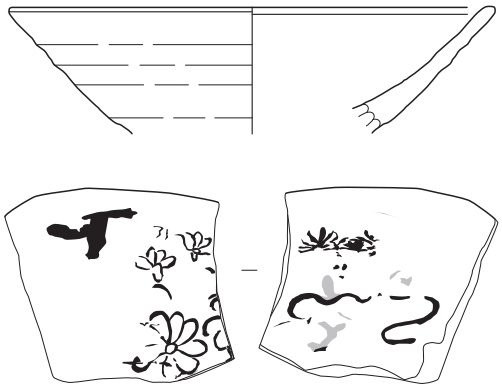
福島県文化財調査報告書第538集

県道広野小高線関連遺跡発掘調査報告２

毛 萱 館 跡



２０２０年

福 島 県 教 育 委 員 会
公益財団法人 福 島 県 文 化 振 興 財 団
福 島 県 土 木 部

県道広野小高線関連遺跡発掘調査報告２

毛萱館跡（けがやたてあと）

序　　文

福島県では、沿岸地域の復興を支援する道路として、双葉郡広野町と南相馬市小高区とを結ぶ一般県道広野小高線を整備しており、福島県教育委員会では、双葉郡富岡町における一般県道広野小高線整備事業計画地内について、埋蔵文化財の保存のための協議を行い、現状での保存が困難なものについては、記録保存のための発掘調査を実施しております。

本報告書は、平成29・30年度に発掘調査を実施した、双葉郡富岡町大字毛萱字前川原に所在する毛萱館跡の調査成果をまとめたものです。発掘調査の結果、本遺跡が室町時代に築かれた山城であることが確認され、門跡や掘立柱建物跡といった遺構、天目茶碗や墨書かわらけ等の遺物から、麓の集落を望む中世城館の様子が明らかとなりました。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解を促進するものです。

本報告書が、文化財に対する県民の皆様の理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するために広く活用いただける資料となれば幸いです。

結びに、発掘調査の実施に当たって御理解と御協力をいただいた福島県土木部富岡土木事務所、富岡町教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

令和２年２月

福島県教育委員会
教育長　鈴　木　淳　一

あ い さ つ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会からの委託を受けて、県内の大規模な開発に先立ち、開発対象地域内に所在する埋蔵文化財の調査を実施しております。

一般県道広野小高線は、相双地区を南北に結ぶ路線であり、この路線の整備は東日本大震災からの復興にも一役を担うものとして期待をされております。当財団では、本路線内に所在する遺跡について、平成26年度から発掘調査を実施しています。

本報告書は、平成29・30年度に発掘調査を実施した双葉郡富岡町に所在する毛萱館跡の調査成果をまとめたものです。毛萱館跡では、弥生時代の集落跡が見つかったほか、室町時代の城館跡を確認しました。６号掘立柱建物跡の柱穴からは、菊花や蓬莱文の戯画を描くかわらけが出土し､往時の宴会儀礼をうかがい知ることができる貴重な成果となりました。

本報告書の成果が、地域文化の理解を広め、郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。さらには、本事業が福島県の復興の足掛かりとなるように祈念いたします。

最後に、この調査に御協力いただきました関係諸機関ならびに地域住民の皆様に、深く感謝を申し上げますとともに、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和２年２月

公益財団法人　福島県文化振興財団
理事長　　大　沼　博　文

緒　　言

1　本書は、平成29・30年度に実施した県道広野小高線関連遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書には、以下に記す遺跡の調査成果を収録した。

毛萱館跡：福島県双葉郡富岡町大字毛萱字前川原　福島県遺跡番号：54340036

3　本事業は、福島県教育委員会が福島県土木部の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は福島県土木部が負担した。

4　福島県教育委員会は、発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財団に委託して実施した。

5　公益財団法人福島県文化振興財団では、遺跡調査部の下記の職員を配置した。

平成29年度

文化財主査　吉野勤也　　文化財主事　佐藤　俊

当該年度は臨時的に下記の調査員の協力を得た。

副　主　幹　佐々木慎一　　嘱　　託　松本　茂

平成30年度

専門文化財主査　杉沢昭太郎（公益財団法人岩手県文化振興事業団より出向）

文化財主事　　佐藤　俊

6　本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。

7　本書の作成に際し使用したＸ線写真については、福島大学行政政策学類考古学研究室の協力を得た。

8　本書に掲載した自然科学分析は、次の機関に委託し、その結果を掲載している。

樹種同定・放射性炭素年代測定：パリノ・サーヴェイ株式会社

9　引用・参考文献は執筆者の敬称を略し、各章末にまとめて掲載した。

10　報告書抄録は巻末に掲載した。

11　本書に収録した調査記録及び出土資料は、福島県教育委員会が保管している。

12　遺構写真の一部は、東京電力ホールディングス株式会社の依頼により、加工して掲載している。

13　発掘調査及び報告書の作成に際して、次の機関および個人から協力・助言を頂いた。（順不同）

奥州市教育委員会　　富岡町教育委員会　　福島県土木部富岡土木事務所

福島大学行政政策学類考古学研究室　　NPO 法人富岡町さくらスポーツクラブ

東京電力ホールディングス株式会社

浅野晴樹　石垣義則　植松暁彦　遠藤嘉一　及川真紀　菅野崇之　菊地芳朗

小玉秀成　小山美紀　今野賀章　佐藤友子　三瓶秀文　高橋　充　鳥居達人

羽柴直人　室野秀文　八重樫忠郎　山田和史

用　　例

1　本書における遺構実測図の用例は、以下のとおりである。

(1) 方　　位　遺構図・地形図の方位は世界測地系で設定した座標北を示す。座標は、国土座標第Ⅸ系に基づく。表記がない遺構図はすべて本書の天を北とした。

(2) 高　　度　高度は、標高で示した。

(3) 縮　　尺　各挿図中にスケールとともに縮小率を示した。

(4) 土　　層　基本土層はアルファベット大文字のＬとローマ数字、遺構内堆積土はアルファベット小文字のℓと算用数字を組み合わせて表記した。

(5) 土　　色　土層注記に使用した土色および記号は『新版標準土色帖』に基づいている。

(6) ケ　　バ　遺構内の傾斜部は「 ⅲ 」、相対的に緩傾斜の部分には「 ⅰ 」、後世の撹乱部や人為的な削土部は「 ⅱ 」の記号で表現した。

(7) 網　　点　各挿図中に用例を示した。

(8) 遺構番号　主たる遺構は正式名称、その他の遺構は記号化した略称で記載した。

(9) 小穴堆積土の類型　Ａ：腐植土＋黒褐色土、Ｂ：ＬⅡ＋炭化物、Ｃ：ＬⅡ＋ＬⅢｂ、Ｄ：ＬⅡ＋ＬⅢａ。

2　本書における遺物実測図の用例は、以下のとおりである。

(1) 縮　　尺　各挿図中にスケールとともに縮小率を示した。

(2) 遺物番号　挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は、例えば図１の１番の遺物を「図１－１」とし、写真図版中では「１－１」と示した。

(3) 注　　記　出土位置および層位を遺物番号右脇の（　）内に示した。

(4) 遺物計測値　各挿図中に示した。（　）内の数値は推定値、［　］内の数値は遺存値を示す。

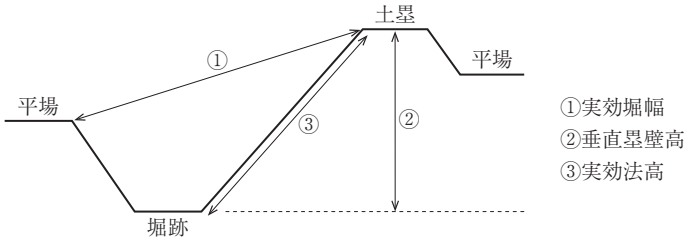
(5) 土器断面　須恵器は断面を黒染とした。粘土紐の積上げ痕は、一点鎖線を入れて示した。

(6) 網　　点　各挿図中に用例を示した。

3　本書で使用した略号は、次のとおりである。

富岡町…ＴＯ	毛萱館跡…ＫＧＴ	掘立柱建物跡…ＳＢ	柱列跡…ＳＡ
竪穴住居跡…ＳＩ	溝跡…ＳＤ	土坑…ＳＫ	
性格不明遺構…ＳＸ	焼土遺構…ＳＧ	小穴…ＧＰ	グリッド…Ｇ
トレンチ…Ｔ	遺構外堆積土…Ｌ	遺構内堆積土…ℓ	

4　土塁・堀跡の計測位置と呼称は、以下のとおりである。



目　　次

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　事 業 の 概 要…… 1
第２節　遺跡の位置と地理的環境…… 3
第３節　歴 史 的 環 境…… 5
第４節　調 査 経 過…… 10
第５節　調 査 方 法…… 11

第２章　城館関連遺構と遺物

第１節　基 本 層 序…… 13
第２節　毛萱館跡の歴史と現況…… 14
第３節　１ 号 平 場…… 16
２号掘立柱建物跡(17)　１号柱列跡(19)　２号柱列跡(20)
１号道跡(21)　１号平場の小穴群(23)
第４節　２ 号 平 場…… 23
１号掘立柱建物跡(25)　３号掘立柱建物跡(26)　３号柱列跡(27)
４号柱列跡(27)　２号平場の小穴群(28)
第５節　３ 号 平 場…… 30
13 号溝跡(30)　17 号性格不明遺構(31)
第６節　４ 号 平 場…… 33
４号掘立柱建物跡(35)　５号掘立柱建物跡(36)　６号掘立柱建物跡(38)
７号掘立柱建物跡(39)　７号柱列跡(41)　32 号土坑(41)
50 号土坑(42)　４・８号平場の小穴群(43)
第７節　５ 号 平 場…… 45
８号掘立柱建物跡(48)　９号掘立柱建物跡(49)　10 号掘立柱建物跡(51)
５号柱列跡(52)　６号柱列跡(52)　１号門跡(53)
２号道跡(61)　９号溝跡(62)　10 号溝跡(62)
12 号溝跡(63)　18 号土坑(64)　23 号土坑(64)
41 号土坑(65)　42 号土坑(65)　47 号土坑(65)
51 号土坑(66)　52 号土坑(66)　53 号土坑(68)
54 号土坑(68)　55 号土坑(68)　56 号土坑(69)
57 号土坑(69)　58 号土坑(71)　59 号土坑(71)
60 号土坑(71)　61 号土坑(72)　62 号土坑(72)

66 号土坑(73)　68 号土坑(73)　69 号土坑(73)
70 号土坑(75)　８号焼土遺構(76)　５号性格不明遺構(76)
６号性格不明遺構(77)　７号性格不明遺構(78)　８号性格不明遺構(79)
19 号性格不明遺構(81)　20 号性格不明遺構(81)　21 号性格不明遺構(82)
25 号性格不明遺構(82)　26 号性格不明遺構(84)　５号平場の小穴群(84)

第８節　６・７号平場の概要…… 87

第９節　土 墨 ・ 堀 跡 …… 88
１号土墨・１号堀跡(88)　２号土墨・２号堀跡(89)　３号土墨・３号堀跡(92)
４号土墨(98)　５号土墨(100)

第３章　その他の遺構と遺物

第１節　遺 構 の 分 布……104

第２節　竪 穴 住 居 跡……105
１号住居跡(105)　２号住居跡(107)　３号住居跡(107)
４号住居跡(112)　５号住居跡(114)　６号住居跡(114)
７号住居跡(117)　８号住居跡(119)　９号住居跡(119)
10 号住居跡(122)　12 号住居跡(122)　13 号住居跡(125)

第３節　溝　　跡……125
１号溝跡(125)　２号溝跡(126)　３号溝跡(126)
４号溝跡(126)　５号溝跡(128)　６号溝跡(128)
７号溝跡(129)　８号溝跡(129)　11 号溝跡(131)
14 号溝跡(132)

第４節　土　　坑……132
１号土坑(132)　２号土坑(132)　３号土坑(133)
４号土坑(133)　５号土坑(133)　６号土坑(135)
７号土坑(135)　８号土坑(135)　９号土坑(136)
10 号土坑(136)　11 号土坑(138)　12 号土坑(138)
13 号土坑(138)　14 号土坑(139)　15 号土坑(139)
16 号土坑(139)　17 号土坑(141)　19 号土坑(141)
20 号土坑(141)　21 号土坑(142)　22 号土坑(142)
24 号土坑(142)　25 号土坑(143)　26 号土坑(143)
27 号土坑(143)　28 号土坑(145)　29 号土坑(145)
30 号土坑(146)　31 号土坑(146)　33 号土坑(146)
34 号土坑(146)　35 号土坑(147)　36 号土坑(147)
37 号土坑(147)　38 号土坑(149)　39 号土坑(149)
40 号土坑(149)　43 号土坑(150)　44 号土坑(150)
45 号土坑(152)　46 号土坑(152)　48 号土坑(152)
49 号土坑(153)　63 号土坑(153)　64 号土坑(153)
65 号土坑(153)　67 号土坑(155)

第５節　焼　土　遺　構……156
１号焼土遺構(156)　２号焼土遺構(156)　３号焼土遺構(156)
４号焼土遺構(156)　５号焼土遺構(157)　６号焼土遺構(157)
７号焼土遺構(157)

第６節　性格不明遺構……158
１号性格不明遺構(158)　２号性格不明遺構(159)　３号性格不明遺構(159)
４号性格不明遺構(161)　９号性格不明遺構(161)　10 号性格不明遺構(161)
11 号性格不明遺構(163)　12 号性格不明遺構(163)　13 号性格不明遺構(164)
14 号性格不明遺構(165)　15 号性格不明遺構(165)　16 号性格不明遺構(166)
18 号性格不明遺構(167)　22 号性格不明遺構(167)　23 号性格不明遺構(168)
24 号性格不明遺構(170)

第７節　遺構外出土遺物……170

第４章　自然科学分析

第１節　炭 化 物 分 析……177

第５章　総　　括

第１節　弥生時代の竪穴住居跡について……186
第２節　陶磁器の器種組成からみた城館の性格……187
第３節　戯画を墨書したかわらけについて……188
第４節　城 館 の 構 造……190
第５節　城 館 の 門 跡……192
第６節　ま　と　め……194

挿図・表・写真目次

[挿図]

図１　事業の位置……１
図２　県道広野小高線路線計画図
（楢葉・毛萱工区）……２
図３　地形分類図……４
図４　周辺の遺跡……６
図５　基本層序……13
図６　毛萱館跡略測図（遠藤版）……14
図７　毛萱館跡縄張図（富岡町史版）……14
図８　毛萱館跡縄張図……15
図９　１号平場遺構配置図……16
図10　２号掘立柱建物跡……18
図11　１号柱列跡……19
図12　２号柱列跡……20
図13　１号道跡、出土遺物……22

図14　１号平場の小穴群……23
図15　２号平場遺構配置図……24
図16　１号掘立柱建物跡……25
図17　３号掘立柱建物跡……26
図18　３・４号柱列跡……28
図19　２号平場の小穴群……29
図20　３号平場遺構配置図……30
図21　13号溝跡……31
図22　17号性格不明遺構、出土遺物……32
図23　４号平場遺構配置図……34
図24　４号掘立柱建物跡……35
図25　５号掘立柱建物跡……37
図26　６号掘立柱建物跡……38
図27　６号掘立柱建物跡出土遺物……39
図28　７号掘立柱建物跡……40
図29　７号柱列跡……41
図30　32・50号土坑、50号土坑出土遺物……42
図31　４号平場の小穴群……43
図32　４・８号平場の小穴群、出土遺物……44
図33　５号平場遺構配置図……46
図34　５号平場出土遺物……47
図35　８号掘立柱建物跡……48
図36　９号掘立柱建物跡……50
図37　10号掘立柱建物跡……51
図38　５・６号柱列跡……53
図39　１号門跡（１）・２号道跡（１）……54
図40　１号門跡（２）・２号道跡（２）……55
図41　１号門跡（３）……56
図42　１号門跡（４）……58
図43　１号門跡（５）、出土遺物……60
図44　９・10号溝跡、出土遺物……63
図45　12号溝跡……63
図46　18・23・41・42・47・51・52号土坑……67
図47　53～59号土坑……70
図48　60～62・66・68～70号土坑……74
図49　18・23・41・53・55・59号土坑出土遺物 …75
図50　８号焼土遺構……76
図51　５号性格不明遺構、出土遺物……77
図52　６号性格不明遺構、出土遺物……78
図53　７号性格不明遺構……79
図54　８号性格不明遺構、出土遺物……80
図55　19～21・25・26号性格不明遺構……83
図56　５号平場の小穴群（１）……85
図57　５号平場の小穴群（２）……86
図58　５号平場の小穴群出土遺物……87
図59　１号土塁・１号堀跡……89
図60　２号土塁・２号堀跡（１）……90
図61　２号土塁・２号堀跡（２）、出土遺物……91
図62　３号土塁・３号堀跡（１）……94
図63　３号土塁・３号堀跡（２）……95
図64　３号土塁・３号堀跡出土遺物……97
図65　４・５号土塁……99
図66　４号土塁出土遺物…… 100
図67　１号住居跡…… 105
図68　１号住居跡出土遺物…… 106
図69　２号住居跡…… 108
図70　２号住居跡出土遺物…… 109
図71　３号住居跡…… 110
図72　３号住居跡出土遺物…… 111
図73　４号住居跡、出土遺物…… 113
図74　５号住居跡、出土遺物…… 115
図75　６号住居跡…… 116
図76　６号住居跡出土遺物…… 117
図77　７・８号住居跡…… 118
図78　９号住居跡…… 120
図79　９号住居跡出土遺物…… 121
図80　10号住居跡、出土遺物…… 123
図81　12・13号住居跡…… 124
図82　１～５号溝跡…… 127
図83　６～８・11・14号溝跡…… 130
図84　３・５～８号溝跡出土遺物…… 131
図85　１～５号土坑…… 134

図86　６～11号土坑…… 137
図87　12～17・19号土坑…… 140
図88　20～22・24～26号土坑…… 144
図89　27～31・33～35号土坑…… 148
図90　36～40・43・45号土坑…… 151
図91　46・48・49・63～65・67号土坑…… 154
図92　１・３・８・９・11・22・26号
土坑出土遺物…… 155
図93　１～７号焼土遺構…… 158
図94　１～４号性格不明遺構…… 160
図95　９・10号性格不明遺構…… 162
図96　11・12号性格不明遺構…… 164
図97　13～16号性格不明遺構…… 166
図98　18・22号性格不明遺構…… 168
図99　23・24号性格不明遺構、３・９・22号
性格不明遺構出土遺物…… 169
図100　遺構外出土遺物（１）…… 172
図101　遺構外出土遺物（２）…… 173
図102　遺構外出土遺物（３）…… 174
図103　遺構外出土遺物（４）…… 175
図104　遺構外出土遺物（５）…… 176
図105　暦年較正結果 …… 182
図106　炭化材（１）…… 183
図107　炭化材（２）…… 184
図108　炭化材（３）…… 185
図109　草花の記されたかわらけ …… 189
図110　毛萱館跡の構造 …… 193

［ 表 ］

表１　周辺の遺跡一覧……7
表２－１　小穴群…… 101
表２－２　小穴群…… 102
表２－３　小穴群…… 103
表３　樹種同定結果一覧…… 178
表４　放射性炭素年代測定結果一覧…… 181
表５　浜通り地方を中心とした城館出土遺物の
器種組成…… 188

［写真］

１　遺跡全景…… 199
２　平成29年度調査区全景…… 199
３　調査区全景…… 200
４　調査区遠景…… 200
５　１・２号平場全景…… 201
６　３～８号平場全景…… 201
７　５～７号平場全景…… 202
８　毛萱館跡周辺…… 202
９　２号掘立柱建物跡…… 203
10　１号柱列跡全景…… 204
11　２号柱列跡全景…… 204
12　１号道跡全景…… 205
13　１号道跡…… 205
14　１号掘立柱建物跡…… 206
15　３・４号柱列跡…… 207
16　13号溝跡全景…… 208
17　13号溝跡断面…… 208
18　17号性格不明遺構全景…… 209
19　17号性格不明遺構断面…… 209
20　４号平場全景…… 210
21　４号平場北西側整地断面…… 210
22　７号柱列跡全景…… 211
23　７号柱列跡、32・50号土坑…… 211
24　５号平場の小穴群…… 212
25　５号平場の小穴群…… 212
26　５号柱列跡…… 213
27　６号柱列跡…… 213
28　１号門跡（１）・２号道跡…… 214
29　１号門跡（２）…… 215
30　１号門跡（３）…… 216
31　１号門跡（４）…… 217
32　１号門跡（５）…… 218

33　９・10・12号溝跡…… 219
34　18・53号土坑…… 219
35　55・59・62号土坑、８号焼土遺構…… 220
36　６・８号性格不明遺構…… 221
37　５～７号平場…… 221
38　１号土墨・１号堀跡…… 222
39　２号土墨・２号堀跡（１）…… 223
40　２号土墨・２号堀跡（２）…… 224
41　２号土墨・２号堀跡（３）…… 225
42　３号土墨全景…… 226
43　３号土墨（出入口）全景…… 226
44　３号堀跡（新期）全景…… 227
45　３号堀跡（古期）全景…… 227
46　３～５号土墨…… 228
47　１号住居跡…… 229
48　２号住居跡…… 230
49　３号住居跡…… 231
50　５号住居跡…… 232
51　６・７号住居跡…… 233
52　８号住居跡…… 234
53　９号住居跡…… 235
54　10・12号住居跡…… 236
55　１～７号溝跡…… 237
56　１・３・７・８・22・25号土坑…… 238
57　26・27・30・38・48・63号土坑…… 239
58　１～５・７号焼土遺構…… 240
59　３・４・11・12号性格不明遺構…… 241
60　13･14号性格不明遺構、９号平場東端部堀跡、
　８号平場…… 242
61　１号道跡、17号性格不明遺構、
　６号掘立柱建物跡、50号土坑出土遺物… 243
62　４号平場の小穴群、５号平場、１号門跡、
　10号溝跡、18・23・41・53・55・59号土坑
　出土遺物…… 244
63　５・６・８号性格不明遺構、５号平場の小穴群、
　２・３号土墨、３号堀跡、４号土墨
　出土遺物…… 245
64　１～６・９号住居跡出土遺物…… 246
65　10号住居跡、３・５・６号溝跡、
　３・８・９・11・26号土坑、
　３・22号性格不明遺構出土遺物…… 247
66　遺構外出土遺物（１）…… 248
67　遺構外出土遺物（２）…… 249
68　磨製石斧…… 250
69　中世城館関連遺物…… 250

第１章　遺跡の環境と調査経過

第１節　事 業 の 概 要

一般県道広野小高線は、双葉郡広野町から南相馬市小高区までを結ぶ、延長55kmの道路である。福島県東部に位置する相双地域の太平洋沿岸を縦貫することから「浜街道」とも称される。本路線は、北の宮城県及び南のいわき地域を結ぶ常磐自動車道・国道６号の補助としての役割を担い、且つ地域密着の生活道路としても必要不可欠な路線である。しかし、未舗装・幅員狭隘等の未改良区間が多数存在することから、福島県では平成９年度よりその整備を進めてきた。平成23年３月11日の東日本大震災以降は、海岸部集落から高台への避難路、復興計画に位置付けられた各開発地域を結ぶ主要路線として、さらに必要性が高まってきている。

本路線における埋蔵文化財の取り扱いについて、東日本大震災以前は各自治体の教育委員会が対応してきた。平成22年度には、毛萱工区に位置する毛萱館跡の試掘・確認調査が富岡町教育委員会により実施され、工区内に中世城館に関連する土塁、堀跡、平場が存在することを確認した。毛萱館跡の試掘・確認調査の結果を受けて、富岡町教育委員会及び相双建設事務所が埋蔵文化財の保存について協議し、工事により埋蔵文化財が掘削され、毀損が免れない10,000㎡の範囲について平成23年度に本発掘調査を行う方向が確認された。

しかし平成23年３月に東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故により富岡町全域が避難区域とされたため、調査及び工事の計画は一旦延期された。

毛萱工区の埋蔵文化財については、平成26年度に本路線の工事再開の動きが出てきたことから、富岡町教育委員会及び福島県教育委員会が協議を行い、毛萱館跡の試掘・確認調査について富

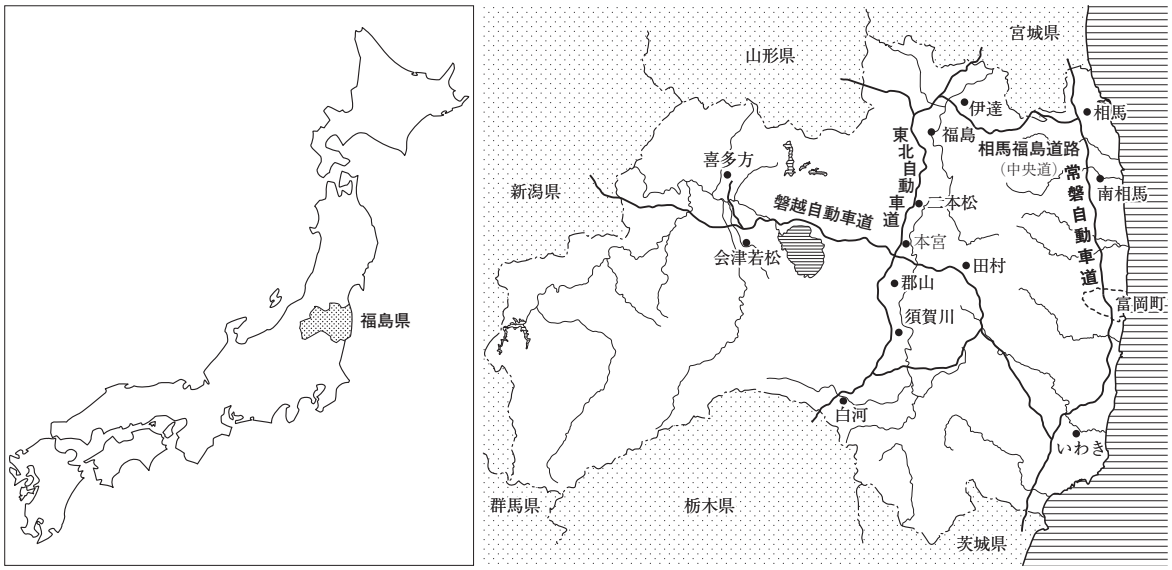


図１　事業の位置

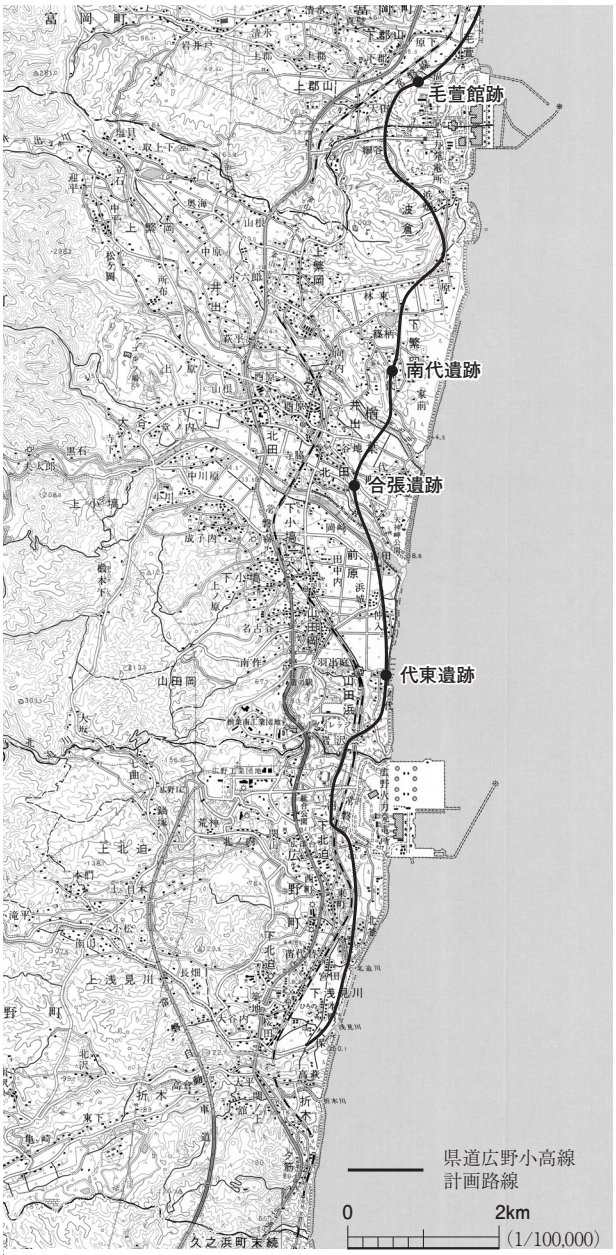


図２　県道広野小高線路線計画図（楢葉・毛萱工区）

岡町教育委員会が実施済であること、本路線の工事にあたって本発掘調査が必要であることを確認した。平成27年度には、富岡土木事務所と県教育委員会で協議し、本路線の事業再開にあたり毛萱館跡の本発掘調査を要する範囲を確認し、本発掘調査対象面積が10,000㎡であること、本発掘調査は平成29年度以降に県教育委員会が実施することを決定した。

平成29年４月１日、県土木部と県教育委員会との間で、平成29年度本発掘調査にかかる協定が締結された。県教育委員会は、財団に対し毛萱館跡の発掘指示書を発出した。財団ではこれに基づき、遺跡調査部の職員２名を配置し業務を開始した。平成29年度は、富岡土木事務所の要望により要保存範囲10,000㎡のうち西側5,000㎡の発掘調査を行った。発掘調査は平成29年12月27日までに完了した。平成30年度には、平成30年４月２日に県土木部と県教育委員会との間で協定が締結された。東側5,000㎡の発掘調査が県教育委員会から財団に指示され、財団では遺跡調査部の職員２名を配置し、業務を開始した。発掘調査は平成30年度11月９日で完了し、本路線の毛萱工区に位置する毛萱館跡の要保存範囲10,000㎡の本発掘調査は終了した。

本路線の浪江・小高工区では、平成30年度に鹿屋敷遺跡、令和元年度には鹿屋敷遺跡（２次）、赤坂Ｄ遺跡の本発掘調査が行われている。　（佐　藤）

第２節　遺跡の位置と地理的環境

毛萱館跡は、福島県双葉郡富岡町大字毛萱字前川原地内に所在する。本遺跡の中心は北緯37°19′16″、東経141°01′01″にあり、本遺跡はＪＲ常磐線富岡駅から南西に約1.5㎞、海岸線からは約700ｍに立地している。

福島県は東北地方南部の太平洋岸に位置し、総面積は約137,983.9㎢で、全国３番目の県土を有する。本県土は、約８割が山地で占められ、阿武隈高地、奥羽山脈や越後山脈の各山地に隔てられた地形・気候の異なる３地方に区分される。３地方の区分は、日本海側内陸部の会津地方、太平洋側内陸部の中通り地方、太平洋岸沿岸部の浜通り地方である。富岡町は浜通り地方の中央部に所在する。富岡町の東側は太平洋に面し、北側は大熊町、西側は川内村、南側は楢葉町と接している。町内には、太平洋岸を南北に結ぶＪＲ常磐線や常磐自動車道、国道６号、県道いわき浪江線が縦貫している。気候は、太平洋の影響を受けた海洋性の温暖な気候で、夏季は比較的涼しく、冬季は降雪が少ない。浜通り地方の地質を概観すると、西側の阿武隈高地周辺は後期白亜紀の花崗岩類を主体とし、石英閃緑岩、花崗岩、珪長岩など多岐にわたる。特に双葉破砕帯や畑川破砕帯周辺の花崗岩類はマグマの貫入を起因として複雑な様相を呈する。双葉破砕帯の東側から海岸平野部にかけては第三系の堆積岩が広く分布している。

浜通り地方は、双葉破砕帯の影響によって、西側に阿武隈高地、東側に浜通り低地帯という地形的特徴を示している。双葉破砕帯の西側は阿武隈高地の高嶺が広がる。阿武隈高地の標高は500～1,000ｍであり、隆起準平原に位置付けられる。浜通り低地方は、標高100ｍ以下の低地な丘陵・段丘と平野で構成される。丘陵は浜通り地方北部から南部へ向けて、その範囲を減じており、富岡町周辺では東西幅６㎞程となる。段丘は高位・中位・低位の３区分にでき、さらに上位・下位は各２面、中位は２面ないし４面に細分化される。富岡町周辺の平野は、谷底平野と中位の砂礫段丘で構成されている。

富岡町の地形は、西から阿武隈高地・河岸段丘地帯・海岸低地の３地形に区分され、西高東低の浜通り地方特有の地形となっている。

富岡町の西側は町内最高峰の大倉山(593.1ｍ)をはじめとした山岳性丘陵であり、太平洋岸に向かって緩やかに標高を減じている。富岡町の東側は、阿武隈高地から派生する丘陵や段丘が太平洋岸に向かって細長く伸びている。丘陵や段丘は、富岡川や本遺跡の周辺を流れる紅葉川、これに連なる小河川によって樹枝状に開析されている。富岡町の市街地中央を流れる富岡川流域両岸には沖積地が開けるが、広大な平野部を形成するには至っていない。太平洋沿岸は海食崖となり、小良ヶ浜東側の海岸には高さ約30ｍの海食崖下部に海食洞が確認できる。

本遺跡は紅葉川によって開析された段丘崖の平坦地から斜面地にかけて立地している。本遺跡の南東側は1975年以降の東京電力福島第二原子力発電所建設時の造成により、旧地形が失われてい

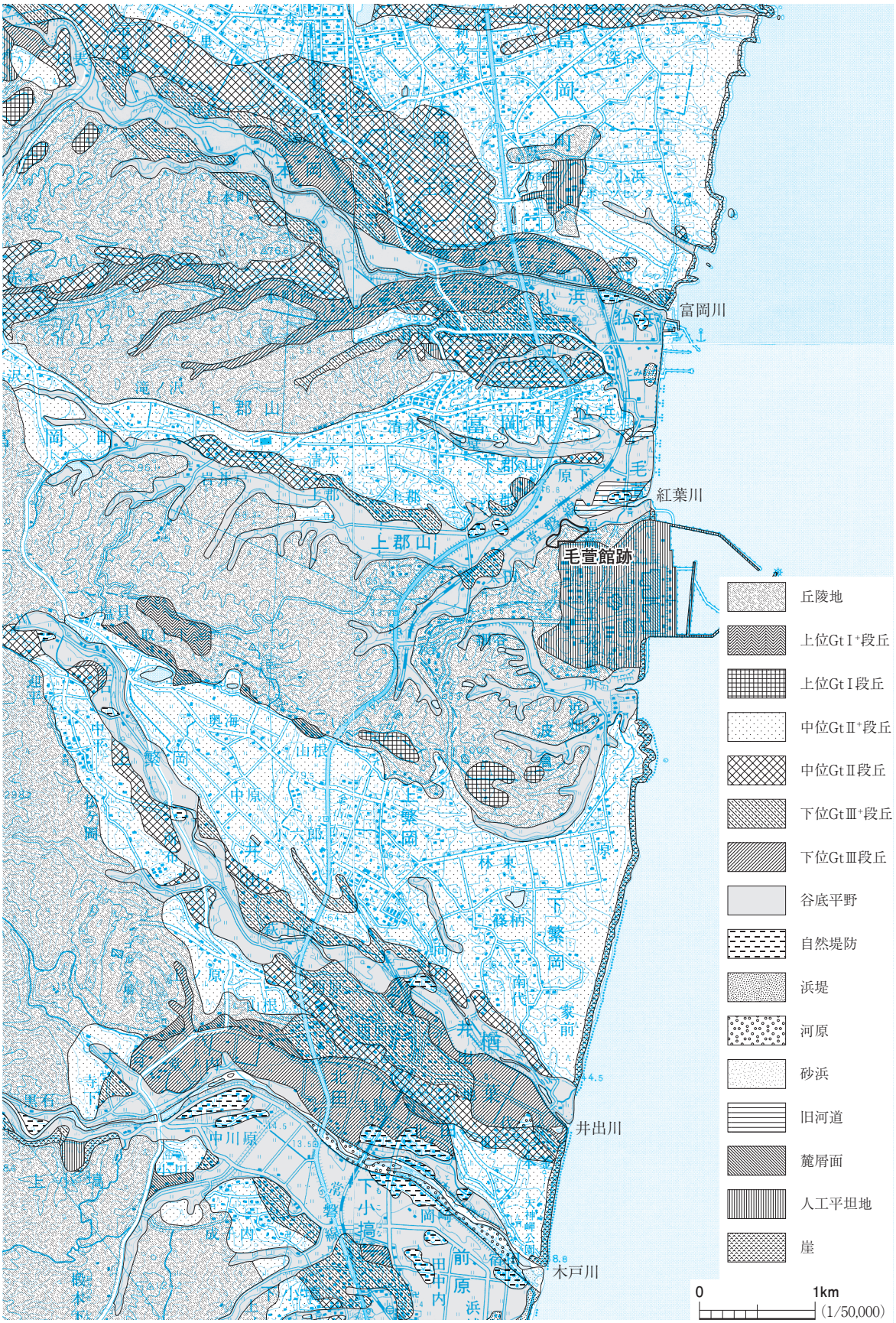

富岡川
紅葉川
毛萱館跡
井出川
木戸川
丘陵地
上位GtⅠ+段丘
上位GtⅠ段丘
中位GtⅡ+段丘
中位GtⅡ段丘
下位GtⅢ+段丘
下位GtⅢ段丘
谷底平野
自然堤防
浜堤
河原
砂浜
旧河道
麓屑面
人工平坦地
崖
0
1km
(1/50,000)

図３　地形分類図

る。東京電力ホールディングス株式会社の協力を得て、富岡町教育委員会から提供を受けた福島第二原子力発電所地質調査一般平面図によれば、本遺跡は幅140m程の独立した丘陵に立地しており、その南東側は樹枝状の沢地形が広がっていたと考えられる。（吉　野）

第３節　歴史的環境

富岡町では、後期旧石器時代から近現代にいたる時代の遺跡が見つかっている。遺跡の種別は豊富で、集落遺跡、官衙関連遺跡、生産遺跡、古墳、横穴墓、城館跡、古戦場などが挙げられる。本節では富岡町内やその周辺地域の歴史について、主な遺跡の調査成果を踏まえながら時系列順に概観する。

旧石器時代　当該地域における旧石器時代は出土遺物が少なく、阿武隈高地縁辺の河岸段丘上に立地する本町西Ａ遺跡(33)で珪質頁岩製のナイフ形石器が１点出土しているほか、本町遺跡(39)では珪質頁岩製の細石刃核が、日南郷遺跡(13)では石刃が出土している程度である。また、本遺跡と同一丘陵上に位置する楢葉町の北向遺跡では、玉髄製や頁岩製のスクレイパーが出土している。隣接する楢葉町の大谷上ノ原遺跡では、後期旧石器時代前半期から後半期の石器群が確認されている。

縄文時代　縄文時代の遺跡は富岡川など河川周辺に分布が集中する傾向にある。本町西Ａ遺跡では縄文時代前期後半の集落跡が見つかっており、長さ９ｍを超える長大な竪穴住居跡が確認されている。出土遺物には大木式のほかに、関東系の諸磯ｂ式や浮島式が含まれている。前山Ａ遺跡(54)は縄文時代中期後半を主体とする集落跡である。確認された竪穴住居跡の炉跡は、定形的な複式炉が成立する直前段階の様相を示しており、石囲炉から複式炉への成立過程を考える上で注目されている。上の町Ｂ遺跡(42)では、縄文時代後期の綱取Ⅱ式を主体とした土器が多量に出土している。本町西Ｂ遺跡(34)や後作Ａ遺跡（３）では縄文時代晩期の土器埋設遺構が確認されており、墓坑と推測されている。

弥生時代　当該地域における弥生時代の発掘調査例は少なく、中期後半の遺跡が若干確認されている程度に留まる。本遺跡の東側に隣接する毛萱遺跡(61)では竪穴住居跡が確認されており、遺物では天神原式期・桜井式期の土器や石庖丁、磨製石斧が出土している。中でも毛萱遺跡から出土した土偶は当該期で出土例が少なく、特筆される。上本町Ｆ遺跡(18)では粘板岩製の石庖丁が出土している。そのほか、上郡Ｂ遺跡(52)、本町西Ａ遺跡、上本町Ｇ遺跡、後作Ａ遺跡からは、遺構は確認できないものの、土器片が出土している。なお、楢葉町の天神原遺跡は、天神原式土器の標式遺跡として知られている。土坑墓や土器棺墓による墓群で構成されており、県指定の史跡となっている。出土遺物は国の重要文化財に指定されている。さらに楢葉町の南代遺跡、植松遺跡、美シ森Ｂ遺跡では竪穴住居跡が確認されている。

古墳時代　当該地域の古墳は富岡川流域周辺と、紅葉川左岸の丘陵周辺に集中しており、下郡山

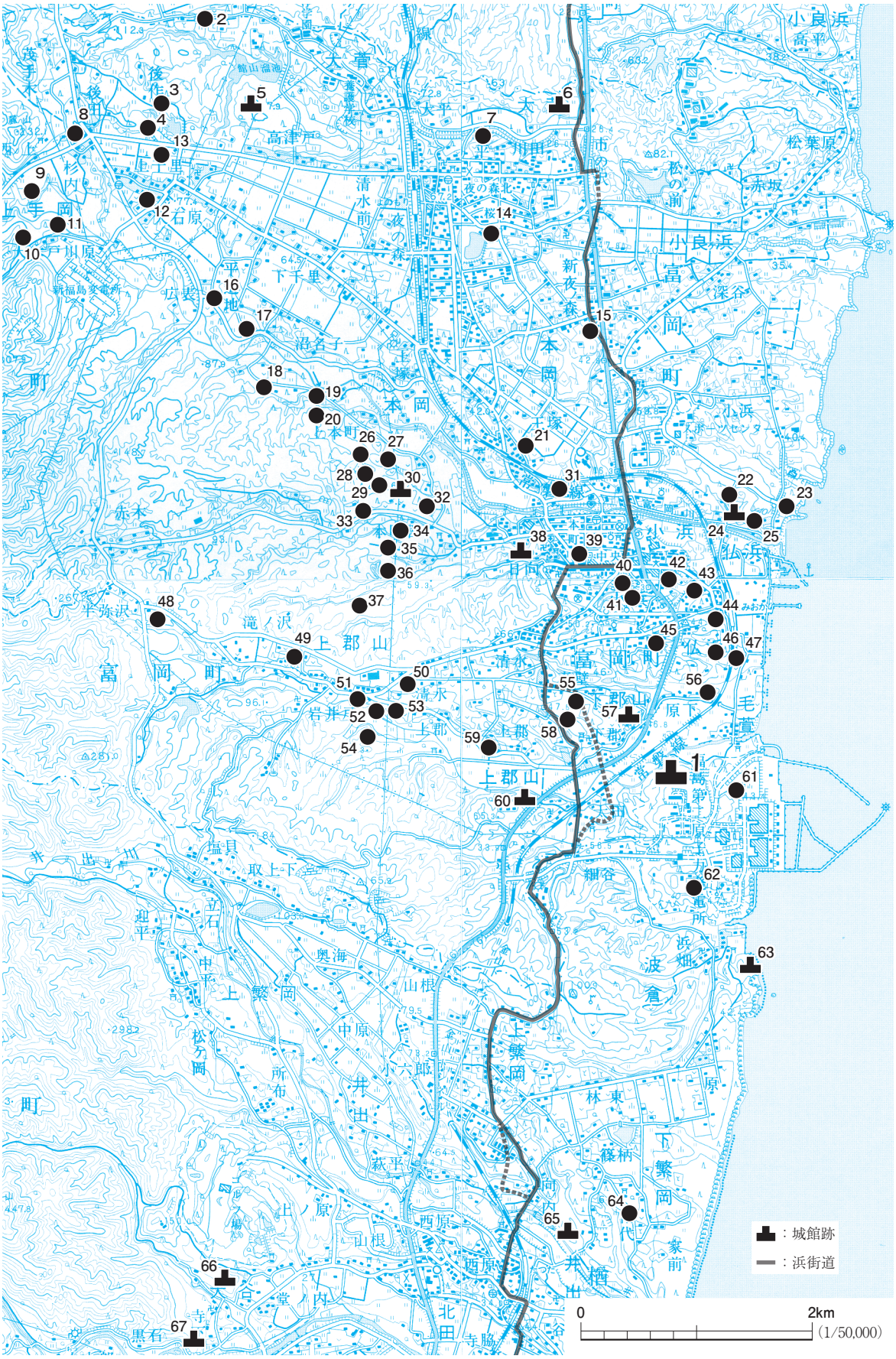


図４　周辺の遺跡

表１　周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	時　代	種　別
1	**毛萱館跡**	中世	城館跡
2	蛇谷須遺跡	縄文	散布地
3	後作Ａ遺跡	縄文・奈良・平安	散布地
4	後作Ｂ遺跡	平安	製鉄跡
5	高津戸館跡	中世	城館跡
6	大菅館跡	中世	城館跡
7	大平遺跡	縄文	散布地
8	茂手木遺跡	縄文	散布地
9	片倉遺跡	縄文	散布地
10	上手岡鉄山鉱炉跡	近世・近代	製鉄跡
11	大木戸川原遺跡	縄文	散布地
12	大石原遺跡	縄文	散布地
13	日南郷遺跡	縄文・近世	散布地
14	新夜ノ森古戦場跡	その他	近世
15	新田町一里塚	近世	塚
16	平道地遺跡	縄文・平安・近世	散布地
17	前川原遺跡	近世	散布地
18	上本町Ｆ遺跡	奈良・平安・中世	集落跡
19	上本町Ｅ遺跡	縄文	散布地
20	上本町Ｄ遺跡	縄文・奈良・平安	製鉄跡・散布地
21	王塚古墳	古墳	古墳
22	小浜代遺跡	奈良・平安	社寺・官衙
23	小浜古墳群	古墳	古墳
24	小浜館跡	中世	城館跡
25	小浜横穴墓群	古墳	古墳
26	上本町Ｃ遺跡	縄文・平安	散布地
27	上本町Ａ遺跡	奈良・平安	散布地
28	上本町Ｂ遺跡	奈良・平安	散布地
29	上本町Ｇ遺跡	縄文	集落跡
30	諸沢館跡	中世	城館跡
31	関根遺跡	縄文	散布地
32	本町西Ｆ遺跡	縄文	散布地
33	本町西Ａ遺跡	縄文	散布地
34	本町西Ｂ遺跡	奈良・平安	散布地
35	本町西Ｃ遺跡	縄文・奈良・平安	散布地
36	本町西Ｄ遺跡	縄文・奈良・平安	散布地
37	本町西Ｅ遺跡	縄文・奈良・平安	散布地
38	日向館跡	中世	城館跡
39	本町遺跡	古墳・平安	散布地
40	上の町Ａ遺跡	縄文	散布地
41	大作横穴墓群	古墳	古墳
42	上の町Ｂ遺跡	縄文	散布地
43	釜田遺跡	古墳～平安	散布地
44	仏浜横穴墓群	古墳	古墳
45	西原Ａ遺跡	古墳	散布地
46	西原Ｂ遺跡	縄文	散布地
47	清水尻横穴墓群	古墳	古墳
48	半弥澤遺跡	縄文	散布地
49	滝の沢遺跡	縄文	散布地
50	清水遺跡	奈良・平安	散布地
51	岩井戸東遺跡	縄文・奈良・平安	散布地
52	上郡Ｂ遺跡	古墳	散布地
53	上郡Ａ遺跡	縄文・奈良・平安	散布地
54	前山Ａ遺跡	縄文・奈良・平安	集落跡
55	下郡山古墳群	古墳	古墳
56	原下遺跡	古墳	散布地
57	真壁城跡	古墳～中世	城館跡・集落跡
58	清水一里塚	近世	塚
59	一本松遺跡	縄文	散布地
60	上郡山館跡	中世	城館跡
61	毛萱遺跡	縄文～古墳	散布地
62	北向遺跡	旧石器・弥生・古墳・平安	散布地
63	蓑輪城跡	中世	城館跡
64	南代遺跡	弥生・奈良	製鉄跡・集落跡
65	井出城跡	中世	城館跡
66	名合沢館跡	中世	城館跡
67	大谷館跡	中世	城館跡

古墳群(55)、小浜古墳群(23)、王塚古墳(21)が挙げられる。小浜古墳群第２号墳の石棺内からは、副葬品として鉄刀や鉄鏃、滑石製の模造品(剣形、鏡形)が出土している。横穴墓群は海岸付近の丘陵裾部に分布しており、仏浜横穴墓群(44)、清水尻横穴墓群(47)、小浜横穴墓群(25)、大作横穴墓群(41)などが確認されている。横穴墓の時期は概ね７世紀代と考えられ、浜通り北部地域の様相と同様の傾向を示している。集落跡は調査例が少なく判然としないが、上郡Ｂ遺跡、毛萱遺跡では古墳時代前期の竪穴住居跡が確認されており、土師器の小型丸底壺や器台、甕などが出土している。真壁城跡(57)では、古墳時代前期の内面に赤彩し棒状浮文を施した壺が出土している。

奈良・平安時代　当該地域を代表する奈良・平安時代の遺跡として、小浜代遺跡(22)が挙げられる。小浜代遺跡では、基壇を持つ建物跡が確認されており、出土した瓦には、単弁六葉蓮華文軒丸瓦と手描き重弧文軒平瓦がある。出土した瓦は、陸奥国府多賀城Ⅱ期の瓦を模倣した可能性が指摘されている。ほかの遺物では、奈良三彩が出土している。確認された遺構や出土遺物から官衙か、寺院跡と推察されている。集落跡では、真壁城跡、上本町Ｄ遺跡(20)、本町西Ｂ遺跡、前山Ａ遺跡で確認されているが、いずれも小規模である。また、上本町Ｄ遺跡や後作Ｂ遺跡(４)からは製鉄遺構や廃滓場、それに伴う羽口や炉壁などが確認されている。また、楢葉町の南代遺跡(64)では、製鉄遺構12基、木炭窯跡６基が確認されており、浜通り北部地域と同様に当該地域でも鉄生産が行われていたことが明らかとなっている。

中　　世　中世の当該地域は楢葉郡に属しており、国人領主楢葉氏が支配していた。楢葉氏は岩城氏や標葉氏と同じ海道平氏の出自とされ、郡名を苗字としていることから12世紀まで遡る在地の武士出身と考えられている(七海2015)。15世紀初頭には「海道五郡一揆契状」に見られるように、行方・標葉・楢葉・岩城・岩崎郡の領主層による互助協定が結ばれた。しかし互助関係は長くは続かず、楢葉氏は文明六年(1474)に岩城氏によって滅亡に追い込まれる。以降、当該地域は岩城氏と相馬氏が領土を争う地域となる。天文三年(1534)には、相馬氏の侵攻により岩城氏方の富岡城、木戸城が落城し、相馬氏の領地となる。元亀元年(1570)には岩城氏の再侵攻により、当該地域は再び岩城氏の領地となる。本遺跡の位置する大字毛萱は毛萱村とされ、文禄四年(1595)の「四郡検地高目録」には「けかや村」とあり、石高は348石である。

当該地域では、楢葉氏と標葉氏の境、あるいは岩城氏と相馬氏の境であることに起因して、多数の城館が築かれた。当該地域の城館跡として、本遺跡をはじめ、真壁城跡、上郡山館跡(60)、小浜館跡(24)、日向館跡(38)、諸沢館跡(30)、高津戸館跡(５)、大菅館跡(６)、楢葉町では蓑輪城跡(63)、井出城跡(65)、名合沢館跡(66)、大谷館跡(67)、小塙城跡、天神館跡などが挙げられる。

真壁城跡は本遺跡から500ｍ程北西へ向かった丘陵に位置する。文献上の記載は確認できないものの、発掘調査の結果、複数の建物跡や土塁、空堀、狼煙場の可能性のある遺構が確認されている。出土遺物では鉄製小札、漆器のほかに、龍泉窯系青磁の稜花皿や香炉、景徳鎮窯系青花の皿など、15世紀から16世紀にかけての輸入陶磁器が多数出土している。

日向館跡は本遺跡から内陸に５㎞程北西へ向かった丘陵の端部に位置する。日向館跡は地誌にそ

の存在を確認することができ、『双葉郡郷土誌』によれば、永正年間(1504～21)に岩城九郎隆時が築いた城とされている。また、『岩城四郡小館記』には、四郡四十二館のひとつとして日向館の名称が記載されている。発掘調査の結果、土塁、空堀、井戸跡などの遺構が確認されている。遺物では龍泉窯系青磁小皿、白磁小皿などの輸入陶磁器や、鉄製の刀子が出土している。

高津戸館跡は室町期の城跡とされ、発掘調査は行われていないが、現況で土塁、空堀、井戸跡などが確認されている。

本町西Ａ遺跡では、掘立柱建物を中心とする集落跡が見つかっており、建物の柱穴からは鎌倉時代後半に比定される常滑焼の大甕が出土している。上本町Ｆ遺跡の土坑からは、25枚のかわらけが一括で出土しており、武士層による饗宴儀礼の痕跡がうかがえる。

近　　世　当該地域は当初、岩城平藩の支配を受けていたが、騒動や一揆が多く延享４年(1747)に幕府領となり、小浜代官の支配下となる。その後は、棚倉藩、多古藩、仙台藩などの支配を受ける。当該地域には、新田町一里塚(15)や清水一里塚(58)など、江戸幕府の政策により整備された一里塚が遺存している。

近世末から近代の当該地域を代表する遺跡が上手岡鉄山鉱炉跡(10)である。上手岡鉄山鉱炉跡は嘉永６年(1853)に南部藩の佐久間長左衛門によって、鉄鉱石を原料とした鉄生産が開始されたことに端を発する。鉄生産の操業は停止と再開を繰り返しながら、昭和36年(1961)の閉山まで行われた。中でも片倉地区の滝川製鉄遺跡が発掘調査され、礫敷きの基礎構造を持つ製鉄炉跡や、鍛冶遺構、廃滓場、鉄鉱石の破砕場が確認されており、往時における鉄生産の様相を明らかにする上で大きな成果となった。

近 現 代　近代に入ると当該地域は平県、磐前県を経て、明治９年(1876)に福島県に編入された。明治22年(1889)に町村制施行に伴い近隣の６か村が合併し、富岡村となった。明治33年(1900)に町制施行により富岡村が富岡町となり、昭和30年(1955)に双葉町(旧上岡村)と合併し、現在の富岡町となった。

平成23年３月11日、東北地方太平洋沖地震が発生した。地震による大津波によって東北・関東地方の太平洋沿岸部は壊滅的な被害を受けた。また、東京電力福島第一原子力発電所の事故により、富岡町は全域が避難指示区域に指定され、町役場の機能は福島県郡山市に移転し、町民は全国に避難を余儀なくされた。平成29年４月１日には、富岡町の大部分で避難指示区域が解除されたが、一部の地域は帰宅困難区域として立ち入りが制限されている。　（佐　藤）

第４節　調 査 経 過

毛萱館跡の発掘調査は、平成29・30年度の２か年度にわたって実施した。本節では調査が辿った経過について年度順に記述する。

平成29年度

平成29年度は、工事側の要望により要保存範囲10,000㎡のうち西側5,000㎡の発掘調査を行った。６月上旬に開催した連絡調整会議において、進入路の造成、伐木・排土置場の選定等の条件整備が完了するのが８月下旬になる見通しとなったため、発掘調査開始を９月上旬とし、７～８月にかけて準備作業を行った。

富岡町は平成29年４月１日に一部地域を除き避難指示が解除されたものの、帰町率は１割に満たず、地元での作業員の確保が困難なことから一部業務を民間企業に委託した。８月25日の入札の結果、株式会社シン技術コンサル福島営業所と支援業務委託の契約を行った。

９月上旬には、調査連絡所等の設置や器材の搬入を行った。調査区は東日本大震災直前に森林伐採が実施されて以来放置されていたため、潅木・下草が密集して繁茂する状態であった。そこで、調査当初の作業として下草・潅木の伐採を行い、重機による集積・運搬を実施した。作業地は段丘崖の急斜面や自然地形を利用した堀跡など、足場の悪い箇所が多いことから安全を考慮して実施した。連絡所から調査区までは急斜面の昇降を強いられることから、仮設階段による安全通路を設置した。９月中旬には表土除去前に縄張図を作成し、現況で城館跡関連遺構の確認作業を行った。結果、調査区内に複数の平場、土塁、堀跡、虎口を確認した。また、１号堀跡が震災前の伐採作業時に埋め立てられている状況を確認した。９月下旬には、調査前の空中写真撮影を実施した。

10月上旬には重機による表土除去、基準杭の打設、作業員による遺構の検出・掘削作業を順次開始した。平場からは弥生時代の竪穴住居跡や土坑、城館跡に関連する建物跡、小穴が確認され、遺跡の様相が徐々に明らかとなった。10月下旬には季節外れの台風による天候不順が続き、調査の遅延が生じたものの、11月中旬には１・２号平場の遺構精査を概ね完了させた。２号土塁・２号堀跡は、高低差が５ｍ以上あることから、作業員に対し高所作業用の命綱付ベルトを着用させるなどの安全対策を行った。東京電力福島第二原子力発電所の敷地内へ延伸している平場・土塁・堀跡は、東京電力ホールディングス株式会社の協力を得て、測量作業を行った。

11月下旬には、調査区北側に張り出す尾根を中心に遺跡範囲内の地形把握のための調査を行った。その結果、調査区外に城館跡関連遺構を確認し、縄張図への追加作図を行った。11月29日には、富岡町教育委員会の三瓶秀文氏を現場に招き、調査の指導を仰いだ。12月８日にはラジコンヘリコプター搭載カメラによる調査後の空中写真撮影を実施した。12月15日にはNPO法人富岡町さくらスポーツクラブの主催により、富岡町民を対象とした遺跡現地見学会が行われた。約60名の来跡者があり、富岡町民の文化財に対する関心の高さがうかがわれた。12月22日には調査連絡

所等の撤去、賃借物の返却、器材の搬出を行い、補足の測量調査を12月27日まで行い、現地調査を終了した。その後、年が明けた平成30年２月16日に現地の引渡しを行い、平成29年度の遺跡発掘調査を終了した。

平成30年度

平成30年度は、前年度の残りの要保存範囲東側5,000㎡の発掘調査を行った。４・５月にかけて準備作業を行った。６月６日には東京電力ホールディングス株式会社の協力を得て再度、東京電力福島第二原子力発電所構内の踏査を行い、縄張図の作製を行った。昨年度と同様、地元での作業員の確保が困難なことから一部業務を民間企業に委託した。入札の結果、株式会社三協技術と支援業務委託の契約を行った。

６月下旬には、調査連絡所等の設置や器材の搬入を行った。今年度の調査区には、昨年度調査時の下草・潅木が仮置きされていることから、当初の作業として下草・潅木の伐採を行い、重機による集積・運搬を実施した。７月上旬には、重機による表土除去を５号平場東端部から開始した。７月下旬には本格的に５号平場の精査を開始したが、連日の猛暑や検出された小穴の掘り込みが深いことから調査に苦慮した。９月７日には、５～７号平場の精査が完了し、ラジコンヘリコプター搭載カメラによる調査後の空中写真撮影を実施した。９月上旬には４号平場の精査を開始し、３号土塁に隣接する３号堀跡や、出入口施設、多数の小穴群を確認した。遺構からは茶臼、古瀬戸の天目茶碗・葉茶壺などが出土し、城館の年代が15世紀代に限定されることや、居館型の山城であることが徐々に明らかとなった。

10月７日には、調査途上ではあったものの現地説明会を開催し、80名の見学者が来跡した。避難先から多数の町民の方々が来跡し、福島第二原子力発電所造成前の地形や集落の様相を聞き取ることができた。10月10日には６号掘立柱建物跡のＰ７から墨書かわらけが出土した。10月11日には公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの羽柴直人氏が来跡し、墨書かわらけや城館の性格について教示を受けた。10月に各土塁、平場に付随する整地土の掘り下げを行い、遺構精査を行った結果、多数の土坑、性格不明遺構などを確認した。１号門跡の精査も進捗し、掘立柱から礎石へと４段階に変遷することを確認した。10月19日には、昨年に引き続いてNPO法人富岡町さくらスポーツクラブの主催により、富岡町民を対象とした遺跡現地見学会が行われ、約70名の来跡者があった。10月31日には調査連絡所等の撤去、賃借物の返却、器材の搬出を行い、11月９日には福島県土木部、福島県教育委員会、福島県文化振興財団の３者にて発掘調査終了の確認と現地の引渡しを行い、平成30年度の遺跡発掘調査を終了した。（佐　藤）

第５節　調 査 方 法

今回の調査にあたっては、調査区内の表土はバックホーを用いて除去した。表土層より下層の堆積土については、原則的に人力で、堆積土の層位ごとに遺物の出土状態に留意しながら基盤土まで

掘り下げている。ただし、掘削途上で遺構・遺物が存在しないと判断された土層については、バックホーを用いて掘削した。２号堀跡の掘削については、フレコンバッグに土砂を集積し、バックホーで吊り上げ、排土を行った。調査において掘削した排土については、クローラーダンプに積み込み、工区内に設定した仮置場まで搬出した。遺構の番号は、検出時に遺構種別ごとに通し番号を付した。ただし、精査の途上で別種の遺構もしくは遺構ではないと判断されたものについては欠番とした。

発掘調査にあたって、堀跡や土塁などの構造物や丘陵を掘削・整地して区画した平坦面について「平場」という名称を使用した。

遺構の調査にあたっては、遺構の特性や遺存状態に応じて土層観察用の畦を設け、遺構の埋没過程や遺物の出土状況を確認しながら精査した。なお、堆積土は、遺構外の標準土層についてはアルファベット大文字Ｌとローマ数字の組み合わせ、遺構内堆積土層についてはアルファベット小文字ℓと算用数字の組み合わせで層位を示した。堆積土の観察には『新版標準土色帖』を参考にし、その表記法に従った。

遺跡の測量記録においては、国土座標第Ⅸ系の座標値と近隣の三角点を基とする標高を有する基準点を遺跡内に設置した。遺構・遺物の大まかな位置については、国土座標を用いた10ｍ方眼のグリッドによって示した。グリッドは遺跡の北西側のＸ＝147,400；Ｙ＝104,750に原点を設定し、その名称は原点からＹ座標軸沿いに東に向かってアルファベット、同じくＸ座標軸沿いに南に向かって算用数字を順に付し、それらを組み合わせて表記した。また、遺構図の位置表示については、国土座標の座標値を示している。遺跡の図化においては、トータルステーションを用いて側点し、図化した。作図の際の縮尺は、土塁・堀跡の平面図は縮尺1/100、1/200、断面図は1/20で記録した。竪穴住居跡や土坑などは縮尺1/20を基準として記録した。調査区全体の地形図は、縮尺1/100もしくは1/200で作製した。

遺跡の写真記録は、検出状況、土層断面、遺物出土状況、完掘状況、断ち割りなど調査の過程に応じて随時撮影している。撮影には35㎜判モノクロ・カラーリバーサルフィルムを使用し、両者同一カットを３コマずつ撮影している。また、これらの補助としてデジタルカメラによる撮影も行っている。さらに、遺跡全体の記録を行うためにラジコンヘリコプターを用いた空中写真撮影を委託して実施した。本書に掲載する遺物写真については、デジタルカメラを用いて撮影した。発掘調査で得られた各種記録や出土遺物は、（公財）福島県文化振興財団遺跡調査部において、整理作業を行った。報告書刊行後は各種台帳類を作成し、閲覧可能な状態で福島県文化財センター白河館（愛称まほろん）に収蔵・保管される。（佐　藤）

参考文献

馬目順一ほか　1983『真壁城遺蹟第四次調査報告』富岡町埋蔵文化財調査報告第４冊　福島県双葉郡富岡町教育委員会
小林清治ほか　1988『福島県の中世城館跡』福島県教育委員会
七海雅人　2015『躍動する東北「海道」の武士団　鎌倉・南北朝時代の興亡』蕃山房
富岡町史編纂委員会　1987『富岡町史』第三巻　考古民俗編　福島県富岡町

第２章　城館関連遺構と遺物

第１節　基 本 層 序

調査区内の遺構外堆積土のうち、標準的な堆積土は、表土から粘土層まで以下の６層に細分した(図５、写真40)。ＬⅥから１～２ｍ下位には、仙台層群大年寺層の上端部と考えられる砂岩質の岩盤層が確認できる。色調及び土質から細分できるものについては、番号の後にアルファベット小文字を付した。

ＬⅠ：現代の表土層である。褐灰色土を基調とし、調査区西側は層厚が約10cmと薄く、撹乱が顕著である。２号土塁・２号堀跡から東側は、森林腐植土を基調とし、層厚は約20cmとなる。

ＬⅡ：中世城館に関連した遺構の検出面である。炭化物を含む灰黄色土で、弥生土器が比較的多く出土する。２号堀跡付近より西側の平坦面(１・２号平場)は後世の撹乱や、耕作による撹拌を受けており、薄く斑状に堆積している。遺存が良好な箇所の層厚は10～20cmである。

ＬⅢ：弥生時代の遺構検出面である。調査区内の丘陵頂上部の平坦面に堆積している。層厚は30～50cmを主体とし、最大1.3mを測る。土質のＬⅢａは灰黄褐色粘質土、ＬⅢｂはにぶい黄橙色砂質土を基調としている。４号平場は、中世城館に関連した平場の構築時にＬⅢｂまで掘り下げられている。

ＬⅣ：褐灰色の礫層である。礫は拳大の亜角礫や、直径５cm程の円礫が主体となる。調査区内の丘陵頂上部の平坦面の縁辺から斜面にかけて堆積している。層厚は最大２ｍに達し、下位は礫

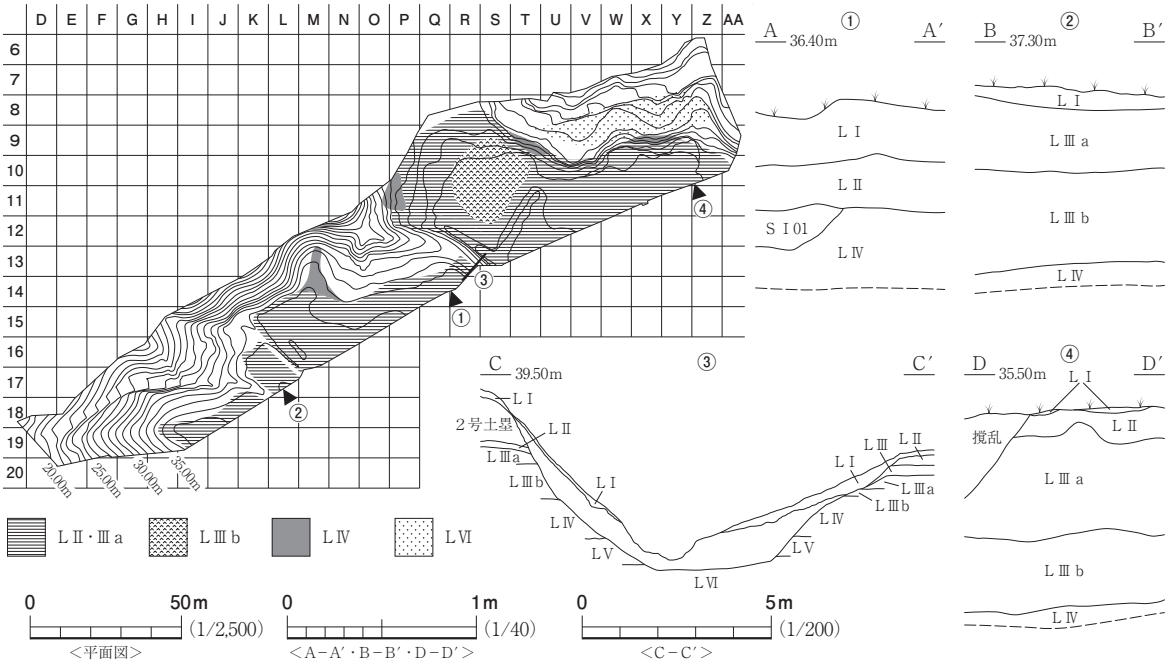


図５　基本層序

の含有が少ない。

ＬＶ：にぶい黄橙色の粘質土である。下位はグライ化している。

ＬⅥ：青灰色の粘質土である。全体的にグライ化している。

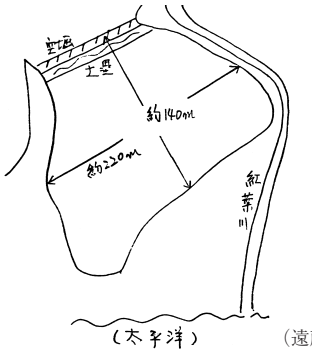
第２節　毛萱館跡の歴史と現況

毛萱館跡は別名を「向山館」とも称し、現況で土塁や堀跡、曲輪とみられる平場などが確認できる。地元住民の話では、本遺跡の選地する丘陵は「タテノヤマ」と呼ばれ、古くから城館跡と認識されていたという。毛萱館跡は中世の文献や近世・近代の地誌などに、記載は認められないものの、1980年代以降、発掘調査報告書や町史などに、本遺跡に関わる城館跡の規模や城館関連遺構の概要、伝承などが紹介されている。

1981年に富岡町教育委員会から刊行された『真壁城蹟の概要』の「真壁城蹟をめぐる主要遺跡」には「向山館」の名称で、毛萱館跡の位置が地図上に示されている。1986年に私家版として刊行された遠藤祝穂氏の『富岡町の城館を探る』では、「毛萱館」の名称で紹介され、その規模・立地が詳説され、略測図も掲載されている（図６）。この略測図には本調査で確認した２号土塁・２号堀跡が図示されている。また、「岩城氏の臣居住す」との伝承も併せて紹介している。1987年に富岡町史編纂委員会から刊行された『富岡町史３』には、「向山館」の名称で報告され、別名を「毛萱館」と呼称するとしている。縄張図も記載され、本調査で確認した１号土塁・１号堀跡、２号土塁・２号堀跡が図示されている（図７）。また、「下郡山館（真壁城跡）と交戦の際、１尺低かったため負けた」という伝承が紹介されている。1988年に福島県教育委員会が刊行した『福島の中世城館跡』では、「向山館」の名称で分布図に位置が記載されている。

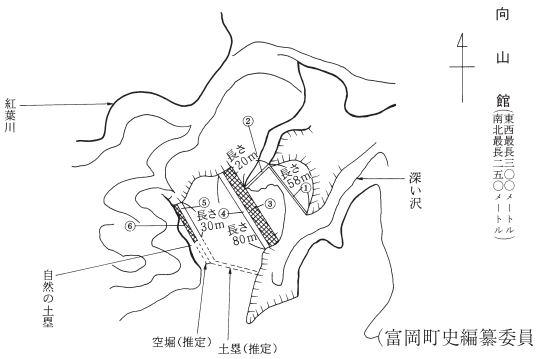
城館の名称について、遺跡の登録時に大字名・旧村名から「毛萱館」、あるいは小字名から「向山館」を冠した可能性がある。平成６年記載の「福島県富岡町埋蔵文化財台帳」には「毛萱館跡」で登録されていることから、本書では「毛萱館跡」の名称を用いている。また、福島県歴史資料館所蔵の明治14年の地籍図を見ると、中世城館に関連するような地割や地名は確認できない。

本発掘調査に伴い、周辺の地形を踏査・観察し、毛萱館跡の縄張図を作製した（図８）。毛萱館跡



（遠藤1986より転載）

図６　毛萱館跡略測図（遠藤版）



（富岡町史編纂委員1987より転載）

図７　毛萱館跡縄張図（富岡町史版）

は、浜通り地域の海岸部に特有な枝葉状に延びる低丘陵の先端部に位置している。本遺跡の北西側は紅葉川によって削られた崖や急傾斜面で、南西側は比高差の大きな沢１と沢５で区画されている。毛萱館跡は、沢３の自然地形を利用した２号堀跡によって丘陵を北東と南西に分断している。城館としている範囲は、北東・南西方向で約290m、南北方向で約135mである。　（佐　藤）

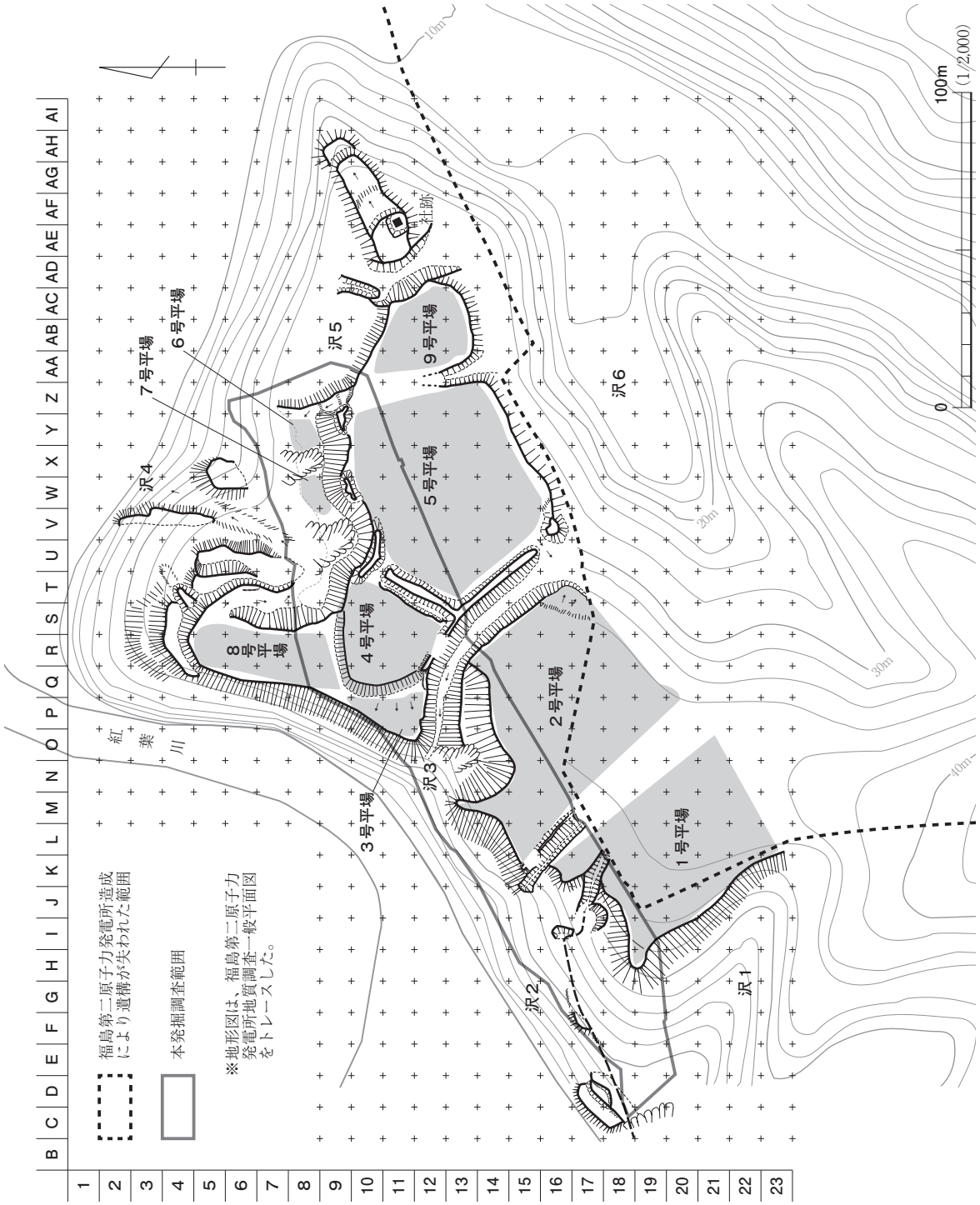


図８　毛萱館跡縄張図

第３節　１ 号 平 場

概　　要　１号平場は丘陵頂上部の平坦面、調査区の南西隅のＫ・Ｌ16・17、Ｈ～Ｋ18、Ｈ～Ｊ19グリッドに位置する（図９、写真５）。

１号平場の標高は36.5～37ｍで、丘陵裾部の平坦面との高低差は27.5～28ｍである。１号平場の大部分は南東側の調査区外に位置し、東京電力福島第二原子力発電所用地造成時の改変により当時の姿を留めていない。造成前の地形図から判断した１号平場の平面形は不整方形で、規模は北東・南西方向で42ｍ、北西・南東方向は80ｍ以上と考えられる。平場の南西隅部は西に向かって半島状に突出する。平場はＬⅡ・Ⅲａが堆積し、特に掘削された様子が認められないことから、丘陵頂上部の平坦面をそのまま平場として利用したと考えている。

南西辺は沢１の急斜面によって城域外と区画され、北東辺は１号土塁・１号堀跡によって２号平場と区画されている。１号土塁・１号堀跡の北西側には、斜面下位へと続く１号道跡が位置し、斜面の中位には小規模な平場が２か所認められる。沢２の下位、丘陵の裾部には紅葉川に隣接する複数の平場が位置し、１号平場との高低差は21ｍである。図８の破線で示した経路が、１号平場と城域外をつなぐルートと考えられる。１号平場と２号平場との高低差は＋0.5～1.5ｍ程で、１号堀跡の底面との高低差は最大＋92㎝である。

施　　設　１号平場で検出した中世城館に関わる遺構は、２号掘立柱建物跡、１・２号柱列跡、

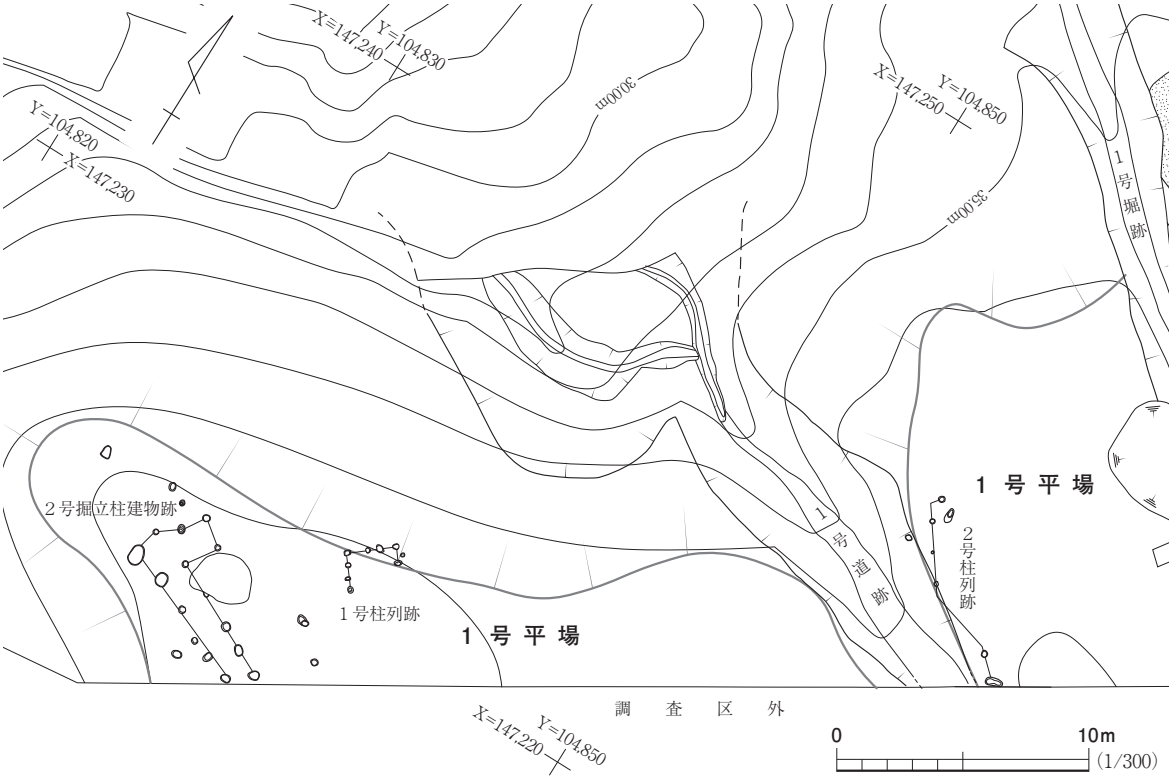


図９　１号平場遺構配置図

１号道跡と小穴６基である。２号掘立柱建物跡は平場西隅部に、１号柱列跡は頂部平坦面の縁辺に、２号柱列跡は１号土塁・１号堀跡に並行して分布している。１号道跡は北西側の丘陵斜面を北西の平場の外に向かって下がって行く。

ま と め　１号平場は城館の中で、最も西側に位置する。４・５号平場と比較して、丘陵を掘削・整地する造作はなく、施設も柵とみられる２号掘立柱建物跡や、１・２号柱列跡が認められる程度で、居住性のある建物や本格的な防御施設は確認できない。このことから、本平場はいわゆる城館の「外郭」に相当し、柵などによって「主郭」に来襲する敵の侵入を防ぐための場と推測される。（佐　藤）

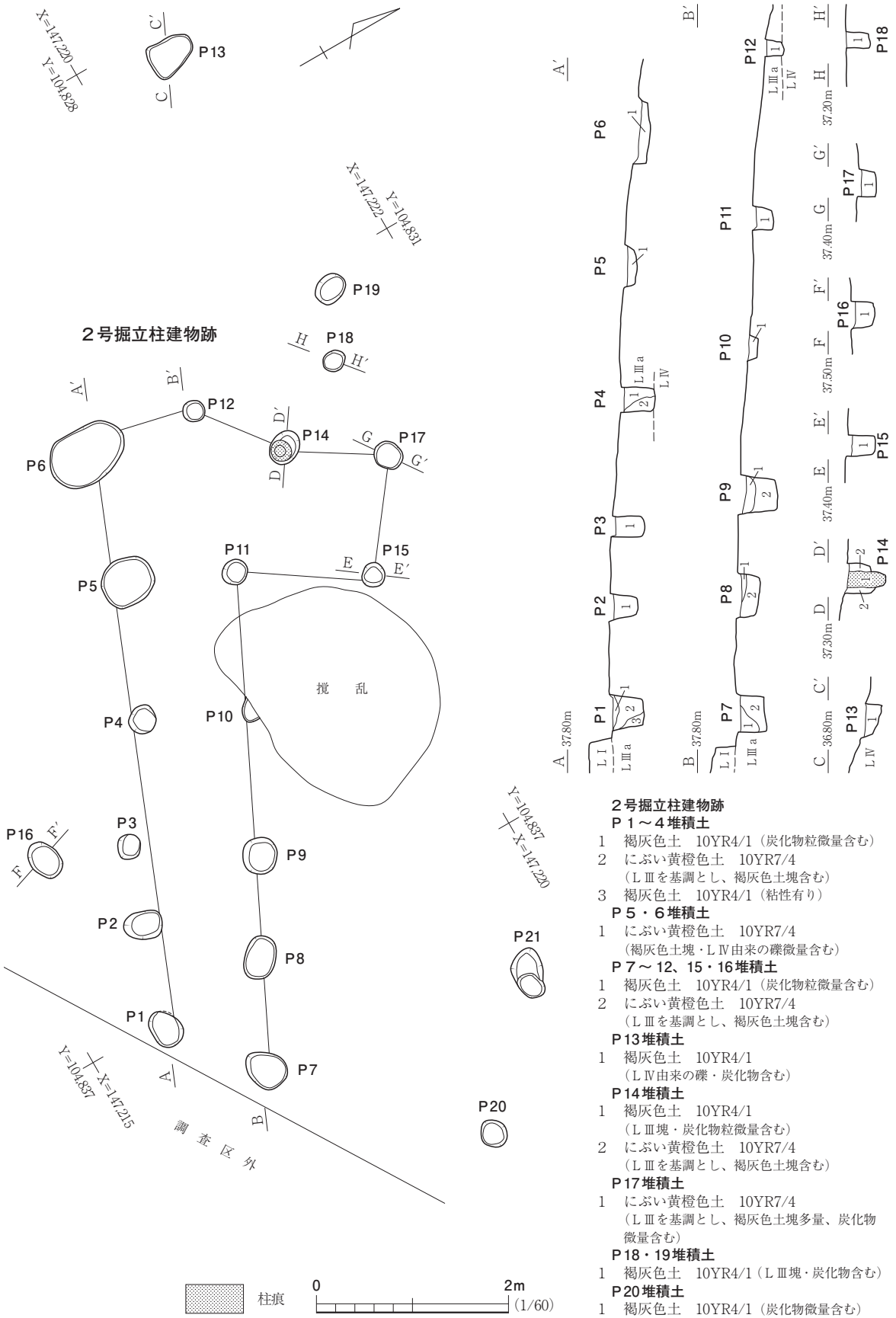
２号掘立柱建物跡　ＳＢ02（図10、写真９）

本遺構は１号平場南西隅部のＨ18、Ｉ18・19グリッドに位置する。丘陵部平坦面に立地し、付近の標高は平坦面が37ｍ前後、斜面が36.4ｍである。本遺構の北西・南西方向は沢１となり、調査区外へ向けて傾斜している。検出面はＬⅢａで、平坦面に規則的に並んだ21基の柱穴群として確認した。本遺構の北東方向には１号柱列跡が位置している。本遺構と重複する遺構はない。本遺構は調査区際に近接していることから、調査区外の南東にも建物跡は広がる可能性がある。

本遺構は桁行き北西・南東５間、さらにＰ６・11で北東・南西に屈折し３間、梁行き１間の側柱建物跡で、平面形はＬ字形を呈する。また、Ｐ13・16・18・19・20・21は柱列としては組めなかったが、土質が近似することや建物跡に近接することから同一遺構として報告する。主軸方向は、北西・南東側柱列を基軸とした場合、Ｎ24°Ｗとなる。各柱列の全長は、桁行きのＰ１－Ｐ６（南西側柱列）が6.08ｍ、Ｐ７－Ｐ12（北東側柱列）が6.92ｍ、Ｐ６－Ｐ17（北西側柱列）が3.15ｍ、Ｐ５－Ｐ15（南東側柱列）が2.56ｍ、梁行きのＰ１－Ｐ７が1.15ｍ、Ｐ17－Ｐ15が1.25ｍとなる。建物内の面積は9.8㎡程である。

建物を構成する各柱穴の平面形は、円形もしくは楕円形を基調とする。規模は19～84㎝と径に幅がある。中でもＰ６が最も大きく84㎝を測る。柱穴の検出面からの深さは約30～40㎝が主体となり、一方Ｐ５・６・10・19・20は約10㎝と浅い。各柱穴の覆土はＰ14以外、いずれもＬⅡを由来とする褐灰色土やＬⅢを由来とするにぶい黄橙色土を基調としており、自然に流入した土と考えた。Ｐ14はℓ１の褐灰色土が柱痕、ℓ２のにぶい黄橙色土が掘形の埋土である。本遺構のＰ13からは粘土塊１点が出土しているが、小片のため図示していない。Ｐ13から出土した１点の炭化物に対して、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行い、樹種はヒノキ属、２σ暦年範囲は11世紀前葉から12世紀中葉との結果を得た（第４章第１節参照）。

本遺構は１号平場の南西隅に位置する、平面形がＬ字形の建物跡である。本遺構は梁行きが約1.15ｍと短いのが特徴で、いわゆる「狭梁掘立柱建物跡」に類するものと考えられる。本遺構は１号平場と平場外を遮断する役割を持った施設と考えられる。年代は、１号平場の軸線と整合することから城館に関連する遺構と判断し、15世紀頃の所産と考えられる。（佐　藤）



２号掘立柱建物跡

Ｐ１～４堆積土

1　褐灰色土　10YR4/1（炭化物粒微量含む）
2　にぶい黄橙色土　10YR7/4
（ＬⅢを基調とし、褐灰色土塊含む）
3　褐灰色土　10YR4/1（粘性有り）

Ｐ５・６堆積土

1　にぶい黄橙色土　10YR7/4
（褐灰色土塊・ＬⅣ由来の礫微量含む）

Ｐ７～12、15・16堆積土

1　褐灰色土　10YR4/1（炭化物粒微量含む）
2　にぶい黄橙色土　10YR7/4
（ＬⅢを基調とし、褐灰色土塊含む）

Ｐ13堆積土

1　褐灰色土　10YR4/1
（ＬⅣ由来の礫・炭化物含む）

Ｐ14堆積土

1　褐灰色土　10YR4/1
（ＬⅢ塊・炭化物粒微量含む）
2　にぶい黄橙色土　10YR7/4
（ＬⅢを基調とし、褐灰色土塊含む）

Ｐ17堆積土

1　にぶい黄橙色土　10YR7/4
（ＬⅢを基調とし、褐灰色土塊多量、炭化物微量含む）

Ｐ18・19堆積土

1　褐灰色土　10YR4/1（ＬⅢ塊・炭化物含む）

Ｐ20堆積土

1　褐灰色土　10YR4/1（炭化物微量含む）

図10　２号掘立柱建物跡

１号柱列跡　ＳＡ01（図11、写真10）

１号柱列跡は調査区南西側のＩ・Ｊ18グリッドに位置する。丘陵平坦面の縁辺部に立地し、付近の標高は36.9～37.2ｍとなる。本遺構から北方向は、急斜面となり１号道跡へ傾斜している。検出面はＬⅢで、コの字状に並んだ褐灰色土を基調とする９基の柱穴群として確認した。本遺構と重複する遺構はないが、南西側には２号掘立柱建物跡が近接して位置している。

本遺構はコの字状に配置された９基の柱穴で構成される。柱配置は北東・南西方向に延伸するＰ１～４の３間と、これに直交する北西・南東方向のＰ１・６・８・９の３間、Ｐ４・７・５の２間となる。北東・南西方向の柱列跡を主軸とした場合の方向は、Ｎ40°Ｅとなり、等高線に並行している。

コの字状となる本遺構の全長は6.35ｍとなり、各柱列間の長さは、概ね40～60cm前後と短い。Ｐ１－Ｐ２は85cmとなる。

各柱穴の平面形は、概ね楕円形を基調とする。平面形の規模は16～26cm程となるが、Ｐ３は34cmを測り、やや大きい。柱穴の検出面からの深さは22～30cm程となり、Ｐ８・９は12cm程と浅い。

柱穴の覆土は、いずれも炭化物を含むＬⅡを由来とする褐灰色土やＬⅢを由来とする灰黄褐色土

図11　１号柱列跡

となる。斜面上位から自然に堆積したものと判断した。本遺構から出土した遺物はない。

本遺構は１号平場の長軸方向と近似することから、城館に付随する柵などの防御施設と推測される。年代は城館に関連する遺構であることから、15世紀頃の所産と考えられる。　（佐　藤）

２号柱列跡　ＳＡ02（図12、写真11）

２号柱列跡は調査区南西側のＫ・Ｌ17グリッドに位置する。１号平場の東側に立地し、付近の標高は36.5～36.7ｍとなる。検出面はＬⅢで、１号道跡の長軸に沿った、黒褐色土を基調とする８基の柱穴群として確認した。本遺構の南西側には１号道跡が位置している。また本遺構の軸線上には６号溝跡、１号性格不明遺構が位置している。本遺構のＰ４と１号性格不明遺構が重複し、本遺構が新しい。Ｐ６は調査区外へと続いていることから、柱列跡は南東方向に延伸する可能性がある。

本遺構は８基の柱穴で構成される。柱配置は湾曲しながら北西・南東方向に向けて延伸するＰ６～５の５間となる。Ｐ７・８は柱列を構成しないものの、柱穴の覆土が同様なことから、同一柱列として報告する。主軸方向はＮ38°Ｗとなり、１号道跡に並行している。

本遺構の全長は8.15ｍとなり、各柱列間の長さは、Ｐ６－Ｐ４が1.11ｍ、Ｐ４－Ｐ１が3.38ｍ、Ｐ１－Ｐ２が1.27ｍ、Ｐ２－Ｐ８が1.12ｍ、Ｐ８－Ｐ３が1.15ｍ、Ｐ３－Ｐ５が0.95ｍである。各

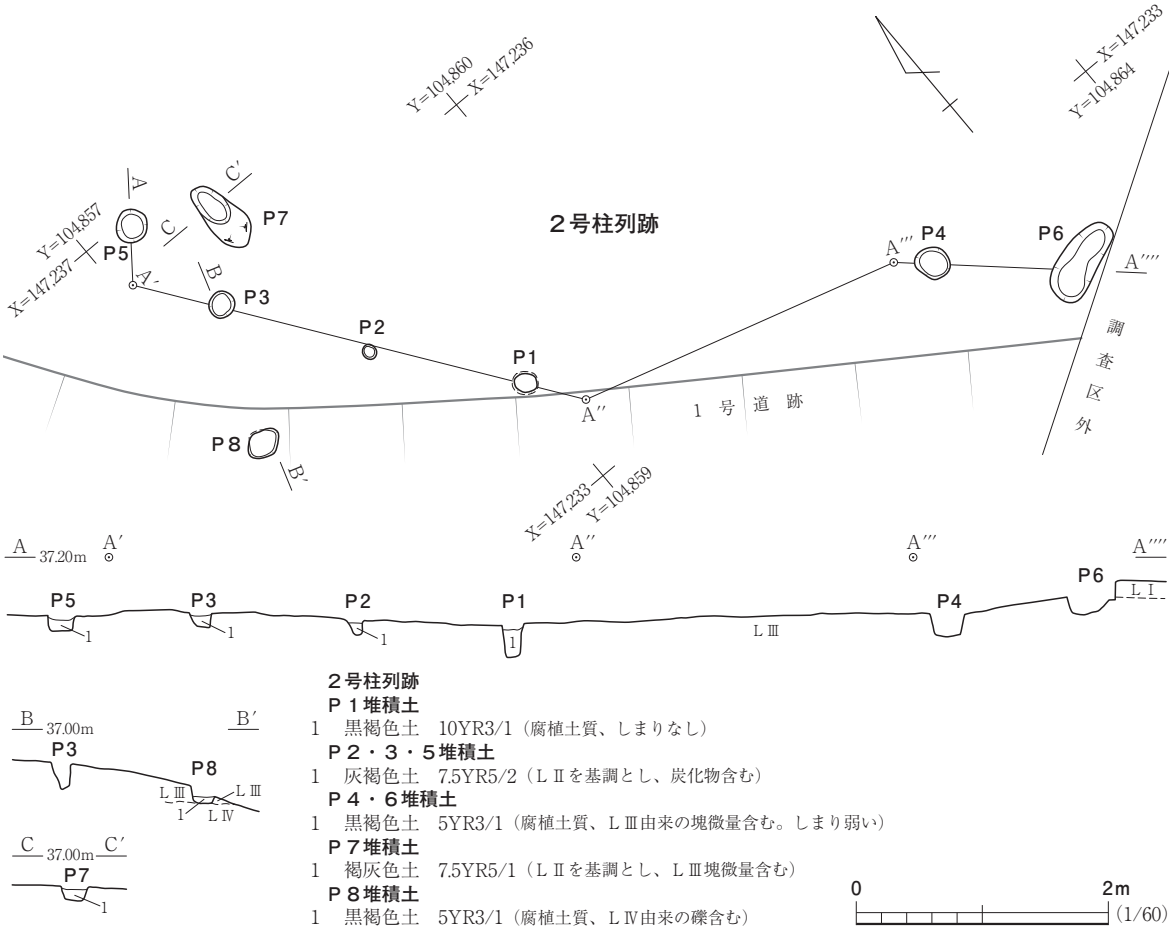


図12　２号柱列跡

柱穴の平面形は、概ね円形を基調とするが、Ｐ６・７は細長い楕円形となる。平面形の規模は、10～30cm程でＰ７は59cm、Ｐ８は68cmと径が大きい。柱穴の検出面からの深さは10cm程と浅く、Ｐ１が26cmとなる。

柱穴の覆土は、Ｐ２・３・５・７がＬⅡを由来とする灰褐色土・褐灰色土を基調とし、斜面上位から自然に堆積したものと判断した。Ｐ１・４・６・８は腐植土質の黒褐色土を基調とし、柱根が腐植したものと推測される。本遺構から出土した遺物はない。

本遺構は１号道跡と一体で機能した柵跡と考えられる。１号道跡から１号平場へと侵攻する敵を遮断する役割があったと推測される。年代は城館に関連する遺構であることから、15世紀頃の所産と考えられる。（佐　藤）

１号道跡（図13、写真12・13・61）

１号道跡は、丘陵頂部の平坦面から沢２の斜面上位、Ｉ～Ｌ17、Ｊ18グリッドに位置している。標高は、31.5～36.6ｍである。調査前の現況では大部分が埋没しており、沢２に連続する自然地形のくぼみとして認識していたが、調査後の結果、明確な掘り込みを持つことや、底面の傾斜が緩やかで踏み締まりがあることから、城館に関連した道跡と判断した。

検出面はＬⅢａである。本遺構に近接して２号柱列跡が並行して位置している。６号土坑と重複しており、これより新しい。一方、南東側は調査区外に続いている。

本遺構は北西・南東方向に延伸する堀状の部分と、北西隅の沢２斜面を切土した平場状の部分で構成される。

堀状の部分の規模は遺存値で長さ15.6ｍ、幅が5.3ｍを測る。丘陵斜面を斜向し、主軸方向はＮ36°Ｗとなる。検出面から底面までの深さは、1.3m程となる。断面形は逆台形状となり、緩やかに立ち上がる。底面は北西の沢２から南東の１号平場へ向かって緩やかに上がっており、その勾配は10～15°となる。

平場状になる部分の規模は、北東・南西10.6ｍ、北西・南東は遺存値で8.4ｍを測る。底面はＬＶ上面まで掘削しており、一部はグライ化していた。底面は比較的平坦だが、南西側はわずかに傾斜している。本遺構の堆積土は５層に区分した。ℓ１～３は灰黄褐色土や褐灰色土を基調としており、斜面上位から覆うように堆積していることから自然堆積と判断した。ℓ４は腐植土を含む褐灰色土で、遺構廃絶直後の自然堆積土である。ℓ５は灰黄褐色土でＬⅣを由来とする礫を多く含み、踏み締まりが認められることから、遺構機能時の堆積土と判断した。

１号道跡に付帯する施設として２条の溝跡を確認した。溝跡は平場状になる部分の底面に位置している。溝跡は重複しており、溝跡１が溝跡２よりも新しい。いずれの溝も平場状になる部分の下端に沿って構築されており、規模は溝跡１が長さ9.6ｍ、幅0.6～2.2cm、深さ84cmを測る。断面形はＶ字状となる。溝跡２は長さ6.9ｍ、幅70cm、深さ22cmを測る。断面形は皿状となる。溝跡１・２の覆土はいずれも砂質土を基調としており、斜面上位からの自然堆積土と判断した。

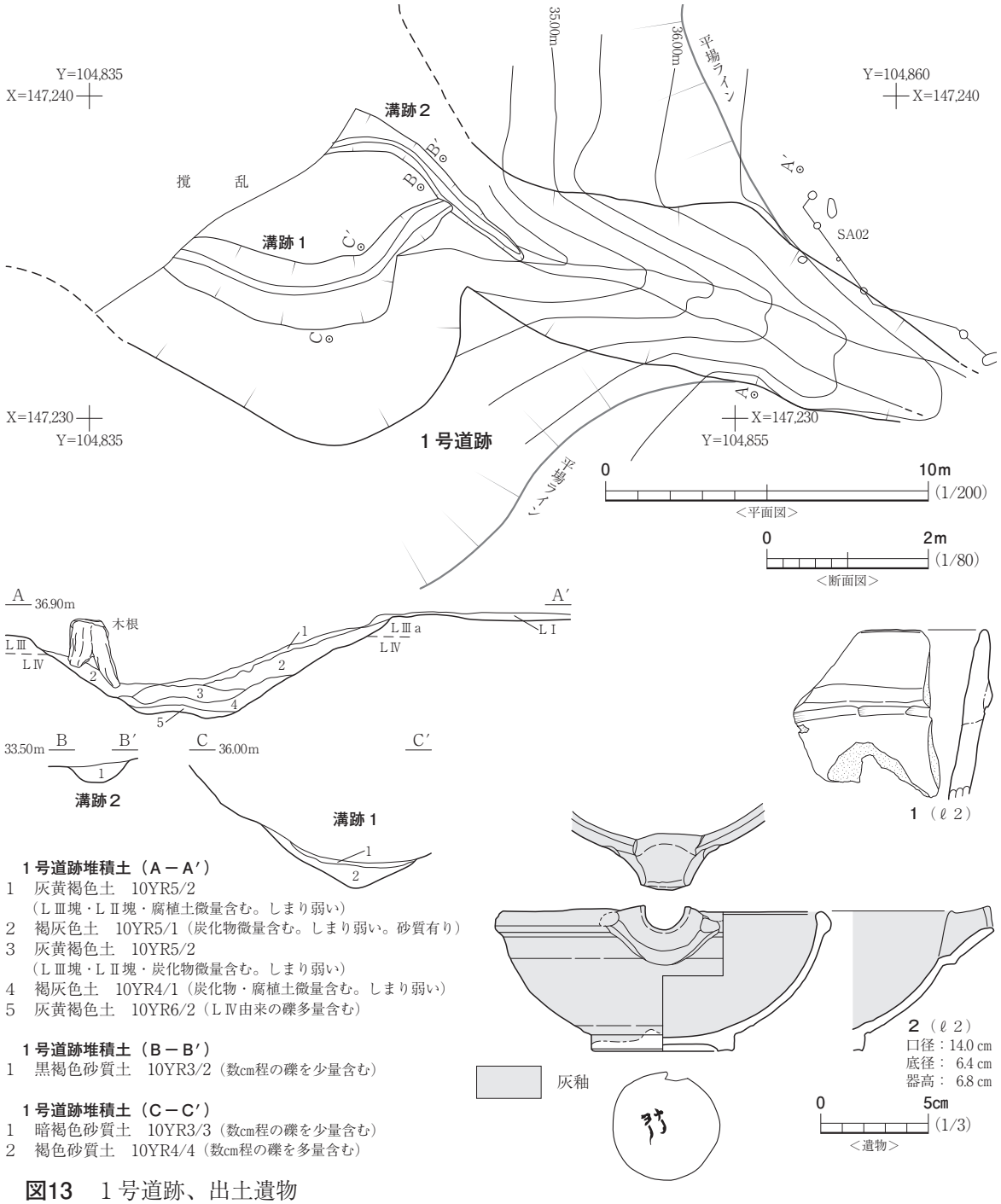


図13　１号道跡、出土遺物

出土遺物は縄文土器１点、陶磁器１点があり、すべてを図示した。図13－１は縄文土器の深鉢である。外面の口縁部付近には、隆帯がめぐり、綱取式と考えられ、縄文時代後期前葉の所産と考えられる。図13－２は大堀相馬焼の片口鉢である。口縁部は玉縁状となり、片口部は別作りとなる。灰釉は高台付近を除く全面に施釉される。底面には判読不能の墨書が認められる。18世紀後葉から19世紀初頭頃の所産と考えられる。

１号道跡は沢２の斜面を利用し、構築された北西・南東方向へ延伸する遺構である。底面は傾斜が緩く踏み締まりが認められることや、斜面に平場状の施設が附帯することから道として機能して

いたと考えられる。また、２号柱列跡が並行して近接すること等から、城館に関連した防御施設とも考えられる。城外から沢２の斜面にある小規模な平場を通り、１号道跡を通り、城内へと出入りしていたと推測できる。遺構に付帯する２条の溝跡は、道として使用するため、排水を目的としていたと考えている。年代は城館に関連する遺構であることから、15世紀頃の所産と考えられる。

（佐　藤）

１号平場の小穴群（図14）

１号平場では小穴を６基確認した。小穴が確認されている平場の中で最も少ない。１号道跡と１号土塁・１号堀跡に挟まれた、Ｋ16・17グリッド付近の平坦面に多く分布していることから、柵のような施設が存在した可能性がある。平面形は楕円形が多く、規模は長軸30～110㎝、深さは10～16㎝と浅いものが多い。小穴の堆積土はＢ・Ｃ類型のみである（小穴の堆積土の類型は用例参照）。１号平場の小穴群から遺物は出土していない。

（佐　藤）

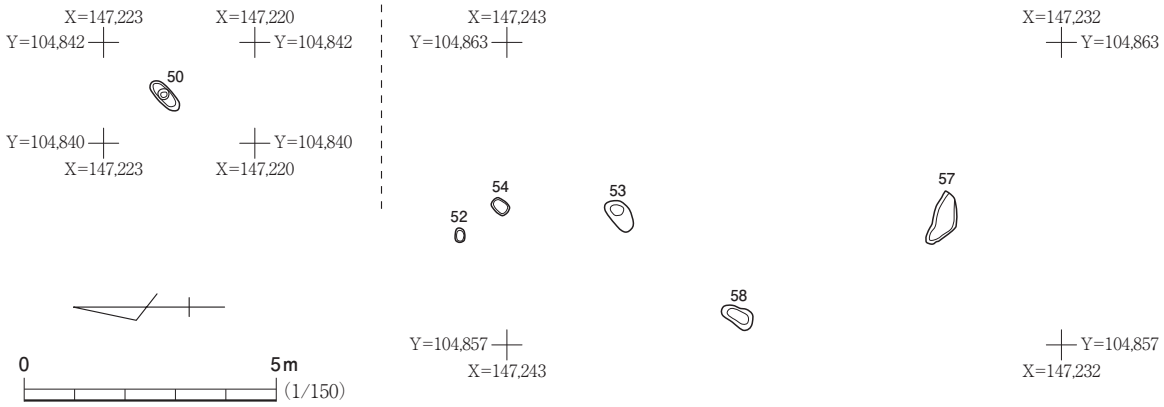


図14　１号平場の小穴群

第４節　２号平場

概　　要　２号平場は丘陵頂上部の平坦面、調査区の南西側のＭ・Ｑ・Ｒ13、Ｌ～Ｒ14、Ｋ～Ｐ15、Ｌ～Ｏ16グリッドに位置する（図15、写真５）。

２号平場の標高は、35.5～36.5ｍで、丘陵裾部の平坦面との高低差は26.5～27.5ｍである。２号平場は、南東方向の調査区外へ伸びているが、福島第二原子力発電所用地造成時の削平によって当時の姿は失われ、北西隅部には道路建設に伴う樹木の伐採により撹乱が多く認められる。造成前の地形図から判断した２号平場の平面形は不整な方形で、想定される規模は北東・南西方向で61ｍ、北西・南東方向で70ｍ以上である。平場の北側の一部は、北へ向かって半島状に突出する。平場はＬⅡ・Ⅲａが、斜面部ではＬⅢｂが認められ、特に整地や掘削された様子が認められないことから、丘陵頂上部の自然地形をそのまま平場として利用したと考えている。

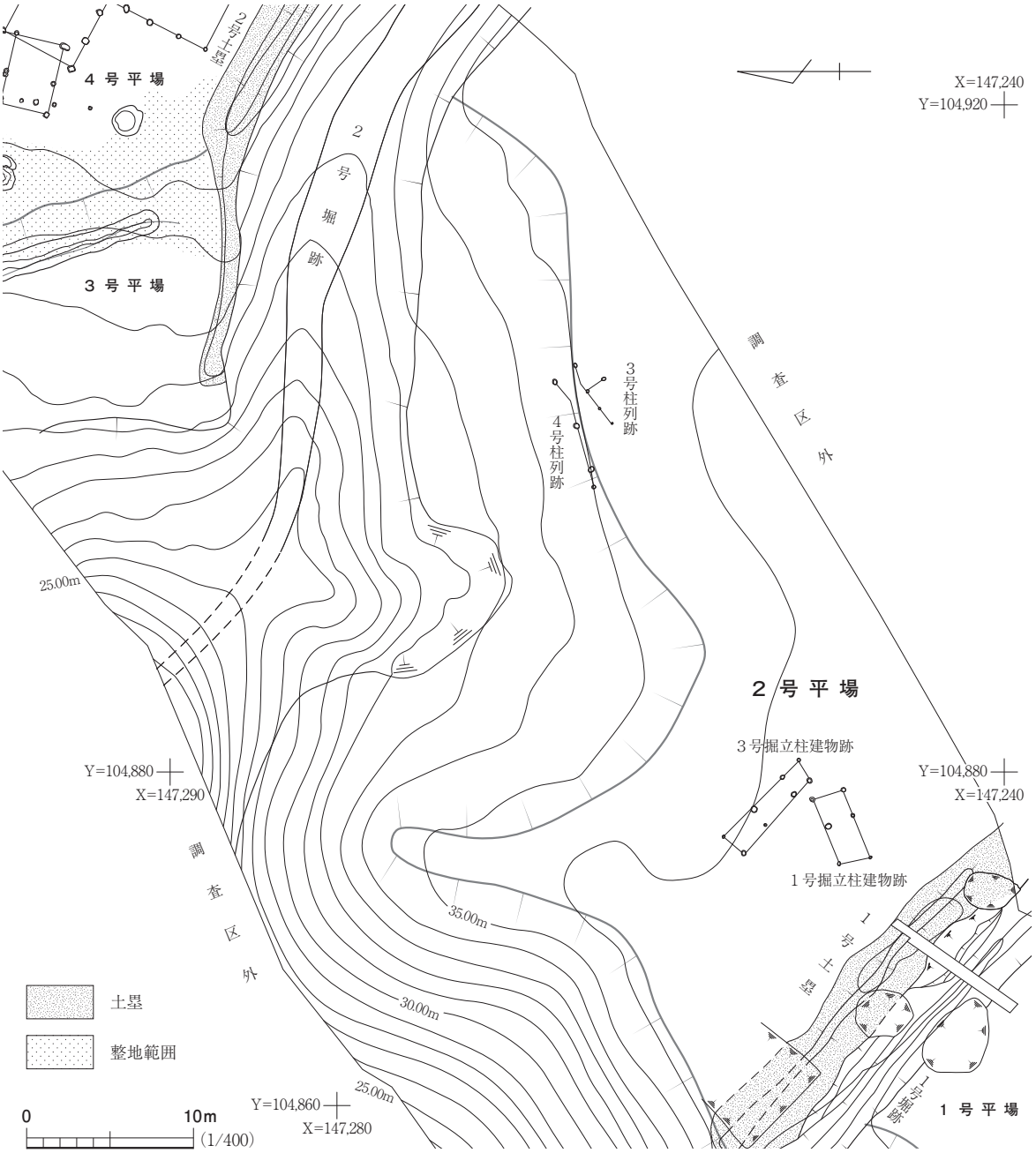


図15　２号平場遺構配置図

南西辺は１号土塁・１号堀跡で１号平場と区画され、北東辺は、２号土塁・２号堀跡で３～５号平場と区画している。各平場との高低差は１号平場で－0.5～1.5ｍ、３号平場で＋2.5～4.5ｍ、４号平場で＋0.7ｍで、２号堀跡の底面との高低差は＋2.56ｍである。

施　　設　２号平場で検出した中世城館に関わる遺構は、１・３号掘立柱建物跡、３・４号柱列跡のほか小穴51基を確認した。１・３号掘立柱建物跡や小穴群は、１号土塁・１号堀跡の北東側に密集し分布している。３・４号柱列跡は２号平場に並行して位置している。

ま と め　２号平場は、２号土塁・２号堀跡を挟んで３～５号平場の南西側に位置する。４・５号平場と比較して、丘陵を掘削・整地する造作が認められない。施設は、小規模・簡易な建物跡で

ある１・３号掘立柱建物跡が位置し、小穴群は少数で、その規模は小さい傾向にある。３・４号柱列跡は、沢３や２号堀跡の底面から２号平場へ侵入する敵を防ぐための施設と考えられる。このことから、本平場は１号平場と同様にいわゆる城館の「外郭」に相当し、柵などによって「主郭」に来襲する敵の侵入を防ぐ役割があったと推測できる。また、簡易な建物跡の存在は、兵士の臨時的な駐屯の場としての機能も考えられる。（佐　藤）

１号掘立柱建物跡　ＳＢ01（図16、写真14）

１号掘立柱建物跡は２号平場の西側、M15・16グリッドに位置する。丘陵頂上部の平坦面に立地し、付近の標高は36.5ｍである。本遺構から北東方向は、緩斜面となり２号堀跡へと傾斜している。検出面はＬⅢａで、北東・南西方向に規則的に並んだ６基の柱穴群として確認した。本遺構の南西方向には１号土塁・１号堀跡が、北東方向には３号掘立柱建物跡が近接して位置しており、周辺には小穴群が密集して確認されている。本遺構と重複する遺構はない。

本遺構は北東・南西桁行き２間、北西・南東梁行き１間の側柱建物跡で、平面形は長方形を呈する。北東・南西側柱列を基軸とした主軸方向はＮ22°Ｅとなる。各柱列の全長は、桁行き方向のＰ１－Ｐ３（北西側柱列）が4.15ｍ、Ｐ４－Ｐ６（南東側柱列）が4.37ｍ、梁行きのＰ１－Ｐ４（南西側柱列）が1.95ｍ、Ｐ３－Ｐ６（北東側柱列）が1.98ｍとなる。四隅の柱穴に囲まれた範囲の面積は

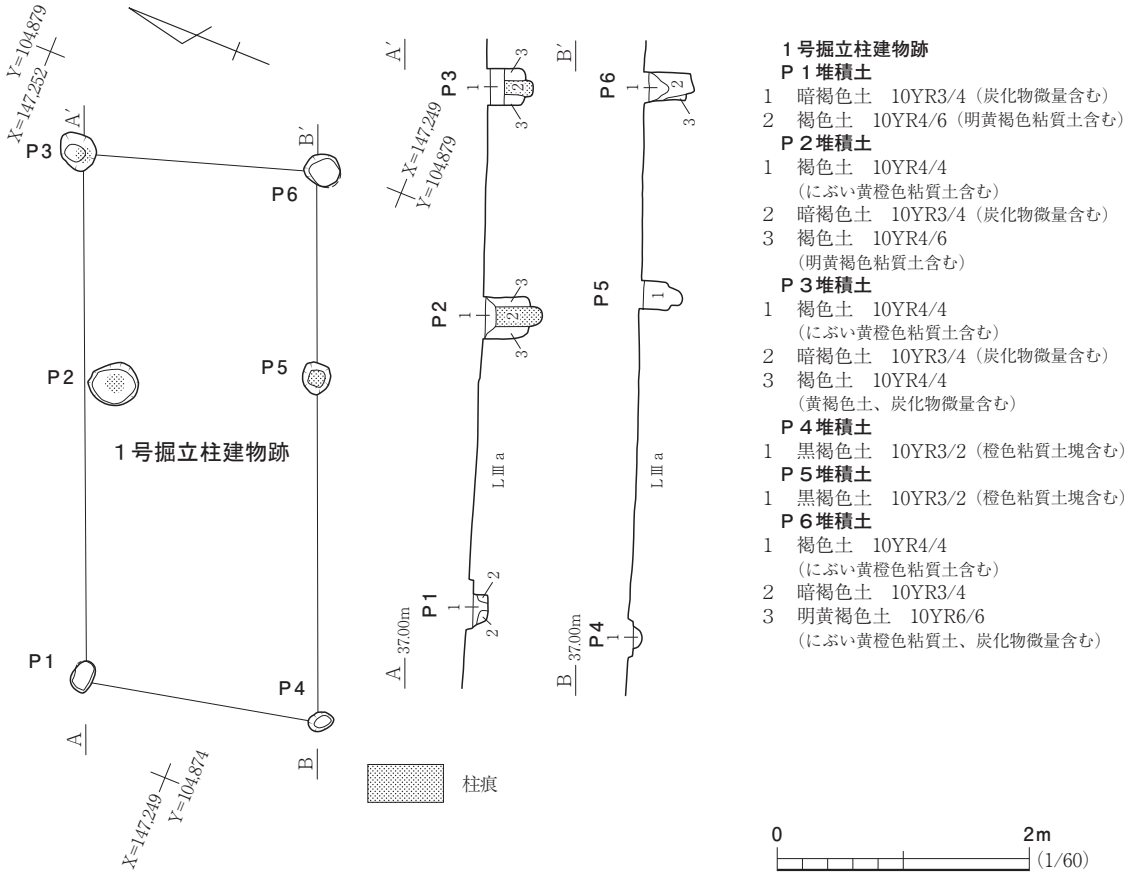


図16　１号掘立柱建物跡

7.9㎡程である。

建物を構成する各柱穴の平面形は、Ｐ２・３・５・６が円形、Ｐ１・４が楕円形を基調とする。規模は、Ｐ３・５・６が約21～30㎝、Ｐ１・４が長辺約23㎝、短辺約14㎝となる。Ｐ２は径が大きく約41㎝を測る。柱穴の検出面からの深さはＰ２・３・５・６が約34～47㎝、一方Ｐ１・４は約12㎝と浅い。Ｐ４以外の柱穴で柱痕が確認できた。各柱穴の覆土は、ＬⅡを由来とする暗褐色土や褐色土を基調とし、ＬⅢ塊が含まれる。本遺構から出土した遺物はない。

本遺構は１号土塁・１号堀跡と梁行きが平行することから、城館に関連する建物と推測される。外郭に相当する２号平場に位置し、２間×１間と小規模であることから、臨時応急的な建物と想定される。年代は城館に関連する遺構であることから、15世紀の所産と考えられる。　（吉　野）

３号掘立柱建物跡　ＳＢ03（図17）

３号掘立柱建物跡は２号平場の中央付近、Ｍ・Ｎ15グリッドに位置する。丘陵頂上部の平坦面に立地し、付近の標高は36.5ｍである。本遺構から北東方向は、緩斜面となり２号堀跡へと傾斜している。検出面はＬⅢａで、北西・南東方向に規則的に並んだ８基の柱穴群として確認した。本遺構の南西方向には１号掘立柱建物跡が近接して位置しており、周辺には小穴群が集中して確認されている。３号住居跡が重複しており、本遺構の方が新しい。

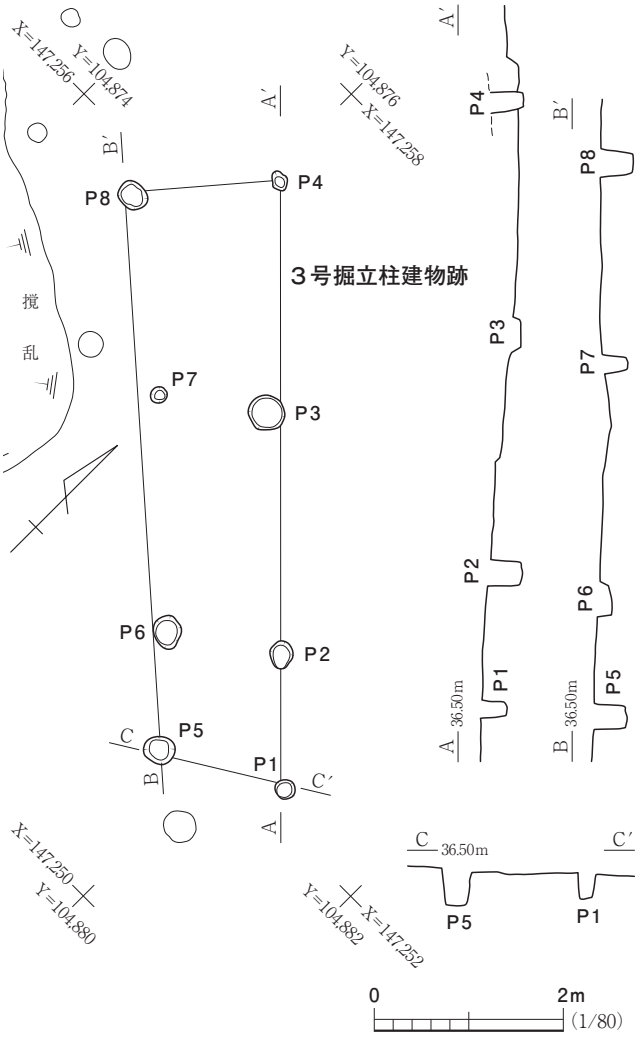


図17　３号掘立柱建物跡

本遺構は北西・南東桁行き３間、北東・南西梁行き１間の側柱建物跡で、平面形は長方形を呈する。北西・南東側柱列を基軸とした主軸方向はＮ44°Ｗとなる。各柱列の全長は、桁行き方向のＰ１－Ｐ４（北東側柱列）が6.5ｍ、Ｐ５－Ｐ８（南西側柱列）が5.9ｍ、梁行きのＰ１－Ｐ５（南東側柱列）が1.4ｍ、Ｐ４－Ｐ８（北西側柱列）が1.56ｍとなる。四隅の柱穴に囲まれた範囲の面積は9.2㎡程である。

建物を構成する各柱穴の平面形は円形を基調としており、Ｐ４のみが不整円形となる。規模は、Ｐ２・３・５・６・８

が約30～40㎝、Ｐ１・４・７が約20㎝となる。柱穴の検出面からの深さは30～35㎝程で、Ｐ６は14㎝と浅い。

本遺構は２号平場の南西側に位置する、平面形が長方形の建物跡である。本遺構は桁行きが約1.6ｍと短いのが特徴で、いわゆる「狭梁掘立柱建物跡」に類するものと考えられる。本建物の役割として、平場内の遮蔽の意図した建物と推測される。年代は城館に関連する遺構であることから、15世紀の所産と考えられる。（佐　藤）

３号柱列跡　ＳＡ03（図18、写真15）

３号柱列跡はＰ14グリッドに位置する。２号平場の北側縁辺部に立地し、付近の標高は34.9～35.4ｍとなる。本遺構から北方向は、緩斜面となり２号堀跡へと傾斜している。検出面はＬⅣで、北東・南西方向に規則的に並んだ灰黄褐色土を基調とする５基の柱穴群として確認した。本遺構の北西側には並行して４号柱列跡が近接して位置している。また、南西側には７号土坑、ＧＰ60・61が位置している。本遺構と重複する遺構はない。

本遺構は４基の柱穴で構成される。柱配置は北東・南西方向に延伸するＰ１～４の３間と、これに直交するＰ３・５の１間となる。主軸方向はＮ40°Ｅとなり、２号平場の長軸方向に並行している。

本遺構の全長は4.2ｍとなり、各柱列間の長さは、Ｐ１－Ｐ２が1.15ｍ、Ｐ２－Ｐ３が1.35ｍ、Ｐ３－Ｐ４が1.72ｍ、Ｐ３－Ｐ５が1.23ｍである。各柱穴の平面形は、Ｐ１・２が円形、それ以外は楕円形を基調とする。平面形の規模は、Ｐ１・２が約13㎝、それ以外が21～28㎝となる。柱穴の検出面からの深さは、Ｐ５が37㎝となり、それ以外は約11～21㎝と浅い。柱穴の覆土は、Ｐ１～４はいずれも単層で、ＬⅣを由来とする灰黄褐色土である。斜面上位から自然に堆積したものと判断した。Ｐ５では柱痕が観察でき、ℓ１はＬⅣを由来とするにぶい黄褐色土で自然堆積と判断した。ℓ２は掘形埋土である。本遺構から出土した遺物はない。

本遺構はその立地や主軸方向から、２号堀跡から２号平場へ侵攻する敵を遮断するための柵と推測できる。年代は城館に関連する遺構であることから、15世紀の所産と考えられる。（佐　藤）

４号柱列跡　ＳＡ04（図18、写真15）

４号柱列跡はＯ・Ｐ14グリッドに位置する。２号平場北側の縁辺部に立地し、付近の標高は34.4ｍから35.2ｍである。本遺構から北方向は、緩斜面となり２号堀跡へと傾斜している。検出面はＬⅣで、北東・南西方向に規則的に並んだ灰黄褐色土を基調とする４基の柱穴群として確認した。本遺構の南東側には並行して３号柱列跡が近接して位置している。また、南側にはＧＰ60・61が位置している。本遺構と重複する遺構はない。

本遺構は４基の柱穴で構成される。柱配置は北東・南西方向に延伸するＰ１～４の３間となる。主軸方向はＮ54°Ｅとなり、２号平場の長軸に並行する。

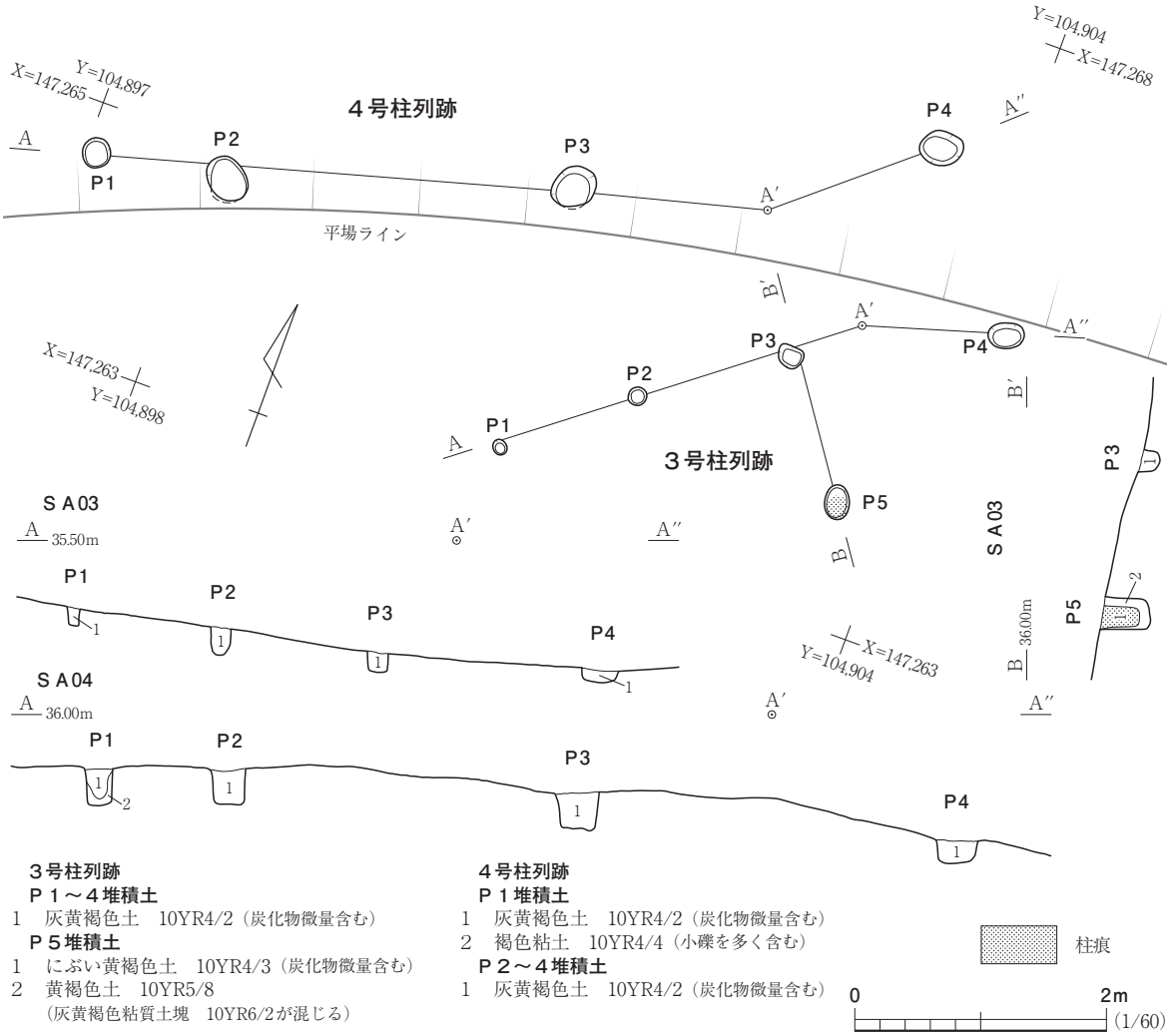


図18　３・４号柱列跡

本遺構の全長は6.8ｍとなり、各柱列間の長さは、Ｐ１－Ｐ２が1.08ｍ、Ｐ２－Ｐ３が2.74ｍ、Ｐ３－Ｐ４が2.86ｍとなる。各柱穴の平面形はいずれも楕円形を基調とする。平面形の規模は、25～35㎝となる。柱穴の検出面からの深さは、20～39㎝となる。柱穴の覆土は、ＬⅣを由来とする灰黄褐色土である。斜面上位から自然に堆積したものと判断した。本遺構から出土した遺物はない。

本遺構はその立地や主軸方向から、２号堀跡から２号平場へ侵攻する敵を遮断するための柵と推測できる。年代は城館に関連する遺構であることから、15世紀の所産と考えられる。　（佐　藤）

２号平場の小穴群（図19）

２号平場では小穴を51基確認した。Ｍ・Ｎ15グリッド付近の平坦面、１・３号掘立柱建物跡の周辺に多く分布していることから、複数の建物が存在し、幾度かの建て替えが行われた可能性がある。平面形は円形や方形が多く、規模は長軸で20～30㎝台が多く、深さは20～60㎝と幅があるが、20㎝台が多い傾向が認められる。小穴の堆積土はＢ・Ｃ類型が多く、Ａ類型が少数認められる（小穴の堆積土の類型は用例参照）。２号平場の小穴群からは、遺物は出土していない。　（佐　藤）

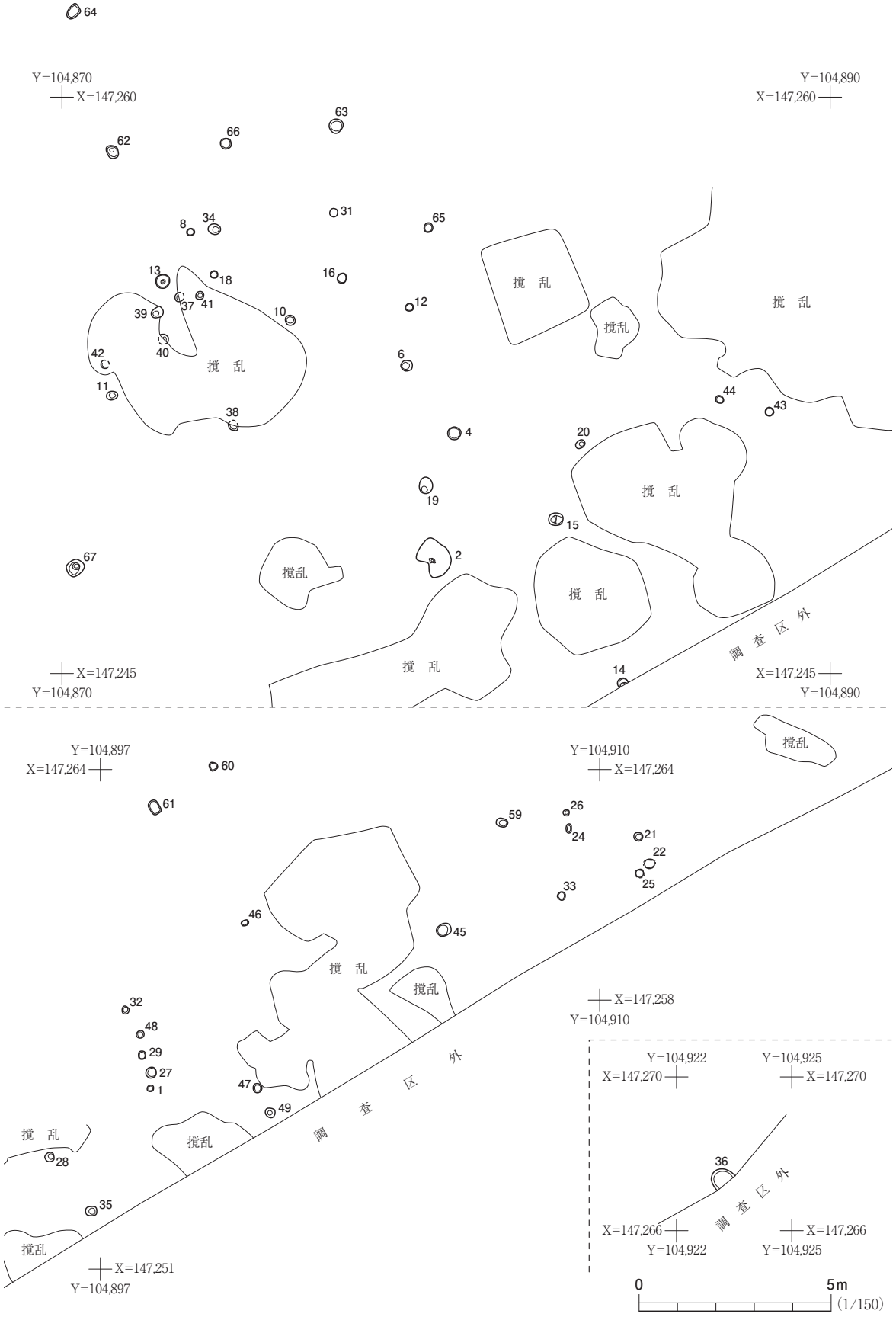


図19　２号平場の小穴群

第５節　３ 号 平 場

概　　要　３号平場は、丘陵頂上付近の緩斜面、調査区の中央のＰ・Ｑ９～12グリッドに位置する（図20、写真６）。３号平場の標高は、31～34ｍで、丘陵裾部の平坦面との高低差は20～23ｍである。３号平場の平面形は、西側に張り出す不整な三角形を呈する。規模は北東・南西方向で30ｍ、東西方向は16ｍである。３号平場の東側は、４号平場の整地により覆われていた。３号平場は、自然の緩やかな斜面部分を平場として利用している。南西辺は、２号土塁・２号堀跡によって２号平場と区画している。東辺は、自然の高低差により４号平場と区画している。各平場との高低差は２号平場で－2.5～4.5ｍ、４号平場で－1.8～3.8ｍである。

施　　設　中世城館に関わる遺構として、13号溝跡、17号性格不明遺構を確認した。いずれの遺構も４号平場の整地で埋め立てられていることから、４号平場の整地に伴い、３号平場の機能も停止したと考えられる。

ま と め　３号平場は城館の中で、４号平場の西側に位置する。平場は小規模で、緩やかな傾斜があり、小穴が認められないことから、居住を目的とした場ではなく、沢３や２号堀跡の底面から４号平場に侵入する敵を防ぐ役割があったと推測される。（佐　藤）

13号溝跡　ＳＤ13（図21、写真16・17）

本遺構は、３号平場の中央側、Ｐ・Ｑ10・11グリッドに位置する。検出面はＬⅣで、４号平場の整地土を除去した際に、溝状の褐灰色土の範囲として確認した。11号性格不明遺構と４号平場の整地と重複し、本遺構が古い。

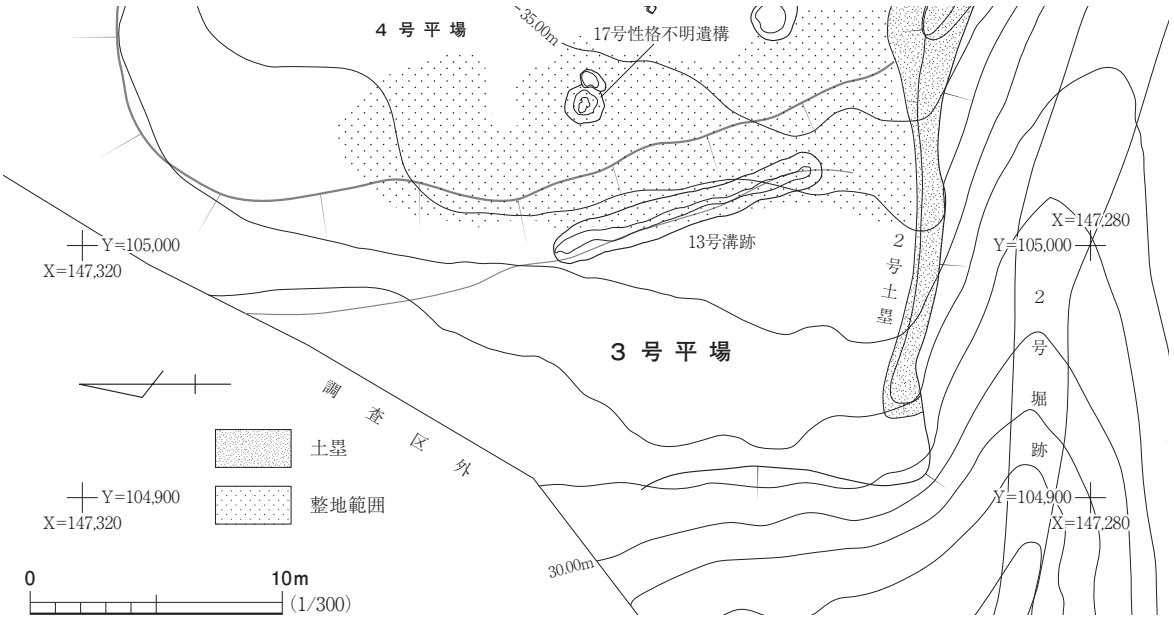


図20　３号平場遺構配置図

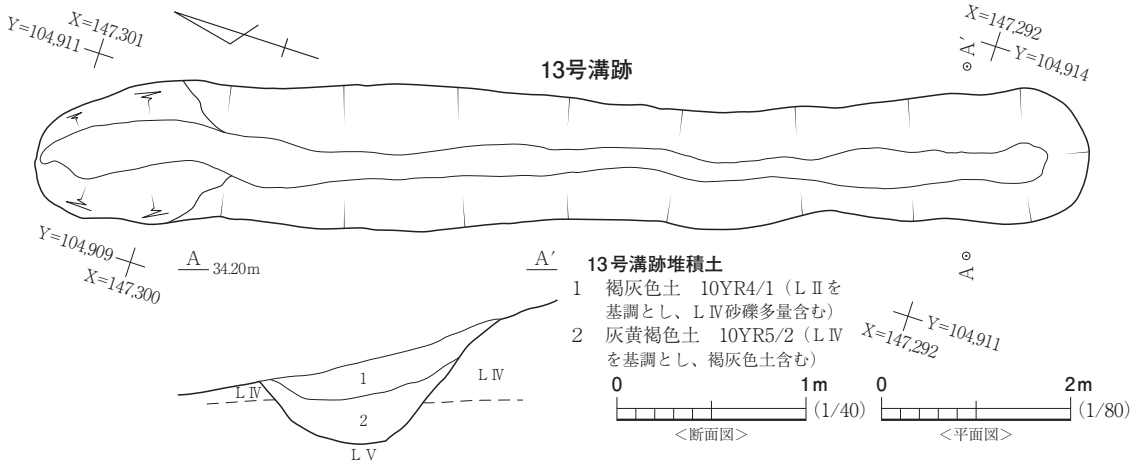


図21　13号溝跡

本遺構は北西・南東方向に延伸する溝跡で、３号平場の緩やかな傾斜に沿って構築される。規模は長さ11.1m、幅1.52ｍを測る。検出面からの深さは最大で69㎝である。周壁は急傾斜を基調とするが、北西隅部のみ、緩やかなスロープ状を呈する。掘り込みはＬＶ上面にまで達し、底面は平坦に整えられている。遺構内堆積土は２層に分けられた。ℓ１はＬⅡを由来とする褐灰色土で、ＬⅣの小礫を含む。ℓ２はＬⅣを由来とする灰黄褐色土で、褐灰色土塊を含む。遺構内堆積土は４号平場の整地土と近似することから、４号平場整地の際に埋められたものと判断している。本遺構から、遺物は出土していない。

本遺構は３号平場の緩やかな傾斜に沿う溝跡である。性格について、２号堀跡から４号平場への移動を遮断するための施設と考えられる。北西隅部がスロープ状になっているのは、溝内へ移動するためのものと考えられる。４号平場の整地の際に埋め立てられ、その機能を終えている。年代は、４号平場の整地土で埋め立てられていることや、城館に関連した遺構であることから15世紀頃の所産と考えられる。　（佐　藤）

17号性格不明遺構　ＳＸ17（図22、写真18・19・61）

本遺構は３号平場の北東斜面、Q10・11グリッドに位置する。検出面はＬⅣである。本遺構は４号平場の整地土の除去後に、不整な円形の褐灰色土の範囲として確認した。32号土坑、４号平場の整地土と重複し、本遺構が古い。本遺構の南西側3.7ｍには13号溝跡が位置する。

本遺構の平面形は、不整な円形を呈している。規模は直径1.6ｍ、底面までの深さは31㎝を測る。周壁は緩やかに立ち上がり、中央付近はわずかにくぼんでいる。底面はＬⅣ上面の小礫が多く露出しており、凹凸が著しい。堆積土は３層に分けられた。ℓ１はＬⅢを由来とする褐灰色土で、ＬⅣ塊や焼土などを含む。ℓ２はＬⅣを由来とする明褐灰色土で、ℓ３は黒褐色土でＬⅣ塊、焼土などを含む。いずれも堆積土の特徴から、人為による埋め立てと判断した。

本遺構からは中世陶器２点、かわらけ１点、弥生土器１点、土師器１点、石製品２点、鉄滓６点が出土している。この中から５点を図示した。図22－１・２は古瀬戸である。１は後期様式の祖

母懐茶壺の体部である。外面には鉄釉が施されている。４号平場整地の底面から出土した破片と接合した。２は瓶子の体部で、外面には灰釉が施され、１本引きの平行沈線がめぐる。図22－３はロクロ成形のかわらけである。器形は底部が小さく、外傾しながら直線的に立ち上がる。図22－４は黒雲母花崗岩製の温石である。通常の温石よりも大型で、表・裏・破損面にススが付着しており、加熱中に破損した可能性がある。図22－５は珪質凝灰岩製の砥石である。４面を砥面として使用している。中央部分の厚みが最大で、両端に向かい細くなる。

遺構内から出土した１点の炭化物に対して、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行い、樹種はツツジ科、２σ暦年範囲は15世紀前半との結果を得た（第４章第１節参照）。

本遺構は平面形が不整な円形で、浅く掘り込まれた遺構である。その詳細な性格は不明である。本遺構から出土した古瀬戸の祖母懐茶壺（図22－１）が、４号平場整地の底面から出土した破片と接合していることから、４号平場の整地とほぼ同時期に埋め立てられたと考えられる。年代は出土した遺物の特徴から15世紀代の所産と考えられ、放射性炭素年代測定の結果とも整合する。

（佐　藤）

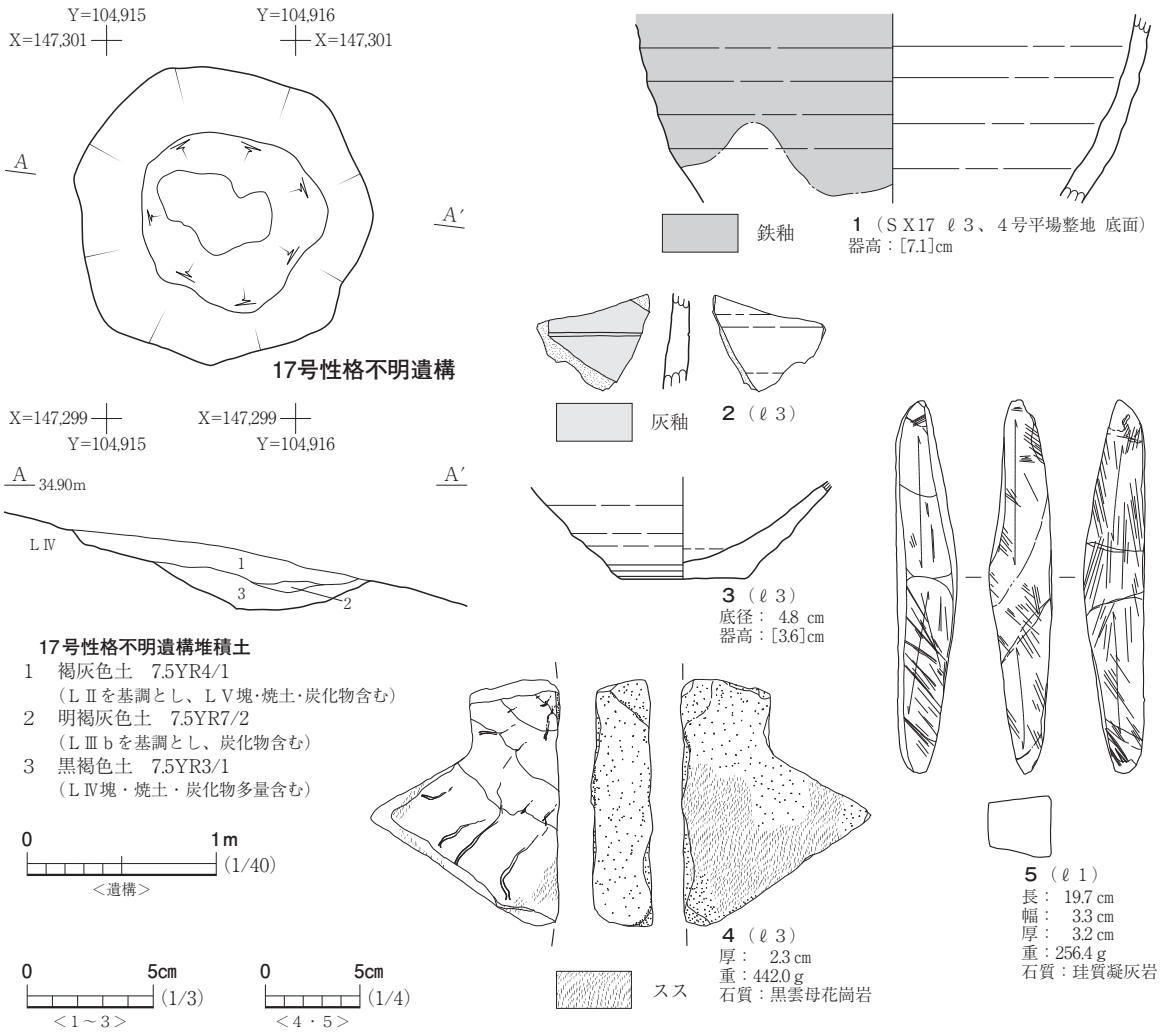


図22　17号性格不明遺構、出土遺物

第6節　4 号 平 場

概　　要　4号平場は、丘陵頂上の平坦面、調査区中央よりやや北東側のQ～S９、Q～T10～12グリッドに位置する(図23、写真６・20・21)。

４号平場の標高は、34.8～35.8mで、丘陵裾部の平坦面との高低差は23.8～24.8mである。４号平場の平面形は、北西側に張り出す不整な三角形を呈する。規模は北東・南西方向で32.2m、北西南東方向は27.6mである。４号平場の検出面の大部分はＬⅢｂであることから、丘陵頂上部のＬⅡ・Ⅲａを大規模に掘削し、北側と北西側の縁辺に整地を行い、広い平坦面を確保していると判断した。

南東辺は３号土塁・３号堀跡によって５号平場と区画され、北東隅には出入口が位置する。西辺は自然の高低差により３号平場と区画していたが、整地を行い、３号平場の範囲を包括している。北辺は自然の高低差により８号平場と区画しているため、本節では８号平場の小穴も含めて後述する。北東辺は斜面を削って傾斜をより急角度にしている。

各平場との高低差は３号平場で＋1.8～3.8m、５号平場で－0.7m、８号平場で＋3.4mである。

整　　地　４号平場では、北側と西側の縁辺部の２か所で整地を行っている。西側の整地は、３号平場東側の緩斜面を覆うように南北方向に細長く構築され、上端は平坦となる。整地の範囲は南北方向の長軸で24.4m、幅は10mで、深さは最大で68cmを測る。西側の整地は３層に分けられた(図23Ａ－Ａ′)。いずれもＬⅢａを由来とする土質であることから、４号平場全体をＬⅢｂまで掘り下げた際の掘削土(ＬⅢａ)で埋め立てたものと判断した。また、整地には版築は認められず、ＬⅢａを用いて短期間に埋め立てたものと判断した。

北側の整地は、５号平場から続いており、平場北側の縁辺から斜面上位を覆うように構築され、上端は平坦となる。整地の範囲は北西・南東方向の長軸で16.3m、幅は5.2mで、深さは最大で1.7mを測る。北側の整地は５層に分けられた(図63Ｃ－Ｃ′)。ℓ１・５はＬⅡを由来とし、ℓ２～４はＬⅢａ・ｂを由来とする土質となることから、４号平場全体を掘り下げた際の掘削土を用いて短期間で埋め立てたものと判断した。

施　　設　中世城館に関わる遺構として、４～７号掘立柱建物跡、７号柱列跡、32・58号土坑、小穴185基を確認した。

ま と め　４号平場は城館の中で、２号土塁・２号堀跡の内側に、３号土塁・３号堀跡の外側に位置する。１・２号平場と比較して、丘陵を掘削・整地する造作が認められる。４号平場は、全体を大規模に掘削することで、整地や土塁の構築土を賄うと同時に、５号平場と高低差を生じさせている。小穴の数は５号平場に次いで多く、施設は４棟の掘立柱建物群が重複して位置し、城館機能時も継続的に使用していたと考えられる。７号柱列跡は、斜面の傾斜する方向に沿って築かれており、３号平場から４号平場へ敵の侵入を防ぐ施設と考えられる。

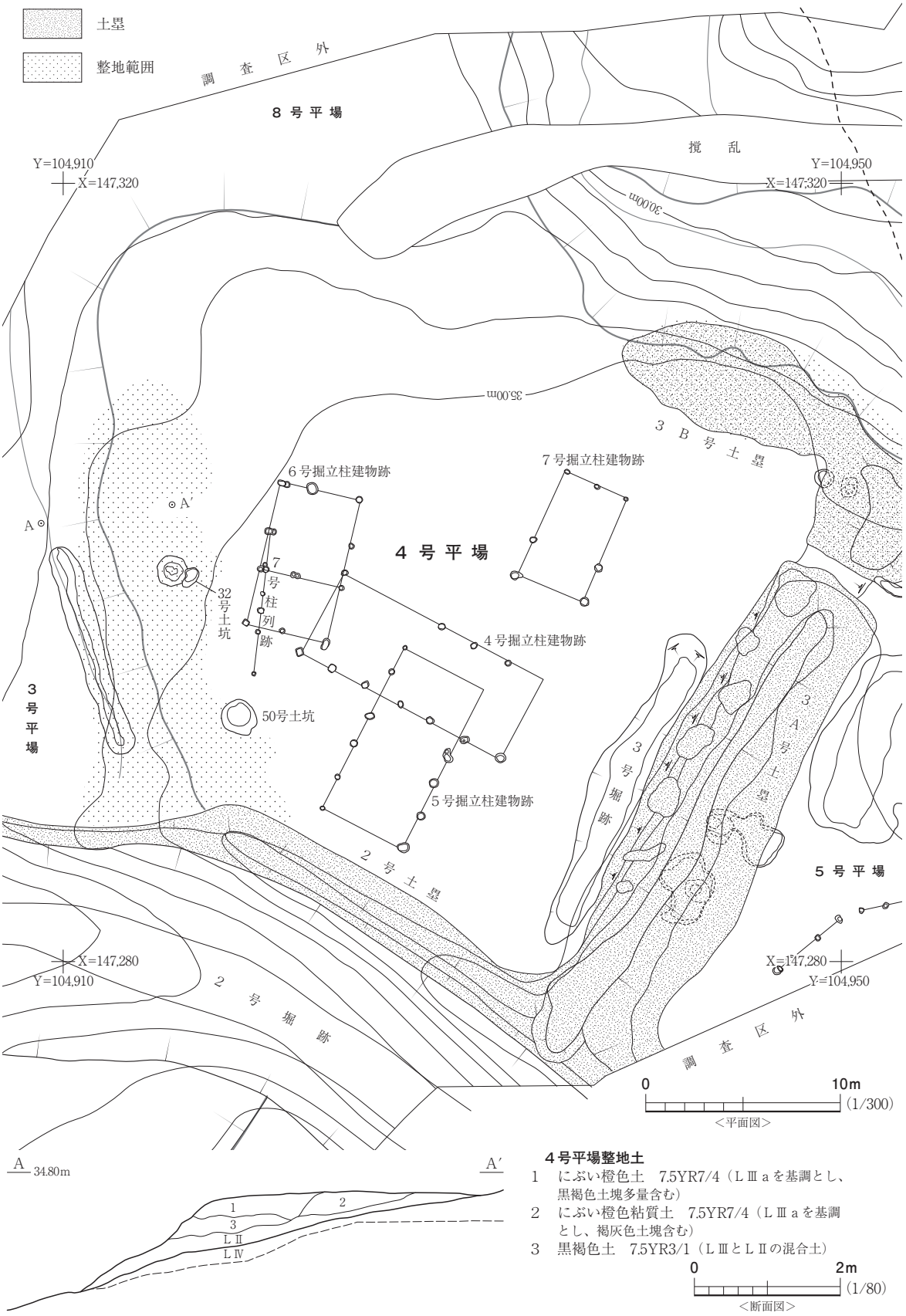


図23　４号平場遺構配置図

以上のことから、本平場は５号平場(主郭)に準じる平場で、北西の縁辺付近は３号土塁の出入口を経て５号平場(主郭)への登城ルートの役割もある。　（佐　藤）

４号掘立柱建物跡　ＳＢ04（図24）

本遺構は、４号平場の中央、Ｒ・Ｓ11グリッドに位置する建物跡である。遺構の検出面はＬⅢｂ上面である。平面形においては５号掘立柱建物跡及び６号掘立柱建物跡と重複しているが、柱穴での重複はなく新旧関係は不明である。北東側約５ｍには７号掘立柱建物跡があり、東側約10ｍ

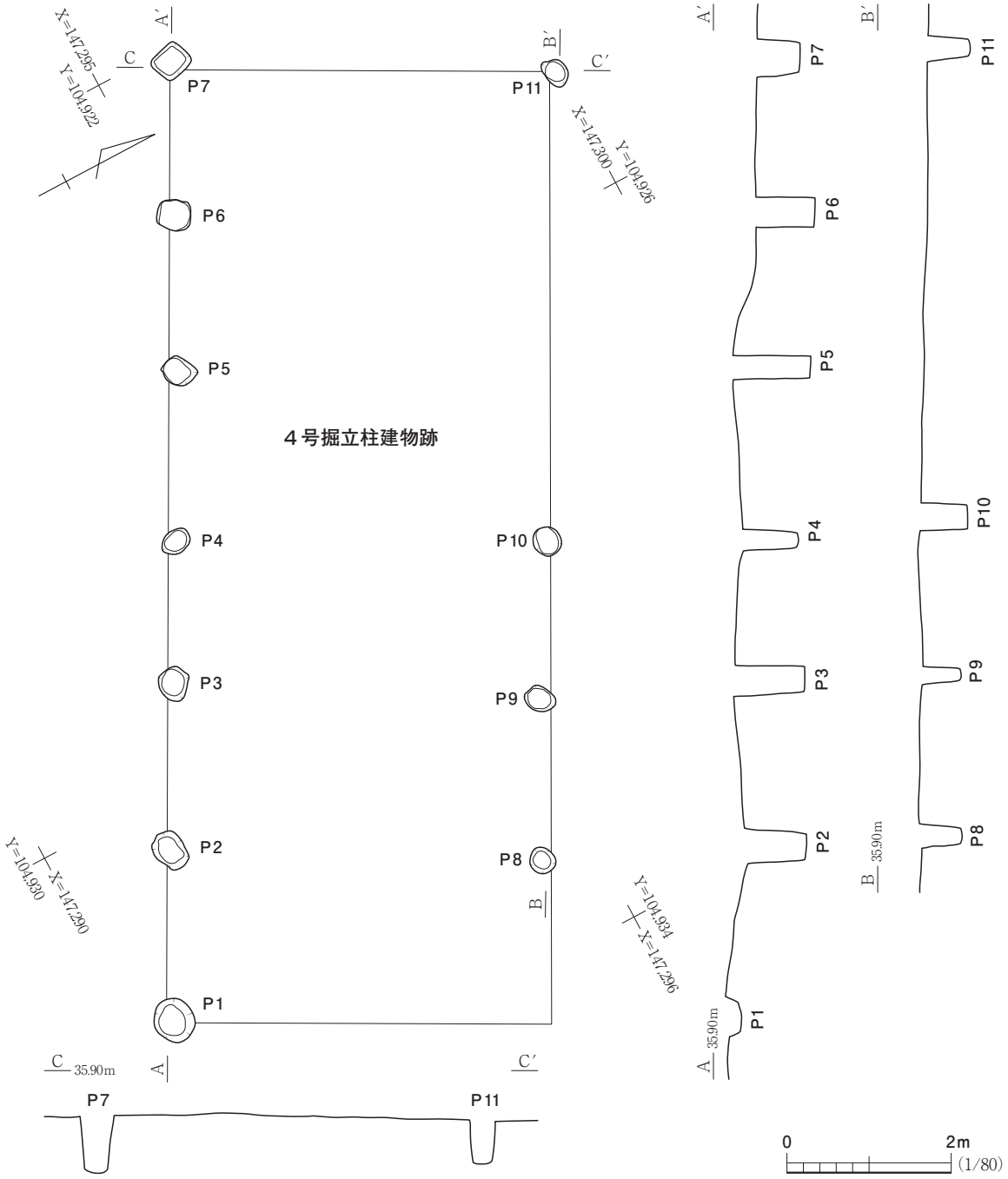


図24　４号掘立柱建物跡

には３号土塁と３号堀跡が位置する。

本遺構は、桁行き６間、梁行き１間の建物跡であると判断した。平面形は西北西・東南東に長軸を持つ長方形で、南南西側柱列を基準にした建物跡の主軸方位は、Ｎ61°Ｗとなり、２号土塁と並行する。本遺構を構成すると考えられる柱穴11基を確認した。推定平面積は53.2㎡である。

桁行きとなる南南西側柱列はＰ１～７で構成される。北西隅、Ｐ７からの柱間距離は1.82ｍ＋1.82ｍ＋2.03ｍ＋1.88ｍ＋2.00ｍ＋2.00ｍで、1.82～2.03ｍの範囲にあり、平均は1.93ｍとなる。柱穴底面の標高は34.60～34.83ｍである。もう一方の桁行きとなる東北東側柱列はＰ８～11で構成されるが、本来であればＰ10とＰ11の間に２基、Ｐ８の隣にも１基の柱穴が存在した可能性があるが、撹乱により検出できなかった。西北西側からの柱間距離は5.67ｍ＋1.88ｍ＋2.00ｍ＋2.00ｍである。失われている柱穴も含めて桁行きを６間として柱間距離の平均値を求めると1.93ｍとなる。柱穴底面の標高は34.70～34.80ｍである。北西側の梁行きはＰ７とＰ11の２基のみ認められた。柱間距離は4.61ｍとなり、これは本遺構桁行きの２間分に相当する数値に近い。

各柱穴の平面形は、隅丸方形と円形を基調とした形とに大別できる。柱穴の規模は長さ40～50㎝前後がほとんどである。最も小さい柱穴はＰ８で長軸38㎝、最も大きい柱穴はＰ１で長軸52㎝である。柱痕や根石は認められない。覆土は砂礫の混じる褐色土が多かった。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は桁行き６間、梁行き１間の建物跡である。梁行きは柱間距離が4.61ｍあるため、棟持柱に相当する柱穴は検出されなかったものの、２間構造であったと考えられる。棟持ち柱の柱穴が認められなかったのは、ほかよりも浅い柱穴であったためか、根太の上に据える構造が想定される。本遺構は４号平場における最大規模の建物であり、平場のほぼ中央に建てられている。４号平場は城館の中心部の可能性が高い５号平場に隣接し、中心部の次に重要な平場と推測される。これらのことから、４号掘立柱建物跡は主屋に準ずるような建物であったと考えられる。本遺構の年代は、城館が機能していた15世紀の可能性が高い。（杉　沢）

５号掘立柱建物跡　ＳＢ05（図25）

本遺構は、４号平場の南西側、Ｒ11・12グリッドに位置する建物跡である。遺構検出面はＬⅢｂ上面である。平面形においては４号掘立柱建物跡及び13号性格不明遺構と重複するが、柱穴との重複はない。12号性格不明遺構とも重複し、本遺構が古い。東約10ｍには３号土塁と３号堀跡があり、北西約４ｍには６号掘立柱建物跡がある。

本遺構は、桁行き５間、梁行き１間の構造の建物跡である。平面形は長方形で、北西側柱列を基準にした建物跡の主軸方位は、Ｎ27°Ｅとなる。本遺構を構成すると考えられる柱穴を10基確認した。

建物規模は桁行きである北西側柱列で9.26ｍ、梁行きである南西側柱列で4.61ｍを測る。本遺構の北東部は撹乱により柱穴を検出できなかった部分がある。推定される平面積は42.7㎡である。

北西側柱列はＰ１～６で構成される。柱間距離は南西から1.81ｍ＋1.82ｍ＋1.52ｍ＋2.58ｍ＋1.52

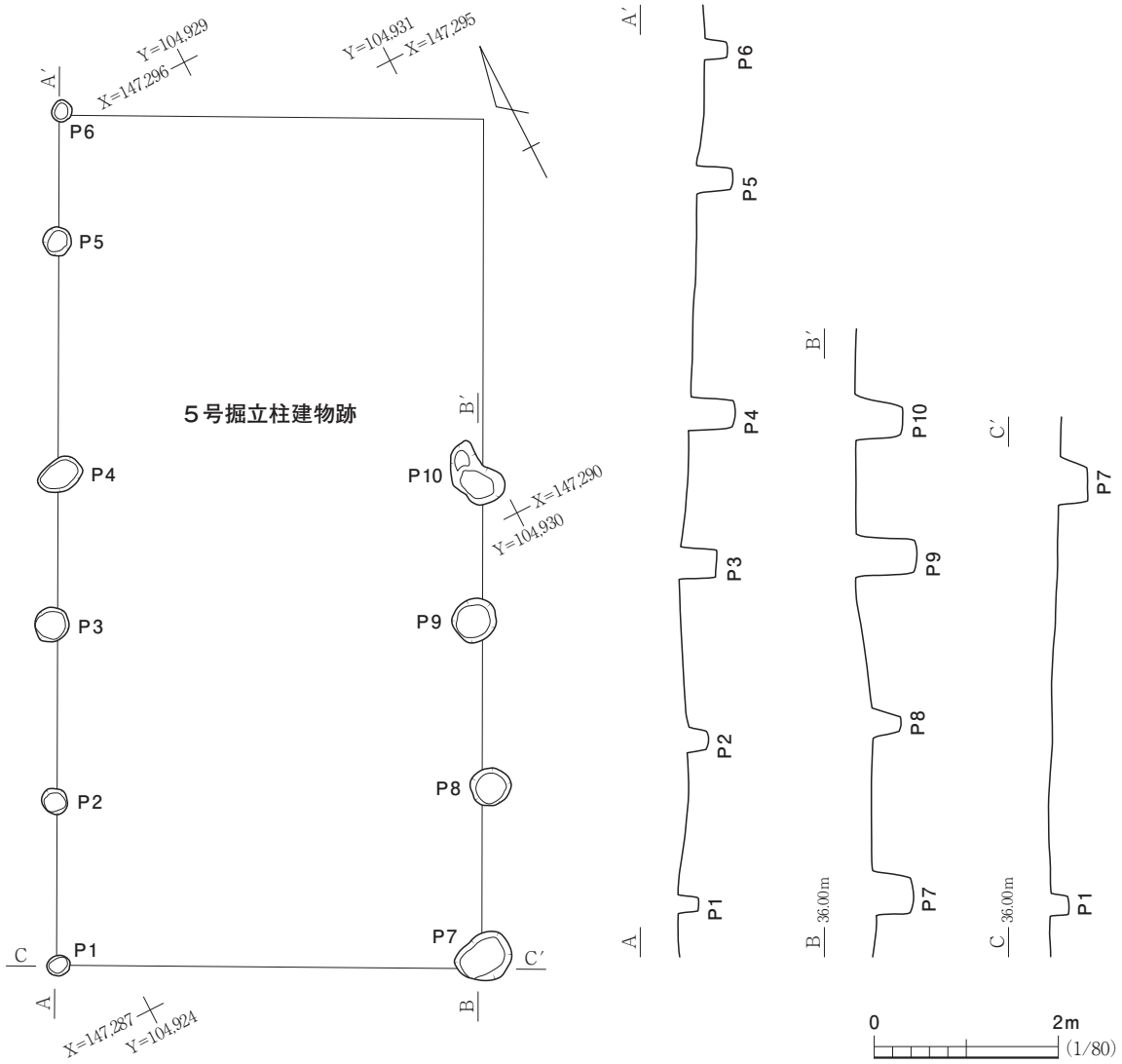


図25　５号掘立柱建物跡

mとなり、平均は1.85ｍである。柱穴底面の標高は35.03～35.4ｍである。南東側柱列はＰ７～10の４基の柱穴が認められた。柱間距離は南西側から1.82ｍ＋1.82ｍ＋1.52ｍとなり、これは北西側柱穴列の柱間距離と同じである。底面標高は35.05～35.20ｍである。

各柱穴の平面形は円形や楕円形を基調とした形である。柱穴の規模は40～50cm前後が多い。Ｐ６の規模は径25cmと最も小さい。最も大きい柱穴はP10の径72cm×50cmである。柱穴からは柱痕、根石や根固め石などは確認できなかった。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、桁行き５間、梁行き１間の北東・南西方向に長軸を有する建物跡である。桁行きの間尺は1.52ｍと1.82ｍが多い。梁行きは4.61ｍあり、本来は２間ある構造だったと考えられ、棟持ち柱は、ほかの柱穴よりも極端に浅かったか、根太の上に据えていたと推測される。

本遺構は４号平場の中央やや南に位置し、３号堀跡・３号土塁と長軸方向がほぼ同じで、２号土塁とも直交する方向である。４号平場の中で検出されている建物の中でも４号掘立柱建物跡に次いで平面積が大きい。４号平場は毛萱館の中心部の可能性が高い５号平場に隣接し、４号平場の次に

重要な平場と推測される。これらのことから、５号掘立柱建物跡は副屋と考えられる。本遺構の年代は、城館が機能していた15世紀の可能性が高い。　（杉　沢）

６号掘立柱建物跡　ＳＢ06（図26・27、写真61）

本遺構は４号平場の北西側縁辺部、Ｑ・Ｒ10・11グリッドに位置する建物跡である。本遺構の検出面はＬⅢｂ・Ⅳ上面である。平面形においては４号掘立柱建物跡や７号柱列跡と重複しているが、柱穴での重複はなく新旧関係は不明である。東約20ｍには３号土塁・３号堀跡が、南約10ｍには２号土塁・２号堀跡がある。南側約１ｍには14号性格不明遺構が近接する。

本遺構は、桁行き３間、梁行き２間の建物跡である。平面形は北北東・南南西方向に長軸を持つ長方形で、建物内部にも柱穴を有する構造となっている。東南東側柱列を基準にした建物跡の主軸方位は、Ｎ13°Ｅとなる。本遺構を構成すると考えられる柱穴を10基確認した。平面積は32.1㎡である。

桁行きとなる東南東側柱列はＰ１～４で構成される。柱間距離は北北東から2.44ｍ＋2.18ｍ＋

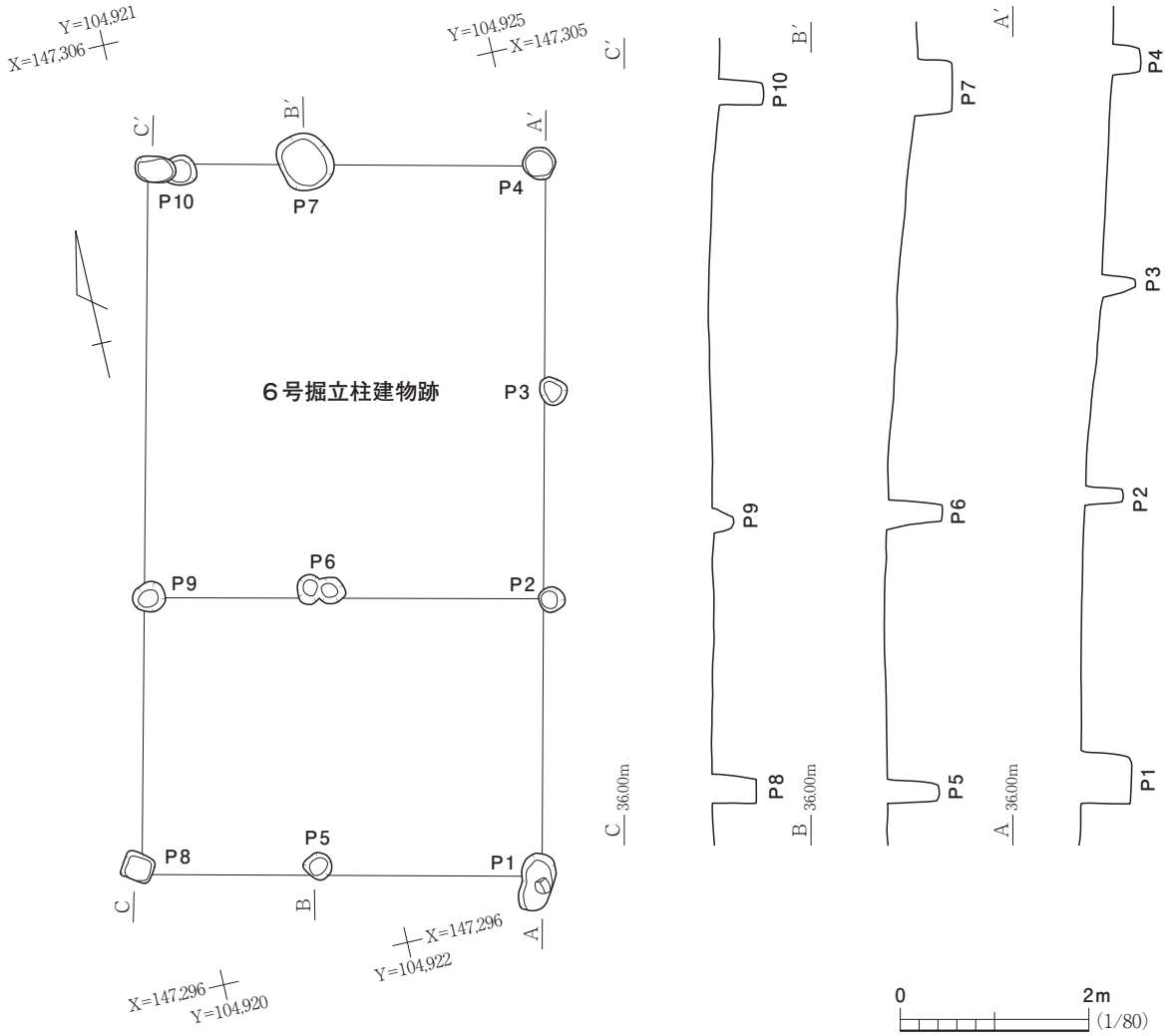


図26　６号掘立柱建物跡

2.94ｍで平均は2.52ｍとなる。柱穴底面の標高は34.24～35.07ｍである。西北西側柱列も桁行きとなりＰ８～10で構成される。柱間距離は北北東から4.54ｍ＋2.94ｍで、Ｐ９とＰ10の間の柱穴は認められなかった。

柱穴底面の標高は34.61～34.94ｍである。梁行きとなる北北東側柱列はＰ４・７・10で構成され、底面の標高は34.64～34.95ｍである。柱間距離は1.64ｍ＋2.52ｍで平均は2.08ｍとなる。南南東側柱列も梁行きである。Ｐ１・５・８で構成され、底面の標高は34.63～35.07ｍである。柱間距離は1.92ｍ＋2.32ｍで平均は2.12ｍとなる。Ｐ２・９の間にもＰ６があり、建物内部を間仕切りしている。

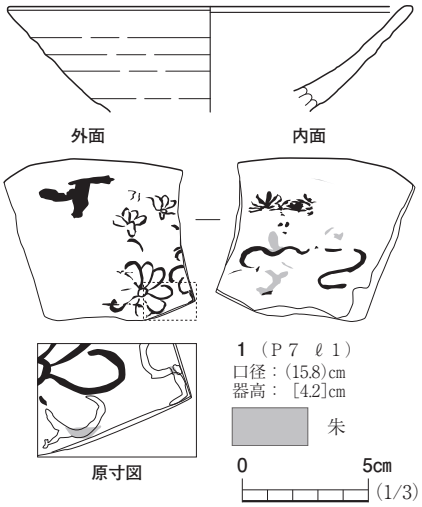


図27　６号掘立柱建物跡出土遺物

各柱穴の平面形は、円形と楕円形を基調とした形と方形のものとがある。柱穴の規模は長さ30～40cm前後がほとんどである。最小の柱穴はＰ２の26×27cmで、最も大きい柱穴はＰ７の58～61cmである。柱痕を確認できた柱穴はなく、覆土は砂礫や黄褐色粘土質ブロックの混じる褐色シルトである。

遺物は、Ｐ７の堆積土中からかわらけが１点出土している。図27－１はロクロ成形のかわらけである。器形は底径が小さく、直線的に立ち上がると考えられる。外面には墨書で４個体以上の菊花を描き、内面には中央に洲浜を配し、その左上部には松葉とみられる意匠が確認できる。また内外面の一部には墨書より古い朱の痕跡が確認できる。

本遺構は、桁行き３間、梁行き２間の建物跡で、建物の内部はＰ６によって２×２間と２×１間の空間に分かれる構造と推測される。４号平場では、本遺構も含めて４棟の建物跡が検出されているが、その中で本遺構の平面積は３番目である。また４号平場は、城館の中心部と考えられる５号平場に準ずる平場と位置付けられることから、本遺構は副屋として機能していたと考えられる。その年代は出土遺物より15世紀と推測される。　（杉　沢）

７号掘立柱建物跡　ＳＢ07（図28）

本遺構は、４号平場の北東側、Ｓ10・11グリッドに位置する建物跡である。遺構検出面はＬⅢｂ・Ⅳ上面である。平面において重複する遺構はない。南約５ｍに４号掘立柱建物跡が、南東約10ｍに３号土塁と３号堀跡が位置する。また、南東約４ｍには33・34号土坑が近接する。

本遺構は桁行き２間、梁行き２間の建物跡で、平面形は北東・南西方向に桁行きを持つ長方形である。北西側柱列を基準にした建物跡の主軸方位は、Ｎ24°Ｅとなる。建物の平面積は20.4㎡である。

桁行きである北西側柱列は5.91ｍで、Ｐ１～３で構成される。柱間の間隔は南西側から1.97＋3.94ｍである。Ｐ２とＰ３の間にもう１基の柱穴を想定すると、柱間距離はすべて1.97ｍで統一さ

れていたことになる。柱穴底面の標高は34.46～34.90ｍである。

桁行きの対になる南東側柱列も5.91ｍである。Ｐ４～６で構成されており、柱間の間隔は南東側から1.97＋3.94ｍである。Ｐ５とＰ６の間に柱穴がもう１基あったと仮定すると、柱間距離はすべて1.97ｍで統一される。柱穴底面の標高は34.71～34.95ｍである。

梁行きは北東列も南西列も3.46ｍである。北東側柱列はＰ３、Ｐ６、Ｐ７で構成されており、柱間の間隔は1.82＋1.64ｍとなる。柱穴底面の標高は34.46～34.71ｍである。南西側柱列はＰ１、Ｐ４で構成され、棟持ち柱にあたる部分から柱穴を検出することはできなかった。柱穴底面の標高は34.90～34.94ｍである。

各柱穴の平面形は円形または長円形で、規模は35～45㎝前後が最も多い。22×24㎝を測るＰ６が最も小さい。最も大きい柱穴はＰ１の42×65㎝である。柱痕を確認できた柱穴はなく、抜き取った後に埋め戻したとみられる。覆土は砂礫もしくは黄褐色粘土塊を不規則に含む暗褐色土が多かった。根石、根固め石のある柱穴もない。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、柱穴が検出されていない部分があるものの、桁行き３間、梁行き２間の北東・南西に長い建物になる可能性が高い。長軸方向は５・６号掘立柱建物跡とほぼ同じであり、３号土塁・３号堀跡とも近い。本遺構は４号平場内で検出された４軒の掘立柱建物跡の中では最も平面積が小さいため、４号掘立柱建物跡または５号掘立柱建物跡に付属する建物と考えられる。　（杉　沢）

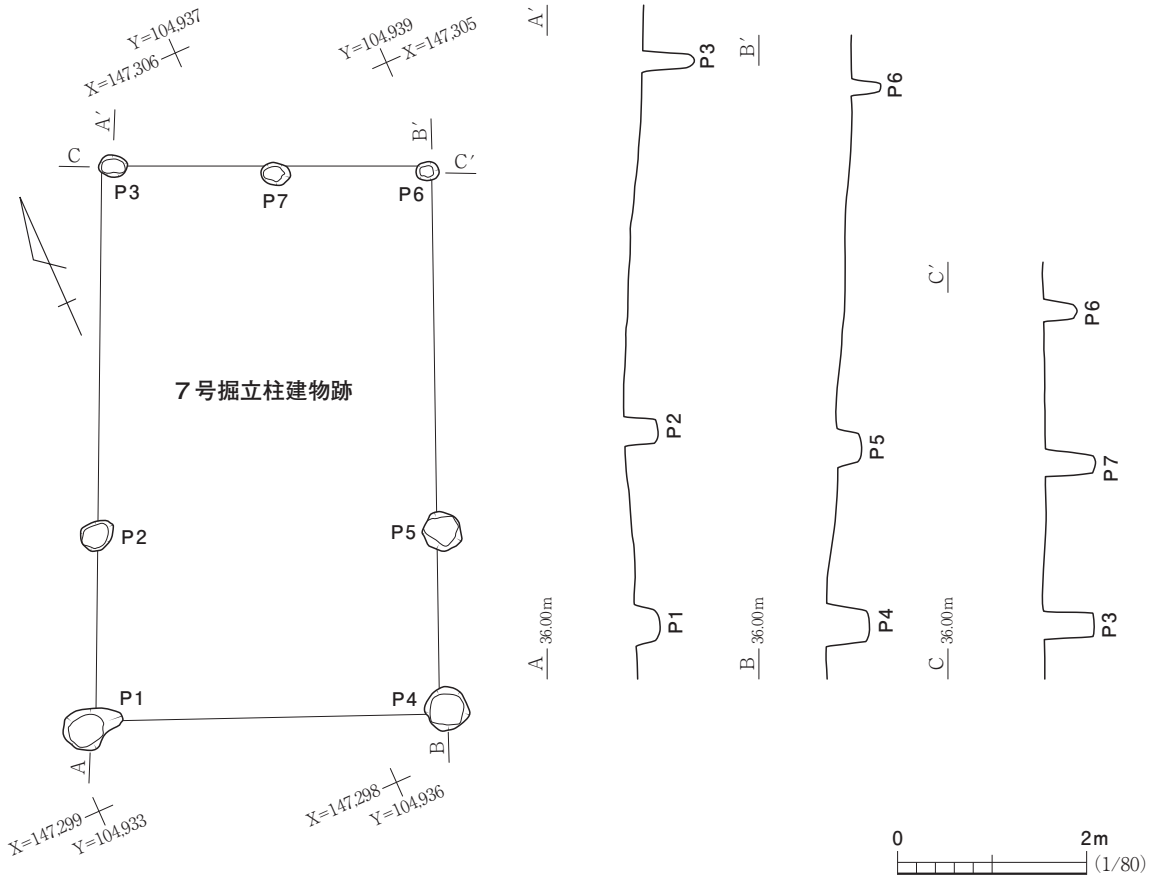


図28　７号掘立柱建物跡

７号柱列跡　ＳＡ07（図29、写真22・23）

本遺構は、４号平場西側の縁辺部、Ｑ11、Ｒ10・11グリッドに位置する柱列跡である。遺構検出面はＬⅢｂ上面である。14号性格不明遺構と重複し、本遺構が古い。６号掘立柱建物跡とも平面形では重複するが、柱穴での重複関係はなく新旧関係は不明である。東側約２ｍには35号土坑が近接する。

本遺構は、北東・南西方向に並ぶ７基の柱穴（Ｐ１～７）で構成され、全長7.39ｍを測る。柱間距離はＰ１から2.00ｍ＋1.24ｍ＋0.88ｍ＋1.12ｍ＋2.15ｍである。各柱穴の深さは23～43㎝で平均は35㎝となる。柱穴の平面形は円形や方形が多く、Ｐ１は楕円形となる。柱穴規模は長さが30～40㎝のものが多い。最小の柱穴はＰ４の22×23㎝で、最も大きい柱穴はＰ１で36×60㎝を測る。いずれの柱穴からも柱痕は検出されなかった。また、根石や根固め石なども使われてはいなかった。覆土は、いずれの柱穴もＬⅣ塊を含む褐灰色土で人為的な埋め立てと判断した。遺物は出土していない。

本遺構は、４号平場の西側の縁辺部に立地し、整地された斜面上部に沿って設置された柵と考えられる。３号平場と４号平場を区画する防御施設と想定される。遺構の年代については、城館として機能していた15世紀と推測される。（杉　沢）

32号土坑　ＳＫ32（図30、写真23）

本遺構は、４号平場の西隅部、Q10・11グリッドに位置する。検出面は４号平場の整地上面で、褐灰色土の楕円形の範囲として確認した。本遺構は17号性格不明遺構と４号平場の整地と重複し、本遺構が新しい。

本遺構の平面形は楕円形となり、規模は長軸1.13ｍ、短軸73㎝、検出面からの深さは最大27㎝である。周壁は南西側が緩やかに、それ以外は急に立ち上がる。周壁の南東側の上位は被熱し、赤色に焼土化している。底面は、ＬⅣ上面の小礫が露出しており、凹凸が著しい。遺構内堆積土は３層に分けられた。いずれもＬⅡを由来とする褐灰色土で、焼土塊やＬⅢａ塊、炭化物を含むことから、人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

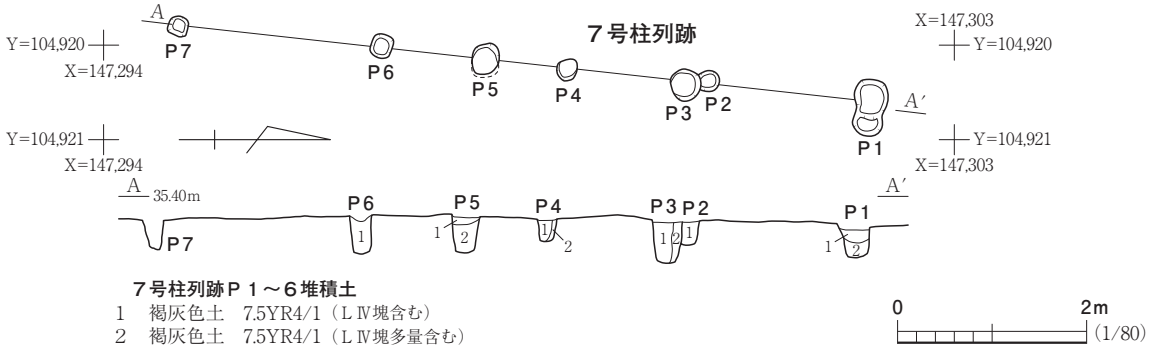


図29　７号柱列跡

本遺構は平面形が楕円形の土坑である。上端付近のみが被熱していることや、堆積土上面のℓ１に多量の焼土塊が含まれることから、土坑状の掘り込みは地下構造で、その上部で木材を燃やすような施設が想定される。年代は４号平場の整地より新しいことから、15世紀頃の所産と考えられる。（佐　藤）

50号土坑　ＳＫ50（図30、写真23・61）

本遺構は、４号平場の西隅部、Q11グリッドに位置する。検出面は南西側が４号平場の整地上面で、北東側がＬⅢａで、褐灰色土の楕円形の範囲として確認した。４号平場の整地より新しい。本遺構の北側には、14号性格不明遺構が隣接して位置している。

本遺構の平面形は楕円形で、規模は長軸1.91m、短軸1.72m、検出面からの深さは最大35cmである。周壁は南側が緩やかに、それ以外は急に立ち上がる。底面は、ＬⅣ上面の小礫が露出しており、凹凸が認められ、南西側に向けて傾斜している。遺構内堆積土は２層に分けられた。ℓ１は褐灰色土で炭化物を含む。ℓ２は黒褐色土でＬⅣ塊・炭化物を含む。いずれも堆積土の特徴から、人為による埋め立てと判断した。

本遺構からは茶臼が１点出土し、図示した。図30－１は砂岩製の茶臼の下臼部分である。遺構の底面付近から逆位で出土した。外面にはノミ状の工具による成形痕が顕著に認められる。上臼と

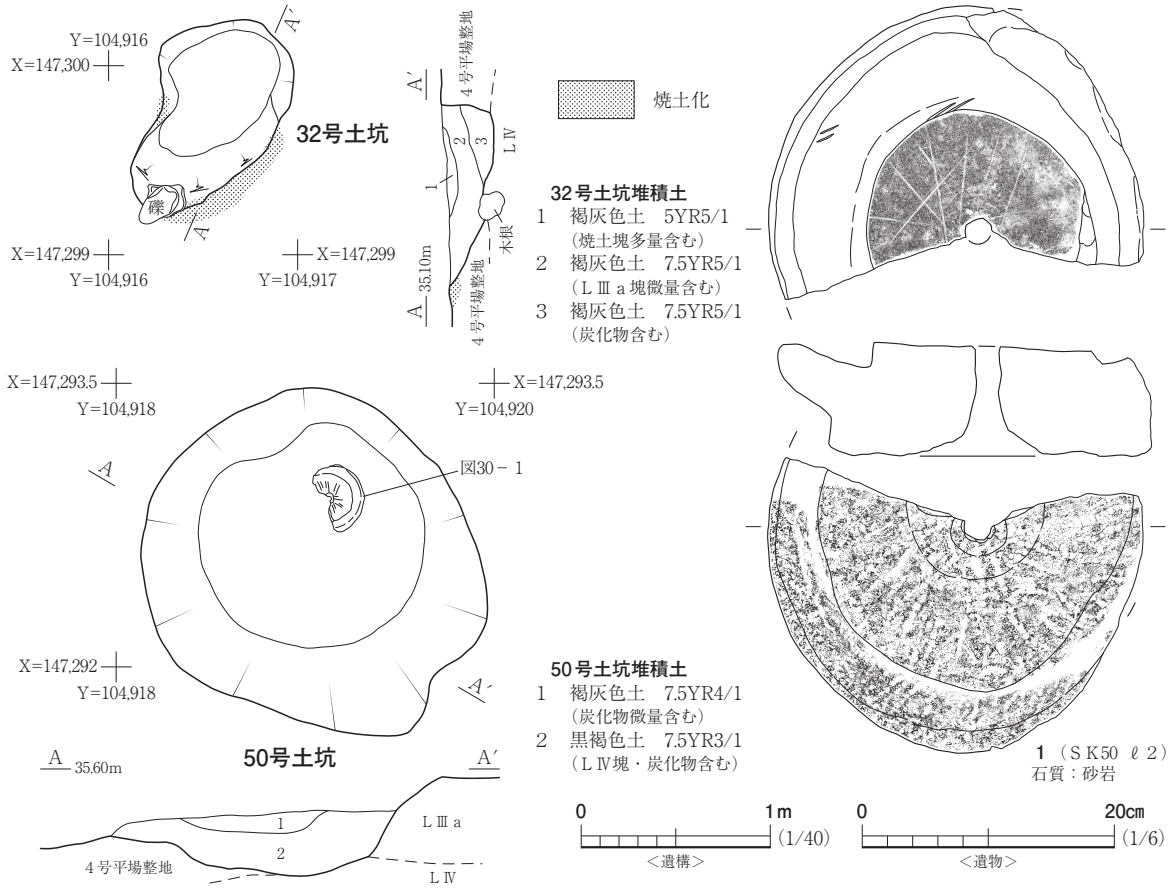


図30　32・50号土坑、50号土坑出土遺物

摺り合わせる面には、放射状を基調とした線状痕が疎らに認められる。

本遺構は平面形が楕円形の土坑である。その詳細な性格は不明だが、年代は出土遺物や４号平場の整地より新しいことから、15世紀の所産と考えられる。（佐　藤）

４・８号平場の小穴群（図31・32、写真62）

４号平場及び８号平場では小穴を185基確認した。小穴は平場のやや南西寄り、Q11、R10～12、S11・12グリッド付近に密集して分布している。北東の縁辺部から９m付近は小穴が極端に少なることから、通路として機能していたと考えられる。平面形は円形、楕円形が多い。規模は長軸で20～40cmが多く、深さは20～70cmと幅があるが、40cm前後が多い。小穴の堆積土はＢ・Ｃ類

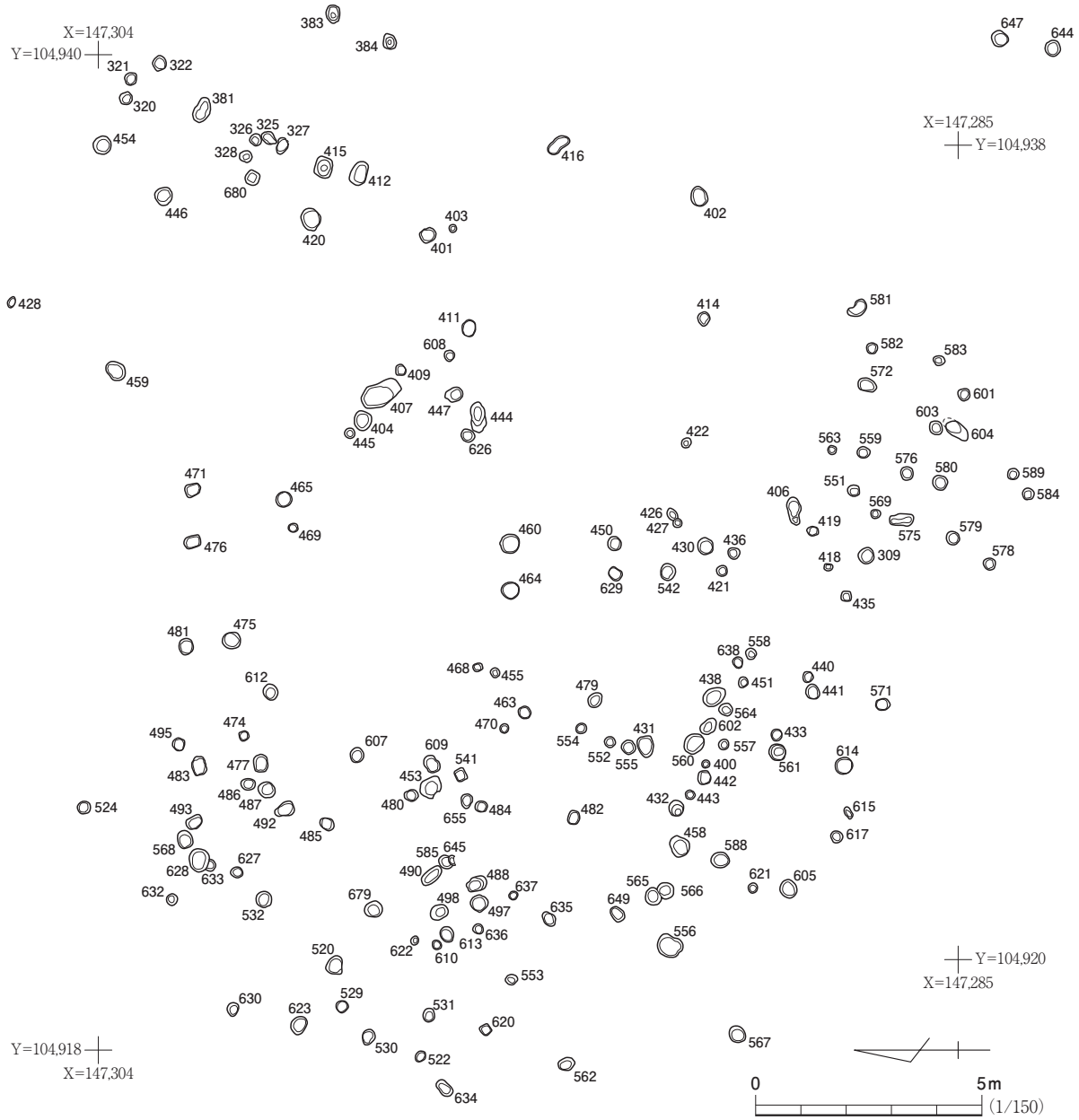


図31　４号平場の小穴群

型が多く、ＬⅣ由来の砂礫を主体とするものも認められる（小穴の堆積土の類型は用例参照）。４号平場の小穴群からは、近世の陶磁器１点、石器２点が出土し、石器１点を図示した。図32－１は粘板岩製の磨製石斧で、刃部は欠損している。右側面には、石斧成形時の線状痕より新しい、細かい剥離が認められる。また、右面下端部には刃部欠損後の細かい剥離が認められる。図32－２は赤玉石の石核である。剥離面の一部は潰れている。　（佐　藤）

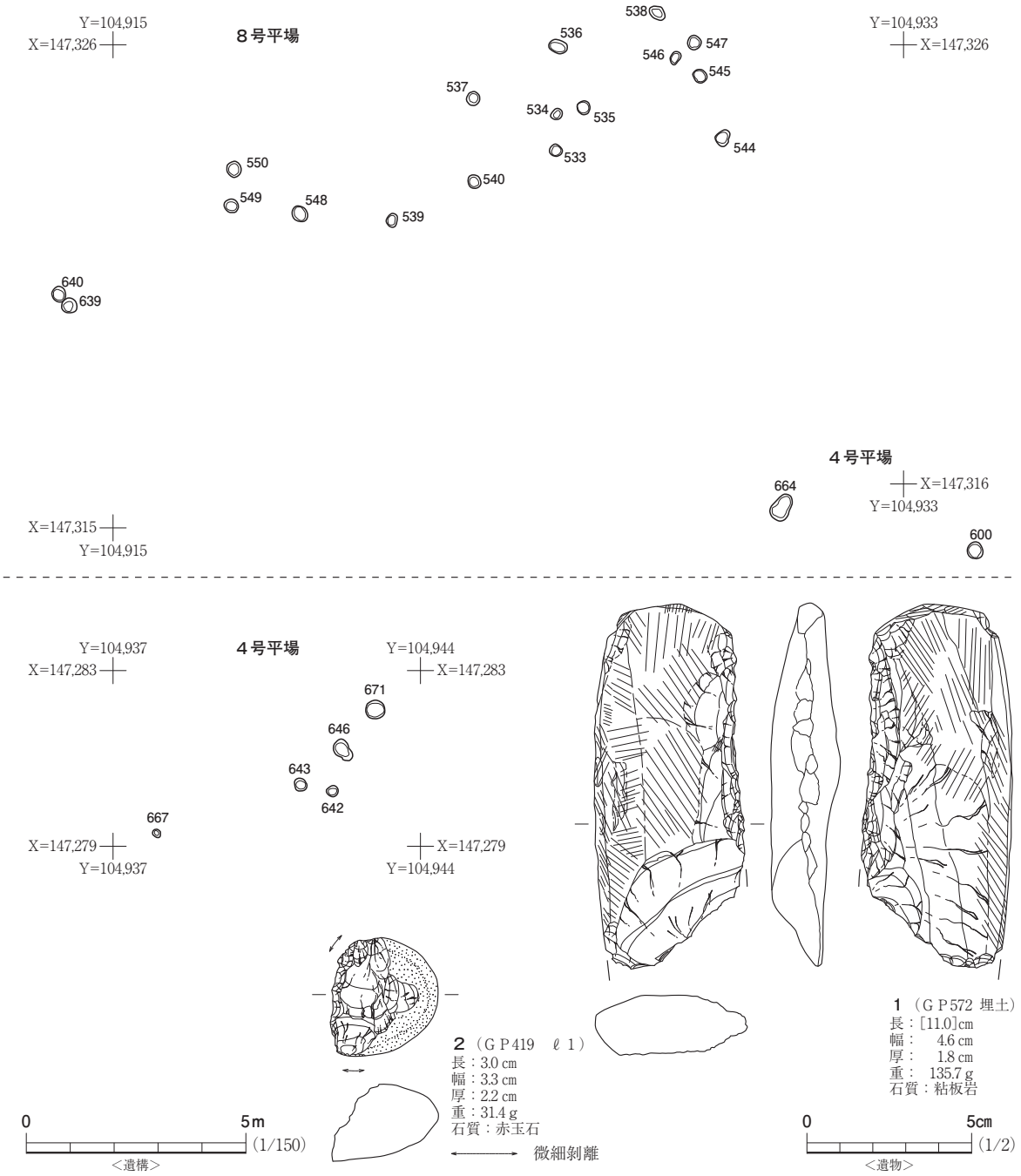


図32　４・８号平場の小穴群、出土遺物

第７節　５号平場

概　　要　５号平場は、丘陵頂上の平坦面、調査区東側のＷ～Ｚ９、Ｕ～ＡＡ10、Ｔ～Ｙ11、Ｔ～Ｗ12、Ｓ～Ｕ13グリッドに位置する（図33・34・37、写真５・６・37）。

５号平場の標高は、34.8～36.5ｍで、丘陵裾部の平坦面との高低差は23.8～25.5ｍである。５号平場の大部分は、南東側の調査区外に位置する。造成前の地形図から判断した平面形は不整な方形と想定される。規模は北東・南西方向で83ｍ、北西・南東方向は57ｍである。５号平場は丘陵頂上部を削平し、北側の縁辺に整地を行い、広い平坦面を確保している。

南西辺は３号土塁・３号堀跡によって４号平場と区画され、西隅には出入口が設けられる。北辺は斜面を削って、より急斜度にし、下位の６・７号平場と区画している。

５号平場の東隅部には、１号門跡、４号土塁が位置し、そこから斜面を降りるように２号道跡が６号平場へと続いている。また５号平場の北縁の一部がわずかに突出し、５号土塁が築かれている。各平場との高低差は４号平場で＋0.7ｍ、６号平場で＋7.5ｍ、７号平場で＋6.5ｍとなり、確認した平場の中では最高所に位置する。

整　　地　５号平場の北側には４号平場から続く整地土が認められる。その上端は平坦となるため、ここでは整地と呼ぶ。整地は平場の北東側縁辺から斜面上位を覆うように構築されている。整地の範囲は東西方向の長軸で62ｍ、北東・南西方向は5.2ｍで、深さは最大で1.3ｍを測る。整地は４号土塁の周辺（図65Ｂ－Ｂ′）では７層、５号土塁の周辺（図65Ａ－Ａ′）では13層に分けられた。いずれも、ＬⅡやＬⅢａを由来とした褐色土や褐灰色土、橙色土と黒褐色土を平坦に薄く積んでいる。Ｂ－Ｂ′のℓ４は褐灰色砂質土でラミナ状の水性堆積が認められることから、整地中に短期間の中断があったと推定される。

施　　設　中世城館に関わる遺構として、８～10号掘立柱建物跡、１号門跡、２号道跡、５・６号柱列跡、９・10・12号溝跡、18・23・41・42・47・51～62・66・68～70号土坑、８号焼土遺構、５～８・19～21・25・26号性格不明遺構、小穴366基を確認した。

遺　　物　５号平場からは縄文土器４点、弥生土器116点、土師器126点、中世陶器４点、土製品１点、鉄製品１点、石器38点が出土し、18点を図示した。図34－１は古瀬戸後期様式の天目茶碗である。体部付近の破片で、外面には厚手の鉄釉が施される。図34－２は瓦質土器の擂鉢である。口縁部は平坦で、端部は外側に肥厚する。図34－３・４は筒形土器である。内外面ともにヨコナデや指頭圧痕による調整が施され、粘土紐の積み上げ痕が明瞭に認められる。図34－５はミニチュア土器の壺と推測される。図34－６は環状の鉄製品である。環状の一部には幅1.2㎝程の板状の鉄を巻き付けている。図34－７～10は弥生土器である。７は甕形土器の口縁部付近で、口縁端部には縄文が認められる。８は壺形土器で２本同時施文具により渦文を施す。９・10は壺形土器もしくは甕形土器の底部である。11・12は縄文土器である。11の外面は２条の沈線により区画

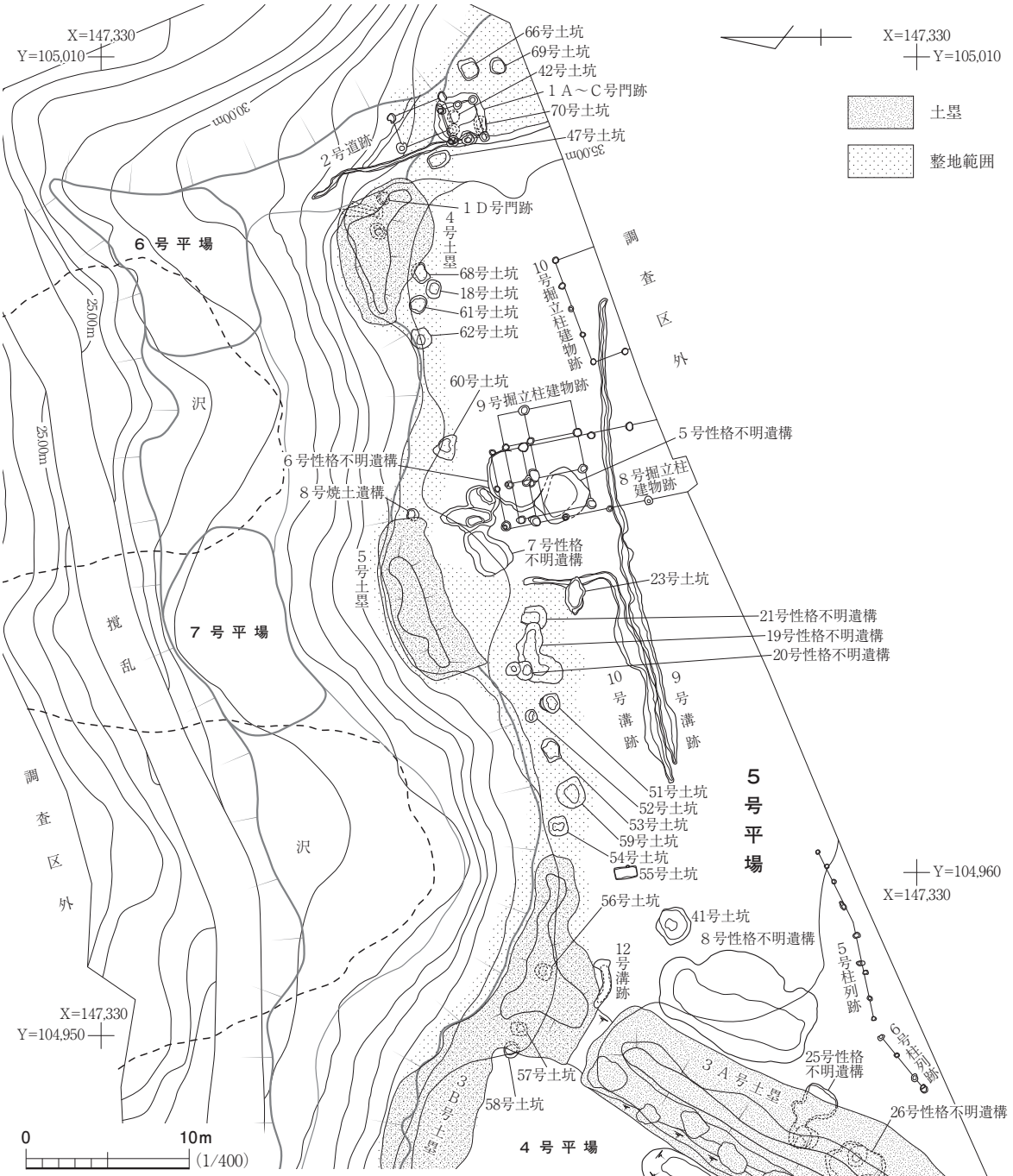


図33　５号平場遺構配置図

し、その内側には磨消縄文が認められる。12は、３条の沈線が縦位に施される。図34－13～18は石器である。13は長石斑岩製の直縁刃石器である。刃部の先端には刃こぼれとみられる微細な剥離痕があり、光沢が認められる。14～18は剥片である。14・16～18は礫面を残す剥片である。

ま と め　５号平場は城館の中で、東端に位置し、２号土塁・２号堀跡、３号土塁・３号堀跡の内側に位置し、平場の中で最も高所に位置する。丘陵を掘削・整地する造作が認められる。

小穴の数は平場の中で最も多く、規模も大きい。施設は３棟の掘立柱建物群が重複して位置し、城館機能時も継続的に使用していたと考えられる。５・６号柱列跡は、３号土塁・３号堀跡の長軸

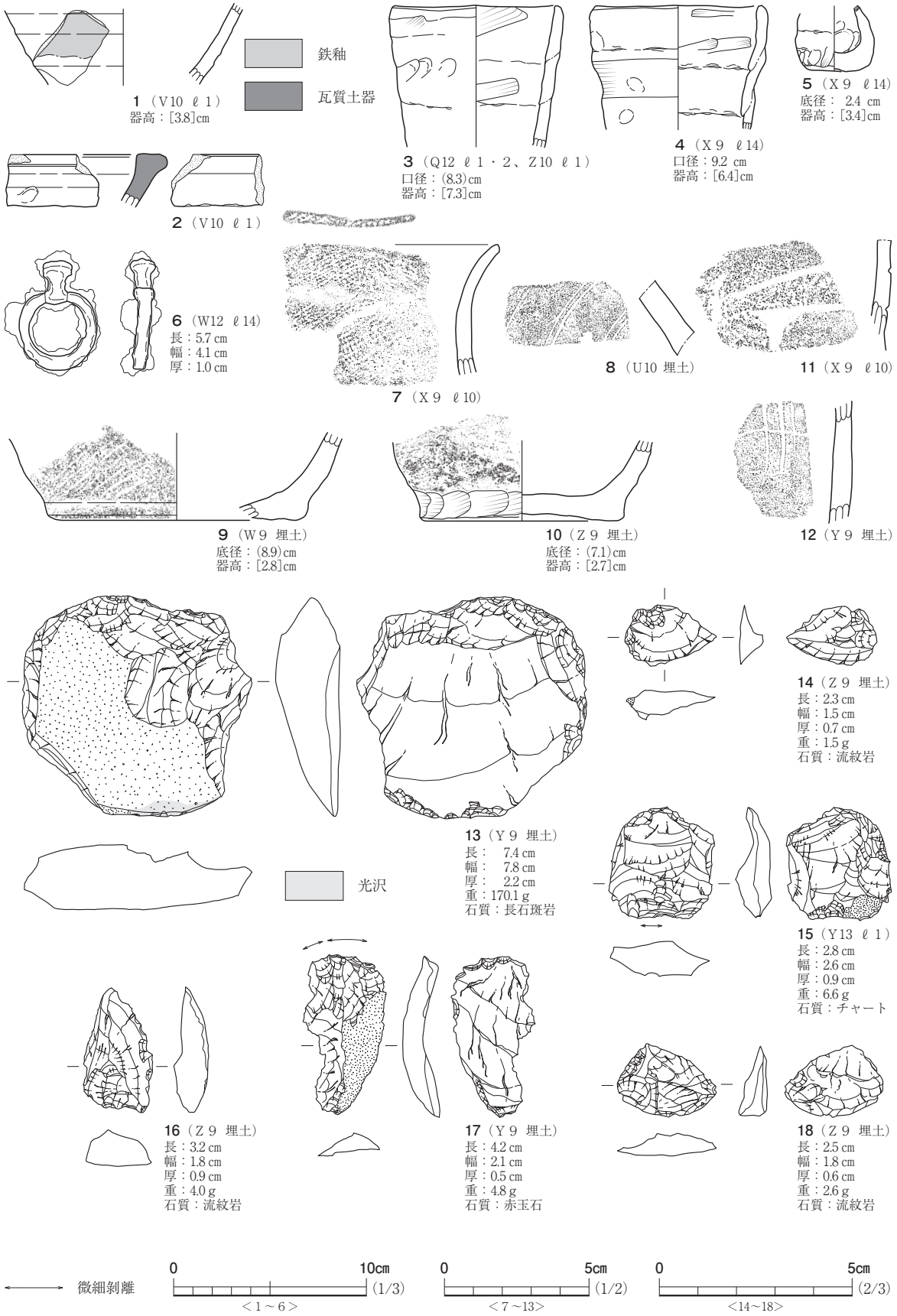


図34　5号平場出土遺物

に沿って築かれ、４号平場から５号平場へ敵の侵入を防ぐ施設と考えられる。東端と北西端に出入口を持ち、東端部には４期に変遷する１号門跡がある。

以上のことから、本平場は城館の中でいわゆる「主郭」に相当する。５号平場からは旧毛萱村の集落や太平洋を臨むことができ、集落や海運の監視・掌握などの役割が想定される。東端部の門跡は登場ルートから見上げるかたちになり、象徴として門跡を配した可能性がある。　（佐　藤）

８号掘立柱建物跡　ＳＢ08（図35）

本遺構は、５号平場の東側、X10・11グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、本遺構のＰ11と９号掘立柱建物跡Ｐ４が重複しているが、新旧関係は不明である。そのほか５・６号性格不明遺

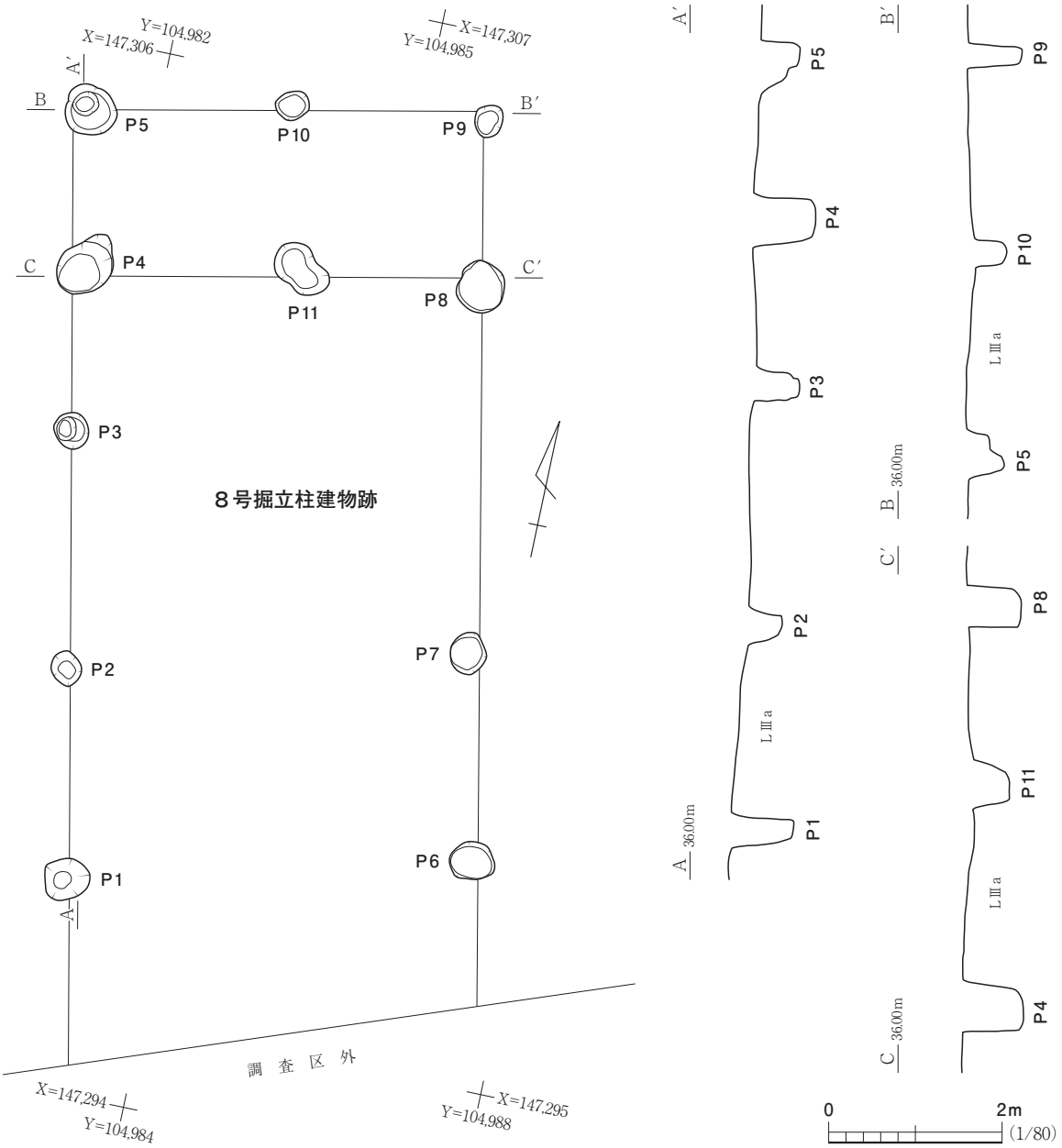


図35　８号掘立柱建物跡

構より新しく、９号溝跡より古い。北東約10ｍの丘陵縁辺部には４号土塁がある。

本遺構は、桁行き４間以上、梁行き２間の建物跡である。平面形は、南北方向に桁行きを持つ長方形と推測される建物跡で、西柱列を基準にした建物跡の主軸方位はＮ12°Ｗとなる。本遺構を構成すると考えられる柱穴を11基確認した。南側は調査区外に続くとみられる。調査区内のみの平面積は41.9㎡である。

桁行きは東側柱列が8.92m、西側柱列が8.94mである。西側柱列はＰ１～５で構成される。柱間距離は北から1.97ｍ＋1.82ｍ＋2.73ｍ＋2.42ｍで平均は2.24ｍである。柱底面の標高は34.62～35ｍである。対の東側柱列はＰ６～９で構成され、北から1.97ｍ＋4.53ｍ＋2.42ｍである。Ｐ７とＰ８の間にも柱穴があった可能性が高いが、倒木痕によって失われている。仮に存在していたとして柱間平均値を求めると2.23ｍとなる。底面の標高は34.56～34.80ｍである。

梁行きはＰ５・９・10で構成され、柱間距離は2.42ｍ＋2.27ｍである。総長4.69ｍで平均値は2.35ｍとなる。底面標高は34.56～34.80ｍである。Ｐ４・８・11も梁行きと同じ柱間距離となり、底面標高は34.62～34.82mである。

各柱穴の平面形は、円形または不整円形となるものが多い。柱穴の規模は40～60㎝前後が最も多く、37×35㎝のＰ９が最小で、78×60㎝を測るＰ４が最大である。柱痕を確認できた柱穴はＰ３とＰ５の２基である。柱痕の直径はＰ３が22㎝、Ｐ５が27㎝の円形であり、底面がくぼんだ状態で検出されている。根石や根固め石は見られなかった。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は桁行き４間以上、梁行き２間の南北に長い建物跡である。南側は調査区外へと続いているため、正確な建物規模は不明である。建物内部はＰ11によって桁行き１間×梁行き２間、桁行き３間以上×梁行き２間の空間に分けられていたと推測される。調査区東端にある１Ｂ・Ｃ号門跡と主軸方位が近似している。本遺構のある５号平場は主郭に相当する平場で、主殿となるような建物は調査区外に建っていたと想定され、本遺構はそれに付属する建物と考えられる。遺構の年代は城館の機能していた15世紀と推測される。（杉　沢）

９号掘立柱建物跡　ＳＢ09（図36）

本遺構は、５号平場の東側、Ｘ10・11グリッドに位置する建物跡である。本遺構の検出面はＬⅢａ面である。本遺構のＰ４と８号建物跡のＰ11が重複しているが、新旧関係は判然としない。ほかの遺構とも重複し、５・６号性格不明遺構より新しく、５号焼土遺構より古い。南東約５ｍには10号掘立柱建物跡が、東約16ｍには１号門跡がある。

本遺構は、桁行き３間、梁行き１間の身舎に１間の北庇が取り付く構造の建物跡であると判断した。平面形は東西方向に長軸を持つ長方形で、南南東側柱列を基準にした建物跡の主軸方位はＮ79°Ｅとなる。本遺構は柱穴を９基により構成されるが、Ｐ１とＰ７の間にも柱穴を想定されるが撹乱により失われている。同様にＰ６の南北にも柱穴があった可能性が高いが、倒木痕により確認できなかった。身舎及び庇内の平面積は29.6㎡である。

身舎の桁行きとなる北北西側柱列はＰ４～６で構成され、柱間距離は2.27ｍ＋1.97ｍで平均は2.12ｍとなる。柱穴底面の標高は34.45～34.66ｍである。対になる南側柱列はＰ１～３で構成し、柱間距離は2.27ｍ＋2.27ｍで、柱穴底面の標高は34.30～34.67ｍである。梁行きＰ２－Ｐ４の柱間距離は3.03ｍ、梁行きＰ３－Ｐ５の柱間距離も3.03ｍである。

北庇の桁行きとなる柱列はＰ７～９で構成される。柱間距離は2.27ｍ＋2.27ｍで、柱穴底面の標高は34.43～34.48ｍである。身舎から庇までの柱間距離はＰ４－Ｐ８、Ｐ５－Ｐ９ともに1.52ｍである。

各柱穴の平面形は、円形から長円形を基調とした形である。柱穴の規模は長さ50～60㎝前後がほとんどである。最も小さい柱穴は、Ｐ９の42×41㎝である。最も大きい柱穴はＰ４の84×60㎝である。柱痕を確認できた柱穴はない。根石や根固め石を持つ柱穴もなかった。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、桁行き３間、梁行き１間の身舎に北庇が取り付き、東西方向に長い建物跡である。調査区東端にある１Ｂ・Ｃ号門跡と本遺構とは主軸方位が近似している。本遺構のある５号平場は、遺構や遺物が最も多く見つかっていることから、城館の中心的な空間である可能性が高い。主殿となるような規模の大きな建物は調査区外にあると想定され、本遺構はそれに付属する建物とみられる。遺構の年代は城館が機能していた15世紀と推測される。（杉　沢）

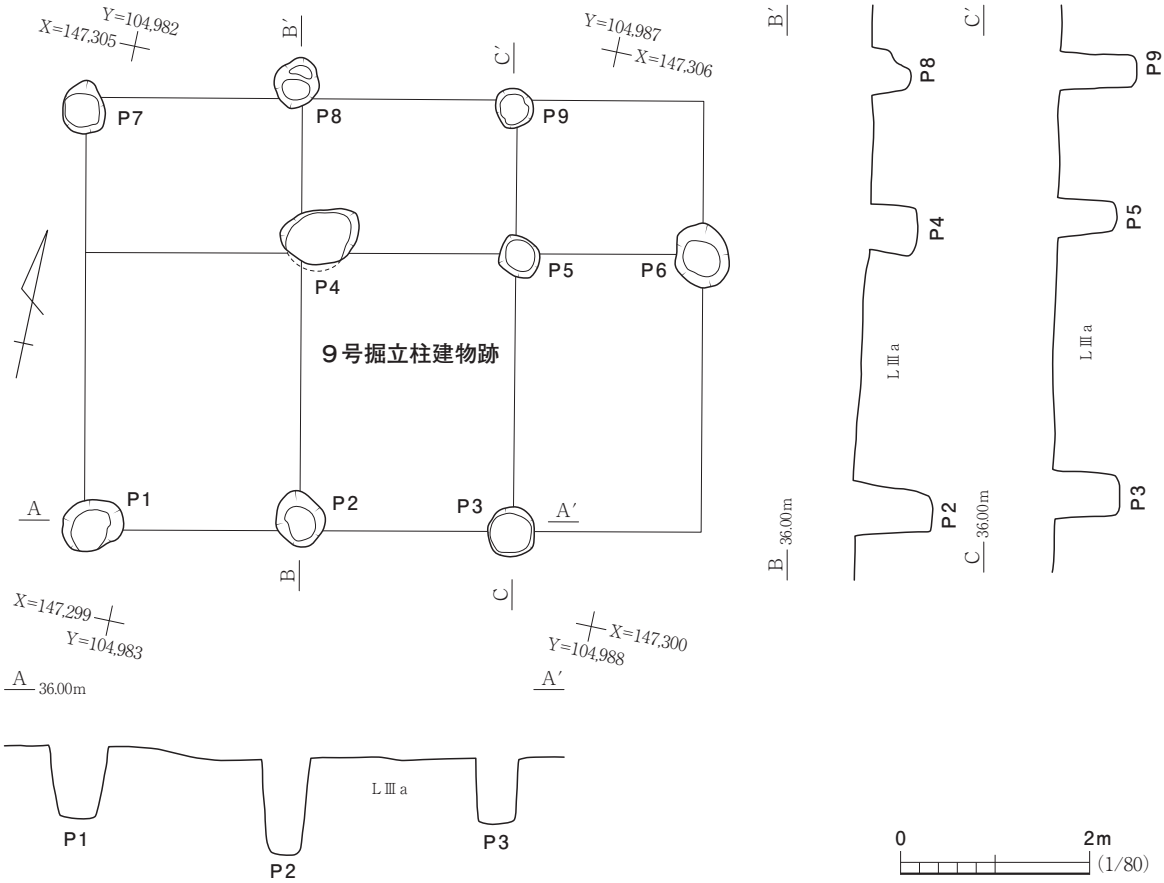


図36　９号掘立柱建物跡

10号掘立柱建物跡　ＳＢ10（図37）

本遺構は、５号平場の東側、Ｙ10・11グリッドに位置する建物跡である。検出面はＬⅢａである。平面において９号溝跡と重複するが、建物跡を構成する柱穴と直接的な重複関係にないため、新旧関係は不明である。北西側約５ｍには８・９号掘立柱建物跡が、北東側約10ｍには１号門跡が位置する。12号土坑が東側約２ｍのところに位置する。

本遺構は、桁行き４間、梁行き２間以上となる構造の建物跡である。平面形は北東・南西方向に桁行きを持つ長方形の建物跡で、主軸方位はＮ70°Ｅとなる。本遺構を構成すると考えられる柱穴を６基確認したが、遺構は南東側の調査区外へと続いていると推測される。

桁行き総長は6.68ｍあり、Ｐ１～５で構成される。各柱間の距離は1.85ｍ＋1.70ｍ＋1.52ｍ＋1.61ｍで平均は1.67ｍである。柱穴底面の標高は34.64～35.05ｍを測る。梁行きとなる柱列はＰ１－Ｐ６で構成され、柱間距離は2.12ｍとなる。柱穴底面の標高は34.61～34.72ｍである。

各柱穴の平面形は円形を基調とした形である。柱穴の規模は40㎝前後が最も多い。36×38㎝を測るＰ１が最も小さい。最も大きい柱穴はＰ４の42×43㎝である。柱痕を確認できた柱穴はなかった。柱穴はいずれも柱を抜き取った後に埋め戻されたり、自然に埋没したりした可能性が考えられる。根石や根固め石を持つ柱穴もなかった。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、桁行き４間、梁行き２間の北東・南西方向に長い建物跡と考えられるが、南側が調査区外へと続いているため詳細は不明である。調査区東端にある１Ｂ・Ｃ号門跡と本遺構は主軸方位が近似している。本遺構のある５号平場は、遺構や遺物が最も多く見つかっていることから、城館の中心的な空間である可能性が高い。主殿となるような規模の大きな建物は調査区外にあると想定され、本遺構はそれに付属する建物とみられる。遺構の年代は城館が機能していた15世紀と推測される。

（杉　沢）

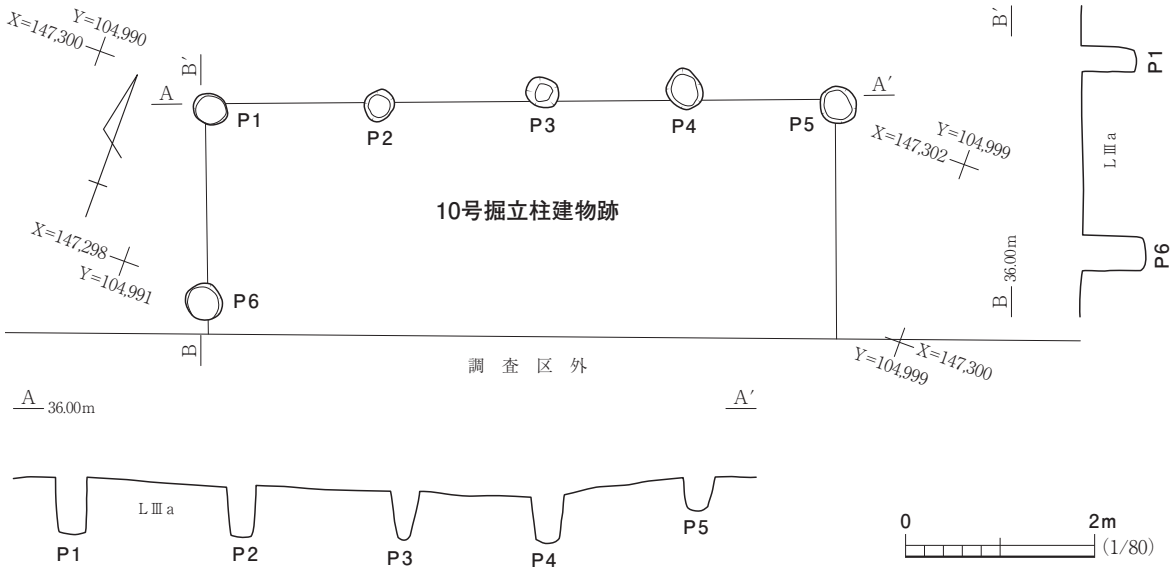


図37　10号掘立柱建物跡

５号柱列跡　ＳＡ05（図38、写真26）

本遺構は、５号平場南西隅部、Ｕ・Ｖ12グリッドに位置する柱列跡である。標高が35.91～36.09ｍの平坦面に立地している。遺構検出面はＬⅢａである。南西約１ｍに６号柱列跡が、北西約10ｍには３号土塁がある。北側５ｍ前後のところには25～28号土坑、８・９号性格不明遺構等がある。

本遺構は東北東・西南西方向に並ぶ９基の柱穴（Ｐ１～９）で構成されており、全長11.04ｍを測る。柱間距離はＰ１から1.10ｍ＋1.04ｍ＋1.66ｍ＋1.95ｍ＋1.72ｍ＋0.68ｍ＋1.64ｍ＋1.25ｍを測る。柱穴の深さは35～65㎝あり、平均は49㎝となる。

各柱穴の平面形は、方形を基調にしたものと、不整形なものとがある。柱穴の規模は30～40㎝前後が多い。最も小さい柱穴はＰ１の27×29㎝である。最大の柱穴はＰ４の32×60㎝である。柱痕はいずれの柱穴からも認められなかった。これらの柱穴は、柱を抜き取った後に埋め戻された可能性がある。また、根石や根固め石などはなかった。各柱穴の堆積土はいずれも、ＬⅡ・Ⅲを由来とする褐灰色土で、ＬⅢ塊を含むことから人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は９基の柱穴が東北東・西南西方向に並ぶ柱列で、５号平場の施設や空間を区画するような柵と考えられる。遺構の年代については、城館が機能していた15世紀と推測される。　（杉　沢）

６号柱列跡　ＳＡ06（図38、写真27）

本遺構は、５号平場南西隅部のＴ12・13グリッドに位置する柱列である。遺構検出面はＬⅢａである。重複する遺構はない。北西約５ｍに３号土塁が、北東約10ｍには25～28号土坑、８・９号性格不明遺構等が検出されている。

本遺構は、北東・南西方向へ連なる４基の柱穴（Ｐ１～４）で構成され、全長4.02ｍを測る。柱間距離は1.52ｍ＋1.75ｍ＋0.75ｍを測る。柱穴の深さは24～44㎝で平均の深さは32㎝である。各柱穴の平面形は、方形から不整な長方形をしているものが多い。柱穴規模は、長さが30㎝に満たないものから50㎝に達するものまで幅がある。最も小さい柱穴はＰ２で26×29㎝、最大の柱穴はＰ４の44×50㎝であった。Ｐ１～４では柱痕を確認できた。Ｐ４の柱痕は15×24㎝の長円形をしており、柱穴の底面まで達している。根石や根固め石を持つ柱穴はなかった。Ｐ１・２・４の堆積土は、柱痕のℓ１が黒褐色土で、掘形のℓ２がＬⅢを由来とする褐灰色土である。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は４基の柱穴で構成され、３間となる柱列跡である。５号平場の施設や空間を区画するような目的で構築されたと考えられ、遺構の年代については城館が機能していた15世紀の可能性が高いと推測される。　（杉　沢）

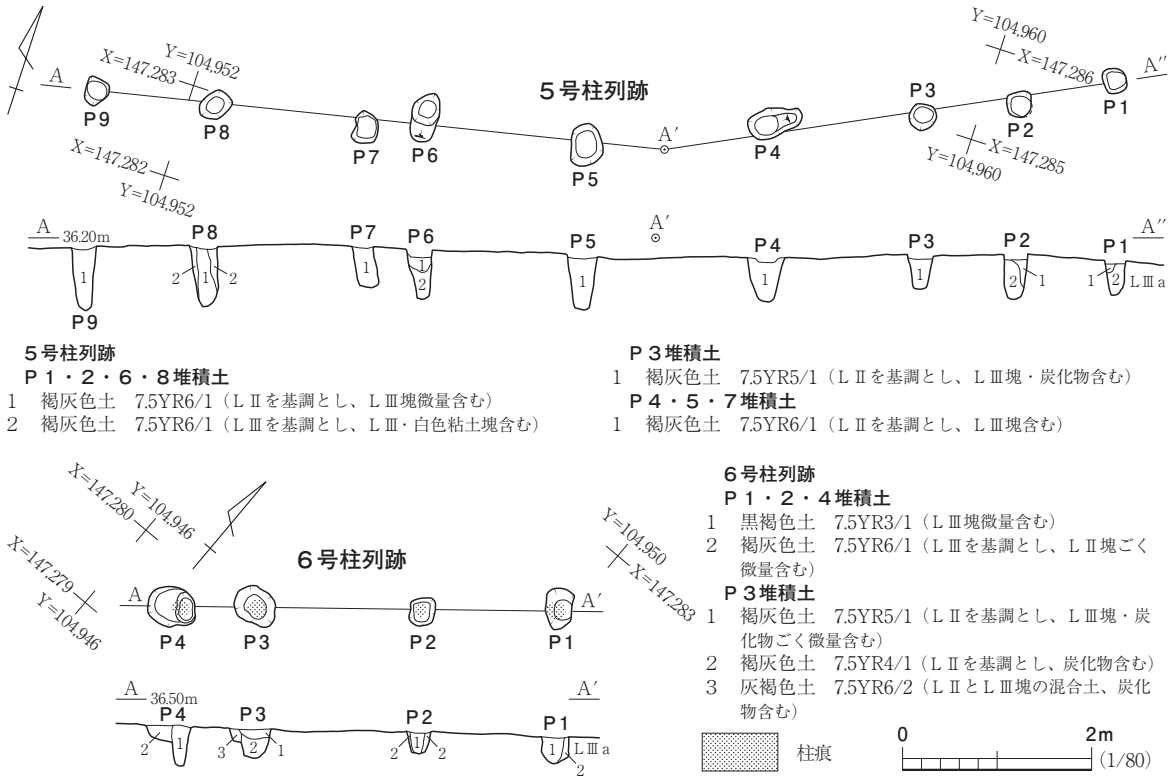


図38　５・６号柱列跡

１号門跡（図39～43、写真28～32）

１号門跡は５号平場東端部のＹ９、Ｚ９・10グリッドに位置する門跡である。場所や構造を変えながら４時期に変遷する門跡と判断した。変遷の新しい順から１Ａ→１Ｂ→１Ｃ→１Ｄ号門跡として報告する。

１Ａ号門跡　標高34.5～34.6ｍの北側及び東側へ下がる丘陵の縁辺部に立地している。本遺構の検出面は５号平場の整地上面である。１Ｂ・Ｃ号門跡の柱穴、２号道跡より新しい。

本遺構は礎石２個で構成される柱間１間の門跡である。柱間距離は2.02ｍで方位はＮ18°Ｗとなる。礎石はいずれも自然の川原石で、割石ではない。礎石１の平面形は不整長方形で長さ35㎝、幅は28㎝を測る。柱がのっていたとみられる部分が17×24㎝の範囲で浅くくぼんでいる。礎石２の平面形は隅丸台形で長さ33㎝、幅は32㎝ある。礎石１のようなくぼみはないが、平坦である。この２個の礎石は、ともに５号平場の整地土を15～25㎝掘り込んで据えられている。礎石１の南からは、長さ６～21㎝の川原石が約25個見つかっている。これら無加工の川原石は、礎石１・２と同じ石質で、礎石１のすぐ南から1.2×0.5ｍの範囲に細長く並べたような状態で検出された。検出面も礎石１と同じであるが、樹木が繁茂していた表土直下に近い検出面であったため、川原石群の範囲は現存する範囲よりも南及び礎石１の北側へと続いた可能性がある。２号道路跡の側溝を埋めた上に並べたような状態で検出されている。礎石２の南東約0.5ｍのところからも、礎石と同じ石質の川原石が２個見つかっている。大きさは前述した礎石１に伴う無加工の川原石群と同じで、

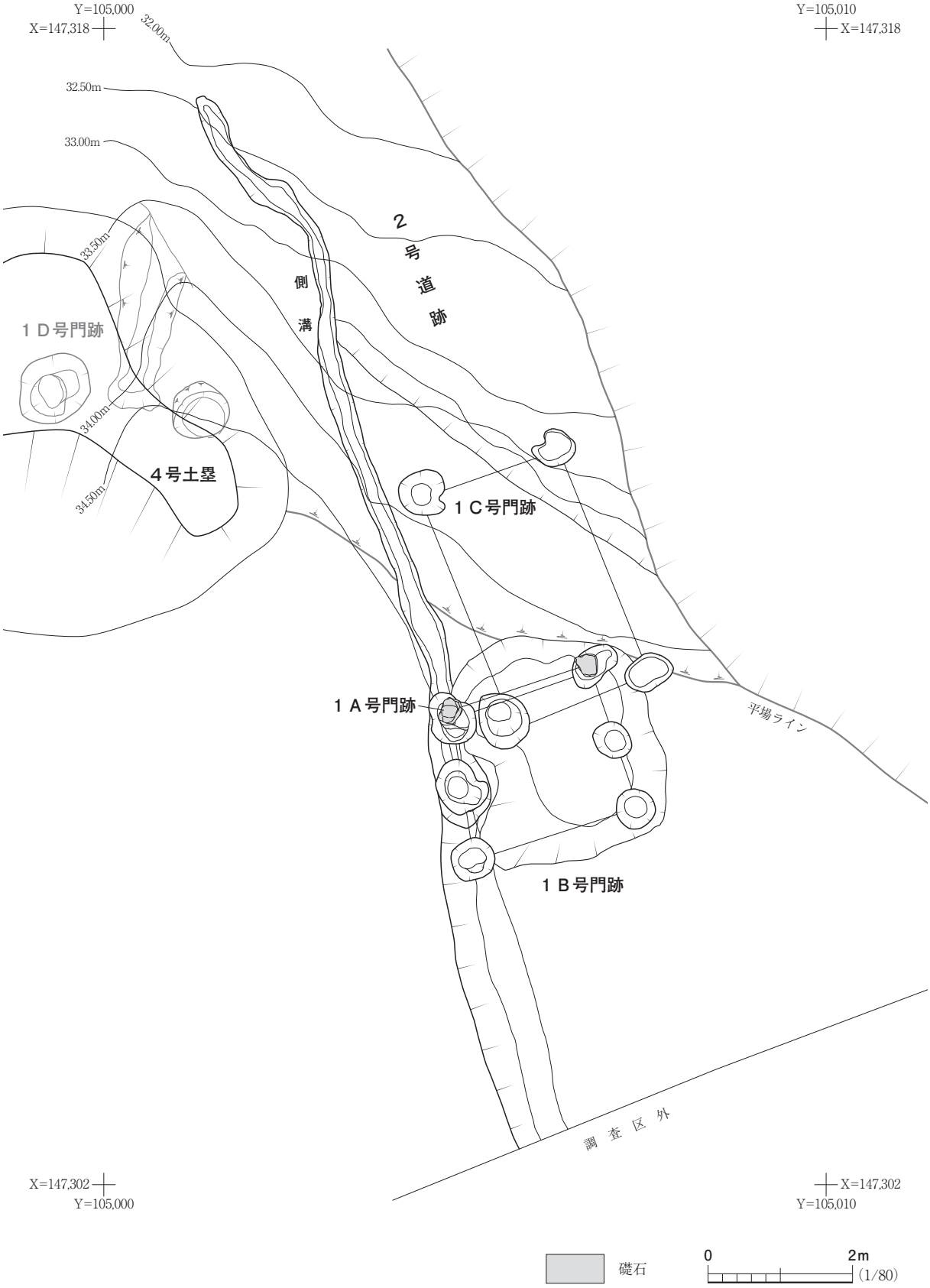


図39　１号門跡（１）・２号道跡（１）

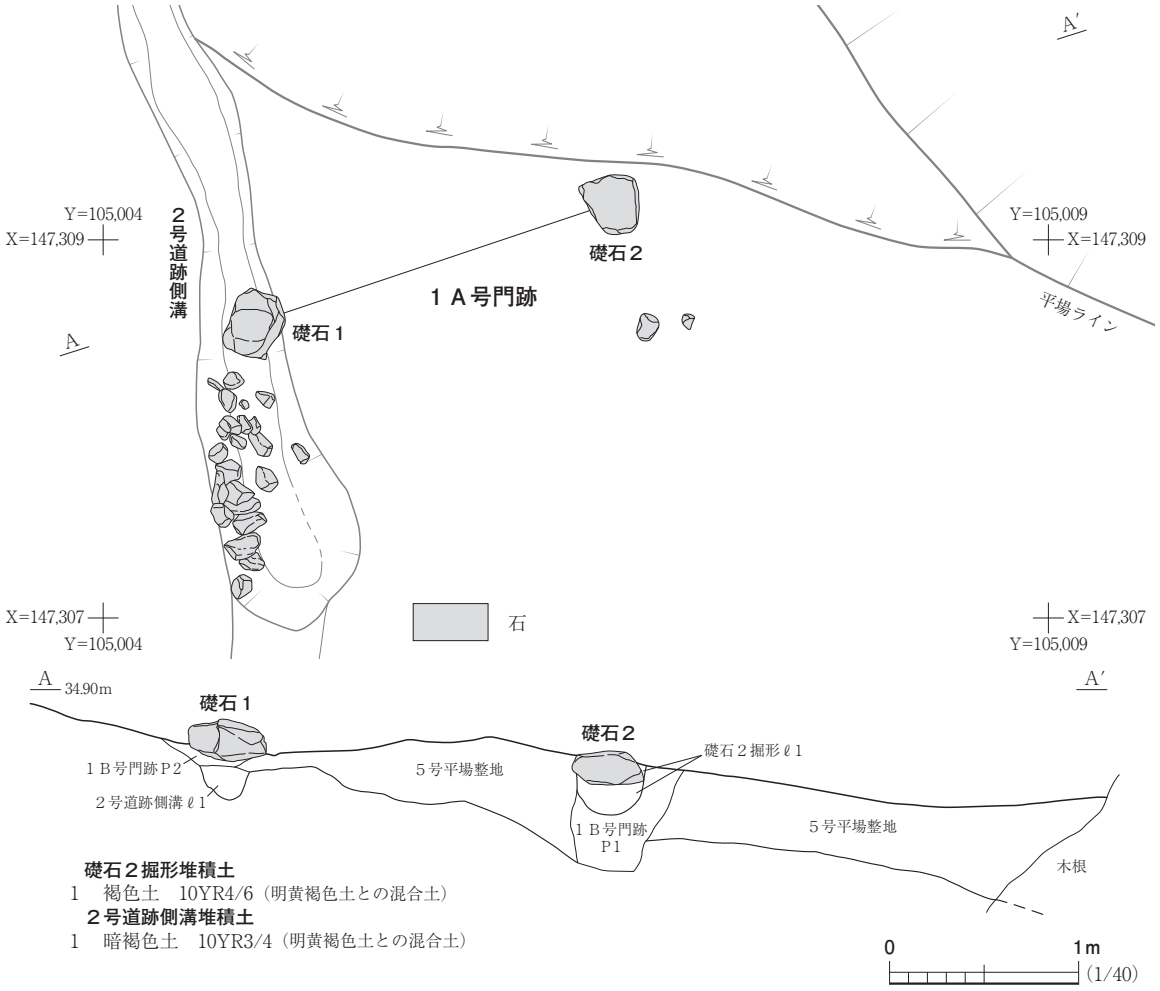


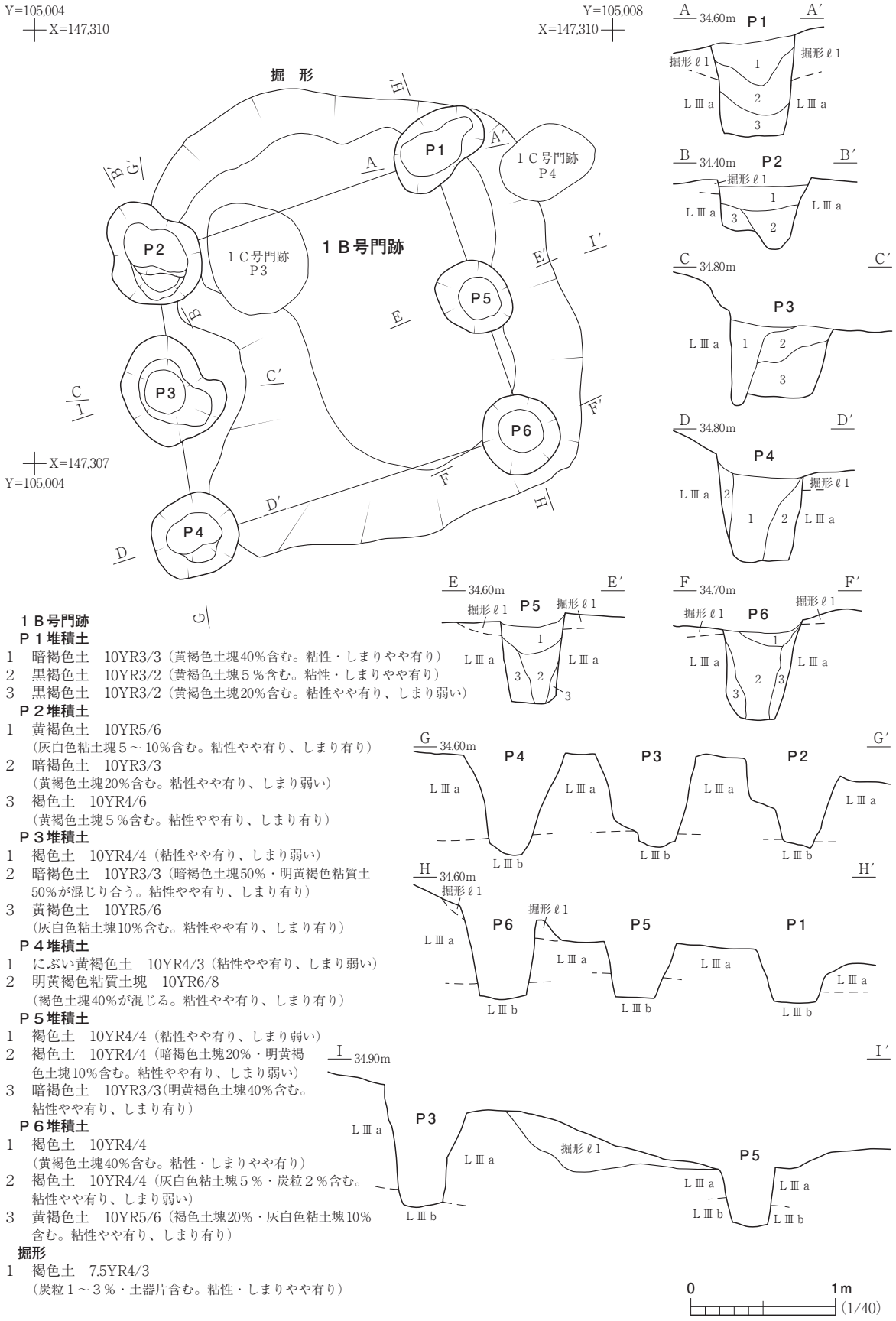
図40　１号門跡（２）・２号道跡（２）

本来であれば同じように並べられていたと推測される。

１Ａ号門跡は、自然の川原石による礎石２個と、礎石と同じ石質の小さな川原石群で構成される門跡である。礎石の配置には、重複する掘立柱構造の１Ｂ・Ｃ号門跡と主軸方位や柱間距離に強い共通性が認められることから、この２個の礎石が本柱にあたると判断した。ただし、礎石による二本柱の門では自立することが難しいため、１Ｂ号門跡の柱穴を控柱とするか、土塁や柵列などとの組み合わせによる構造であった可能性が高い。４号土塁、あるいは柵や塀と接続する構造であったかに関しては、４号土塁が風化流出して低く、接続していた痕跡は確認できない。また、本遺構に伴う柵列や塀の痕跡も確認できない。

１Ｂ号門跡　標高34.09～34.60ｍの北側及び東側へと下る丘陵縁辺部に立地している。遺構検出面はＬⅢａと５号平場整地上面である。１Ａ号門跡の礎石と重複し、本遺構の方が古い。また、５号平場の整地より新しい。北側に２号道跡が近接し、北西側１～３ｍには47号土坑と４号土塁がある。南東側約２ｍには、13・14・66・69号土坑が位置する。

本遺構は、梁行き２間、桁行き１間の構造をした門跡である。平面形は桁行きの方が長い長方形で、Ｐ２＋Ｐ３＋Ｐ４列を基準にした建物跡の主軸方位はＮ14°Ｅとなる。北北西・南南東方向に



１Ｂ号門跡

Ｐ１堆積土

1　暗褐色土　10YR3/3（黄褐色土塊40％含む。粘性・しまりやや有り）
2　黒褐色土　10YR3/2（黄褐色土塊５％含む。粘性・しまりやや有り）
3　黒褐色土　10YR3/2（黄褐色土塊20％含む。粘性やや有り、しまり弱い）

Ｐ２堆積土

1　黄褐色土　10YR5/6
（灰白色粘土塊５～10％含む。粘性やや有り、しまり有り）
2　暗褐色土　10YR3/3
（黄褐色土塊20％含む。粘性やや有り、しまり弱い）
3　褐色土　10YR4/6
（黄褐色土塊５％含む。粘性やや有り、しまり有り）

Ｐ３堆積土

1　褐色土　10YR4/4（粘性やや有り、しまり弱い）
2　暗褐色土　10YR3/3（暗褐色土塊50％・明黄褐色粘質土50％が混じり合う。粘性やや有り、しまり有り）
3　黄褐色土　10YR5/6
（灰白色粘土塊10％含む。粘性やや有り、しまり有り）

Ｐ４堆積土

1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（粘性やや有り、しまり弱い）
2　明黄褐色粘質土塊　10YR6/8
（褐色土塊40％が混じる。粘性やや有り、しまり有り）

Ｐ５堆積土

1　褐色土　10YR4/4（粘性やや有り、しまり弱い）
2　褐色土　10YR4/4（暗褐色土塊20％・明黄褐色土塊10％含む。粘性やや有り、しまり弱い）
3　暗褐色土　10YR3/3（明黄褐色土塊40％含む。粘性やや有り、しまり有り）

Ｐ６堆積土

1　褐色土　10YR4/4
（黄褐色土塊40％含む。粘性・しまりやや有り）
2　褐色土　10YR4/4（灰白色粘土塊５％・炭粒２％含む。粘性やや有り、しまり弱い）
3　黄褐色土　10YR5/6（褐色土塊20％・灰白色粘土塊10％含む。粘性やや有り、しまり有り）

掘形

1　褐色土　7.5YR4/3
（炭粒１～３％・土器片含む。粘性・しまりやや有り）

図41　１号門跡（３）

出入りしていた可能性が高い。本遺構を構成する柱穴は６基確認されている。桁行きＰ１＋Ｐ２の柱間距離は2.07ｍ、対となる桁行きＰ４＋Ｐ６は2.38ｍである。梁行きとなるＰ２＋Ｐ３＋Ｐ４柱列の柱間総長は2.02ｍである。各柱穴の柱間距離はＰ２＋Ｐ３が1.01ｍ、Ｐ３＋Ｐ４も1.01ｍである。対となる梁行きＰ１＋Ｐ５＋Ｐ６柱列の柱間総長は2.02ｍである。各柱穴の柱間距離はＰ１＋Ｐ５が1.01ｍ、Ｐ５＋Ｐ６も1.01ｍとなる。柱穴底面の標高は33.74～33.90ｍを測り、あまり高低差はなく、平均値33.82ｍとなる。

各柱穴の規模と平面形は、Ｐ１が40×69㎝の不整円形で深さは67㎝である。Ｐ２は42×76㎝の不整形で深さは50㎝となる。Ｐ３は56×74㎝の不整形で深さが63㎝を測る。Ｐ４は54×62㎝の楕円形で深さは74㎝である。Ｐ５は46×55㎝の楕円形で深さは68㎝となる。Ｐ６は54×54㎝の円形で深さは68㎝を測る。柱痕は３基の柱穴で検出されている。Ｐ２は14×26㎝の長円形、Ｐ３が直径28㎝の円形、Ｐ４では直径22㎝の円形を呈する。柱穴の平面形に不整形が多いのは、抜き取りによるものと考えられることから、柱材はすべて抜き取られたものと判断した。底面に根石を入れるもの、柱の周囲に石を混ぜて柱の安定を図ったような痕跡は見られなかった。各柱穴の堆積土は、ＬⅡを由来とする褐色土や暗褐色土、黒褐色土を主体とする土で埋め立てられる。一方、掘形の土はＬⅣ塊が多く含まれている。

柱穴の周辺には不整楕円形を呈する掘り込みが検出され、１Ｂ号門跡に伴う掘形と考えている。平面規模は東西2.62ｍ、南北3.16ｍで、深さは26㎝を測る。周壁は底面から緩やかに立ち上がっているが、その角度も一様なものではなかった。埋土は単層で、炭粒をごく微量含む褐色土で、人為堆積である。丘陵の縁辺部ということもあり、掘形は平場整地の軟質な箇所の補強や、人間の往来によりできたくぼみの補修を行った痕跡と推察される。

１Ｂ号門跡は５号平場の東端部に位置し、柱穴６基で構成される桁行き１間、梁行き２間の門跡である。梁行きよりも桁行きのほうが柱間距離は長い。門の形式としては四脚門、あるいは六脚の櫓門の可能性がある。四脚門であればＰ３とＰ５が本柱となり、ほかの柱穴(控柱)よりも大きくなるはずであるが、本遺構を構成する柱穴には大きさや深さの違いがあまり見られない。逆に各柱穴の平面規模や深さが近似することから、本遺構は六脚の櫓門の可能性が高い。東北東－西南西方向に出入りし、２号道跡を使って６号平場へ行けるようになっている。本遺構は５号平場の整地の直上から掘り込まれ、４号土塁も同様であることから、これらは城館機能を充実させていく中で一体的に行われたものといえる。

１Ｃ号門跡　標高33.5～34.4ｍの北東方向へ低くなる斜面に立地している。本遺構の検出面はＬⅢａ～ＬⅣである。柱穴での重複関係ではないが平面形では１Ａ・Ｂ号門跡と重複関係にあり、遺構検出面の違いから本遺構の方が古くなると考えている。また、５号平場の整地より古い。北西約３ｍには１Ｄ号門跡と４号土塁があり、東約１ｍには47号土坑、南から南東２～４ｍには13・14・42・66・69号土坑が多く検出されている。

本遺構は、桁行き１間、梁行き１間の門跡で、平面形は長方形である。北北西・南南東方向に出

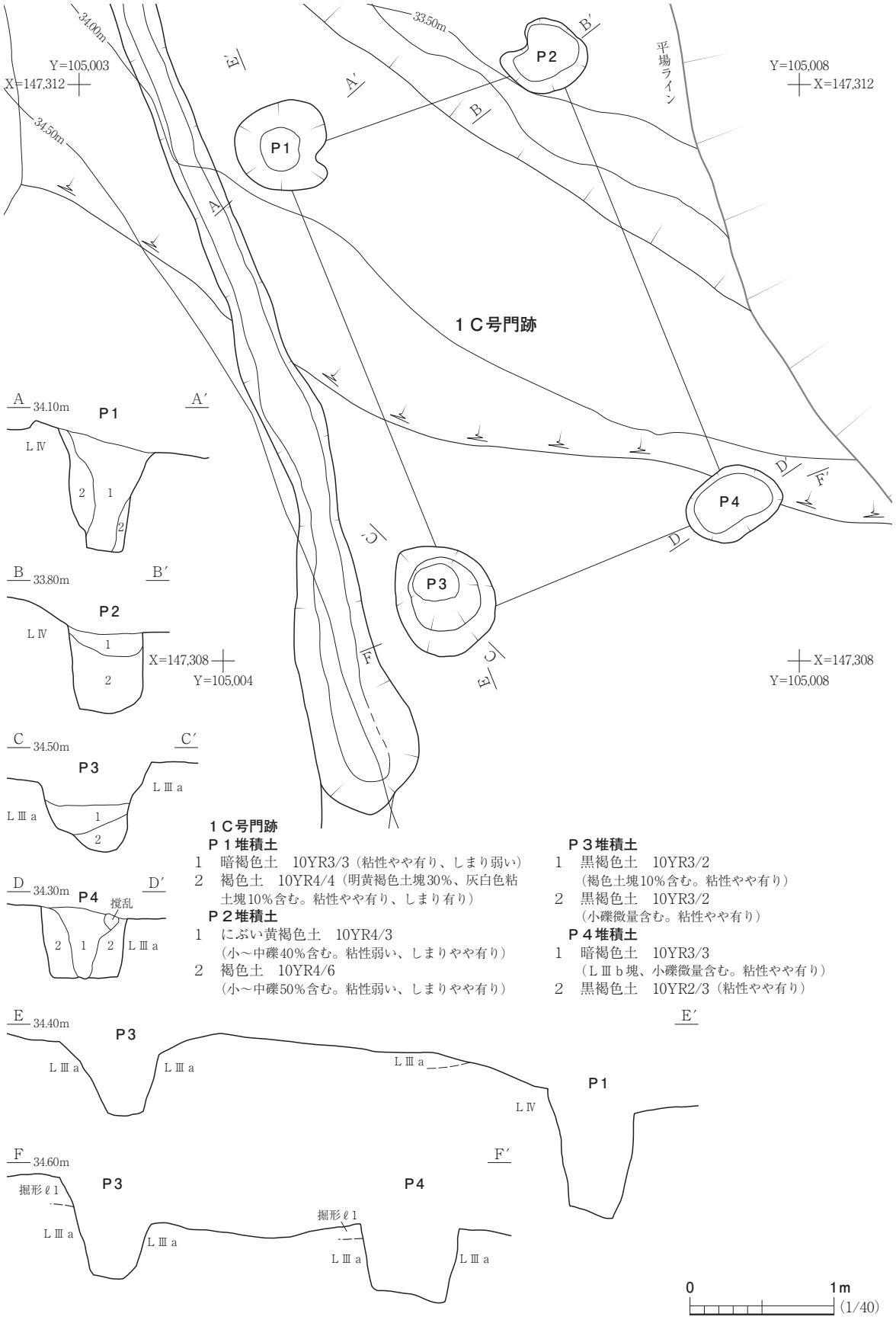

34.00m
Y=105,003
X=147,312
34.50m
33.50m
Y=105,008
X=147,312
平場ライン
P1
P2
P3
P4
１Ｃ号門跡
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
34.10m
34.80m
34.50m
34.30m
34.40m
34.60m
ＬⅣ
ＬⅢａ
X=147,308
Y=105,004
X=147,308
Y=105,008
撹乱
掘形ℓ1
１Ｃ号門跡
Ｐ１堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（粘性やや有り、しまり弱い）
2　褐色土　10YR4/4（明黄褐色土塊30%、灰白色粘土塊10%含む。粘性やや有り、しまり有り）
Ｐ２堆積土
1　にぶい黄褐色土　10YR4/3
（小～中礫40%含む。粘性弱い、しまりやや有り）
2　褐色土　10YR4/6
（小～中礫50%含む。粘性弱い、しまりやや有り）
Ｐ３堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2
（褐色土塊10%含む。粘性やや有り）
2　黒褐色土　10YR3/2
（小礫微量含む。粘性やや有り）
Ｐ４堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3
（ＬⅢｂ塊、小礫微量含む。粘性やや有り）
2　黒褐色土　10YR2/3（粘性やや有り）
0
1m
(1/40)

図42　１号門跡（４）

入りしていたと推測され、主軸方位はＮ18°Ｅとなる。本遺構を構成する柱穴は４基確認されている。北北西桁行きＰ１－Ｐ２の柱間距離は2.04ｍである。対になる南南東桁行きＰ３－Ｐ４の柱間距離も2.04ｍである。西南西梁行きＰ１－Ｐ３の柱間距離は3.42ｍである。対になる東北東梁行きＰ２－Ｐ４の柱間距離も3.42ｍである。各柱穴の平面形状と規模はＰ１が、不整形で67～71㎝、深さ87㎝を測る。Ｐ２は不整形で50～61㎝、深さは56㎝である。Ｐ３は不整円形で68×82㎝、深さ70㎝を測る。Ｐ４が不整楕円形で48×67㎝、深さは50㎝であった。柱痕はＰ３で15～42㎝の長円形、Ｐ４が直径13㎝の円形のものが検出されている。Ｐ１とＰ２は、柱を抜き取られているために柱穴の平面形も不整形になっている。底面に根石などの痕跡は見られない。各柱穴の堆積土は、Ｐ２がＬⅣ塊により埋め立てられ、砂礫を多く含む。Ｐ１・４の掘形はＬⅣ塊を含み、柱痕は暗褐色土を主体とし埋め立てられる。Ｐ３は黒褐色土を主体とする土で埋め立てられている。

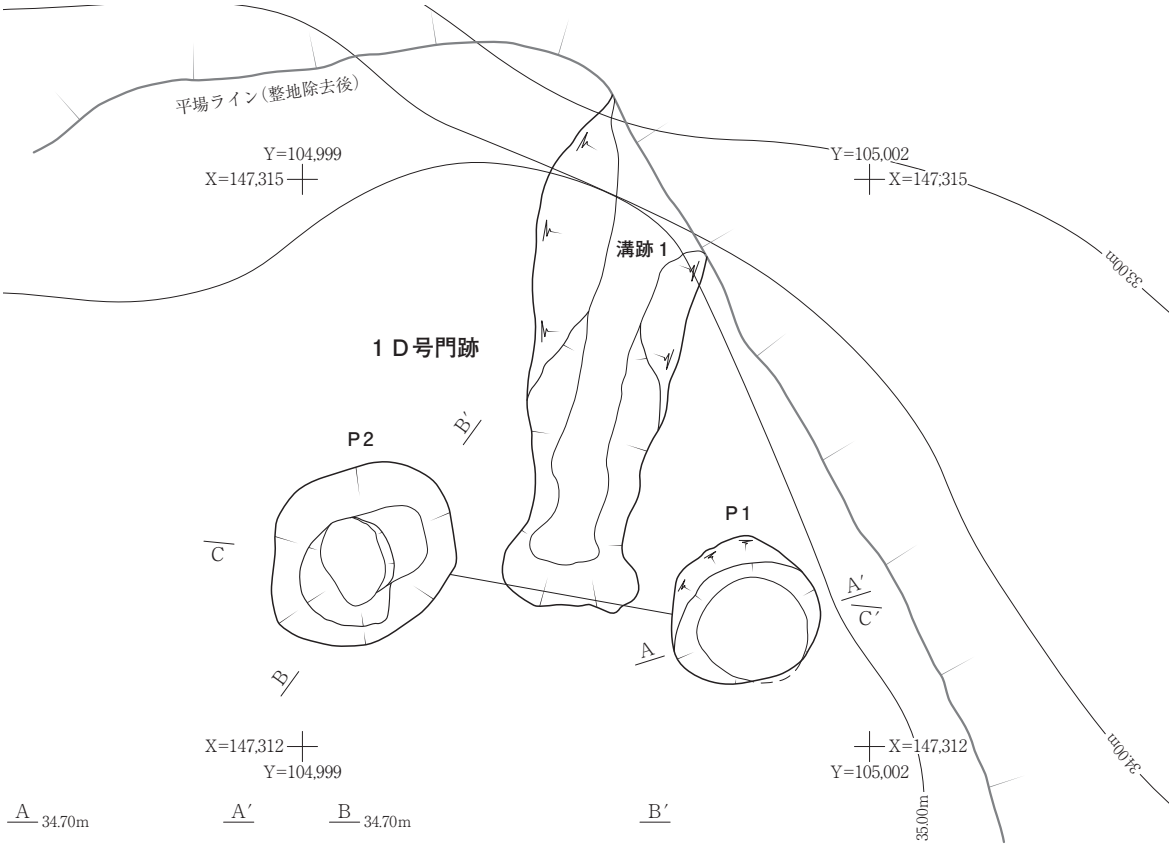
本遺構は柱穴４基で構成される桁行き１間、梁行き１間の門跡で、桁行きよりも梁行きの方が柱間距離は長い。北北西・南南東方向に出入りし、２号道跡を通って６号平場との往来ができるようになっていた。１Ａ・Ｂ号門跡より古い遺構であることから、１Ｄ号門跡に後続する遺構と位置付けられる。

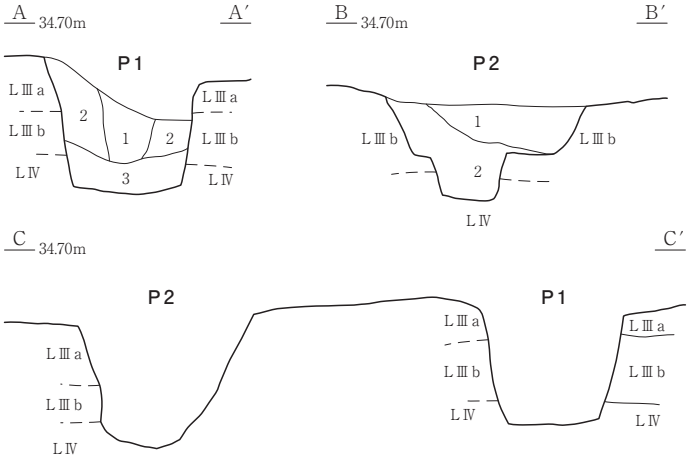
１Ｄ号門跡　北側及び東側へと下がる斜面部に立地している。本遺構の検出面はＬⅢａ～Ⅲｂである。４号土塁と５号平場の整地土を除去した段階で本遺構を確認したことから、本遺構が古い。溝跡１は柱間ほぼ中央から北北東方向に延びている。南東３～６ｍに１Ａ～Ｃ期門跡と42・47号土坑があり、東約２ｍに２号道跡が近接する。

本遺構は、２基の柱穴と溝１条で構成される柱間１間の門跡である。柱間距離は2.12ｍで、方位はＮ10°Ｅとなる。Ｐ１の平面形は不整円形で、規模は80×77㎝である。深さは70㎝を測る。柱痕は径25㎝の円形であり、柱は抜き取られていた。Ｐ２の平面形は不整長円形で、規模は112×90㎝を測る。深さは68㎝である。柱痕は48×30㎝の楕円形と推測され、南側へ倒すように柱を抜き取った痕跡がみられた。柱を安定させるために根石を置いたり、周りに石を入れたりしている柱穴はなかった。堆積土は黒褐色土や暗褐色土で、ＬⅢｂ塊を含む。埋土はいずれも人為堆積と考えられる。

溝跡１は、１Ｄ号門跡を構成する２基の柱穴間のほぼ中間部から北北東方向へ2.7ｍ延びている（Ｎ12°Ｅ）。その先は斜面が急角度で削られているため総長は不明である。上幅は50～92㎝、下幅は25～50㎝あり、北端部が最も幅広になっている。深さは18～26㎝を測る。壁は溝底面から緩やかに外傾して立ち上がる。

１Ｄ号門跡は、毛萱館の中心部と想定される５号平場の東端部に位置している。柱穴２基で構成される柱間１間の門跡である。４号土塁や、５号平場の整地より古く、本格的な城館の構築以前に機能していたと考えられる。溝１も本遺構に伴う可能性が高く、５号平場と６号平場を結ぶ通路の痕跡と推測される。４号土塁より古いことから、城館としての利用が始まった最初の段階に位置付けられる可能性が高い。





１Ｄ号門跡

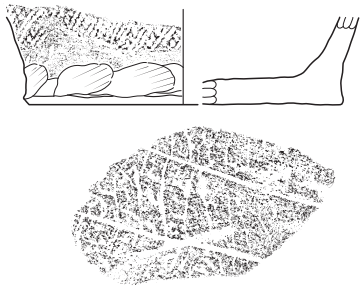
Ｐ１堆積土

1　黒褐色土　10YR3/2（灰白色粘土塊５％含む。粘性やや有り、しまり弱い）
2　暗褐色土　10YR3/3（褐色土塊10％・黄褐色土塊５～10％含む。粘性やや有り、しまり有り）
3　暗褐色土　10YR3/3（灰白色粘土塊10％・褐色土塊５％含む。粘性やや有り、しまり有り）

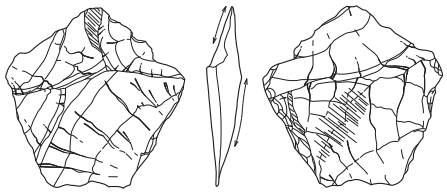
Ｐ２堆積土

1　黒褐色土　10YR3/2（灰白色粘土小塊５％・炭２～３％含む。粘性・しまりやや有り）
2　暗褐色土　7.5YR3/4（灰白色粘土塊５％・小礫５％含む。粘性弱い、しまりやや有り）

0　1m　(1/40)



1（１Ｂ号門跡掘形　ℓ１）
底径：(8.2)cm
器高：[2.3]cm



2（１Ｂ号門跡掘形　ℓ１）
長：　4.7 cm
幅：　4.7 cm
厚：　0.9 cm
重：15.4 g
石質：粘板岩

←→　研磨範囲

0　5cm　(1/2)

図43　１号門跡（５）、出土遺物

出土遺物（図43、写真62）

１Ｂ号門跡からは弥生土器11点、土師器４点、石器１点が出土し、弥生土器１点、石器１点を図示した。図43－１は、壺形あるいは甕形土器の底部片である。底面には木葉痕が認められる。２は粘板岩製の石庖丁を再調整した剥片である。左面上端部には石庖丁成形時の研磨による線状痕が認められる。右面には再調整時の研磨痕が認められる。

ま と め

１号門跡は、５号平場の北東隅部に位置する。場所や構造を変えながら４時期に変遷する。１Ａ号門跡は、５号平場整地を掘り込んで据え置かれた礎石２個と、川原石群で構成される。１Ｂ号門跡は５号平場整地を掘り込んで築かれた、梁行き２間、桁行き１間の六脚の櫓門と考えられる。４号土塁も同時期に築かれることから、城館機能を充実させていく過程で一体的に行われたものといえる。１Ｃ号門跡は５号平場整地以前に構築された梁行き１間、桁行き１間の四脚門と考えられる。１Ｄ号門跡は４号土塁、５号平場整地以前に構築された掘立柱の二脚門で、斜面下位に接続するための通路と推測される、溝１が付属する。８号平場に大手(虎口)と考えられる地形が認められることから、１号門跡は裏口(搦手)に付随する施設と考えられる。年代は城館に関連することから、15世紀と推測される。（杉　沢）

２号道跡（図39・40、写真28）

本遺構は、５号平場の北東端部、Ｚ９・10グリッドに位置する。標高32.49～34.50ｍの北北西へ下る斜面に立地している。遺構検出面は、５号平場付近がＬⅢａ、斜面はＬⅢｂやＬⅣ・Ⅴである。平面において１Ａ・Ｂ号門跡と側溝が重複しており、本遺構が古い。西側約１ｍには４号土塁が近接して位置する。

本遺構は、路面と側溝によって構成されている。丘陵の東縁辺部を北北西方向へ下るように削り出し、路面として使用している。残存する路面の規模は、長さ9.2ｍ以上で、幅は2.2～3.4ｍを測る。本来は５号平場と６号平場を往来する目的で作られた道跡で、想定される道の総長は約35ｍとなる。側溝は、路面の丘陵側(西南側)にのみに造られ、１Ｃ号門跡のＰ３隣から始まり、北北西方向へ7.0ｍ程直線的に延び、その先は3.8ｍ程少し蛇行しながら端部は徐々に浅く不明瞭になっている。残存する側溝の長さは10.8ｍである。側溝の上幅は21～72㎝、下幅が７～31㎝あり、深さは17㎝前後を測る。本遺構から遺物は出土していない。側溝の堆積土は暗褐色土の単層で、ＬⅢｂ塊を含む。

本遺構は５号平場と６号平場をつなぐ道跡である。１Ｃ号門跡に側溝が並行することから、同時期造られたと考えられる。側溝は後続する１Ａ・Ｂ号門跡の段階には機能しなくなるが、路面部は引き続き使われたと推測される。年代は城館に関連する遺構であることから、15世紀と推測している。（杉　沢）

９号溝跡　ＳＤ９（図44、写真33）

本遺構は、５号平場の中央部、Ｖ～Ｙ11グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、溝状の褐灰色土の範囲として確認した。本遺構は複数の遺構と重複しており、８号掘立柱建物跡、10号溝跡、22号土坑、ＧＰ116・154・160・180・185・195・196・228・248・249・259・260・261・263・265・266・272・273・274・293・300・304・312・355より新しく、21号土坑より古い。

本遺構は、東西方向にやや弧状を呈しながら延伸する溝跡で、５号平場の長軸方向に沿って構築される。規模は長さ29m、幅60cmを測る。検出面からの深さは、最大で10cmと浅い。本遺構の東側は上端の幅が狭く、掘り込みが深くなり、一方西側は上端の幅が広くなり、掘り込みは浅くなる。斜面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面は、西側から東側に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は、ＬⅢ塊や焼土などを含む褐灰色土で、人為による埋め立てと判断した。

本遺構から、近世陶器４点、弥生土器６点、石器２点が出土し、近世陶器２点を図示した。図44－１・２は大堀相馬焼である。１は丸碗で、内外面に灰釉が施される。２は椀の体部の破片で、内外面に鉄釉が施される。いずれもℓ１上位からの出土で、本遺構の年代的な根拠とはならない。

本遺構は東西方向へ延伸する溝跡である。性格については、９号掘立柱建物跡や５号平場と長軸方向を同じくすることから、５号平場の内部を区画するような施設と考えている。年代について、15世紀と考えられる10号溝跡と並行することを考慮すると、中世城館に関連した15世紀頃の所産と考えられる。（佐　藤）

10号溝跡　ＳＤ10（図44、写真33・62）

本遺構は５号平場の中央部、W10、Ｖ・W11グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、溝状の褐灰色土の範囲として確認した。本遺構は複数の遺構と重複しており、５号平場整地、ＧＰ187・233・238・247・262・286・508より新しく、９号溝跡、23・40号土坑より古い。

本遺構は、９号溝跡と同様に東西方向に延伸し、途中で北方向に主軸方向を変える平面形がＬ字形の溝跡である。規模は全長が18.5mで、東西方向に13.5m程延伸した後、北方向に主軸を変え、５m程延びる。幅は広狭が著しく、最大幅1.23m、最小幅24cmを測る。検出面からの深さは、最大で８cmと浅い。本遺構の北方向へ屈曲する部分は上端の幅が狭く、一方東西方向を主軸とする部分は上端の幅が広くなる傾向にある。斜面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面は、西側から東側に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は、ＬⅢ塊や焼土などを含む褐灰色土で、人為による埋め立てと判断した。

本遺構から、中世陶器１点が出土し、これを図示した。図44－３は古瀬戸後期様式の口広有耳壺と推測した。体部下半の破片で、外面には２条の沈線がめぐり、鉄釉が施される。

本遺構は、途中で北方向に主軸を変える平面形がＬ字形の溝跡である。性格は、９号溝跡と同様

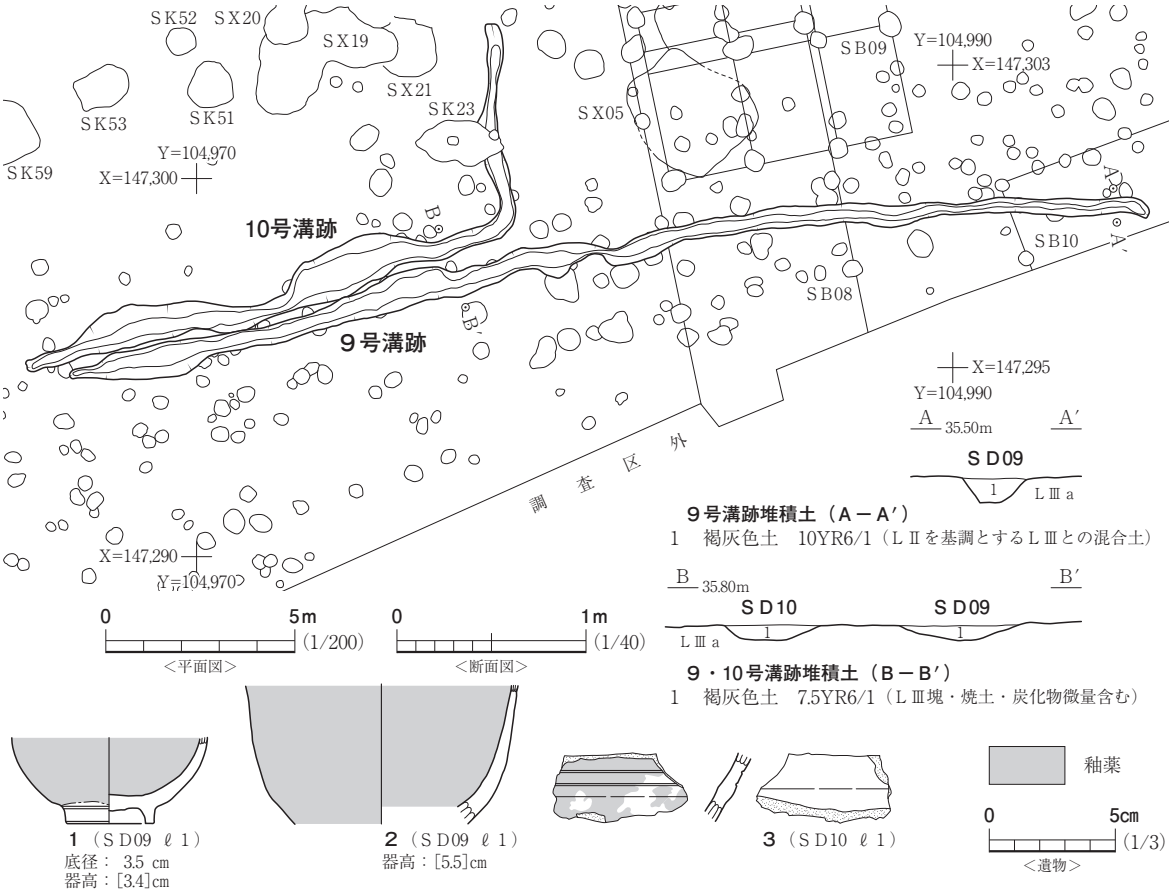


図44　９・10号溝跡、出土遺物

に５号平場の内側を区画するような施設と考えている。年代について、出土した中世陶器の特徴から、中世城館に関連した15世紀頃の所産と考えられる。　（佐　藤）

12号溝跡　ＳＤ12（図45、写真33）

本遺構は５号平場の西隅部、U11グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、３号土塁の下端裾部を精査した際、溝状の暗褐色土の範囲として確認した。３号土塁と重複し、本遺構が新しい。本遺構は３号土塁の出入口に隣接して位置している。

本遺構は３号土塁の下端に沿い、主軸は東西方向を基調とする溝跡である。平面形は弧状で東隅は扇形となる。規模は長さ３ｍで、幅は57㎝、扇形となる部分は1.04ｍを測る。検出面からの深さ

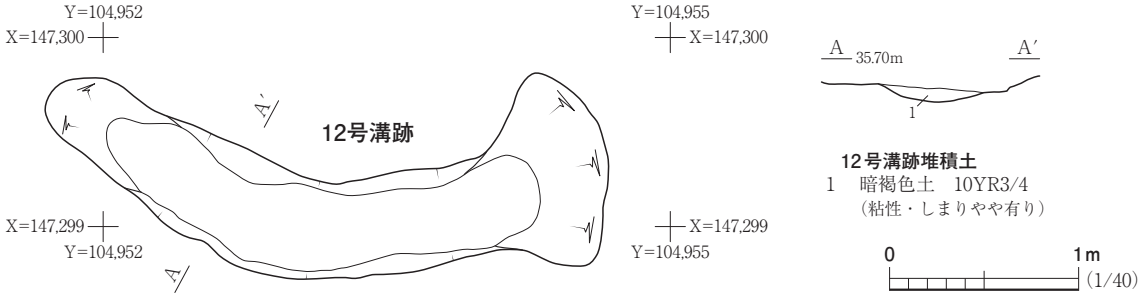


図45　12号溝跡

は、最大７㎝と浅い。周壁は緩やかに立ち上がり、東西両端部はスロープ状となり上端につながっている。断面形は皿状を呈する。底面は平坦である。遺構内堆積土は、暗褐色土の単層で自然堆積となる。遺物は出土していない。

本遺構は、５号平場側の３号土塁出入口に付帯する溝跡である。性格について、３号土塁の出入口の排水などに利用されたと考えられる。年代は、３号土塁に付帯することから中世城館に関連した15世紀頃の所産と考えられる。（佐　藤）

18号土坑　ＳＫ18（図46・49、写真34・62）

本遺構は、５号平場の北東隅部、Ｙ９・10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａと５号平場の整地上面で、楕円形の褐灰色土の範囲として確認した。本遺構の重複関係は、５号平場の整地より新しく、17号土坑より古い。本遺構の北東側１ｍには４号土塁が、周辺には16・17・19・20・61・68号土坑が密集して位置している。

本遺構の平面形は楕円形であり、規模は長軸1.12ｍ、短軸87㎝、検出面からの深さは最大29㎝である。周壁はいずれも急に立ち上がる。底面は、中央に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は２層に分けられた。ℓ１はＬⅡを由来とする褐灰色土で、ＬⅢａ塊を含む。ℓ２は黒褐色土で焼土や炭化物を含む。堆積土の特徴から、人為による埋め立てと判断した。

遺物は石製の硯が１点出土した。図49－７はシルト岩製の硯である。先端部は欠損により遺存していない。遺構の底面付近から出土した。小型品で、磨耗により山側から海側に向かって緩やかに傾斜している。

本遺構は平面形が楕円形の土坑である。その詳細な性格は不明だが、年代は、５号平場の整地より新しく、出土遺物に石製の硯が見られることから、15世紀の所産と考えられる。（佐　藤）

23号土坑　ＳＫ23（図46・49、写真62）

本遺構は、５号平場の中央部、W10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで不整楕円形の灰褐色土の範囲として確認した。本遺構は他遺構との重複関係から、５号平場の整地・10号溝跡より新しく、ＧＰ122・277より古い。本遺構の東側には８・９号掘立柱建物跡が位置している。

本遺構の平面形は不整な楕円形であり、規模は長軸2.33ｍ、短軸1.2ｍ、検出面からの深さは最大20㎝である。周壁はいずれも急に立ち上がる。底面は平坦となるが、西側は段状に高くなっている。遺構内堆積土は２層に分けられた。いずれにも焼土や炭化物、ＬⅢｂ・黒褐色土塊を含んでいることから、人為による埋め立てと判断した。遺物はかわらけ１点、弥生土器５点、石器１点が出土しており、かわらけ１点を図示した。図49－３はかわらけの体部片である。ロクロ成形で、胎土中には金雲母が多量に含まれる。

本遺構は平面形が不整な楕円形の土坑である。その詳細な性格は不明だが、年代は、５号平場の整地や10号溝跡より新しく、中世の小穴より古いことや、遺構内から出土したかわらけの特徴か

ら、15世紀代の所産と考えられる。　（佐　藤）

41号土坑　ＳＫ41（図46・49、写真62）

本遺構は、５号平場の北西側、Ｕ11グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、不整円形の黒褐色土の範囲として確認した。本遺構と他遺構との重複関係は認められない。本遺構の北西側4.3mには３号土塁の出入口が位置している。

本遺構の平面形は不整円形であり、規模は長径2.16m、検出面からの深さは最大62cmである。周壁は北壁が急に、それ以外は緩やかに立ち上がる。底面の範囲は狭く、断面形は擂鉢形となる。遺構内堆積土は３層に分けられた。ℓ１・３はＬⅢａを由来とする同質の黒褐色土で、明黄褐色土塊や炭化物を含む。ℓ２は黒色土で、炭化物を多く含んでいる。遺構内堆積土の状況から、人為によって短期間に埋め立てられたものと判断している。

遺物は中世陶器１点、羽口１点、石臼１点が出土しており、３点すべてを図示した。図49－２は古瀬戸後期様式の祖母懐茶壺である。体部下半の小片で器壁は薄く、外面には鉄釉が施される。図49－４は羽口である。先端に溶着滓が認められないことから、未使用品や木呂羽口と考えられる。図49－８は砂岩製の石臼で、上臼の破片である。体部には挽き手を差し込む小穴が認められ、下側部には、約1.5cmの間隔で放射状の線状痕が認められる。

本遺構は平面形が不整円形の土坑である。３号土塁出入口と５号平場内の建物群をつなぐ導線上に位置していることから、中世城館が機能を停止した際の廃棄坑の可能性がある。年代は遺構内から出土した遺物の特徴から、15世紀代の所産と考えられる。　（佐　藤）

42号土坑　ＳＫ42（図46）

本遺構は、５号平場の北東端部、Ｚ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、１Ｂ号門跡の掘形底面の精査中に、円形の褐灰色土の範囲として確認した。１Ｂ号門跡と重複し、本遺構が古い。

本遺構の平面形は円形であり、規模は長径82cm、検出面からの深さは最大42cmである。周壁はいずれも、ほぼ垂直に立ち上がる。底面はＬⅣ上面で、小礫が露出していることから凹凸が著しい。遺構内堆積土は２層に分けられた。いずれも褐灰色土で、炭化物やＬⅢａ塊を含むことから人為によって埋め立てられたものと判断している。遺物は出土していない。

本遺構は小型で平面形が円形の土坑である。形態は１号門跡の柱穴に類似するが、柱痕などは確認できなかった。年代は１Ｂ号門跡より古いことから、15世紀以前の所産と考えられる。（佐　藤）

47号土坑　ＳＫ47（図46）

本遺構は、５号平場の北東端部、Ｚ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、５号平場の整地土を除去した後の精査で長方形の褐灰色土の範囲として確認した。本遺構は５号平場の整地より

古い。１号門跡、２号道跡や４号土塁が隣接して位置する。

本遺構の平面形は長方形であり、規模は長軸1.4m、短軸97cm、検出面からの深さは最大42cmである。周壁はいずれも急に立ち上がる。底面は南側に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は２層に分けられた。ℓ１は黒褐色土で炭化物、ＬⅢａ・ｂ塊を含む。ℓ２は褐灰色土で、灰色粘土塊を含む。いずれも堆積土の特徴から、人為によって埋め立てられたものと判断している。遺物は出土していない。

本遺構は平面形が長方形の土坑である。詳細な性格は不明だが、５号平場の整地以前に築かれ、斜面際に等間隔に並ぶ土坑群のひとつと考えている。年代は、等間隔に並ぶ土坑から出土した土器の特徴から、15世紀の所産と考えられる。（佐　藤）

51号土坑　ＳＫ51（図46）

本遺構は、５号平場の斜面に近い北端部、Ｖ・W10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、５号平場の整地土を除去した後の精査で、不整な楕円形の褐灰色土の範囲として確認した。５号平場の整地より古い。本遺構の北西側には、52号土坑が隣接して位置する。

本遺構の平面形は不整な楕円形であり、規模は長軸1.22m、短軸1.18m、検出面からの深さは最大28cmである。北側は段状になり、周壁はいずれも緩やかに立ち上がる。底面は中央に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は２層に分けられた。ℓ１は褐灰色土で炭化物、ＬⅢａ塊を含む。ℓ２は黒褐色土で、焼土や炭化物を多量に含む。堆積土の特徴から、人為によって埋め立てられたものと判断している。本遺構からは、弥生土器１点、土師器が12点出土しているが、いずれも小片のため、図示していない。

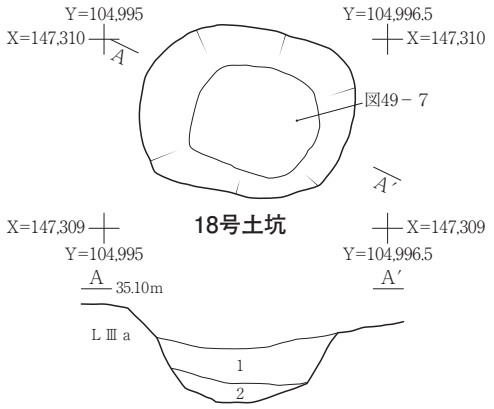
本遺構は平面形が不整な楕円形の土坑である。詳細な性格は不明だが、５号平場の整地以前に築かれ、斜面際に等間隔に並ぶ土坑群のひとつと考えている。年代は、等間隔に並ぶ土坑から出土した土器の特徴から、15世紀の所産と考えられる。（佐　藤）

52号土坑　ＳＫ52（図46）

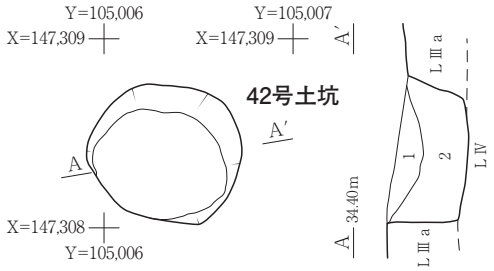
本遺構は、５号平場の斜面に近い北端部、Ｖ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、５号平場の整地土を除去した後の精査で、楕円形の褐灰色土の範囲として確認した。５号平場の整地より古い。本遺構の南東側には、51号土坑が隣接して位置する。

本遺構の平面形は楕円形であり、規模は長軸80cm、短軸72cm、検出面からの深さは最大25cmである。周壁はいずれも緩やかに立ち上がる。底面は、丘陵斜面側である北側に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は２層に分けられた。いずれも褐灰色粘質土で、ＬⅢａ塊や炭化物を含んでいることから、人為によって埋め立てられたものと判断している。遺物は出土していない。

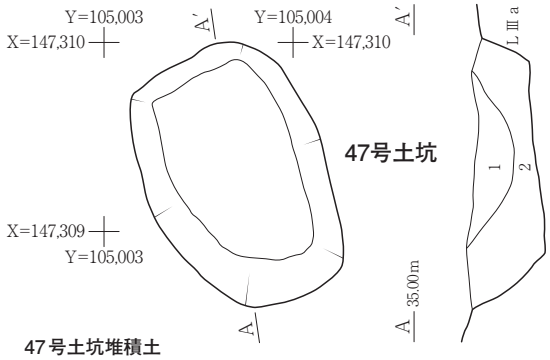
本遺構は平面形が楕円形の土坑である。詳細な性格は不明だが、５号平場の整地以前に築かれ、斜面際に等間隔に並ぶ土坑群のひとつと考えている。年代は、等間隔に並ぶ土坑から出土した土器



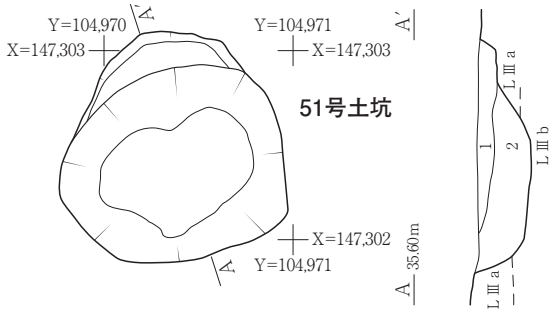
18号土坑堆積土
1　褐灰色土　10YR4/1（ＬⅡを基調とし、ＬⅢａ塊・炭化物含む）
2　黒褐色土　10YR3/1（炭化物微量含む）



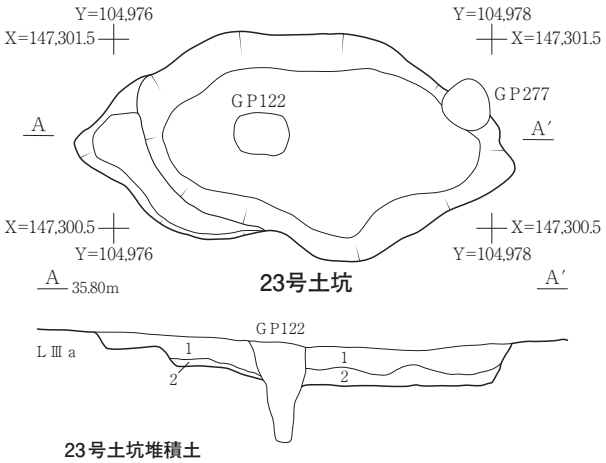
42号土坑堆積土
1　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅢａ塊・炭化物含む。しまり有り）
2　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅢａ塊・炭化物含む。しまり弱い）



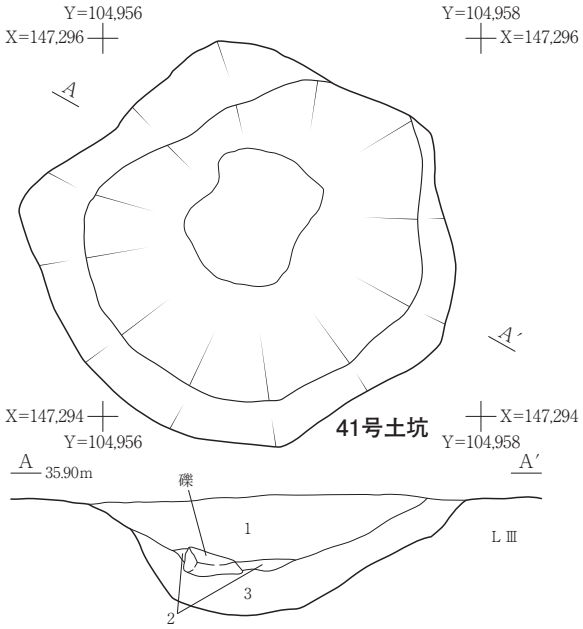
47号土坑堆積土
1　黒褐色土　7.5YR3/1（ＬⅢａ・ｂ塊、焼土・炭化物含む）
2　褐灰色土　7.5YR4/1（灰色粘土塊・炭化物微量含む）



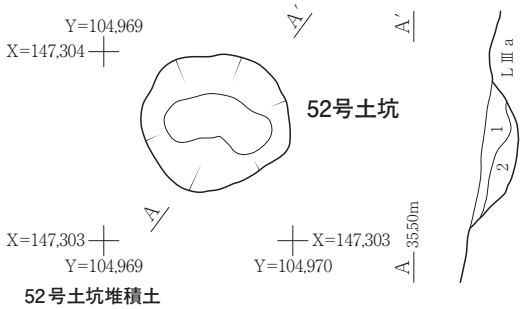
51号土坑堆積土
1　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅢａ塊・炭化物含む）
2　黒褐色土　7.5YR3/1（焼土・炭化物多量含む）



23号土坑堆積土
1　灰褐色土　7.5YR5/2
（ＬⅢを基調とし、黒褐色土塊・焼土・炭化物多量含む）
2　黒褐色土　7.5YR3/1（ＬⅢｂ塊・焼土・炭化物多量含む）



41号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2
（黒色土塊と明黄褐色土塊40％・炭化物粒５％含む。粘性・しまりやや有り）
2　黒色土　10YR2/1（黒色土・炭化物粒50％含む。粘性・しまりやや有り）
3　黒褐色土　10YR3/2（炭化物粒３～５％含む。粘性・しまりやや有り）



52号土坑堆積土
1　褐灰色粘質土　7.5YR4/1（ＬⅢａ塊・炭化物含む）
2　褐灰色粘質土　7.5YR4/1（ＬⅢａ塊・炭化物微量含む）

0　1m
(1/40)

図46　18・23・41・42・47・51・52号土坑

の特徴から、15世紀の所産と考えられる。（佐　藤）

53号土坑　ＳＫ53（図47・49、写真34・62）

本遺構は、５号平場の斜面に近い北端部、Ｖ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、５号平場の整地土を除去した後の精査で、不整な楕円形の褐灰色土の範囲として確認した。５号平場の整地より古い。本遺構の周辺には52・59号土坑が近接して位置する。

本遺構の平面形は楕円形であり、規模は長軸1.42m、短軸1.03m、検出面からの深さは最大30cmである。周壁は北・南壁は急に、東・西壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦となる。遺構内堆積土は３層に分けられた。ℓ１はＬⅢｂを由来とする灰黄褐色土で、黒褐色土を含む。ℓ２・３は褐灰色土でＬⅢｂ塊を含む。いずれも堆積土の特徴から、人為による埋め立てと判断した。本遺構からは土師器が２点、石斧が１点出土しており、石斧１点を図示した。図49－９は緑泥片岩製の磨製石斧である。磨きが弱く、成形時の剥離が明瞭に認められる。

本遺構は平面形が不整な楕円形の土坑である。詳細な性格は不明だが、５号平場の整地以前に築かれ、斜面際に等間隔に並ぶ土坑群のひとつと考えている。年代は、等間隔に並ぶ土坑から出土した土器の特徴から、15世紀の所産と考えられる。（佐　藤）

54号土坑　ＳＫ54（図47）

本遺構は、５号平場の斜面に近い北端部、Ｖ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａ・ｂで、５号平場の整地土を除去した後の精査で、不整な方形の褐灰色土の範囲として確認した。５号平場の整地より古い。本遺構の北西側には３号土塁が、東側には59号土坑が隣接して位置する。

本遺構の平面形は不整な方形であり、規模は直径1.16m、検出面からの深さは最大42cmである。周壁はいずれも緩やかに立ち上がり、底面の範囲は狭く、断面形は擂鉢状となる。遺構内堆積土は３層に分けられた。ℓ１・３は褐灰色土で、ＬⅢｂ塊を含む。ℓ２はＬⅢｂを由来とし、褐灰色土塊を含む。いずれも堆積土の特徴から、人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は平面形が不整な方形の土坑である。詳細な性格は不明だが、５号平場の整地以前に築かれ、斜面際に等間隔に並ぶ土坑群のひとつと考えている。年代は、等間隔に並ぶ土坑から出土した土器の特徴から、15世紀の所産と考えられる。（佐　藤）

55号土坑　ＳＫ55（図47・49、写真35・62）

本遺構は、５号平場の北西側、Ｕ・Ｖ11グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、長方形の褐灰色土の範囲として確認した。本遺構と重複する遺構はないが、東壁の中央部は木根による撹乱で破壊されている。本遺構の西側6.8mには３号土塁の出入口が位置している。

本遺構の平面形は整った長方形を呈する。規模は長軸1.35m、短軸74cm、検出面からの深さは最

大29cmである。周壁はいずれも垂直に立ち上がる。底面は平坦となる。遺構内堆積土は２層に分けられた。ℓ１・２はＬⅡを由来とする褐灰色土で、焼土粒や炭化物、黒褐色土塊を含む。いずれも堆積土の特徴から、人為による埋め立てと判断した。

本遺構からは縄文土器１点、弥生土器１点、土師器４点、鉄製品７点が出土しており、鉄製品２点を図示した。図49－５は不明鉄製品である。上端部は欠損している。下端部の断面形は長方形となり、上部端部は板状となる。図49－６は鉄鍋の底部の破片と考えられる。

本遺構は平面形が整った長方形の土坑である。鉄製品の出土の多さが特徴といえる。遺構の性格については、平面形や出土遺物から墓坑の可能性も考慮したが、骨片などは認められないことから不明である。年代は、出土遺物から、中世城館と同様の15世紀の所産と考えられる。　（佐　藤）

56号土坑　ＳＫ56（図47）

本遺構は、５号平場北西端の縁辺部、U10グリッドに位置する。検出面はＬⅢｂで、３号土塁、５号平場の整地土を除去した後の精査で、楕円形の褐灰色土の範囲として確認した。本遺構は３号土塁、５号平場の整地より古い。本遺構の北西には57・58号土坑が近接して位置する。

本遺構の平面形は楕円形であり、規模は長軸1.04m、短軸92cm、検出面からの深さは最大55cmである。周壁はいずれも急に立ち上がり、底面は平坦となる。覆土は２層に分けられた。ℓ１は褐灰色土で焼土粒を微量含む。ℓ２は黒褐色土で焼土粒やＬⅢａ塊を微量含む。いずれも堆積土に焼土や土塊を含むことから、人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

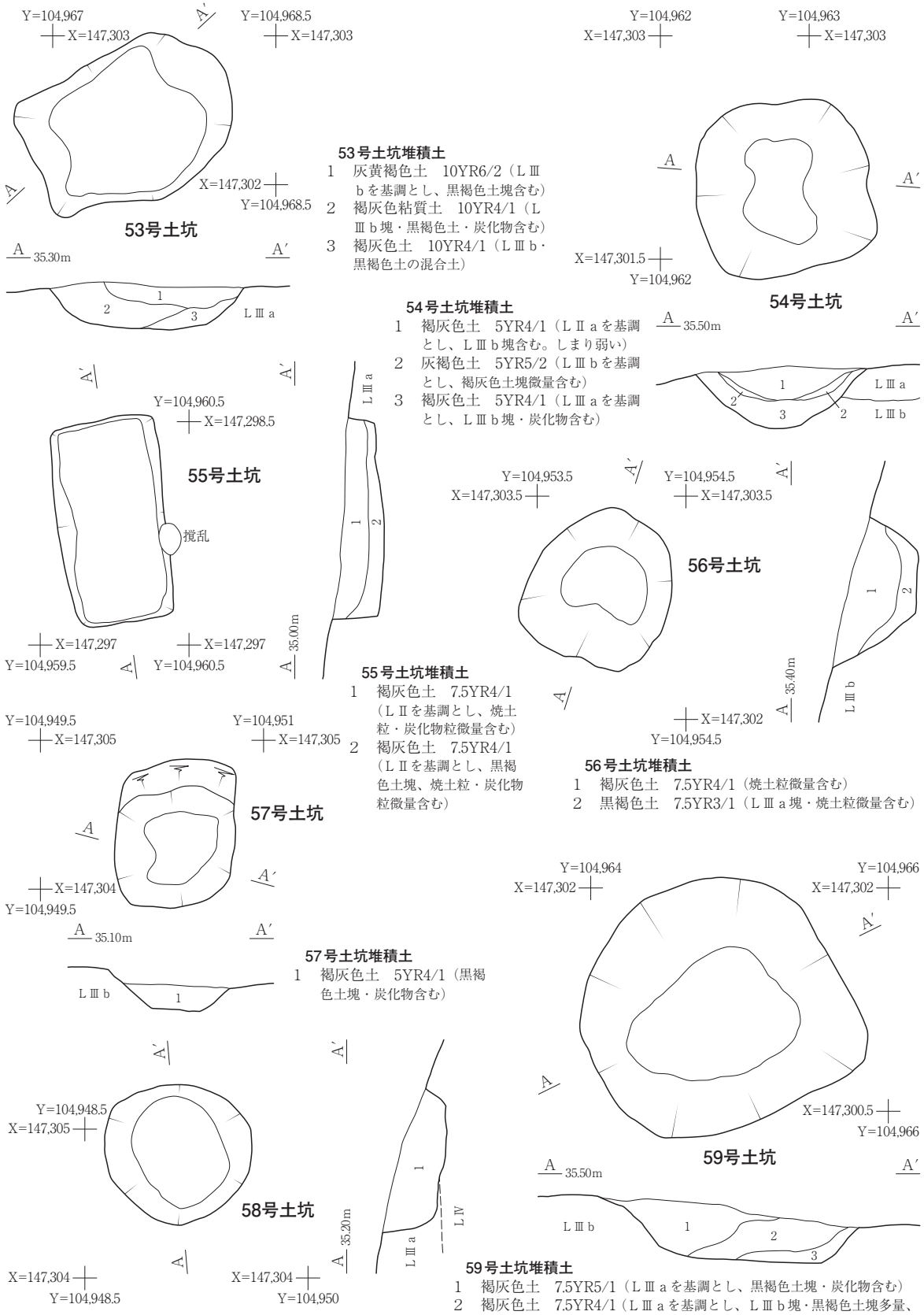
本遺構は平面形が楕円形の土坑である。詳細な性格は不明だが、５号平場の整地以前に築かれ、斜面際に等間隔に並ぶ土坑群のひとつと考えている。年代は、等間隔に並ぶ土坑から出土した土器の特徴から、15世紀の所産と考えられる。　（佐　藤）

57号土坑　ＳＫ57（図47）

本遺構は、５号平場北西端の縁辺部、U10グリッドに位置する。検出面はＬⅢｂで、３号土塁、５号平場の整地土を除去した後の精査で、長方形の褐灰色土の範囲として確認した。本遺構は３号土塁、５号平場の整地より古い。本遺構の周辺には56・58号土坑が位置する。

本遺構の平面形は長方形であり、規模は長軸１m、短軸81cm、検出面からの深さは最大19cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、北側斜面の周壁は特に緩やかとなる。底面は平坦となる。覆土は褐灰色土の単層で、炭化物や黒褐色土塊を含む。堆積土に炭化物や土塊を含むことから、人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は平面形が長方形の土坑である。詳細な性格は不明だが、５号平場の整地以前に築かれ、斜面際に等間隔に並ぶ土坑群のひとつと考えている。年代は、等間隔に並ぶ土坑から出土した土器の特徴から、15世紀の所産と考えられる。　（佐　藤）



53号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10YR6/2（ＬⅢｂを基調とし、黒褐色土塊含む）
2　褐灰色粘質土　10YR4/1（ＬⅢｂ塊・黒褐色土・炭化物含む）
3　褐灰色土　10YR4/1（ＬⅢｂ・黒褐色土の混合土）

54号土坑堆積土
1　褐灰色土　5YR4/1（ＬⅡａを基調とし、ＬⅢｂ塊含む。しまり弱い）
2　灰褐色土　5YR5/2（ＬⅢｂを基調とし、褐灰色土塊微量含む）
3　褐灰色土　5YR4/1（ＬⅢａを基調とし、ＬⅢｂ塊・炭化物含む）

55号土坑堆積土
1　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅡを基調とし、焼土粒・炭化物粒微量含む）
2　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅡを基調とし、黒褐色土塊、焼土粒・炭化物粒微量含む）

56号土坑堆積土
1　褐灰色土　7.5YR4/1（焼土粒微量含む）
2　黒褐色土　7.5YR3/1（ＬⅢａ塊・焼土粒微量含む）

57号土坑堆積土
1　褐灰色土　5YR4/1（黒褐色土塊・炭化物含む）

58号土坑堆積土
1　にぶい橙色土　7.5YR7/4（ＬⅣ塊・焼土粒・炭化物含む）

59号土坑堆積土
1　褐灰色土　7.5YR5/1（ＬⅢａを基調とし、黒褐色土塊・炭化物含む）
2　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅢａを基調とし、ＬⅢｂ塊・黒褐色土塊多量、炭化物微量含む）
3　黒褐色土　7.5YR3/1（ＬⅡ・ＬⅢａ塊・炭化物粒含む）

図47　53～59号土坑

0　1m（1/40）

58号土坑　ＳＫ58（図47）

本遺構は、５号平場北西端の縁辺部、Ｔ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、３号土塁、５号平場の整地土を除去した後の精査で、円形のにぶい橙色土の範囲として確認した。本遺構は３号土塁、５号平場の整地より古い。本遺構の東側には57号土坑が隣接して位置する。

本遺構の平面形は円形であり、規模は直径97㎝、検出面からの深さは最大36㎝である。周壁は５号平場側は急に、斜面側は緩やかに立ち上がる。底面はＬⅣに含まれる小礫が露頭し、凹凸がある。覆土はにぶい橙色土の単層で、ＬⅣ塊、焼土粒、炭化物を含むことから、人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は平面形が円形の土坑である。詳細な性格は不明だが、５号平場の整地以前に築かれ、斜面際に等間隔に並ぶ土坑群のひとつと考えている。年代は、等間隔に並ぶ土坑から出土した土器の特徴から、15世紀の所産と考えられる。（佐　藤）

59号土坑　ＳＫ59（図47・49、写真35・62）

本遺構は、５号平場の斜面に近い北端部、Ｖ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢｂで、５号平場の整地土を除去した後の精査で、不整な楕円形の褐灰色土の範囲として確認した。５号平場の整地より古い。本遺構の西側には54号土坑が隣接して位置する。

本遺構の平面形は不整な楕円形であり、規模は長軸1.72m、短軸1.68m、検出面からの深さは最大37㎝である。周壁はいずれも緩やかに立ち上がる。底面はＬⅣ上面の小礫が露出しており、凹凸が著しい。遺構内堆積土は３層に分けられた。ℓ１・２はＬⅢａを由来とする褐灰色土で、ＬⅢｂ塊や黒褐色土塊を含む。ℓ３は黒褐色土で、ＬⅡ・Ⅲａ塊を含む。いずれも堆積土の特徴から、人為による埋め立てと判断した。

本遺構からは中世陶器１点、弥生土器８点、石器１点が出土しており、中世陶器１点を図示した。図49－１は古瀬戸の瓶子の体部片である。外面には灰釉を施し、１条の平行沈線がめぐる。

本遺構は平面形が不整な楕円形の土坑である。詳細な性格は不明だが、５号平場の整地以前に築かれ、斜面際に等間隔に並ぶ土坑群のひとつと考えている。年代は、出土した古瀬戸の瓶子の特徴から、15世紀の所産と考えられる。（佐　藤）

60号土坑　ＳＫ60（図48）

本遺構は、５号平場の斜面に近い北端部、Ｘ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、５号平場の整地土を除去した後の精査で、不整な楕円形の灰褐色土の範囲として確認した。５号平場の整地より古い。本遺構の北西側3.5mには８号焼土遺構が、南西側２mには７号性格不明遺構が近接して位置する。

本遺構の平面形は不整な楕円形であり、規模は長軸1.59m、短軸1.31m、検出面からの深さは最

大38㎝である。周壁はいずれも急に立ち上がり、底面は中央に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は３層に分けられた。ℓ１・３はＬⅢａを由来とした灰褐色土で、黒褐色土塊を含む。ℓ２は黒色土で、ＬⅢａ粒を微量含む。いずれも堆積土の特徴から、人為による埋め立てと判断した。本遺構からは弥生土器1点、土師器２点、石器４点が出土しているが、いずれも小片のため、図示していない。

本遺構は平面形が不整な楕円形の土坑である。詳細な性格は不明だが、５号平場の整地以前に築かれ、斜面際に等間隔に並ぶ土坑群のひとつと考えている。年代は、等間隔に並ぶ土坑から出土した土器の特徴から、15世紀の所産と考えられる。（佐　藤）

61号土坑　ＳＫ61（図48）

本遺構は、５号平場の斜面に近い北端部、Ｙ９グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、５号平場の整地土を除去した後の精査で、不整な円形の灰褐色土の範囲として確認した。５号平場の整地より古い。本遺構の周辺には18・62・68号土坑が、北東側には４号土塁が隣接して位置する。

本遺構の平面形は不整な円形であり、規模は直径1.14m、検出面からの深さは最大26㎝である。周壁はいずれも急に立ち上がり、底面は中央に向かって傾斜している。遺構内堆積土は２層に分けられた。ℓ１・２ともにＬⅢａを由来とし、ＬⅡ・Ⅲｂ塊や炭化物・焼土を含んでいることから、短期間の人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は平面形が不整な円形の土坑である。詳細な性格は不明だが、５号平場の整地以前に築かれ、斜面際に等間隔に並ぶ土坑群のひとつと考えている。年代は、等間隔に並ぶ土坑から出土した土器の特徴から、15世紀の所産と考えられる。（佐　藤）

62号土坑　ＳＫ62（図48、写真35）

本遺構は、５号平場の斜面に近い北端部、Ｙ９・10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、５号平場の整地土を除去した後の精査で、不整な円形の褐灰色土の範囲として確認した。５号平場の整地より古い。本遺構の東側には18・61・68号土坑や４号土塁が隣接して位置する。

本遺構の平面形は不整な円形であり、規模は直径1.34m、検出面からの深さは最大51㎝である。周壁はいずれも緩やかに立ち上がり、底面の範囲は狭くなり、断面形は擂鉢形となる。遺構内堆積土は４層に分けられた。いずれの堆積土にもＬⅢａ塊や褐灰色土塊を含むことから、人為による埋め立てと判断した。本遺構からは弥生土器３点、土師器２点、粘土塊が出土している。粘土塊はℓ２を主体に200ｇが出土している。いずれも小片のため図示していない。

本遺構は平面形が不整な円形の土坑である。詳細な性格は不明だが、５号平場の整地以前に築かれ、斜面際に等間隔に並ぶ土坑群のひとつと考えている。年代は、等間隔に並ぶ土坑から出土した土器の特徴から、15世紀の所産と考えられる。（佐　藤）

66号土坑　ＳＫ66（図48）

本遺構は、５号平場の斜面に近い北東端部、Ｚ10グリッドに位置する。検出面は、遺構の西側がＬⅢａで、東側が５号平場の整地である。５号平場の整地土を除去中に、不整な方形の褐灰色土の範囲として確認した。本遺構の南側には69号土坑が、西側には１号門跡が隣接して位置する。

本遺構の平面形は不整な方形であり、規模は長軸1.43m、短軸1.09m、検出面からの深さは最大41cmである。周壁はいずれも急に立ち上がり、底面は平坦となる。遺構内堆積土は褐灰色土の単層で炭化物を含むことから、人為による埋め立てと判断した。本遺構からは弥生土器５点、土師器８点が出土している。いずれも小片のため図示していない。

本遺構は平面形が不整な方形の土坑である。遺構の性格について、５号平場の整地中に築かれていることから、平場の造成に関連した遺構の可能性がある。また、斜面際に等間隔に並ぶ土坑群のひとつと捉えられる。年代は、５号平場の整地土から出土した土器の特徴から、15世紀の所産と考えられる。（佐　藤）

68号土坑　ＳＫ68（図48）

本遺構は、５号平場の斜面に近い北東部、Ｙ９・10グリッドに位置する。検出面は、５号平場の整地上面である。５号平場の整地土を除去中に、不整な楕円形の黒褐色土の範囲として確認した。４号土塁と５号平場の整地より古い。本遺構の南西側には18・20・61・62号土坑が、北東側には４号土塁が隣接して位置する。

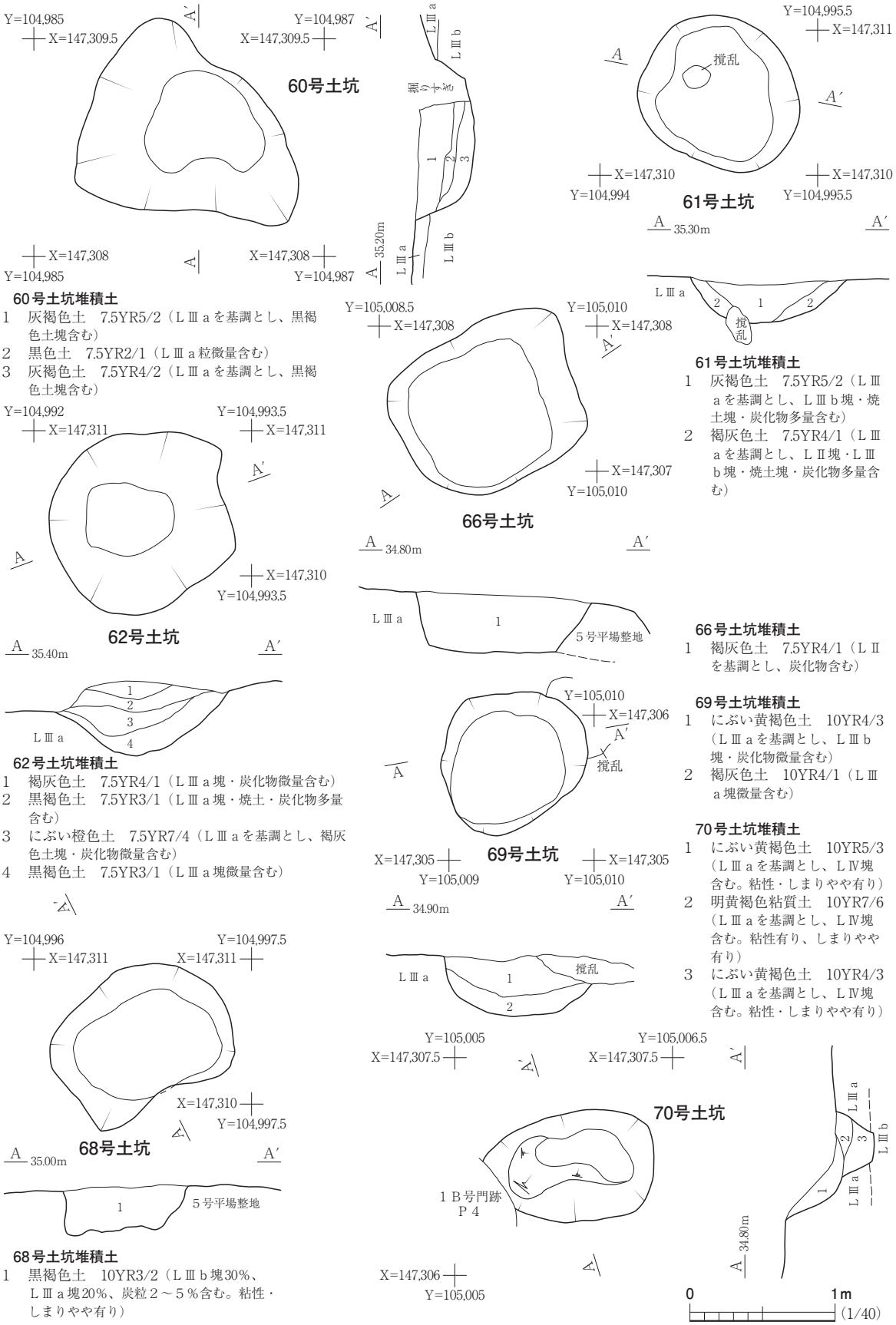
本遺構の平面形は不整な楕円形であり、規模は長軸1.21m、短軸94cm、検出面からの深さは最大30cmである。周壁は、南西壁が垂直に、それ以外の壁は急に立ち上がる。底面は凹凸が顕著となる。遺構内堆積土は黒褐色土の単層で、ＬⅢａ・ｂ塊を含むことから、人為による埋め立てと判断した。

本遺構は平面形が不整な楕円形の土坑である。遺構の性格について、５号平場の整地中に築かれていることから、平場の造成に関連した遺構の可能性がある。また、斜面際に等間隔に並ぶ土坑群のひとつと捉えられる。年代は、５号平場の整地土から出土した土器の特徴から、15世紀の所産と考えられる。（佐　藤）

69号土坑　ＳＫ69（図48）

本遺構は、５号平場の斜面に近い北東端部、Ｚ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、５号平場の整地土を除去した後の精査で、不整な円形のにぶい黄橙色土の範囲として確認した。５号平場の整地より古い。本遺構の北側には66号土坑が、北西側には１号門跡が隣接して位置する。

本遺構の平面形は不整な円形であり、規模は直径1.06m、検出面からの深さは最大37cmである。周壁はいずれも急に立ち上がり、底面は平坦となる。遺構内堆積土は２層に分けられた。ℓ１はＬ



60号土坑堆積土

1　灰褐色土　7.5YR5/2（ＬⅢａを基調とし、黒褐色土塊含む）
2　黒色土　7.5YR2/1（ＬⅢａ粒微量含む）
3　灰褐色土　7.5YR4/2（ＬⅢａを基調とし、黒褐色土塊含む）

61号土坑堆積土

1　灰褐色土　7.5YR5/2（ＬⅢａを基調とし、ＬⅢｂ塊・焼土塊・炭化物多量含む）
2　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅢａを基調とし、ＬⅡ塊・ＬⅢｂ塊・焼土塊・炭化物多量含む）

66号土坑堆積土

1　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅡを基調とし、炭化物含む）

69号土坑堆積土

1　にぶい黄褐色土　10YR4/3（ＬⅢａを基調とし、ＬⅢｂ塊・炭化物微量含む）
2　褐灰色土　10YR4/1（ＬⅢａ塊微量含む）

70号土坑堆積土

1　にぶい黄褐色土　10YR5/3（ＬⅢａを基調とし、ＬⅣ塊含む。粘性・しまりやや有り）
2　明黄褐色粘質土　10YR7/6（ＬⅢａを基調とし、ＬⅣ塊含む。粘性有り、しまりやや有り）
3　にぶい黄褐色土　10YR4/3（ＬⅢａを基調とし、ＬⅣ塊含む。粘性・しまりやや有り）

62号土坑堆積土

1　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅢａ塊・炭化物微量含む）
2　黒褐色土　7.5YR3/1（ＬⅢａ塊・焼土・炭化物多量含む）
3　にぶい橙色土　7.5YR7/4（ＬⅢａを基調とし、褐灰色土塊・炭化物微量含む）
4　黒褐色土　7.5YR3/1（ＬⅢａ塊微量含む）

68号土坑堆積土

1　黒褐色土　10YR3/2（ＬⅢｂ塊30%、ＬⅢａ塊20%、炭粒２～５%含む。粘性・しまりやや有り）

図48　60～62・66・68～70号土坑

Ⅲａを由来とするにぶい黄褐色土でＬⅢｂ塊、炭化物を含む。ℓ２は褐灰色土でＬⅢａ塊を含む。いずれも堆積土の特徴から人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は平面形が不整な円形の土坑である。詳細な性格は不明だが、５号平場の整地以前に築かれ、斜面際に等間隔に並ぶ土坑群のひとつと考えている。年代は、等間隔に並ぶ土坑から出土した土器の特徴から、15世紀の所産と考えられる。（佐　藤）

70号土坑　ＳＫ70（図48）

本遺構は、５号平場の斜面に近い北東端部、Ｚ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、１Ｂ号門跡掘形の底面を精査中に、不整な楕円形のにぶい黄褐色土の範囲として確認した。５号平場の整地、１Ｂ号門跡より古い。本遺構の北側には42号土坑が位置する。

本遺構の平面形は不整な楕円形であり、規模は長軸が遺存値で1.17m、短軸は75cm、検出面からの深さは最大61cmである。周壁はいずれも急に立ち上がり、西壁は段状になる。底面の範囲は狭く、平坦となる。遺構内堆積土は３層に分けられた。ℓ１～３はＬⅢａを由来とする土で、ＬⅣ塊を含むことから、人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は平面形が不整な楕円形の土坑である。詳細な性格は不明だが、５号平場の整地以前に築かれ、斜面際に等間隔に並ぶ土坑群のひとつと考えている。年代は、等間隔に並ぶ土坑から出土した土器の特徴から、15世紀の所産と考えられる。（佐　藤）

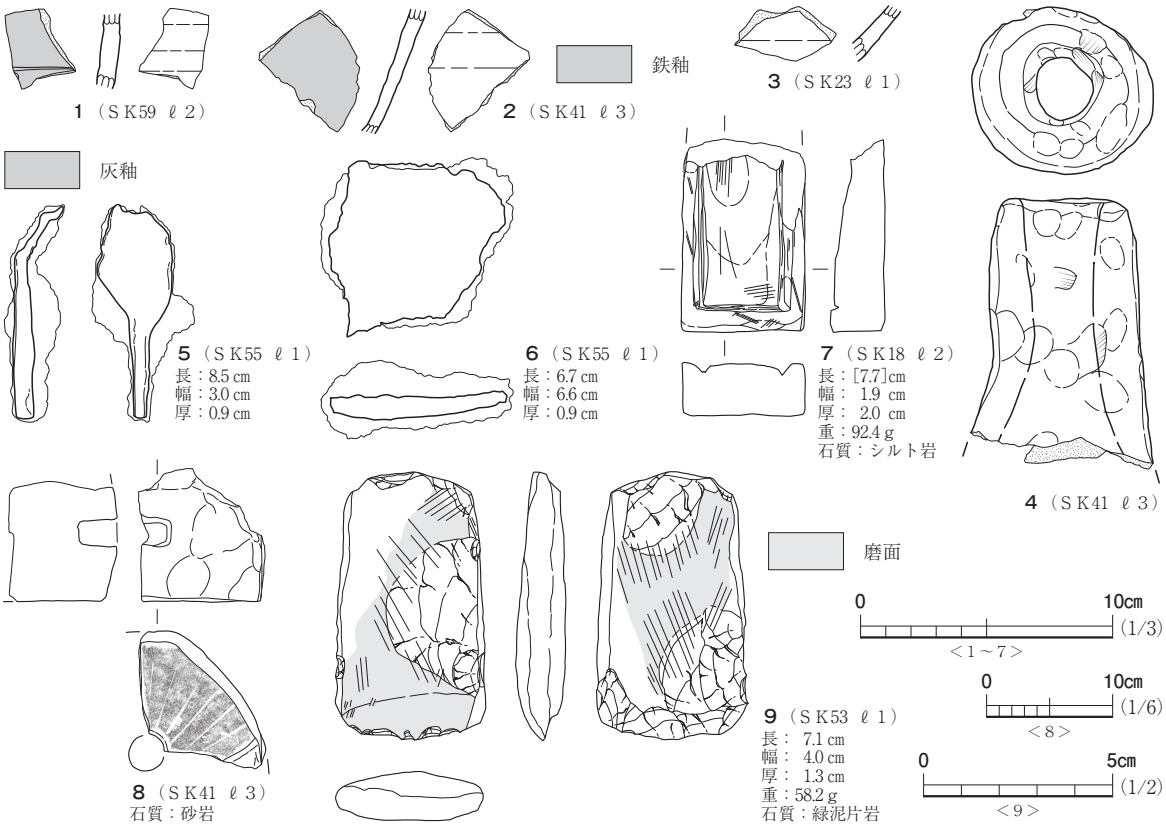


図49　18・23・41・53・55・59号土坑出土遺物

８号焼土遺構　ＳＧ08（図50、写真35）

本遺構は５号平場の北端部、丘陵斜面の上位、Ｘ９グリッドに位置する。検出面はＬⅣで、５号土塁・５号平場の整地除去後の検出時に焼土や炭化物、白色粘土の分布する不整形の範囲として確認した。５号土塁と５号平場の整地と重複し、本遺構が古い。

平面形は不整円形で、規模は直径69～75cmを測る。検出面からの深さは最大で50cmとなり、周壁は南側が急に立ち上がり、北側は垂直に近い立ち上がりとなる。遺構上面の中央付近には、焼土化した褐灰色粘土が遺存していた。規模は30～35cmで、厚さは５～10cmである。北側の周壁の上位、堆積土中位や遺構に隣接した北西側の斜面付近が顕著に焼土化し、厚さは周壁で２cm、堆積土中位で19cmとなる。堆積土は４層に分けられた。ℓ１は褐灰色粘質土で、砂礫や炭化物を多量含む。ℓ２は黒褐色の炭層である。ℓ３は橙色砂質土で被熱した砂礫を含む。ℓ４は褐灰色土で炭化物を多量含む。堆積土の特徴から、いずれも人為による堆積と考えた。

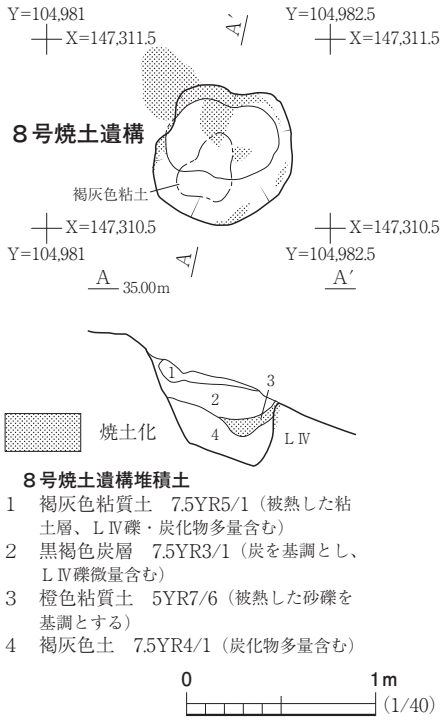


図50　８号焼土遺構

本遺構からは弥生土器４点、土師器２点、焼土塊・粘土塊1,460ｇが出土しているが、いずれも小片のため、図示していない。遺構内から出土した炭化物１点に対して、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行い、樹種はモミ属と推測された。２σ暦年範囲は13世紀代との結果を得た。

本遺構は遺構の周辺や堆積土中から被熱した粘土塊が多く認められることや、遺構上面に粘土を貼り付けていることから、粘土成形による上部構造があったと推測される。また、遺構内の周壁が焼土化し、堆積土には炭層が認められる。この特徴は古代製鉄炉の基礎構造に類似する。しかし、遺構内や周辺から鉄滓や鍛造剥片などの出土は認められない。本遺構の性格は不明ながら、粘土による上部構造と防湿を意識した基礎構造を持つ。年代は遺構の重複関係から、５号平場構築以前の所産と考えられる。

（佐　藤）

５号性格不明遺構　ＳＸ05（図51、写真63）

本遺構は５号平場の北東側、Ｘ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。灰黄褐色土の範囲として確認した。本遺構は、他遺構との重複関係が認められ、６号性格不明遺構より新しく、８・９号掘立柱建物跡、ＧＰ107・108・110・113・123・129・132・331より古い。本遺構の北側には、６・７号性格不明遺構が隣接して位置する。中央部は撹乱により破壊されている。

本遺構の平面形は隅丸方形を基調としている。規模は北東壁で2.9ｍ、南東壁で2.1ｍ、底面までの深さは20cmを測る。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状となる。底面はほぼ平坦とな

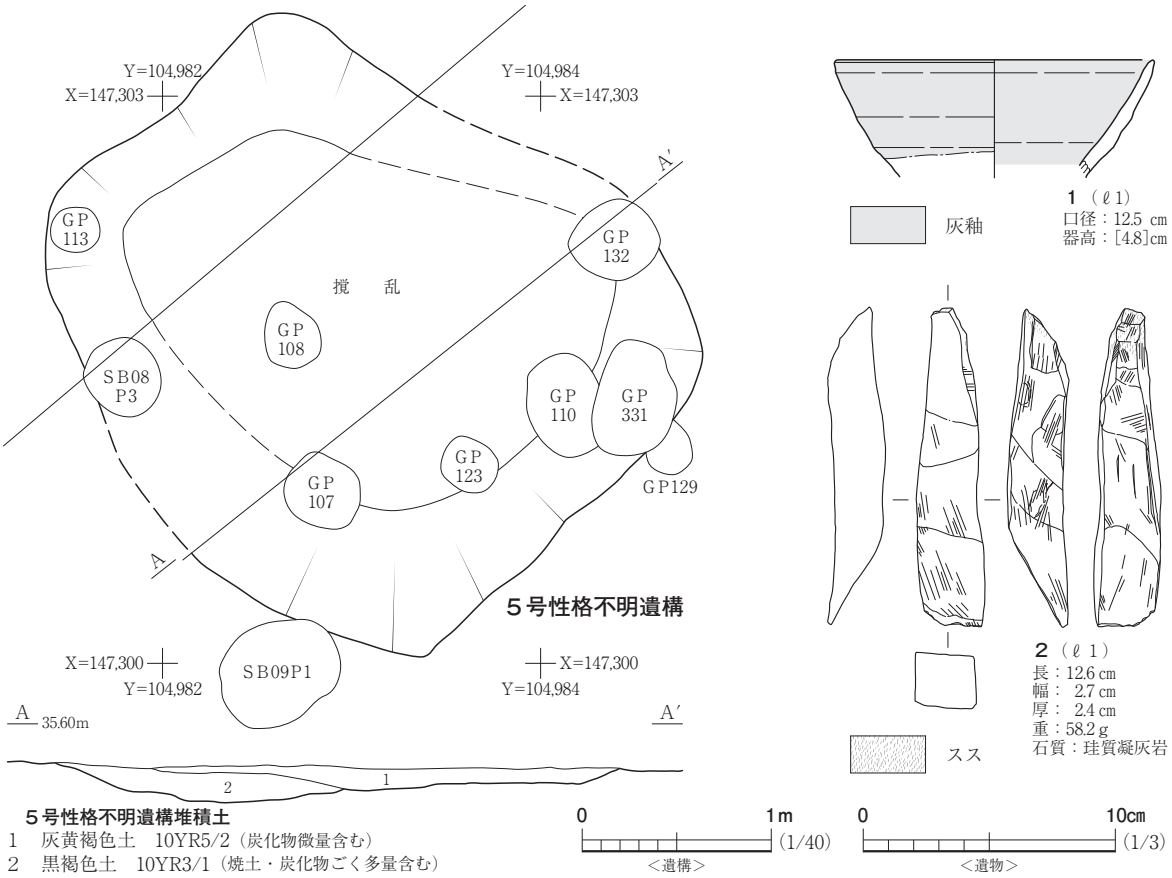


図51　５号性格不明遺構、出土遺物

る。堆積土は２層に分けられた。ℓ１・２は堆積土中に炭化物・焼土を含んでいることから人為による埋め立てと判断している。

本遺構からは中世陶器１点、石製品２点が出土し、２点を図示した。図51－１は古瀬戸後期様式の平碗である。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部内面と外面体部上半には灰釉が施されている。２は珪質凝灰岩製の砥石である。４面を砥面として使用し、上端部はススが付着している。

本遺構は平面形が隅丸方形で、浅く掘り込まれた遺構である。５号平場の整地範囲や５号土塁に近接することから、中世城館に関連した土塁の構築や整地のための土取り穴と考えられる。年代は出土した遺物の特徴から、15世紀前半頃の所産と考えられる。　（佐　藤）

６号性格不明遺構　ＳＸ06（図52、写真36・63）

本遺構は５号平場の北東側、X10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。灰褐色土の範囲として確認した。本遺構は、他遺構との重複関係が認められ、７号性格不明遺構より新しく、８・９号掘立柱建物跡、５号性格不明遺構、ＧＰ134・139より古い。本遺構の北側には７号性格不明遺構が、南側には５号性格不明遺構が隣接して位置する。南東部の大半は撹乱により破壊されている。

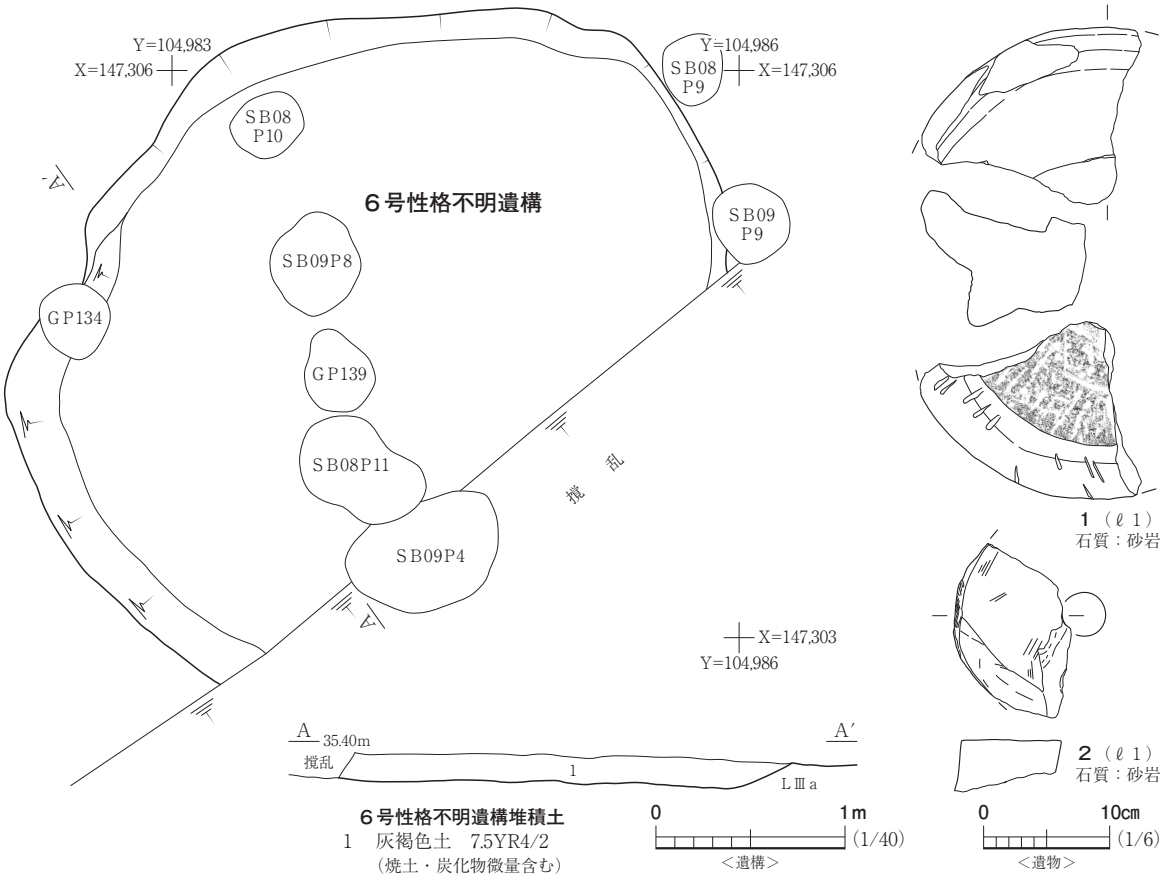


図52　６号性格不明遺構、出土遺物

本遺構の平面形は円形になると推測される。規模は直径４ｍ、底面までの深さは14㎝を測る。周壁は極めて緩やかに立ち上がり、断面形は皿状となる。底面はほぼ平坦となる。堆積土は灰褐色土の単層で炭化物や焼土を含むことから、人為による埋め立てと判断している。

本遺構からは弥生土器２点、石製品３点が出土し、２点を図示した。図52－１・２は砂岩製の石臼である。１は茶臼の下臼で、外面には鑿の工具痕が認められる。２は上臼の破片である。表面には線状痕が認められる。

本遺構は平面形が円形で、浅く掘り込まれた遺構である。５号平場の整地範囲や５号土塁に近接することから、中世城館に関連した土塁や整地構築のための土取り穴と考えられる。年代は５号性格不明遺構と同様の特徴を有することから、15世紀代の所産と考えられる。　（佐　藤）

７号性格不明遺構　ＳＸ07（図53）

本遺構は５号平場の北東側、Ｗ・Ｘ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。灰褐色土の不整形の範囲として確認した。本遺構は、他遺構との重複関係が認められ、６号性格不明遺構、ＧＰ161より古い。本遺構の北西側１ｍには５号土塁が、南側には５・６号性格不明遺構が隣接して位置する。

本遺構の平面形は不整形である。中央や東隅には土坑状の掘り込みが確認できる。規模は長さ

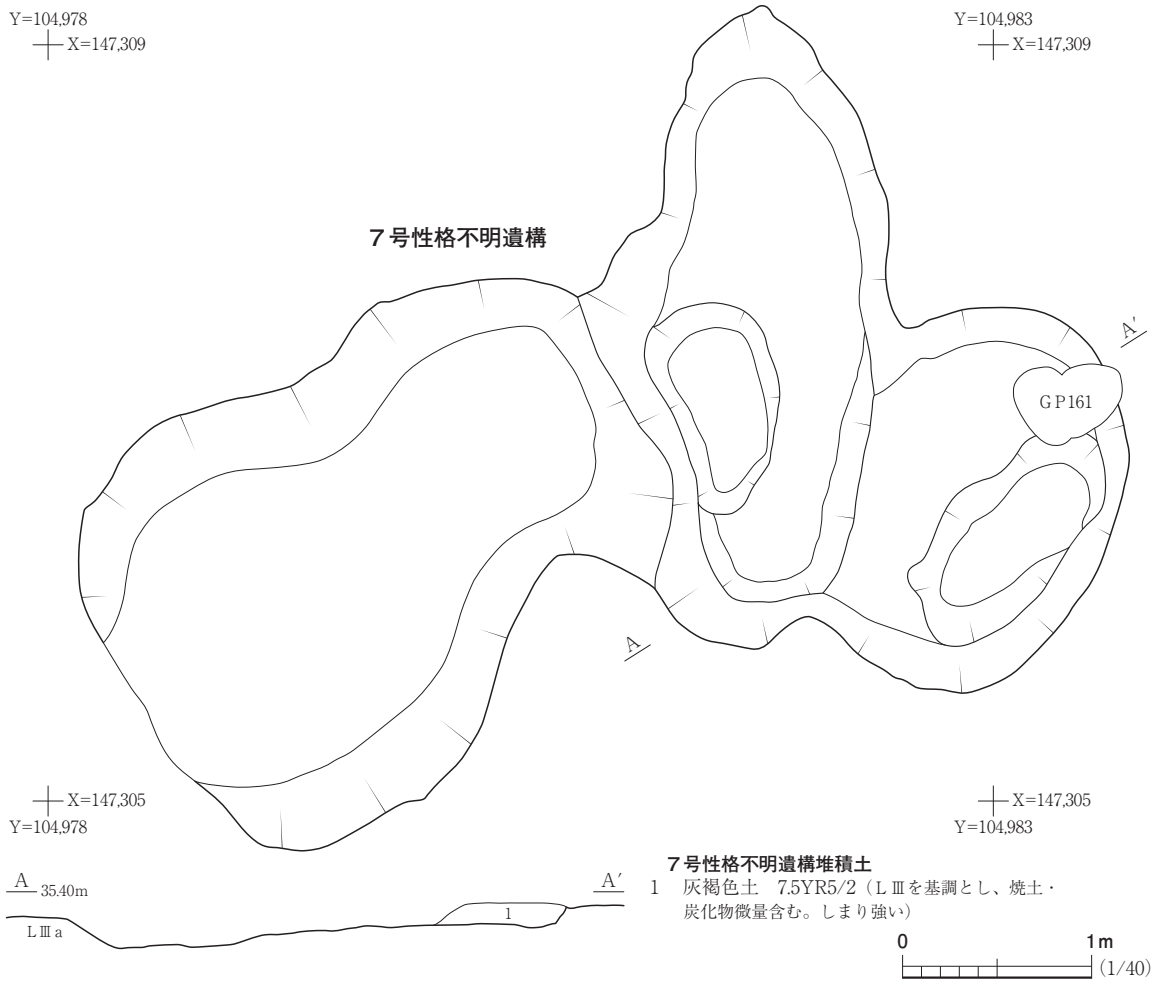


図53　７号性格不明遺構

5.58m、幅は1.5～3.35mである。底面までの深さは14cmとなり、中央の土坑では34cm、東隅の土坑では28cmを測る。周壁は緩やかに立ち上がる。底面には凹凸が認められ、中央の土坑に向かって緩やかに傾斜している。堆積土は灰褐色土の単層で炭化物や焼土を含むことから、人為による埋め立てと判断している。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は平面形が不整形で浅く掘り込まれた遺構である。５号平場の整地範囲や５号土塁に近接することから、中世城館に関連した土塁の構築や整地のための土取り穴と考えられる。年代は５・６号性格不明遺構と同様の特徴を有することから、15世紀代の所産と考えられる。　（佐　藤）

８号性格不明遺構　ＳＸ08（図54、写真36）

本遺構は５号平場の南西隅、Ｔ・U11・12グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。３号土塁掘下げ後の精査で褐灰色土の不整長方形の範囲として確認した。本遺構は３号土塁・ＧＰ389・391・397・423～425・505より古い。

本遺構の平面形は不整な長方形を基調とし、南東へ向かってやや張り出す。主軸方向は北東・南西となる。規模は長軸9.96m、短軸は3.78～6.14mである。底面までの深さは34cmを測る。周壁は

北西・南西壁は緩やかに立ち上がり、南東壁はスロープ状となる。底面は平坦となるが、南西隅には凹凸が目立つ。遺構内堆積土は３層に分けられる。ℓ１・２はＬⅡを由来とする褐灰色土で、焼土塊やＬⅢｂ塊を含むことから人為による埋め立てと判断した。ℓ３は炭化物・焼土粒を含む黒褐色土で、底面直上に斑状に薄く堆積していることから、遺構機能時に堆積したものと判断した。

本遺構からは、弥生土器１点、土師器1点、中世陶器４点、石製品１点が出土し、２点を図示した。図54－１は古瀬戸後期様式の口広有耳壺である。頸部は垂直に立ち上がり、口縁部は玉縁状となる。肩部には粘土紐貼り付けによる耳が施される。内面の頸部上半、外面の体部上半には鉄釉が施され、一部は被熱により発泡している。２は珪質頁岩製の砥石である。４面を砥面として使用している。下側面には鋸引きとみられる平行の線状痕が密に認められる。

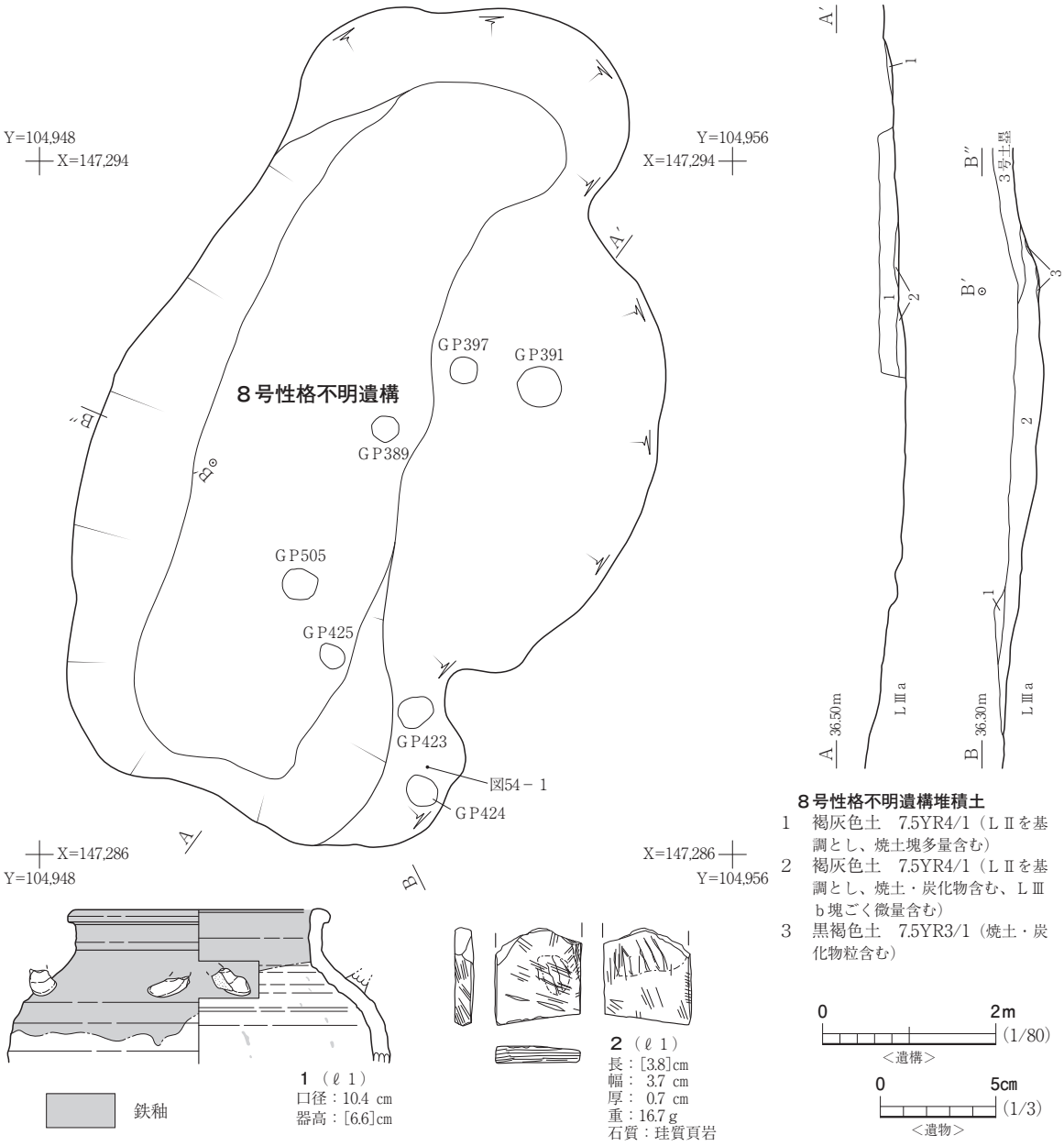


図54　８号性格不明遺構、出土遺物

本遺構は平面形が長方形で浅く掘り込まれた遺構である。３号土塁より古いことから、中世城館に関連した土塁の構築や整地のための土取り穴と考えられる。年代は出土遺物の特徴から15世紀代前半頃の所産と考えられる。（佐　藤）

19号性格不明遺構　ＳＸ19（図55）

本遺構は５号平場北西側、丘陵平坦面から斜面へ向かう傾斜の変換する箇所、W10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、５号平場の整地土除去後に遺構精査を行った結果、炭化物や焼土を含む不整形のにぶい橙色土の範囲として確認した。本遺構は重複から、21号性格不明遺構より新しく、20号性格不明遺構より古い。北側２ｍには５号土塁が位置する。

本遺構の平面形は隅丸鉤形を呈する。規模は長さ4.7ｍ、短軸1.8ｍ、底面までの深さは16㎝を測る。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。底面には細かな凹凸が多く認められ、特に掘り込みが深い部分はＬⅣが露出している。底面は、西側から東側へ向けて緩やかに傾斜している。南側の周壁の一部には弱い焼土化が認められる。厚さは最大で２㎝を測る。被熱により硬化が認められた上面の周辺には炭化物が薄く堆積しており、その範囲を捉えることはできなかったが、厚さは３㎝を測る。堆積土は３層に分けられた。ℓ１はＬⅢａを由来とするにぶい橙色土で、黒褐色土塊を含む。５号平場の整地土と土質が似ることから、整地時の堆積土と考えられる。ℓ２は黒色炭層で炭化物を主体とし、焼土を含む。ℓ３は褐灰色土でＬⅢａ・ｂの混合土である。いずれにも土質の特徴から、人為的に埋めたものと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、平面形が鉤形の浅い掘り込みを持つ遺構である。５号平場整地土が遺構上面を覆っていたことから、中世城館の整地行為に関連した遺構と考えられる。一部に被熱と炭化物が密に分布することから、遺構を埋め立てる過程で火を用いて何らかの行為がなされた可能性がある。年代は城館に関連することから、15世紀代の所産と考えられる。（佐　藤）

20号性格不明遺構　ＳＸ20（図55）

本遺構は５号平場北西側、丘陵平坦面から斜面へ向かう傾斜の変換する箇所、W10グリッドに位置する。検出面はＬⅢｂで北側の斜面部分がＬⅣとなる。本遺構は５号平場の整地土除去後に遺構精査を行った結果、褐灰色土の楕円形の範囲として確認した。本遺構は重複から、19号性格不明遺構より新しい。北側１ｍには５号土塁が位置する。

本遺構の平面形は楕円形となり、中央がすぼまる。規模は長軸1.67ｍ、短軸1.15ｍ、底面までの深さは38㎝を測る。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦だが、中央のくびれている箇所から北側は一段下がりＬⅣが露出している。堆積土は２層に分けられた。ℓ１・２とも土質は近似し、ＬⅢａ・ｂ塊や炭化物を含むことから、短期間に埋め立てたものと考えている。本遺構からは土師器２点、石器１点、粘土塊が数点出土しているが、いずれも小片のため図示していない。

本遺構は平面形が楕円形で、中央がすぼまる箇所で底面に高低差があることから、土坑を２基連ねたものと考えられる。５号平場の整地以前の平場線付近に等間隔に並ぶ、土坑の一群のひとつと推測される。年代は19号性格不明遺構より新しく５号平場の整地より古いことから、15世紀代の所産と考えられる。（佐　藤）

21号性格不明遺構　ＳＸ21（図55）

本遺構は５号平場の北側、丘陵平坦面から斜面へ向かう傾斜の変換する箇所、W10グリッドに位置する。検出面はＬⅢｂと５号平場整地上面である。本遺構は５号平場の整地土掘削中に黒褐灰色土の楕円形の範囲として確認した。本遺構は重複から、19号性格不明遺構より古い。本遺構の北側と西側は、整地土掘削時の掘りすぎにより遺存していない。

本遺構の平面形は楕円形を基調とすると推測され、規模は遺存値で1.5ｍ、短軸1.4ｍ、底面までの深さは54㎝を測る。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は半円形を呈する。底面は平坦だが、北側へ向かってわずかに傾斜している。堆積土は３層に分けられた。ℓ１・３はＬⅢｂを由来とする土で、黒褐色や褐灰色の土塊を含む。ℓ２は黒褐色土で、ＬⅢｂ・炭化物を含む。１・３は土質が近似し、土塊を含むことから、短期間に埋め立てたものと考えている。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、平面形が楕円形を基調とする遺構である。詳しい性格は不明だが、５号平場の整地を掘り込んで築かれ、本遺構の上位は整地土に覆われていたことから、５号平場の整地に関連した遺構と考えられる。年代は５号平場の整地中に築かれたことから、15世紀代の所産と考えられる。

（佐　藤）

25号性格不明遺構　ＳＸ25（図55）

本遺構は５号平場の南西隅、T12グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。本遺構は、３号土塁除去後の精査で黒褐色土やにぶい黄褐色土の不整形の範囲として確認した。本遺構は重複関係から、３号土塁よりも古い。本遺構の南西側には、隣接して26号性格不明遺構が、北東方向1.6ｍには８号性格不明遺構が近接して位置する。

本遺構の平面形は不整形である。規模は長軸4.02ｍ、短軸0.7～2.2ｍ、底面までの深さは28㎝、西隅部の土坑状の掘り込みでは40㎝を測る。周壁は緩やかに立ち上がる。底面は凹凸が多く、西隅部には土坑状の掘り込みがあり、一段下がる。堆積土は５層に分けられた。ℓ１・２は黒褐色土を主体とし、ℓ３～５はにぶい黄褐色土を基調とする。ℓ１～５はいずれも、ＬⅢｂを由来とする土塊が含まれることから、人為的な堆積と判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は平面形が不整形である。詳しい性格は不明だが、８・26号性格不明遺構と同様に３号土塁の下から掘り込まれることから、中世城館に関連した土塁構築や整地のための土取り穴の可能性がある。年代は３号土塁より古く、８号性格不明遺構と同様の性格であることから、15世紀代

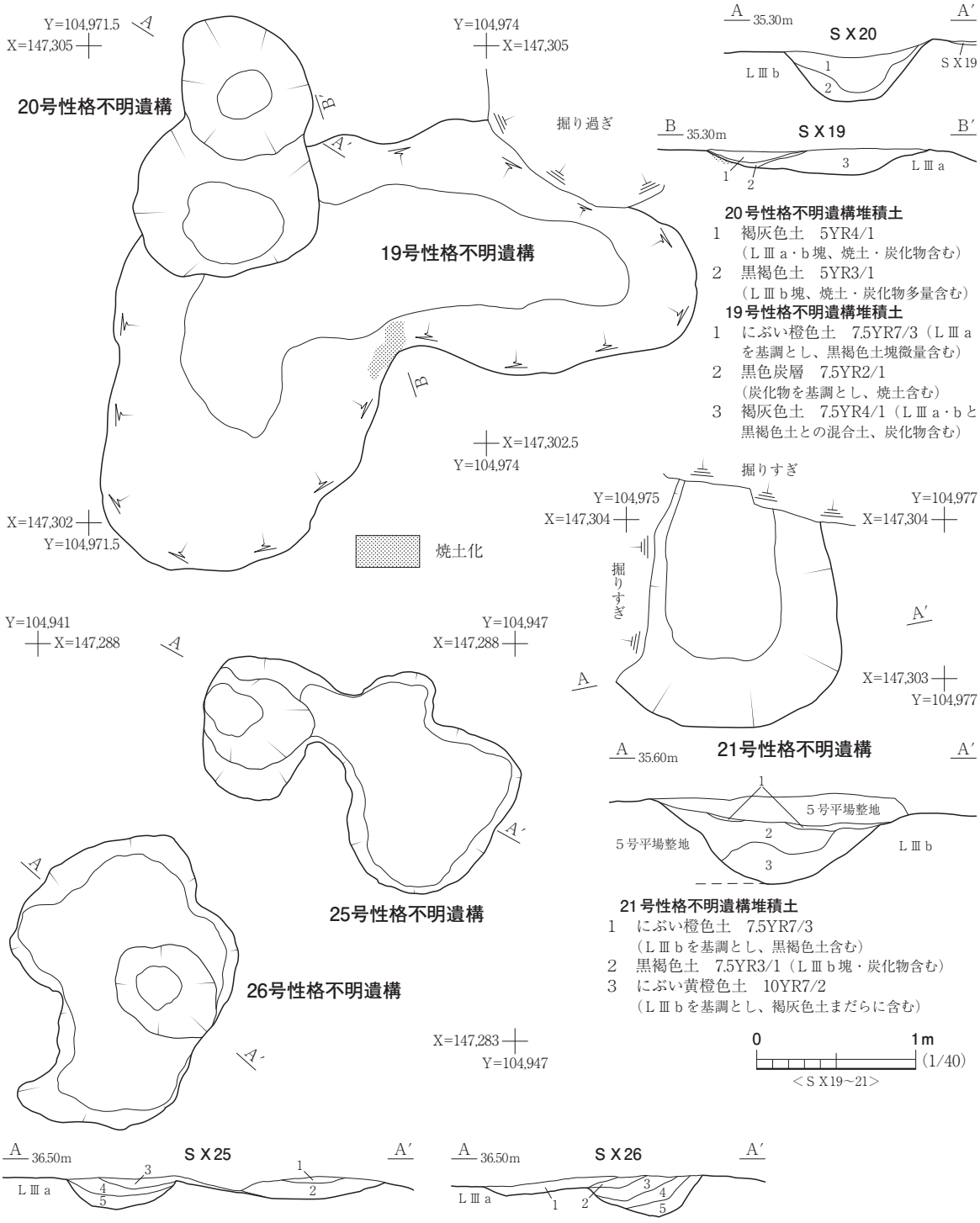


図55　19～21・25・26号性格不明遺構

の所産と考えられる。　（佐　藤）

26号性格不明遺構　ＳＸ26（図55）

本遺構は５号平場の南西隅、Ｔ12グリッドに位置する。検出面はＬⅢａである。本遺構は、３号土塁除去後の精査で褐色土の不整形の範囲として確認した。重複関係から３号土塁よりも古い。

本遺構の北東側には、隣接して25号性格不明遺構が、北東方向６ｍには８号性格不明遺構が近接して位置する。

本遺構の平面形は不整形である。規模は長軸3.86ｍ、短軸1.7～2.8ｍ、底面までの深さは12㎝、中央部にある土坑状の掘り込みでは51㎝を測る。周壁は緩やかに立ち上がる。底面は凹凸が多く、中央部には土坑状の掘り込みがあり、一段下がる。堆積土は５層に分けられた。ℓ１・３・５はＬⅡを由来とする褐色土、ℓ２・４はＬⅢｂを由来とする土で、土塊などが含まれることから、人為的な堆積と判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は平面形が不整形である。詳しい性格は不明だが、８・25号性格不明遺構と同様に３号土塁の下から掘り込まれることから、中世城館に関連した土塁構築や整地のための土取り穴の可能性がある。年代は３号土塁より古く、８号性格不明遺構と近似することから、15世紀代の所産と考えられる。　（佐　藤）

５号平場の小穴群（図56～58、写真24・25・63）

５号平場では小穴を331基確認した。小穴は、３号土塁の出入口からＵ11・12グリッド付近を境に分布が極端に薄くなる。また、５号平場の北東側縁辺部、１号門跡、５号土塁付近から４～９ｍ付近も同様に小穴の分布が薄くなる。これは、５号平場の出入口にあたり、通路として機能していたためと考えられる。３号土塁の下からは16基の小穴が見つかっていることから、土塁構築以前に何らかの施設が存在した可能性がある。平面形は円形、方形が多く、規模は長軸で20～50㎝、深さは20～80㎝のものが多く、ほかの平場と比較して大規模のものが多い。Ｗ・Ｘ10・11グリッド付近は、長軸60㎝、深さ70㎝を超えるような大型のものが多く認められる。小穴の堆積土はＢ・Ｄ類型が多く、Ａ・Ｃ類型は極めて少ない（小穴の堆積土の類型は用例参照）。ＧＰ153には根石が認められる。ＧＰ278・684から出土した炭化物各１点について、樹種同定及び、放射性炭素年代測定を行った（第４章第１節参照）。ＧＰ278は樹種がクリ、年代が15世紀初頭から前葉の結果を得た。ＧＰ684は樹種がマツ属複維管束亜属、年代が15世紀後葉から16世紀前葉もしくは、16世紀後葉から17世紀前葉頃の結果を得た。

５号平場の小穴群からは中世陶器１点、須恵器１点、土師器６点、弥生土器30点、土製品３点、石器５点、銭貨１点が出土し、７点を図示した。図58－１は古瀬戸後期様式の祖母懐茶壺で、外面には薄手の鉄釉が施される。図58－２は須恵器大甕の体部下半である。外面には平行のタタキ目が認められる。図58－３は桜井・天神原式期の壺形土器の体部片である。２本１組の平

図56　５号平場の小穴群（１）

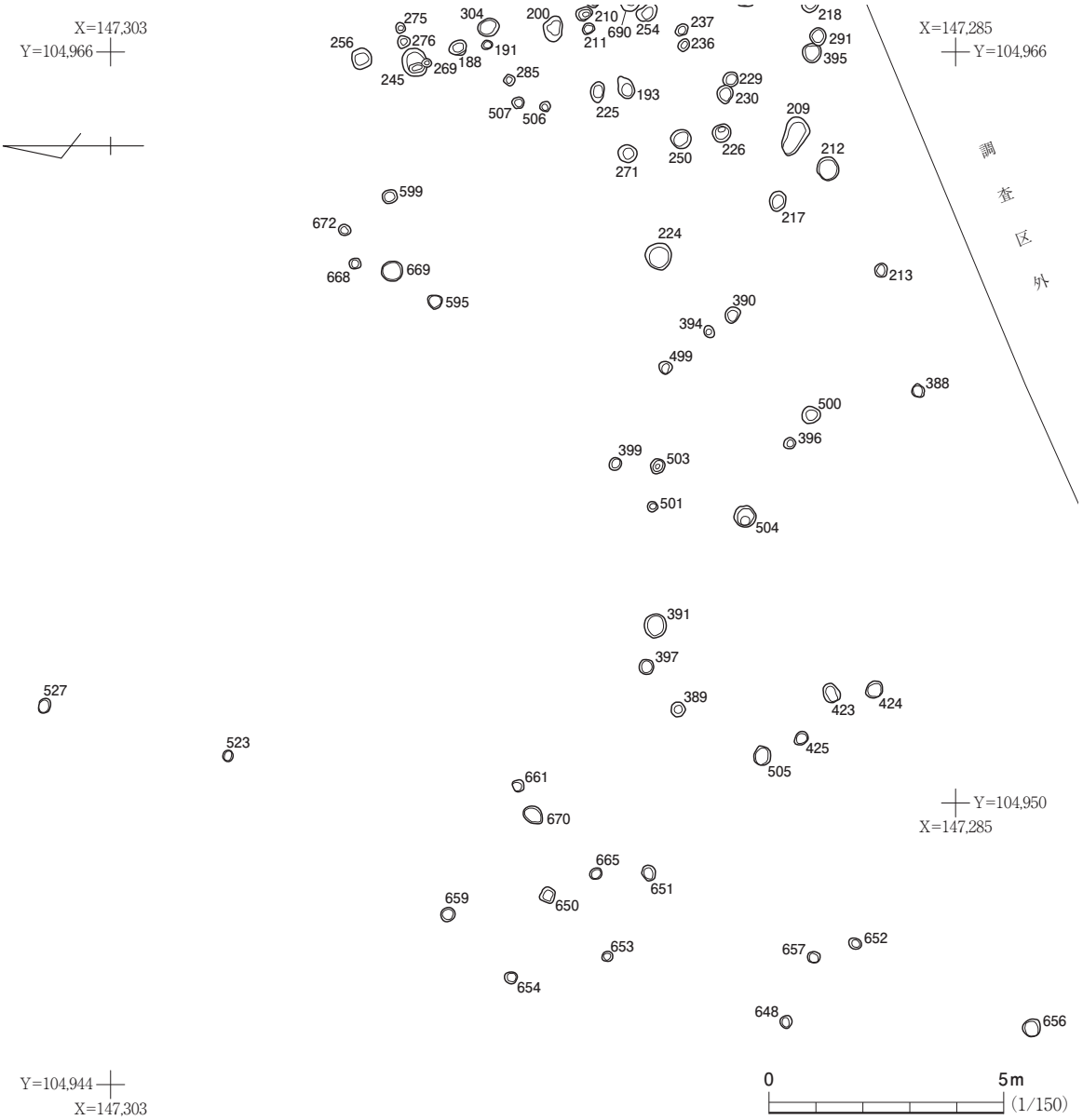


図57　５号平場の小穴群（２）

行沈線が斜状に認められる。図58－４・５は不明土製品である。いずれもＧＰ121の底面付近から出土している。４は上下端部が肥厚する土製品で、中央には両側から穿孔された小穴が認められる。表面はユビナデやユビオサエにより成形される。５は円柱状の土製品で、上端はくぼみ、下端は平行で放射状に線状痕が認められる。上下部には貫通する小穴が認められる。側面には穿孔が２か所で認められ、方向は115°異なる。表面はユビナデやユビオサエにより成形される。図58－６は珪質凝灰岩製の砥石である。４面を砥面として利用し、線状痕が認められる。正面右短辺は棒状の製品を研磨した痕跡が顕著に認められる。研磨痕の断面形は逆台形で底面に２～３条の溝状のくぼみが確認できる。図58－７は1411年初鋳の永楽通寶である。　（佐　藤）

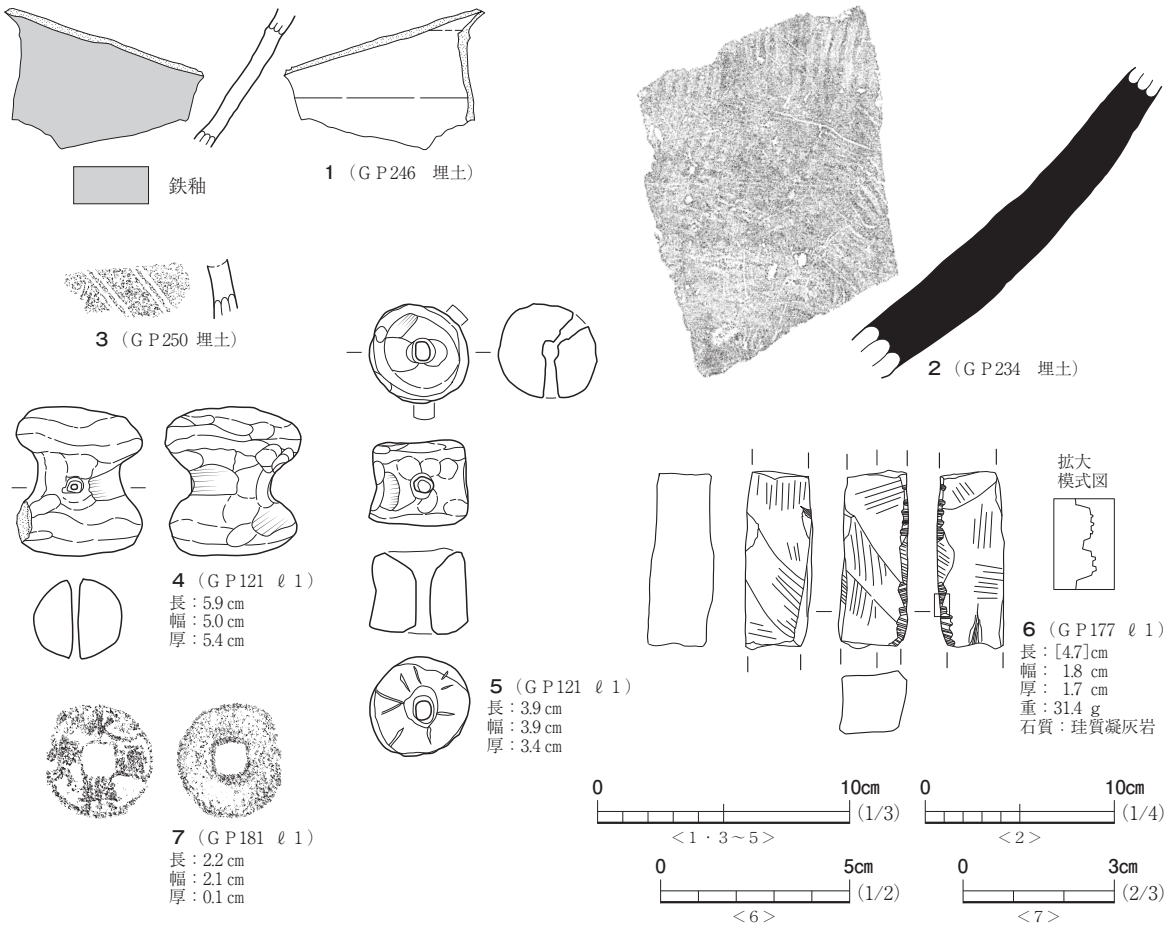


図58　５号平場の小穴群出土遺物

第８節　６・７号平場の概要

概　　要　６・７号平場は、調査区北東側のＹ・Ｚ７、Ｖ～Ｚ８、Ｖ～Ｘ９グリッドに位置する（写真６・７・37）。５号平場北辺の斜面を削り、より急斜度にした際に生じた平坦面である。平場の北側は、道路建設に伴う樹木の伐採による撹乱が多く認められる。

６号平場の標高は29mで、丘陵裾部の平坦面との高低差は18mである。西辺は自然地形の沢が位置し、近接する７号平場と区画している。南辺は高低差によって、上位の５号平場と区画している。６号平場の東隅部には２号道跡が位置し、斜面上位の５号平場と往来していたと考えられる。各平場との高低差は５号平場で－7.5m、７号平場で－１mである。

６号平場の平面形は不整な方形を呈し、北東部は細長くなる。規模は東西方向で10ｍ、南北方向は遺存値で8.1ｍを測る。平場はＬＶ・Ⅵまで掘り込まれ、緩やかに北西側に傾斜している。６号平場では、中世城館に関わる遺構は確認できない。

７号平場の標高は30mで、比高差は19mである。東辺は自然地形の沢が位置し、近接する６号平場と区画している。南辺は高低差によって上位の５号平場と区画している。各平場との高低差は

５号平場で－6.5m、７号平場で＋１mである。

７号平場の平面形は不整な楕円形を呈し、規模は東西方向で13.3m、東西方向は遺存値で7.3mを測る。平場はＬＶ・Ⅵまで掘り込まれ、東西の沢に向かって緩やかに傾斜している。７号平場では、中世城館に関わる遺構は確認できない。

ま と め　６・７号平場は、丘陵頂上付近の斜面を「切岸」状に造成した結果、生じた平場である。中世城館に関わる遺構が確認できないことから、丘陵下位と５号平場をつなぐ通路のような役割を想定している。（佐　藤）

第９節　土 墨 ・ 堀 跡

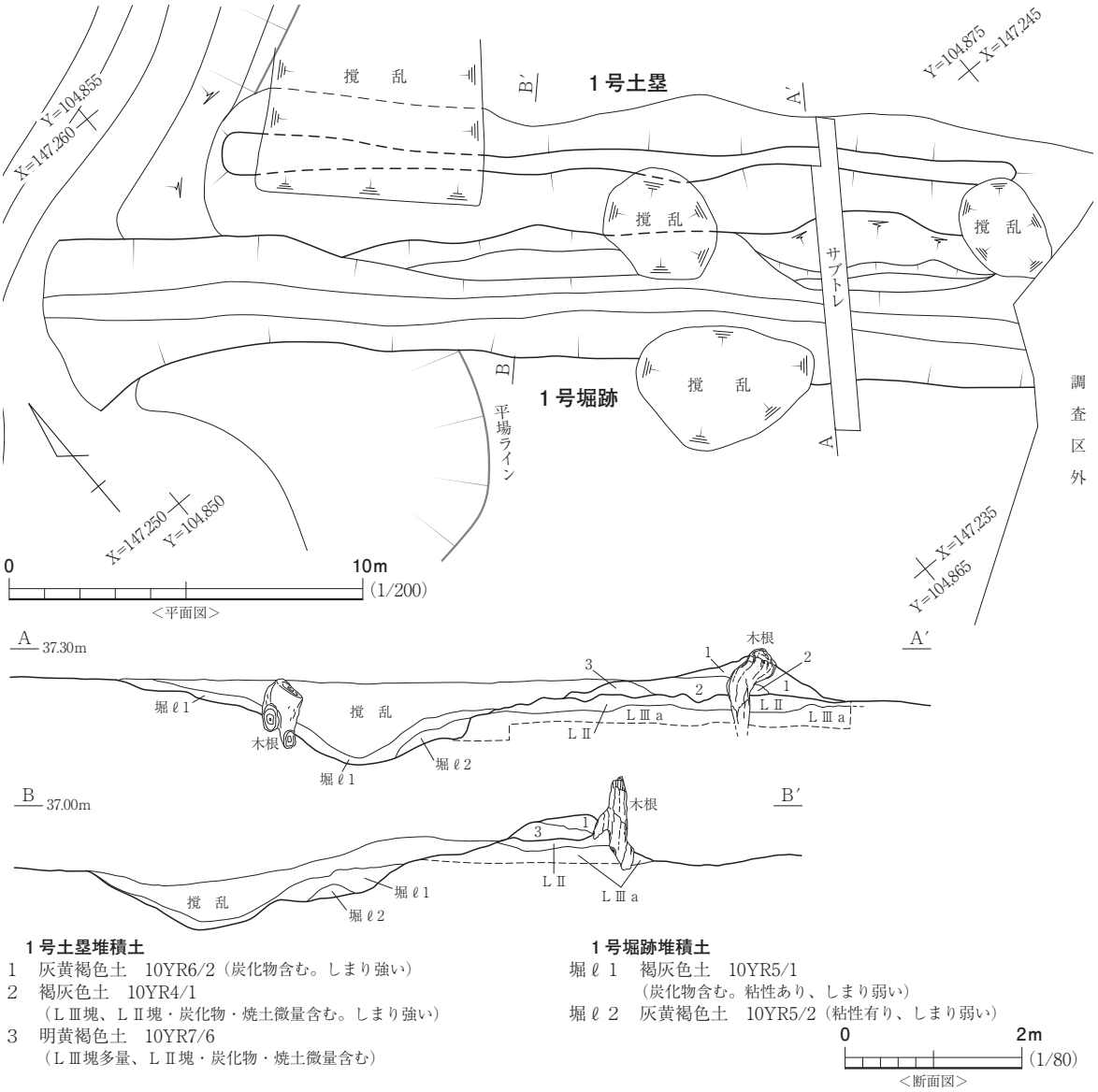
１号土墨・１号堀跡（図59、写真38）

１号土墨・１号堀跡は、調査区南西側のＪ～Ｌ15、Ｋ～M16、Ｌ・M17グリッドに位置している。丘陵頂上部を北西・南東方向に横断し、１号平場と２号平場を区画している。本遺構は南東側の調査区外へ走っている。１号土墨・１号堀跡は、富岡町史や富岡町教育委員会が行った試掘確認調査で確認された遺構である。調査前に行った現況確認の際には、１号土墨のわずかな高まりのみが確認でき、１号堀跡は震災直前の伐採時の土砂や伐木で埋め立てられていた。１号土墨の北東側には１号掘立柱建物跡、小穴群が分布している。１号堀跡の検出面はＬⅢａである。遺存状態は悪く、北西側の一部は伐木搬出路によって壊されている。７・８号住居跡、10号土坑と重複し、これより新しい。

１号土墨・１号堀跡の断面規模は、実効堀幅5.2～5.8m、垂直墨壁高1.3m、実効法高4.5mである。１号土墨は１号堀跡の北東側に隣接して位置する。調査区内の土墨の規模は、長さが遺存値で26m、幅は下端で2.8～3.8mである。検出面からの高さは最大48cmである。１号土墨の積土、１号堀跡の堆積土は、図59Ａ－Ａ′、Ｂ－Ｂ′に示す。１号土墨の積土は、ＬⅡの上面に１号堀跡の掘削土や２号平場周辺の土を盛っている。１号土墨の積土は３層に分けられ、褐灰色土・黄褐色土を基調とし、ＬⅡ・Ⅲ塊を多く含んでいる。しまりは弱く、版築は認められなかった。

１号堀跡は１号土墨の南西側に位置している。北西端は急斜面に吸収される。堀跡の規模は長さが遺存値で29m、幅は上端で2.4～3.7mを測る。深さは最大92cmである。底面は概ね平坦である。周壁の角度は１号平場側で17°、２号平場側で25°である。１号堀跡の北東壁の一部には、ステップが認められる。幅は60～88cm、底面からの高さは24cm、長さ7.62mである。周壁は断面図Ａ－Ａ′付近は急なのに対し、Ｂ－Ｂ′は緩やかに立ち上がる。１号堀跡の堆積土は２層に分けられ、ＬⅢａ由来の褐灰色土・灰黄褐色土を基調とし、三角堆積が認められることから、斜面上位の土や土墨の積土が自然に流入したとものと判断した。

出土遺物は、１号土墨から弥生土器１点、石器１点があるが、いずれも小片のため図化していない。



1号土墨堆積土
1　灰黄褐色土　10YR6/2（炭化物含む。しまり強い）
2　褐灰色土　10YR4/1
（LⅢ塊、LⅡ塊・炭化物・焼土微量含む。しまり強い）
3　明黄褐色土　10YR7/6
（LⅢ塊多量、LⅡ塊・炭化物・焼土微量含む）

1号堀跡堆積土
堀ℓ1　褐灰色土　10YR5/1
（炭化物含む。粘性あり、しまり弱い）
堀ℓ2　灰黄褐色土　10YR5/2（粘性有り、しまり弱い）

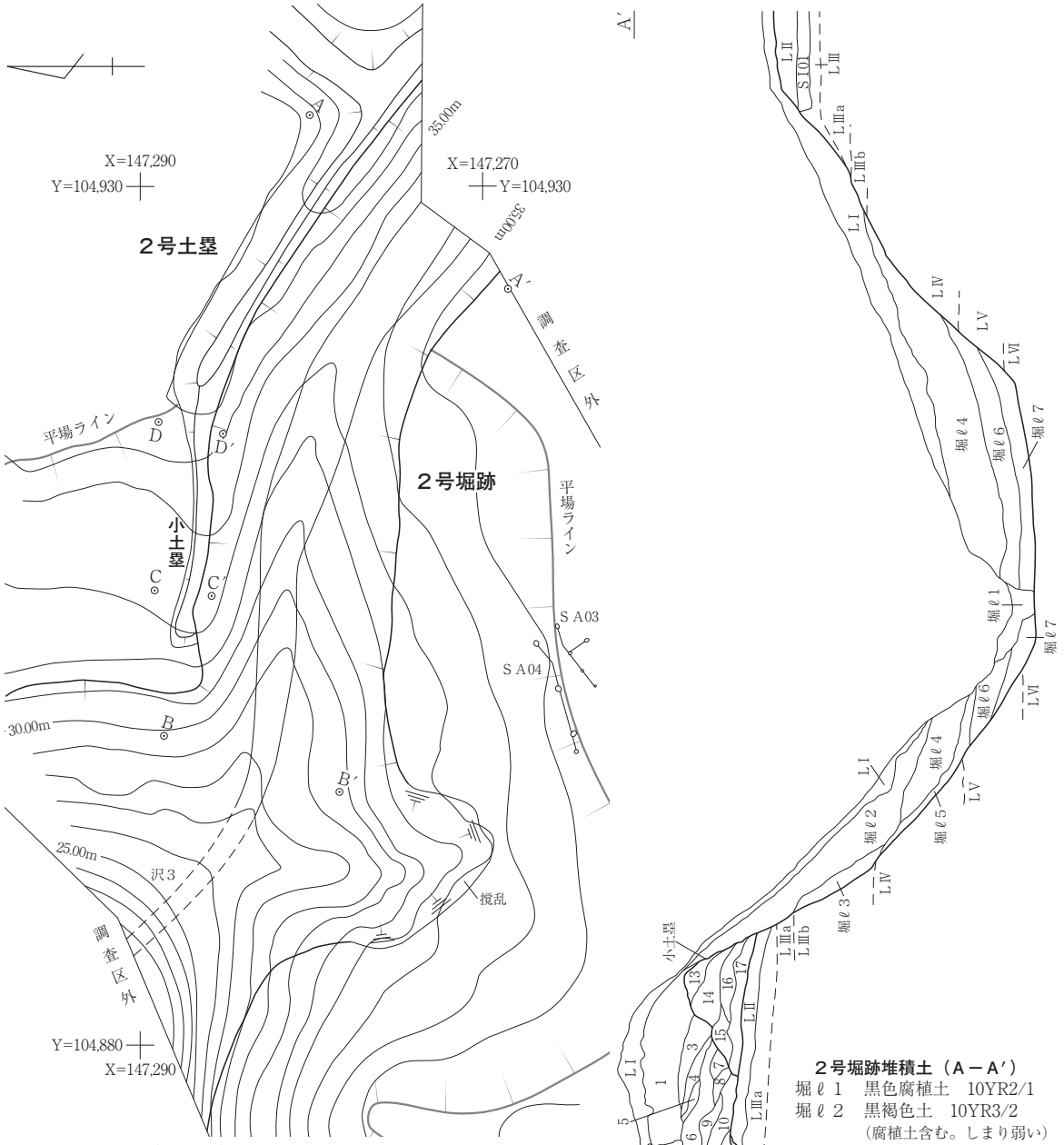
図59　１号土墨・１号堀跡

ま と め

１号土墨・１号堀跡は１号平場と２号平場を区画し、規模はほかの土墨・堀跡と比較して、実効堀幅は狭く、垂直墨壁高・実効法高は低く、傾斜は緩やかである。１号堀跡の周壁には、ステップが付き、土墨を積むための足場と考えられる。以上のことから、ほかの土墨や堀跡と比較して、防御性は低いと考えられる。用途として、１号平場から２号平場へ敵の侵攻を防ぐものと考えられる。（佐　藤）

２号土墨・２号堀跡（図60・61、写真39～41・63）

２号土墨・２号堀跡は３・４号平場の南西側、O10、N～P11、M～S12、N～S13、R14グリッドに位置し、丘陵頂部を横断する土墨と堀切状の施設である。沢３を起点とし北西・南東方向



２号土塁堆積土（Ａ－Ａ′）

1　にぶい褐色土　7.5YR5/3（ＬⅢａを基調とし、黒褐色土塊含む。しまり弱い）
2　褐灰色土　7.5YR5/1（ＬⅡを基調とし、炭化物含む。しまり弱い）
3　にぶい褐色土　7.5YR5/3（ＬⅢａとＬⅡの混合土。しまり有り）
4　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅢａ塊・炭化物微量含む。しまり有り）
5　にぶい褐色土　7.5YR5/3（ＬⅡ塊ごく微量・炭化物微量含む。しまり有り）
6　黒褐色土　10YR3/2（ＬⅢａ・ｂ塊多量、炭化物含む。しまり有り）
7　にぶい褐色土　7.5YR5/3（ＬⅢａを基調とする。しまり有り）
8　黒褐色土　10YR3/2（ＬⅢａ塊多量含む。しまり有り）
9　にぶい褐色土　7.5YR5/3（ＬⅢａを基調とし、黒褐色土塊含む。しまり弱い）
10　にぶい褐色土　7.5YR5/3（ＬⅢａと黒褐色の混合土、炭化物含む。しまり有り）
11　褐灰色土　10YR4/1（黒褐色土、ＬⅢａ・ＬⅢｂの混合土。しまり有り）
12　黒褐色土　10YR3/2（ＬⅢａ塊含む。しまり有り）
13　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅡを基調とし、炭化物微量含む。しまり弱い）
14　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅡを基調とし、ＬⅢａ塊微量、炭化物含む。しまり弱い）
15　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅡを基調とし、ＬⅢａ塊・炭化物含む。しまり弱い）
16　褐灰色土　7.5YR4/1（焼土・炭化物含む。しまり弱い）
17　黒褐色土　7.5YR3/1（ＬⅡを基調とし、ＬⅢ塊ごく微量含む）

２号堀跡堆積土（Ａ－Ａ′）

堀ℓ１　黒色腐植土　10YR2/1
堀ℓ２　黒褐色土　10YR3/2（腐植土含む。しまり弱い）
堀ℓ３　灰褐色土　5YR6/2（ＬⅢａを基調とする。しまり弱い）
堀ℓ４　褐灰色土　10YR5/1（ＬⅢｂを基調とし、ＬⅡ・Ⅴ塊微量、炭化物含む。しまり弱い）
堀ℓ５　灰黄褐色土　10YR5/2（ＬⅣを基調とする。しまり弱い）
堀ℓ６　黒褐色土　10YR3/1（ＬⅤ・Ⅵ塊微量、炭化物含む。しまり弱い）
堀ℓ７　褐灰色砂質土　10YR4/1（ＬⅣ由来の礫含む。しまりなし）

0　10m　(1/400)　＜平面図＞
0　2m　(1/80)　＜断面図＞

図60　２号土塁・２号堀跡（１）

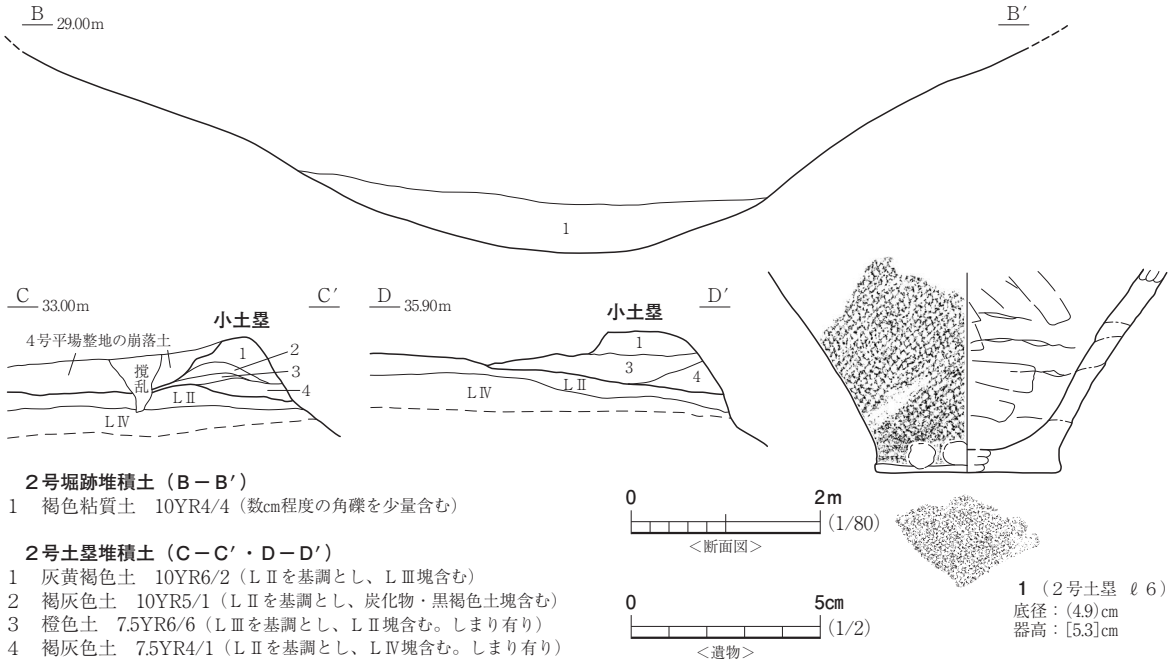


図61　２号土墨・２号堀跡（２）、出土遺物

に伸び、２号平場と３～５号平場を区画している。２号土墨・２号堀跡は、富岡町史や富岡町教育委員会が行った試掘確認調査で確認されていた遺構である。調査前に実施した表面調査で、南東隅部に出入口と思われる土墨の切れ目を確認した。遺存状態は良好であるが、２号土墨の一部は、調査前の伐木搬出路により壊されている。２号堀跡の検出面はＬⅢａである。１号住居跡、14号溝跡、45号土坑と重複し、これより新しい。丘陵頂部のＳ13グリッド付近で２号土墨と３号土墨はＴ字状に交わり、構築順序は土層の観察から２号土墨が先行することを確認した。これについては、３号土墨・３号堀跡の項で報告する。

２号土墨・２号堀跡の断面規模は、実効堀幅11.9ｍ、垂直墨壁高4.86ｍ、実効法高6.46ｍである。２号土墨は２号堀跡の北東側、３～５号平場側に築かれる。主軸は北西・南東方向を基調とし、３号平場の位置する緩やかな斜面部分、断面図Ｄ－Ｄ′の西側でくびれ、主軸は東西方向に変化している。図60Ａ－Ａ′、図61Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′に示す断面から、２号土墨は２号堀跡の縁辺に幅が狭く、低い土墨状の高まりを堀側の土留めとするように３～５号平場側に積土している（小土墨）。断面図Ｄ－Ｄ′より西側では、小土墨のみが確認された。

２号土墨の規模は、調査区外を含めると長さ79.4ｍ、幅は下端で3.2～４ｍ、高さ1.18ｍ、Ｄ－Ｄ′より西側の土墨は幅90cm～1.65ｍ、検出面からの高さは58～72cmである。土墨の積土には主に４号平場の掘削土が用いられ、ＬⅡの上に盛られている。４号平場はＬⅢｂまで掘削されていることから、当初から土墨を構築する範囲のＬⅡを掘り残していたことが確認できた。

２号土墨の積土は、17層に分けられた。Ａ－Ａ′のℓ１～12は拡張部分の積土である。ＬⅡもしくはＬⅢａに由来する土で、ＬⅢａ・ｂ塊を含んでいる。Ａ－Ａ′のℓ13～17、Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′のℓ１～４は、２号堀跡の縁辺に築かれた小土墨の積土である。ＬⅡを由来とする土を用い、Ｌ

Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ塊を含んでいる。

土塁の積み方を簡単にまとめると、①土塁を造る範囲のＬⅡを掘り残し、４号平場を掘削する。②２号堀跡の縁辺に小土塁を築く（Ａ－Ａ′ℓ 13～17、Ｃ－Ｃ′・Ｄ－Ｄ′ℓ １～４）。③小土塁の脇に水平に盛土する（Ａ－Ａ′ℓ ６～12）。④その間を積土し、高さを確保する（Ａ－Ａ′ℓ ３～５）。④土塁全体を覆うように盛土する（Ａ－Ａ′ℓ １・２）。いずれの積土にも版築など叩きしめた痕跡は認められないが、小土塁の積土はしまりが弱く、これを覆う積土のしまりは強い。

２号堀跡は、北西側は沢３と区分できないことから、元々丘陵を横断するようにあった沢３を利用し、堀が造られたことがうかがわれる。掘り込みはＬⅥにまで達している。２号堀跡の規模は、調査区外を含めると長さ77ｍ、幅は9.8～13.2ｍ、２号平場からの深さは3.54ｍである。周壁はいずれも急に立ち上がる。２号平場側の周壁の角度は、底面からＬⅣ中位までは47°、それより上位は31°である。４号平場側の周壁の角度は、底面からＬⅣ上面までは32°で、それより上位は59°と傾斜は極めて急である。底面はＱ12・13グリッド付近を境に南東側は平坦に、北西側は沢３に向かって急激に下がって行く。

２号堀跡の堆積土は７層に分けられた。ℓ １は表土で、ℓ ２～４・６は２号土塁の崩落土、ℓ ５・７は風化したＬⅣの自然堆積と判断した。

２号土塁の積土にＬⅣ以下の土がほとんど含まれないことから、２号堀跡の掘削土は北西側の沢３に掻き落としたと推測される。

遺　　物（図61、写真63）

遺物は、２号土塁から弥生土器１点、石器１点、２号堀跡から弥生土器１点が出土し、弥生土器１点を図示した。図61－１は壺形土器もしくは甕形土器である。外面には単節斜縄文が認められる。

ま と め

２号土塁・２号堀跡は、２号平場と３～５号平場を区画する施設である。丘陵を横断するように構築し、毛萱館跡を構成する土塁・堀跡の中で最も大規模で、主郭へ敵の侵攻を防ぐ、防御の基幹となる施設である。２号土塁は、２号堀跡の縁辺に小土塁を築き、これを土留めとし、積土している。こういった土塁の工法は、楢葉町の小塙城跡や、郡山市の下宿御所宮館跡の土塁に類例が認められる。２号堀跡は、沢３の自然地形を利用しながら掘削している。堀底は粘土質のＬⅥで、水気を帯びると非常に滑りやすく、敵の侵入を防ぐ効果があったと推測される。年代は城館に関連する遺構であることから、15世紀の所産と考えている。（佐　藤）

３号土塁・３号堀跡（図62・63、写真42～46）

３号土塁・３号堀跡は調査区の東側、Ｓ・Ｔ９、Ｔ～Ｖ10、Ｓ～Ｕ11、Ｓ・Ｔ12・13グリッドに位置している。３号土塁については３号堀跡と平行し、丘陵尾根の稜線と平行するように北東・南西方向に縦断し、４号平場と５号平場を区画している土塁と、４・５号平場北側急斜面の肩部に築かれ北西・南東方向を主軸とする土塁があり、前者を３Ａ号土塁、後者を３Ｂ号土塁とした。南

西端は２号土墨とほぼ直角に交わっている。３Ａ号土墨の北東部は一部途切れ、この部分を４号平場と５号平場をつなぐ出入口と推定した。３Ａ号土墨は富岡町史や富岡町教育委員会が行った試掘確認調査で確認されていた。

本遺構は多数の遺構と重複し、12号溝跡より古く、46・56～58・63・64号土坑、８・22・25・26号性格不明遺構、ＧＰ523・527・642～644・646・647・648・650・651・653・654・656・657・659・665・670・671、４・５号平場の整地土よりは新しい。ＧＰ667は盛土中につくられていた。また、２号土墨と３Ａ号土墨は、ほぼ直角に交わり、堆積土の観察から２号土墨が先行して築かれていることを確認した。３Ａ土墨・３号堀跡の検出面は５号平場側でＬⅢａ、４号平場側でＬⅢｂである。３Ａ号土墨は伐根による撹乱を受けている。

３Ａ号土墨・３号堀跡の断面規模は、実効堀幅5.65m、垂直墨壁高2.35m、実効法高3.15mである。３Ａ号土墨は５号平場側に築かれ、３号堀跡と約70㎝の間隔を空けて平行している。３Ａ号土墨の規模は、長さ35.6m、幅は下端で5.9～6.08m、高さは現況で0.91～1.15mである。３Ｂ号土墨の検出面は、４・５号平場整地上面で、北東隅部は伐採時に上部が壊されている。３Ｂ号土墨の規模は、長さ23.3m、幅は下端で2.5～4.3m、高さは現況で1.29mである。

土墨の積土は、３Ａ号土墨がＬⅡ・ＬⅢａ、３Ｂ号土墨が４・５号平場の整地土上に盛られている。３Ａ号土墨堆積土は図63－Ｂ－Ｂ′で８層、Ｄ－Ｄ′で６層、３Ｂ号土墨は図63－Ｃ－Ｃ′で９層に分けることができた。Ｂ－Ｂ′のℓ２・４・６・８はＬⅡ、ℓ１・３はＬⅢａ、ℓ５・７はＬⅢｂを由来とする土である。いずれの層にもＬⅢａ・ｂ塊が含まれている。２号土墨のように、土留めとなるような小土墨は認められない。南西隅部の３Ａ号土墨と２号土墨との結合部に設定したＤ－Ｄ′では、３Ａ号土墨の積土が２号土墨の積土を覆って堆積していることが確認できた。ℓ１・２・５はＬⅡを由来とする褐灰色土で、ℓ３はＬⅢｂを由来とするにぶい黄橙色土、ℓ４はＬⅢａを由来とする灰褐色土である。ℓ６はにぶい黄橙色土で、薄く帯状に堆積している。３Ａ・Ｂ号土墨の結合部の堆積土をＣ－Ｃ′に示す。斜面への土砂流出を防ぐ目的で３Ｂ号土墨ℓ７～９を土手状に積み、それに取り付くように３Ａ号土墨ℓ５・６をさらに積み、ℓ１～４で土墨全体を覆うように積土している。積土にはＬⅡ・Ⅲａ・ｂ塊が含まれる。

出入口は４・５号平場の北側、３Ａ・Ｂ号土墨の結合部から、3.2m離れた部分に構築されている。出入口に断ち割りを行った結果、ℓ５・６が出入口の両側で確認できたことから、土墨を断ち切って出入口としたものと判断した。規模は上端の幅が1.16m、下端の幅が95㎝で、底面から土墨上面までは1.18mである。側壁はほぼ垂直に立ち上がり、ＬⅡを底面とし、５号平場から４号平場に向けて緩やかに傾斜している。底面には踏み締まりが認められた。出入口の堆積土は８層に分けた。ℓ１～７は褐灰色土もしくは灰褐色土でＬⅢｂ塊を含むことから、人為堆積と判断した。ℓ８は黒褐色土で、出入口として使用されていた時に自然堆積したものと考えられる。

３号土墨の積み方を簡単にまとめると、①３Ａ号土墨を造るため、その範囲のＬⅡを掘り残す。②４・５号平場北側の急斜面に続く緩斜面部を整地し、平坦面を造り出す。③造り出した平坦面

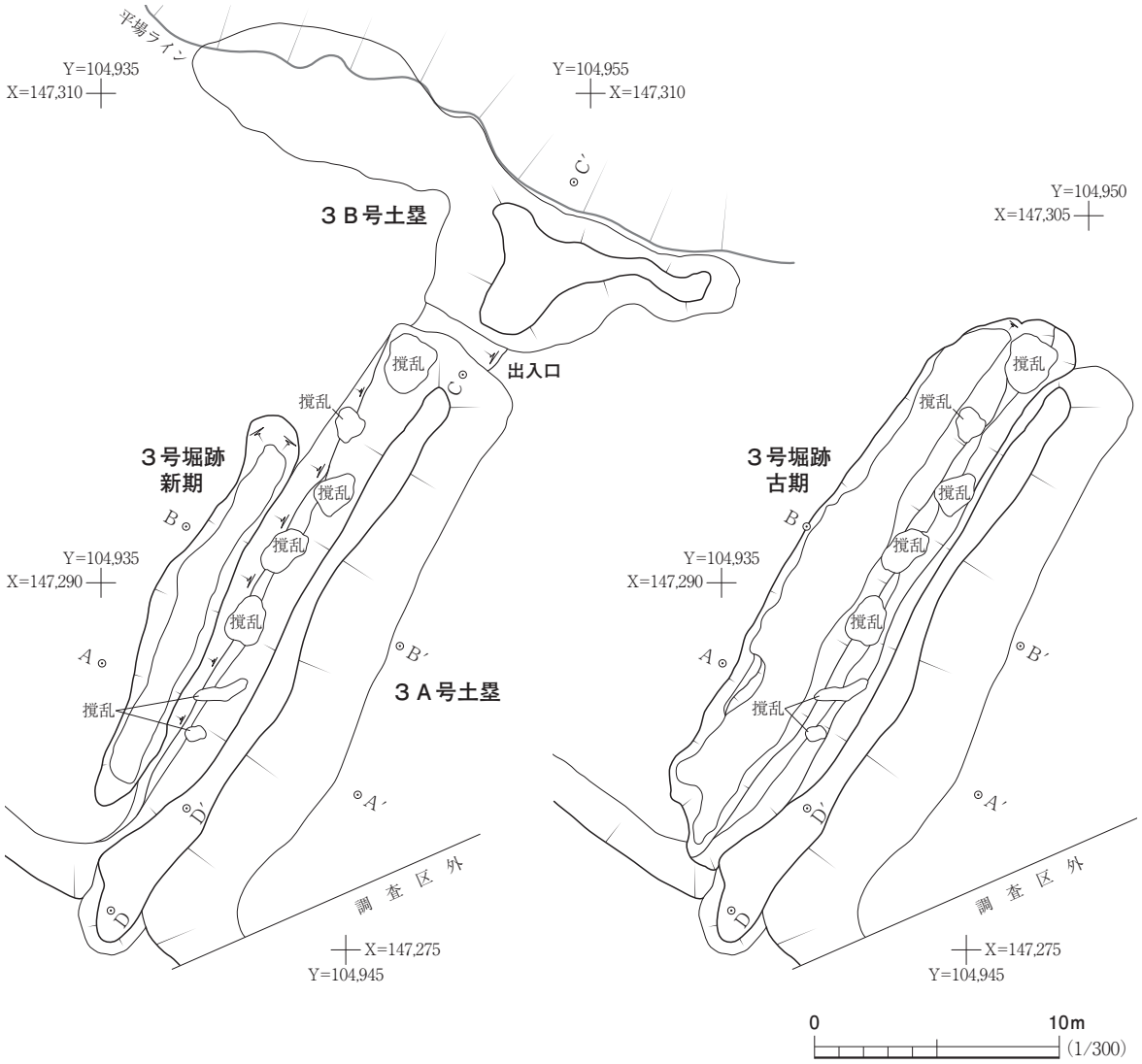


図62　３号土塁・３号堀跡（１）

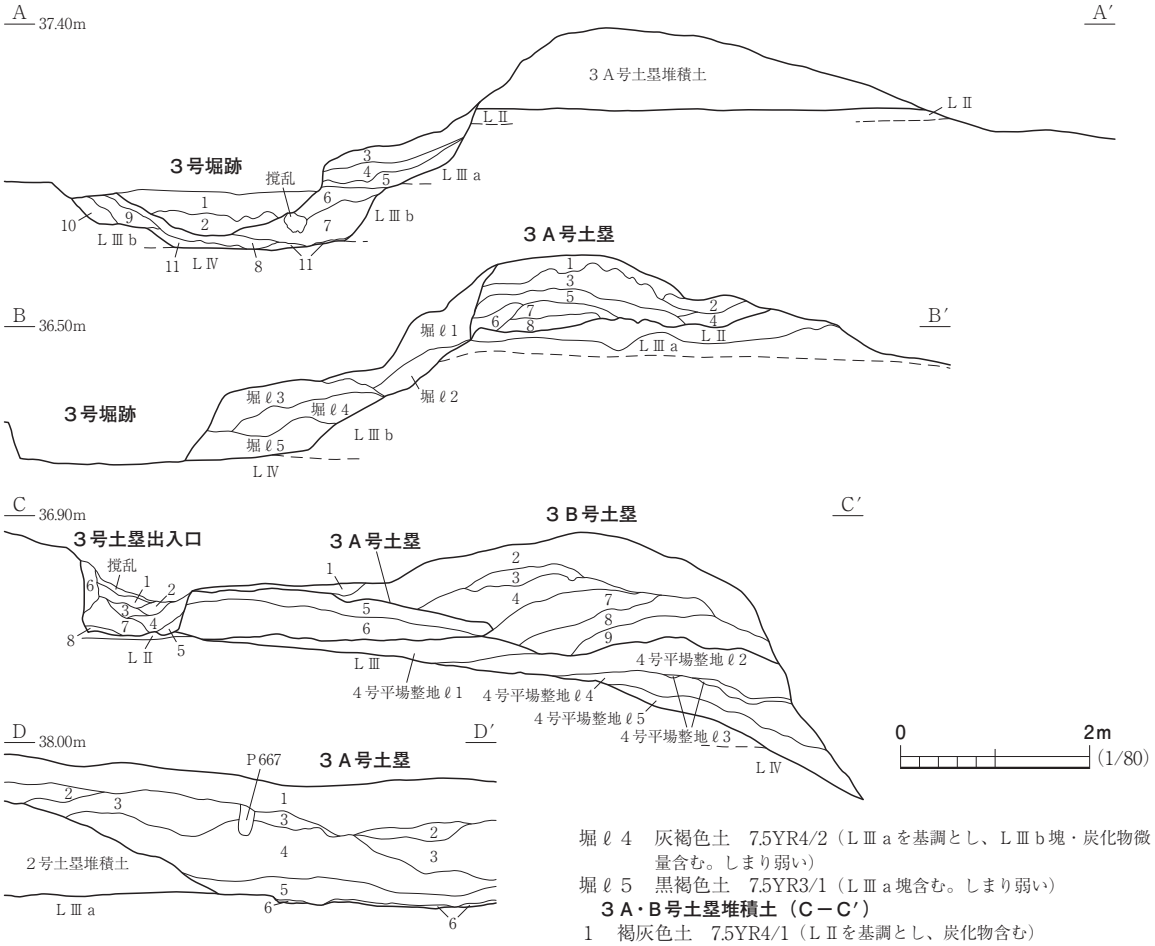
の上に、３Ｂ号土塁を土手状に積土する（Ｃ－Ｃ′ℓ７～９）。④３Ａ号土塁を築く（Ｂ－Ｂ′ℓ１～８、Ｃ－Ｃ′ℓ５・６、Ｄ－Ｄ′ℓ１～６）。⑤３Ａ号土塁と３Ｂ号土塁の接する部分を積土で覆う（Ｃ－Ｃ′ℓ１～４）。⑤土塁を掘削して出入口を造り出す。

３号堀跡は３Ａ号土塁の４号平場側に位置している。土層断面を検討した結果、覆土上位に楕円形の掘り込みを確認したことから、堀の埋め立て後、縮小して再度、掘り直したと判断した。以下「新期」、「古期」として報告する。

新期の堀跡については底面に自然堆積土が認められないことから、使用はごく短期間であり、古期の堀跡を埋め立てる際の時間差、あるいは城館とは関連しない可能性がある。

新期の堀跡は、旧段階の堀跡の堆積土を一回り小さく掘り込んで構築している。５号平場側の上端には、幅１～1.7m程度の細長い平坦面があり、そこに新段階の堀跡を掘削した際の土砂が堆積していた。

規模は長さ17.45m、幅は1.7～2.8m、４号平場からの深さは55cmを測る。周壁の角度は25～



３号堀跡堆積土（Ａ－Ａ′）

1　灰黄褐色土　10YR6/2（ＬⅢａを基調とし、ＬⅣ塊含む）
2　褐灰色土　10YR5/1（ＬⅡを基調とし、黒褐色土微量含む）
3　灰褐色土　7.5YR5/2（ＬⅢａを基調とし、炭化物含む。しまり弱い）
4　灰褐色土　7.5YR5/2（ＬⅢａを基調とし、ＬⅢｂ塊・炭化物微量、焼土ごく少量含む。しまり弱い）
5　灰褐色土　7.5YR4/2（ＬⅢａを基調とし、ＬⅢａ塊・炭化物微量含む。しまり弱い）
6　灰黄褐色土　10YR6/2（ＬⅢａを基調とし、ＬⅡ塊含む）
7　褐灰色土　10YR4/1（ＬⅡを基調とし、炭化物含む）
8　灰黄褐色土　10YR4/2（黒褐色土帯状に含む）
9　褐灰色土　10YR4/1（白色粘土・黒褐色土含む）
10　褐灰色土　10YR4/1（白色粘土含む）
11　黒褐色土　10YR3/1（腐植土多量含む）

３Ａ号土墨・３号堀跡堆積土（Ｂ－Ｂ′）

1　灰褐色土　7.5YR6/2（ＬⅢａを基調とし、炭化物微量含む）
2　褐灰色土　7.5YR5/1（ＬⅡを基調とし、ＬⅢｂ塊多量含む）
3　にぶい橙色土　7.5YR7/4（ＬⅢａを基調とし、黒褐色土・炭化物含む）
4　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅡを基調とし、ＬⅢａ塊含む）
5　にぶい橙色土　7.5YR7/4（ＬⅢｂを基調とし、ＬⅢａ塊・炭化物含む）
6　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅡを基調とし、ＬⅢｂ塊・炭化物含む）
7　にぶい橙色土　7.5YR7/4（ＬⅢｂを基調とし、ＬⅢａ塊・黒褐色土塊・炭化物含む）
8　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅡを基調とし、ＬⅢａ・ｂ塊・炭化物含む）
堀ℓ１　灰褐色土　7.5YR5/2（炭化物微量含む。しまり弱い）
堀ℓ２　灰褐色土　7.5YR5/2（ＬⅢｂ塊・炭化物微量含む。しまり弱い）
堀ℓ３　灰褐色土　7.5YR4/2（ＬⅢａを基調とし、炭化物含む。しまり弱い）
堀ℓ４　灰褐色土　7.5YR4/2（ＬⅢａを基調とし、ＬⅢｂ塊・炭化物微量含む。しまり弱い）
堀ℓ５　黒褐色土　7.5YR3/1（ＬⅢａ塊含む。しまり弱い）

３Ａ・Ｂ号土墨堆積土（Ｃ－Ｃ′）

1　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅡを基調とし、炭化物含む）
2　にぶい褐色土　7.5YR6/3（ＬⅢａを基調とし、黒褐色土塊微量含む）
3　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅡとＬⅢａの混合土）
4　にぶい褐色土　7.5YR5/3（ＬⅢａを基調とし、ＬⅢｂ塊・褐灰色土塊含む）
5　灰黄褐色土　10YR6/2（ＬⅢｂを基調とし、ＬⅣ塊微量含む）
6　灰黄褐色土　10YR5/2（ＬⅢａとＬⅢｂの混合土）
7　灰褐色土　7.5YR4/2（ＬⅢａを基調とし、ＬⅢｂ塊・褐灰色土塊微量含む）
8　褐色土　7.5YR4/3（ＬⅢａを基調とし、褐灰色土塊微量含む）
9　褐色土　7.5YR4/3（ＬⅢａを基調とする）

４号平場整地土（Ｃ－Ｃ′）

1　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅡを基調とし、ＬⅢａ塊微量含む）
2　灰褐色土　5YR4/2（ＬⅢａを基調とし、炭化物含む）
3　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅢｂを基調とし、ＬⅢａ塊微量含む）
4　灰褐色土　5YR4/2（ＬⅢａを基調とし、黒褐色土・炭化物含む。土墨ℓ２と近似）
5　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅡを基調とし、黒褐色土含む）

３号土墨出入口堆積土（Ｃ－Ｃ′）

1　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅢｂ塊多量含む）
2　灰褐色土　7.5YR4/2（ＬⅢｂ塊微量含む）
3　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅢｂ塊・灰褐色土塊含む）
4　灰褐色土　7.5YR5/2（ＬⅢｂ塊多量含む）
5　灰褐色土　7.5YR5/2（ＬⅢｂ塊含む）
6　褐灰色土　7.5YR5/1（炭化物微量含む）
7　褐灰色土　7.5YR5/1（白色粘土塊微量含む）
8　黒褐色土　7.5YR3/1（白色粘土塊微量含む）

３Ａ号土墨堆積土（Ｄ－Ｄ′）

1　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅡを基調とし、炭化物含む）
2　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅡを基調とし、ＬⅢｂ塊・炭化物含む）
3　にぶい黄橙色土　10YR7/2（ＬⅢｂを基調とし、ＬⅢａ塊含む）
4　灰褐色土　7.5YR6/2（ＬⅢａを基調とし、黒褐色土塊含む）
5　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅡを基調とし、ＬⅢａ塊微量含む）
6　にぶい黄橙色土　10YR7/2（ＬⅢｂを基調とする）

図63　３号土墨・３号堀跡（２）

27°と緩やかに立ち上がる。北東隅の３号土塁出入口と接する周壁は、スロープ状になる。

新期の堀跡の堆積土は図63Ａ－Ａ′ℓ１・２である。ℓ１はＬⅢａを由来とする灰黄褐色土で、ＬⅣ塊を含む。ℓ２はＬⅡを由来とする褐灰色土で、黒褐色土を含んでいる。いずれも人為堆積土で、自然堆積土が認められないことから、掘削後すぐにℓ１・２によって埋め立てられたと判断した。新期の堀跡を掘削した際の土は、Ａ－Ａ′ℓ３～５、Ｂ－Ｂ′ℓ１・２である。旧段階の堀跡の上端と、３号土塁の下端を覆うように堆積している。いずれもＬⅢａを由来とし、ＬⅢｂ塊や炭化物、焼土などを含んでいる。

古期堀跡の規模は、長さ26.45m、幅は3.9～5.6m、深さは最大68cmである。４号平場側の側壁中位には、幅50cm程度の小段状の高まりが一部で確認できた。周壁の角度は、４号平場側が27°、５号平場側は56°と急である。北東隅の出入口と接する側壁はスロープ状である。底面はＬⅢ・Ⅳ上面まで掘削し、平坦だがわずかに南西側に向けて傾斜している。

古期の堀跡堆積土は、Ａ－Ａ′のℓ６～11の６層に分けられた。ℓ６はＬⅢａを由来とする灰黄褐色土でＬⅡ塊を含み、ℓ７はＬⅡを由来とする褐灰色土で炭化物を含む。ℓ６・７は土質の特徴から、３号土塁や平場を造成した土を利用した人為的な埋め立てと判断した。ℓ８は灰黄褐色土で、堆積土中に帯状の黒褐色土が認められることから、４号平場からの流入土と判断した。ℓ９・10はＬⅢｂ塊を含む褐灰色土で、堀跡の４号平場側の縁辺を埋め立てている。ℓ11の黒褐色土には腐植土が含まれることから、機能時の自然堆積と判断した。Ｂ－Ｂ′では、ℓ３～５の３層が旧段階の堀跡堆積土で、ℓ３・４はＬⅢａを由来とする灰褐色土で、ℓ５はＬⅢａ塊を含む黒褐色土である。

遺　　物（図64、写真63）

３号土塁から弥生土器２点、陶器３点、石器５点、３号堀跡からは弥生土器５点、土師器４点、陶器１点、石製品１点、石器２点が出土し、７点を図示した。図64－１は古瀬戸後期様式の祖母懐茶壺である。体部下半の資料で、外面の上位には鉄釉が施される。図64－２は常滑焼の壺の体部である。図64－３はロクロ成形のかわらけの底部である。図64－４は砂岩製の石臼である。上臼の一部で、下臼と接する面の縁辺は磨かれ、ススが付着している。図64－５は花崗岩製の温石である。比較的大型で、自然石をそのまま使用している。表・裏面の中央にはススが付着している。図64－６は溶結凝灰岩製の砥石である。円礫の縁辺部をそのまま砥石に利用している。図64－７は珪質頁岩製の錐形石器である。両端部には微細剥離による抉りが認められ、下端部は鋭利となる。左面の左上側縁には、連続した細かい剥離が認められることから、削器としての使用も想定される。

ま と め

３Ａ号土塁・３号堀跡は、４号平場と５号平場を区画し、北東隅部には３Ｂ号土塁、平場間をつなぐ出入口が構築されている。性格として、５号平場（主郭）へ侵攻する敵を防ぐ役割があったと考えられる。２号土塁・２号堀跡と比較すると小規模だが、実効法高は3.15mあり、容易に敵は侵攻

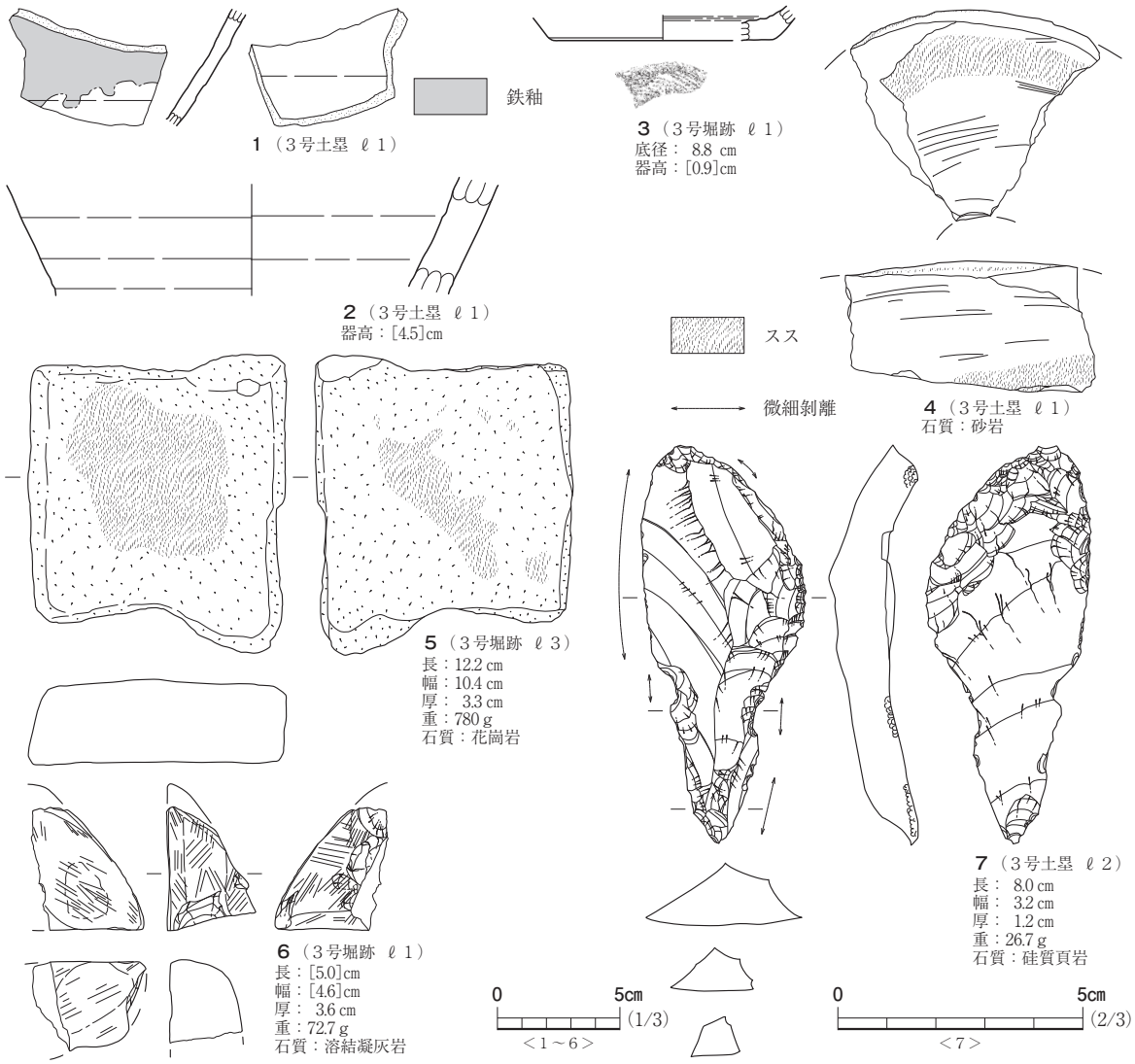


図64　３号土墨・３号堀跡出土遺物

できないと推測される。３Ａ号土墨の５号平場側の傾斜は16～20°と緩やかで、容易に土墨の頂部へ到達できることから、５号平場から土墨頂部に人を配置して守備にあたらせていた可能性がある。土墨の頂部には柵などの防御施設は確認できなかった。３Ａ号土墨と３号堀跡の間にある間隔は、堀に土墨の崩落土が流れ込まないようにする工夫と推測される。

出入口は下端の幅が95㎝と、複数人での往来を制限していることから、敵の侵攻を遅らせる工夫と推測される。出入口には門跡のような柱穴は確認できず、常時開口していたか、地面に痕跡を持たない門を付設していた可能性がある。

堀跡は埋め立てられた後、縮小し再度構築している。新期の堀跡については、使用経過による自然堆積が認められないことから、ごく短期間で廃絶したものか、遺構内堆積土の一単位の可能性もある。

年代は出土した遺物の特徴や、城館に関連する遺構であることから、15世紀の所産と考えている。

（佐　藤）

４号土塁（図65、写真46）

４号土塁は、５号平場の北東隅、Ｙ・Ｚ９・10グリッドに位置する。４号土塁は、富岡町史に記載がなく、今回の発掘調査で確認された遺構である。発掘調査前の現況観察では緩やかな盛土状の遺構として認識し、表土除去後の精査によって中世城館に関連した土塁として確認した。

検出面はＬⅢａと５号平場整地の上面である。本遺構は、南東側に隣接する１号門跡と連動して斜面下位の６号平場と５号平場を区画している。東側には２号道跡が隣接し、西側12mには５号土塁が位置している。本遺構は１Ｄ号門跡、68号土坑、ＧＰ666・675、５号平場整地より新しい。

４号土塁は５号平場の北側縁辺に張り出すように構築され、平面形は５号平場の地形に沿った不整な楕円形を呈する。土塁の規模は、長さは8.8m、幅は下端で６ｍ、検出面からの高さは1.36mを測る。

積土は４層に分けられた。ℓ１・３はＬⅢａを由来とする橙色土で、褐灰色土塊・ＬⅢｂ塊を含む。ℓ２はＬⅡを由来とする褐灰色土で、ＬⅢｂ塊を含む。ℓ４は黒褐色砂質土で水性堆積が認められることから、５号平場整地後の自然堆積と判断した。４号土塁は、５号平場周辺のＬⅢａ・ｂを積土とし、短期間に盛土している。この際、２号土塁のように小型の土塁を構築し、そこから拡張して盛土する方法はとらず、広範囲に平坦に積んでいる。盛土のしまりは弱く、版築などの痕跡は認められない。

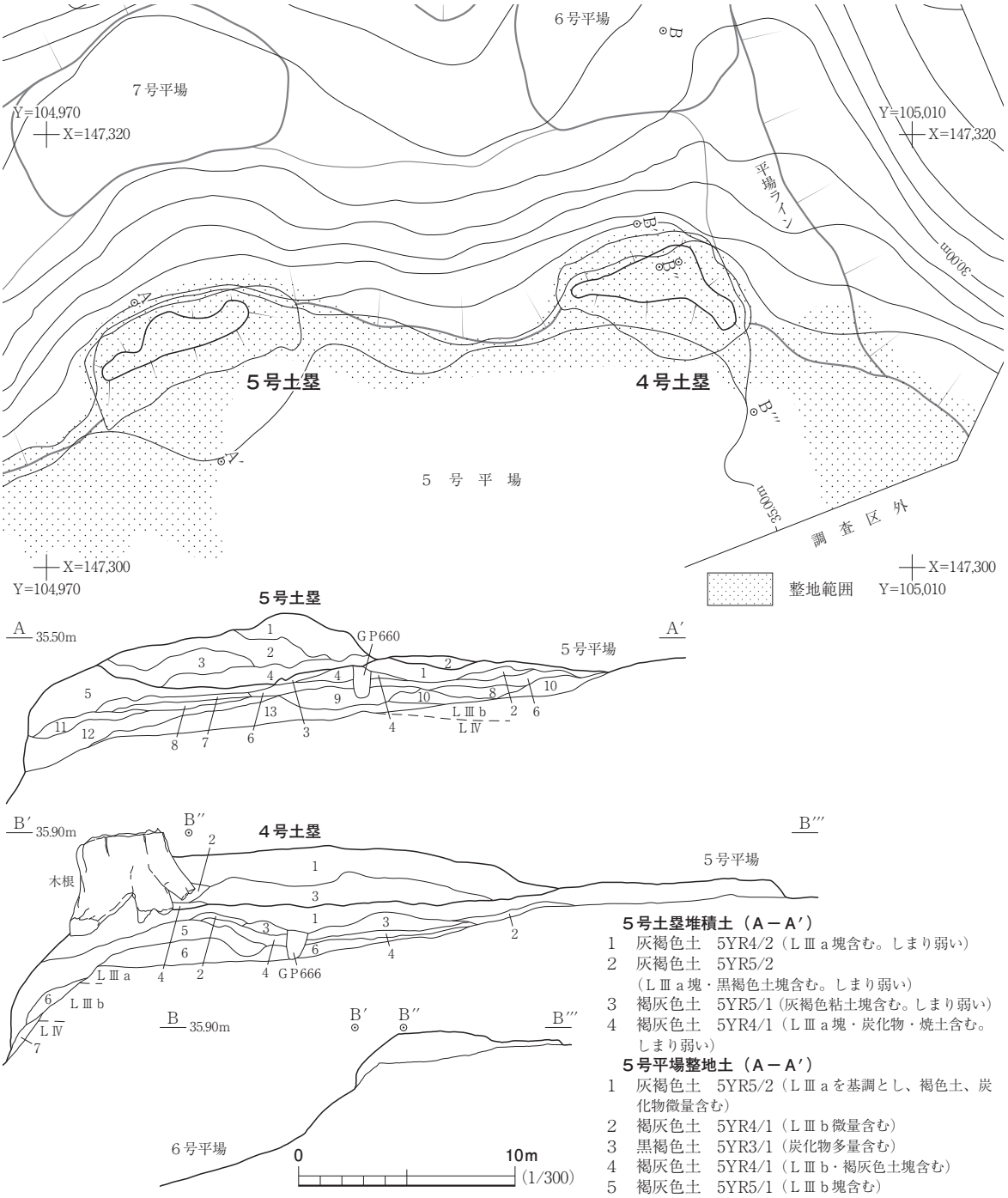
遺　　物（図66、写真63）

４号土塁からは弥生土器26点、石製品１点、石器７点が出土した。また、土塁の底面付近からは焼土塊の小片が６点出土している。この中から焼土塊１点、砥石１点、石斧１点を図示した。図66－１は焼土塊である。指頭やスサの圧痕が明瞭に認められる。図66－２は軟質の珪質頁岩製の砥石である。上端は欠損している。５面を砥面として利用し、側面には鋸引きとみられる細長い線状痕が多く認められる。右面中央部には多方向の線状痕が認められる。図66－３は溶結凝灰岩製の磨製石斧である。両側縁には、研磨より古い成形時の剥離痕が認められる。

ま と め

４号土塁は６号平場から２号道跡を通って５号平場へ来る敵の侵入を、１号門跡とともに防ぐ施設と考えられる。４号土塁は遺構の重複関係から、１Ａ・Ｂ号門跡と同時期に機能していたものと考えられる。土塁の上端に櫓や柵列などの施設は認められない。土塁は、５号平場から突出し、北東方向の旧毛萱村や太平洋、北西側の６・７号平場や、城内外を結ぶ道を一望できることから、周囲の監視も兼ねている可能性がある。年代は城館に関連する遺構であることから、15世紀の所産と考えている。

（佐　藤）



５号土墨堆積土（Ａ－Ａ′）

1　灰褐色土　5YR4/2（ＬⅢａ塊含む。しまり弱い）
2　灰褐色土　5YR5/2
（ＬⅢａ塊・黒褐色土塊含む。しまり弱い）
3　褐灰色土　5YR5/1（灰褐色粘土塊含む。しまり弱い）
4　褐灰色土　5YR4/1（ＬⅢａ塊・炭化物・焼土含む。しまり弱い）

５号平場整地土（Ａ－Ａ′）

1　灰褐色土　5YR5/2（ＬⅢａを基調とし、褐色土、炭化物微量含む）
2　褐灰色土　5YR4/1（ＬⅢｂ微量含む）
3　黒褐色土　5YR3/1（炭化物多量含む）
4　褐灰色土　5YR4/1（ＬⅢｂ・褐灰色土塊含む）
5　褐灰色土　5YR5/1（ＬⅢｂ塊含む）
6　褐灰色土　5YR4/1（炭化物含む）
7　灰褐色土　5YR5/2
（ＬⅢａを基調とし、ＬⅢｂ塊・褐灰色土多量含む）
8　にぶい橙色土　5YR6/3
（ＬⅢａを基調とし、褐灰色土塊含む）
9　褐灰色土　5YR5/1（砂礫・ＬⅢｂ塊微量含む）
10　灰褐色土　5YR5/2
（ＬⅢａを基調とし、褐灰色土含む）
11　褐灰色土　5YR4/1（炭化物含む）
12　褐灰色土　5YR4/1（ＬⅢａ塊・炭化物微量含む）
13　灰褐色土　5YR5/2（ＬⅢａを基調とし、ＬⅣ塊含む）

４号土墨堆積土（Ｂ－Ｂ′）

1　橙色土　7.5YR7/6（ＬⅢａを基調とし、褐灰色土塊・炭化物含む。しまり弱い）
2　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅡを基調とし、ＬⅢｂ塊・炭化物微量含む。しまり弱い）
3　橙色土　7.5YR7/6（ＬⅢａを基調とし、ＬⅢｂ塊・褐灰色土含む。しまり弱い）
4　黒褐色砂質土　7.5YR3/1（炭化物微量含む。しまり弱い）

５号平場整地土（Ｂ－Ｂ′）

1　橙色土　7.5YR7/6（ＬⅢａを基調とし、褐灰色土塊・炭化物含む）
2　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅡを基調とし、ＬⅢｂ塊・炭化物微量含む）
3　褐灰色土　7.5YR4/1（ＬⅢｂ塊・黒褐色土塊・炭化物多量含む）
4　褐灰色砂質土　7.5YR5/1（ラミナ状の水性堆積）
5　黒褐色土　7.5YR3/1（ＬⅢａ塊・炭化物多量含む）
6　橙色土　7.5YR7/6（ＬⅢａを基調とし、ＬⅢｂ塊・炭化物含む）
7　黒褐色土　7.5YR3/1（ＬⅢｂ塊含む）

0　10m　(1/300)　＜平面図＞　　0　2m　(1/80)　＜断面図＞

図65　４・５号土墨

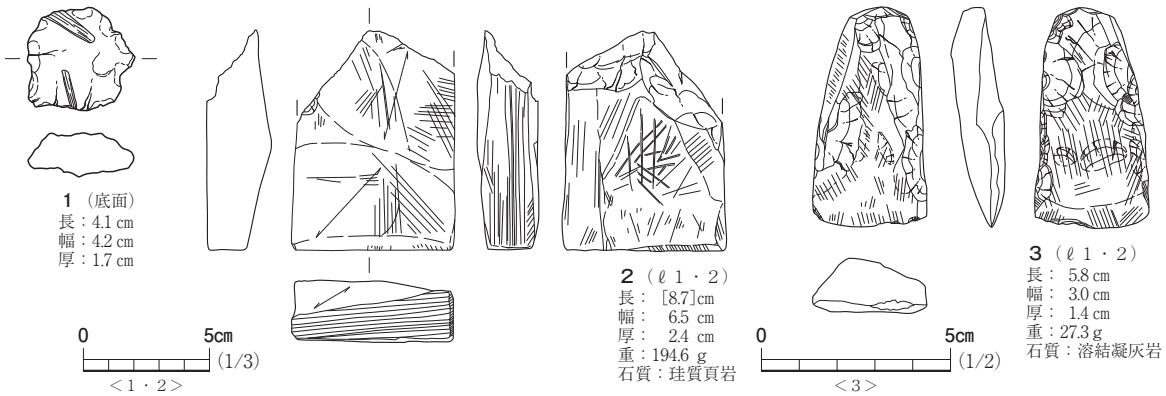


図66　４号土塁出土遺物

５号土塁（図65、写真46）

５号土塁は、５号平場の北隅、Ｗ・Ｘ９・10グリッドに位置する。５号土塁は、富岡町史に記載がなく、今回の発掘調査で確認された遺構である。発掘調査前の現況観察では緩やかな盛土状の遺構として認識し、表土除去後の精査によって中世城館に関連した土塁として確認した。

検出面は５号平場整地の上面である。東側12mには４号土塁が、西側12mには３号土塁が立地している。本遺構は８号焼土遺構、ＧＰ660、５号平場整地より新しい。

５号土塁は５号平場の北側縁辺に張り出すように構築され、平面形は５号平場の地形に沿った不整な長方形を呈する。土塁の規模は、長さは10.4m、幅は下端で4.35m、検出面からの高さは92cmを測る。

積土は４層に分けられた。ℓ１・２は灰褐色土で、ＬⅢａ塊や黒褐色土塊を含む。ℓ３・４は褐灰色土で灰褐色粘土塊やＬⅢａ塊を含む。多くの積土にＬⅢａ塊を含んでいることから、５号平場周辺のＬⅡやＬⅢaを土塁の積土とし、短期間に盛土していると判断した。この際、２号土塁のように縁辺に小土塁を構築し、そこから拡張して盛土する方法はとらず、広範囲に平坦に積んでいる。盛土のしまりは弱く、版築などの痕跡は認められない。５号土塁から遺物は出土していない。

ま と め

５号土塁は５号平場の北側縁辺部の張り出しに位置し、斜面下位の６・７号平場から来る敵の侵入を防ぐ施設と考えられる。土塁の上端に櫓や柵列などの施設は認められない。年代は城館に関連する遺構であることから、15世紀の所産と考えている。　（佐　藤）

表２－１　小穴群

ＧＰ名	グリッド	長軸(cm)	深さ(cm)	覆土	備考(重複や出土遺物など)
Ｐ１	O15	17	40	C	
Ｐ２	M16	93	40	B	
Ｐ４	N15	36	56	C	
Ｐ６	M15	32	33	C	
Ｐ８	M15	21	30	A	
Ｐ10	M15	20	57	C	
Ｐ11	M15	24	30	B	
Ｐ12	M15	20	16	B	
Ｐ13	M15	36	58	C	
Ｐ14	N16	27	59	A	
Ｐ15	N16	38	48	B	
Ｐ16	M15	28	－	C	
Ｐ18	M15	20	16	B	
Ｐ19	M16	42	49	B	
Ｐ20	N15	27	42	－	
Ｐ21	Q14	23	25	B	
Ｐ22	Q14	25	35	C	
Ｐ24	Ｐ14	24	26	B	
Ｐ25	Q14	20	20	C	
Ｐ26	Ｐ14	16	20	B	
Ｐ27	O15	30	35	C	
Ｐ28	O15	26	50	C	
Ｐ29	O15	22	24	B	
Ｐ31	M15	22	30	B	
Ｐ32	O15	20	27	B	
Ｐ33	Ｐ14	22	28	B	
Ｐ34	M15	32	57	B	
Ｐ35	O15	30	52	C	
Ｐ36	R14	50	18	－	ＳＩ01内
Ｐ37	M15	20	42	C	
Ｐ38	M15	20	24	C	
Ｐ39	M15	34	70	C	
Ｐ40	M15	23	40	C	
Ｐ41	M15	24	55	C	
Ｐ42	M15	20	46	C	
Ｐ43	N15	26	48	C	
Ｐ44	N15	29	50	B	
Ｐ45	Ｐ15	30	40	C	
Ｐ46	Ｐ15	20	30	A	
Ｐ47	Ｐ15	23	35	C	
Ｐ48	O15	19	29	C	
Ｐ49	Ｐ15	27	43	C	
Ｐ50	Ｊ18	74	45	C	
Ｐ52	K16	30	15	C	
Ｐ53	K16	73	27	C	
Ｐ54	K16	30	10	C	
Ｐ57	K17	110	15	B	
Ｐ58	K17	65	16	B	
Ｐ59	Ｐ14	31	14	B	
Ｐ60	O14	20	20	C	
Ｐ61	O14	30	23	B	
Ｐ62	M15	35	30	B	
Ｐ63	M15	40	21	B	
Ｐ64	M14	40	30	B	
Ｐ65	M15	25	38	B	
Ｐ66	M15	31	25	B	
Ｐ67	M16	47	44	B	
Ｐ68	Y10	25	45	D	
Ｐ69	Y10	35	73	B	
Ｐ70	Y10	26	72	B	
Ｐ71	Y10	36	64	B	
Ｐ73	Y10	28	55	B	
Ｐ75	Y11	24	22	D	
Ｐ76	Y10	33	32	B	
Ｐ77	Y11	44	70	B	礫
Ｐ78	Y10	29	24	B	
Ｐ79	Y10	32	51	B	
Ｐ80	Y11	22	43	B	
Ｐ81	Y10	28	46	B	
Ｐ82	Y10	36	35	B	
Ｐ83	Y10	30	48	B	
Ｐ84	Y10	45	50	B	
Ｐ85	Y10	32	43	B	
Ｐ86	Y10	35	53	C	
Ｐ87	Y10	33	63	D	
Ｐ88	Y10	28	40	B	
Ｐ89	Y10	33	59	B	
Ｐ90	Y10	38	43	B	
Ｐ91	X10	38	55	C	
Ｐ93	X10	20	44	C	
Ｐ94	Y10	29	45	D	
Ｐ95	Y10	32	35	D	
Ｐ96	Y10	40	17	B	
Ｐ97	Y10	41	47	C	
Ｐ98	Y10	26	26	B	
Ｐ101	Y10	21	21	不明	
Ｐ102	Y10	58	58	D	ＧＰ103との新旧不明
Ｐ103	Y10	52	52	D	ＧＰ102との新旧不明
Ｐ104	Y10	42	42	D	
Ｐ105	Y10	36	36	D	
Ｐ106	Y10	65	65	C	
Ｐ107	X10	41	41	D	
Ｐ108	X10	24	24	D	
Ｐ110	X10	26	26	D	ＧＰ331より新しい
Ｐ111	X10	41	41	C	
Ｐ113	X10	27	27	B	
Ｐ114	X11	71	71	B	
Ｐ116	X11	58	58	B	
Ｐ117	X11	35	35	B	
Ｐ119	X11	72	72	D	

ＧＰ名	グリッド	長軸(cm)	深さ(cm)	覆土	備考(重複や出土遺物など)
Ｐ121	X11	56	56	A	土製品２点
Ｐ122	W10	39	37	D	
Ｐ123	X10	22	22	D	
Ｐ127	X11	30	30	C	
Ｐ128	Y11	14	14	B	
Ｐ129	X10	64	64	D	ＧＰ331より古い
Ｐ132	X10	44	40	A	
Ｐ133	Y10	33	31	B	
Ｐ134	X10	38	27	B	
Ｐ135	X11	19	58	B	
Ｐ136	X11	51	53	D	
Ｐ137	X10	38	31	D	
Ｐ138	X10	35	48	D	
Ｐ139	X10	45	－	D	
Ｐ140	X10	28	41	B	
Ｐ141	X11	28	17	D	
Ｐ142	Y11	28	39	D	
Ｐ144	X10	50	64	B	
Ｐ145	Y10	34	46	C	
Ｐ146	X11	41	50	A	
Ｐ147	X11	48	60	C	ＧＰ682との新旧不明
Ｐ148	X11	49	21	B	
Ｐ149	X11	47	66	A	
Ｐ150	X10	23	25	B	
Ｐ151	W11	49	77	B	
Ｐ152	X10	38	54	B	
Ｐ153	X11	37	18	－	根石
Ｐ155	X10	25	55	D	
Ｐ156	X10	37	24	A	
Ｐ157	W11	32	53	D	
Ｐ159	X11	71	17	B	
Ｐ160	X11	34	9	A	
Ｐ161	X10	58	62	A	
Ｐ162	W11	50	49	D	
Ｐ163	W11	38	47	D	
Ｐ164	W11	25	15	D	
Ｐ165	X11	48	57	B	ＧＰ296が新しい　弥生土器９点
Ｐ166	X11	34	37	C	
Ｐ167	W11	28	32	D	
Ｐ168	W10	48	66	D	
Ｐ169	W11	44	2	D	
Ｐ170	W11	44	80	D	
Ｐ171	W11	55	46	C	
Ｐ172	W11	71	30	B	
Ｐ173	X11	50	65	B	
Ｐ174	W11	38	56	D	弥生土器１点　石器１点
Ｐ175	W11	19	21	B	
Ｐ176	W11	31	61	B	
Ｐ177	X11	34	44	B	弥生土器１点　土師器１点　石器２点
Ｐ178	W11	33	70	C	
Ｐ179	W11	45	20	A	
Ｐ180	W11	39	61	B	
Ｐ181	W11	181	73	D	銭貨
Ｐ182	W11	38	54	B	
Ｐ183	W11	64	70	D	
Ｐ184	W12	54	63	D	
Ｐ185	W11	24	43	D	
Ｐ186	W11	38	56	D	
Ｐ187	W11	42	65	B	
Ｐ188	V11	40	77	B	弥生土器２点
Ｐ189	V12	41	70	B	
Ｐ190	W11	27	60	B	
Ｐ191	V11	24	70	D	
Ｐ192	V11	29	27	D	
Ｐ193	V11	52	72	D	弥生土器１点　石器１点
Ｐ194	V11	46	60	D	
Ｐ195	V11	32	42	D	
Ｐ196	W11	40	42	B	
Ｐ197	W11	39	56	B	
Ｐ198	W10	46	60	B	
Ｐ199	V11	45	75	D	
Ｐ200	V11	55	65	D	
Ｐ201	W10	82	10	D	
Ｐ202	V11	42	70	D	
Ｐ203	V12	48	69	D	
Ｐ204	V11	42	64	D	
Ｐ205	V12	50	66	B	
Ｐ206	V12	44	72	B	
Ｐ207	V12	29	70	B	
Ｐ208	W11	62	89	C	
Ｐ209	V12	83	62	B	
Ｐ210	V11	35	70	B	
Ｐ211	V11	25	40	B	
Ｐ212	V12	50	64	D	
Ｐ213	V12	30	64	D	
Ｐ214	V12	32	74	B	
Ｐ215	V11	50	70	B	ＧＰ216より新しい
Ｐ216	V11	26	20	D	ＧＰ215より古い
Ｐ217	V12	44	71	C	
Ｐ218	V12	37	65	D	
Ｐ219	V12	28	59	B	
Ｐ221	V11	35	69	D	
Ｐ223	V12	32	65	D	
Ｐ224	V11	56	50	C	
Ｐ225	V11	45	65	B	
Ｐ226	V12	39	40	B	
Ｐ227	V11	38	27	D	
Ｐ228	W11	41	67	B	
Ｐ229	V12	34	50	D	ＧＰ230より新しい
Ｐ230	V12	39	60	B	ＧＰ229より古い

表２－２　小穴群

ＧＰ名	グリッド	長軸(cm)	深さ(cm)	覆土	備考(重複や出土遺物など)
Ｐ232	W11	37	50	D	
Ｐ233	W11	31	48	D	
Ｐ234	W12	29	70	B	礫多量含む　土師器１点
Ｐ235	W12	36	60	B	ＧＰ257・258との新旧不明
Ｐ236	V11	27	55	D	
Ｐ237	V11	31	50	D	
Ｐ238	W11	47	51	D	
Ｐ239	W11	52	65	D	
Ｐ240	V11	41	50	D	
Ｐ241	V11	37	74	D	
Ｐ242	W11	45	20	D	
Ｐ243	W11	28	20	B	
Ｐ244	V11	40	52	D	
Ｐ245	V11	60	40	D	ＧＰ269より新しい
Ｐ246	W11	34	61	B	土師器１点　陶器１点
Ｐ247	W11	42	41	D	
Ｐ248	W11	104	35	C	
Ｐ249	W11	48	41	C	
Ｐ250	V11	43	50	D	弥生土器９点
Ｐ251	W11	47	70	B	
Ｐ252	W11	13	10	D	
Ｐ253	W11	28	30	D	
Ｐ254	V11	47	60	B	
Ｐ256	V11	44	72	B	
Ｐ257	W12	32	27	B	ＧＰ235・258との新旧不明
Ｐ258	W12	38	62	B	ＧＰ235・257との新旧不明
Ｐ259	W11	37	42	D	
Ｐ260	W11	32	31	D	
Ｐ261	W11	20	20	D	
Ｐ262	W11	18	21	D	
Ｐ263	W11	40	44	D	
Ｐ264	W11	24	42	B	
Ｐ265	W11	33	33	D	
Ｐ266	W11	30	40	B	
Ｐ267	W11	32	31	B	
Ｐ268	W11	34	45	D	
Ｐ269	V11	22	12	D	ＧＰ245より古い
Ｐ270	W11	46	71	B	
Ｐ271	V11	40	70	C	
Ｐ272	W11	39	37	B	
Ｐ273	W11	38	51	C	
Ｐ274	W11	30	52	D	
Ｐ275	V11	23	60	D	
Ｐ276	V11	27	65	B	
Ｐ277	W10	30	38	D	
Ｐ278	W11	41	50	B	炭化物分析
Ｐ279	W11	33	49	D	
Ｐ280	X11	38	45	B	
Ｐ281	W11	32	52	B	
Ｐ283	W11	25	38	D	
Ｐ285	V11	22	21	B	
Ｐ286	W11	25	21	B	
Ｐ287	W11	40	20	D	ＧＰ288・289との新旧不明、ＧＰ290より古い
Ｐ288	W11	41	67	B	ＧＰ287・289との新旧不明
Ｐ289	W11	25	20	D	ＧＰ287・288との新旧不明
Ｐ290	W11	51	71	C	
Ｐ291	V12	34	74	－	
Ｐ292	X11	29	67	C	
Ｐ293	W11	50	42	B	
Ｐ294	X11	40	44	C	ＧＰ685より古い
Ｐ295	V11	36	52	B	
Ｐ296	X11	64	43	D	ＧＰ165より新しい　弥生土器２点　土製品１点
Ｐ297	X10	36	50	D	
Ｐ298	X11	35	36	B	
Ｐ299	W10	25	20	B	
Ｐ300	X11	49	56	C	
Ｐ302	X10	47	58	C	
Ｐ304	V11	47	57	B	
Ｐ309	R12	35	39	C	
Ｐ312	W11	42	61	－	
Ｐ313	X11	70	38	D	
Ｐ314	X11	34	21	C	
Ｐ320	S10	27	6	砂混	
Ｐ321	S10	27	51	砂混	
Ｐ322	S10	29	27	砂混	
Ｐ325	S10	38	50	砂礫	
Ｐ326	S10	26	31	砂礫	
Ｐ327	S11	38	31	砂礫	
Ｐ328	S10	28	17	砂礫	
Ｐ331	X10	61	36	C	ＧＰ129より新しくG110より古い
Ｐ332	X11	32	70	C	
Ｐ334	X11	61	53	C	
Ｐ335	X10	41	42	D	
Ｐ338	X10	30	42	C	
Ｐ339	X11	79	73	B	
Ｐ340	X10	36	41	D	
Ｐ342	X10	32	44	D	
Ｐ344	Y11	33	54	B	ＧＰ345より新しい
Ｐ345	Y11	49	60	C	ＧＰ344より古い
Ｐ346	X10	43	42	D	
Ｐ347	X10	40	4	C	
Ｐ348	X10	42	60	D	
Ｐ352	Y10	75	72	C	
Ｐ354	Y10	51	57	D	
Ｐ355	Y11	40	62	C	
Ｐ356	X10	38	29	C	
Ｐ357	Y10	36	64	D	
Ｐ358	Y10	50	63	C	
Ｐ359	Y10	37	54	D	
Ｐ360	W10	79	91	C	

ＧＰ名	グリッド	長軸(cm)	深さ(cm)	覆土	備考(重複や出土遺物など)
Ｐ361	X10	78	100	C	
Ｐ362	Y10	35	70	D	
Ｐ363	Y10	46	40	D	
Ｐ364	Y10	30	25	D	
Ｐ365	Y10	32	70	C	
Ｐ366	Y10	32	50	D	
Ｐ367	Y10	35	45	D	
Ｐ368	Y10	65	72	D	
Ｐ369	Y10	50	40	D	
Ｐ370	Y10	28	32	D	
Ｐ372	Y10	39	70	D	
Ｐ373	Y10	33	39	D	
Ｐ374	Y10	40	49	D	
Ｐ375	Z10	30	70	D	
Ｐ377	Y10	60	72	C	
Ｐ379	Y10	35	51	D	
Ｐ381	S10	56	50	B	
Ｐ383	T11	40	45	B	
Ｐ384	T11	36	58	B	
Ｐ385	Y10	25	54	B	
Ｐ388	U12	26	38	D	弥生土器４点　石器２点
Ｐ389	U11	29	30	C	
Ｐ390	V12	35	48	D	
Ｐ391	U11	50	50	C	
Ｐ392	Y10	33	56	D	
Ｐ394	V11	31	31	D	
Ｐ395	V12	40	72	C	
Ｐ396	U12	27	45	－	
Ｐ397	U11	31	40	C	
Ｐ399	U11	30	75	D	
Ｐ400	R11	17	10	－	
Ｐ401	S11	35	40	B	
Ｐ402	S11	44	21	B	
Ｐ403	S11	16	9	B	
Ｐ404	S11	41	47	C	
Ｐ406	R12	62	52	B	
Ｐ407	S11	90	26	砂礫	
Ｐ409	S11	25	5	C	
Ｐ411	S11	37	30	B	
Ｐ412	S11	56	40	B	
Ｐ414	S11	28	50	B	
Ｐ415	S11	45	40	砂礫	
Ｐ416	S11	51	27	C	
Ｐ418	R12	20	10	C	
Ｐ419	R12	27	20	B	石器１点
Ｐ420	S11	44	51	B	
Ｐ421	R11	24	20	D	
Ｐ422	S11	24	21	B	
Ｐ423	U12	41	64	－	
Ｐ424	U12	38	45	－	
Ｐ425	U12	32	39	－	
Ｐ426	R11	27	20	－	ＧＰ427との新旧不明
Ｐ427	R11	22	48	－	ＧＰ426との新旧不明
Ｐ428	S10	26	33	－	
Ｐ430	R11	35	51	－	
Ｐ431	R11	47	18	－	近世陶器１点
Ｐ432	R11	34	51	－	
Ｐ433	R12	23	46	－	
Ｐ435	R12	22	10	－	
Ｐ436	R12	25	40	－	
Ｐ438	R11	54	60	－	
Ｐ440	R12	23	40	－	
Ｐ441	R12	33	38	－	
Ｐ442	R11	28	60	－	
Ｐ443	R11	20	15	－	
Ｐ444	S11	68	56	－	
Ｐ445	S11	22	36	－	
Ｐ446	S10	37	19	－	
Ｐ447	S11	41	56	－	
Ｐ450	R11	30	49	－	
Ｐ451	R12	23	41	－	
Ｐ453	R11	47	64	－	ＳＢ06Ｐ１との新旧不明
Ｐ454	S10	40	54	－	
Ｐ455	R11	20	20	－	
Ｐ458	R11	47	48	－	
Ｐ459	S10	49	40	－	
Ｐ460	R11	42	32	－	
Ｐ463	R11	29	43	B	
Ｐ464	R11	39	62	B	
Ｐ465	S11	35	20	砂礫	
Ｐ468	R11	21	49	B	礫あり
Ｐ469	R11	22	26	B	
Ｐ470	R11	20	16	B	
Ｐ471	S10	35	52	B	
Ｐ474	R10	21	22	B	
Ｐ475	R10	40	55	礫	
Ｐ476	R10	37	24	礫	
Ｐ477	R10	39	56	礫	
Ｐ479	R11	35	42	B	
Ｐ480	R11	30	39	C	
Ｐ481	R10	36	48	礫	
Ｐ482	R11	32	37	C	
Ｐ483	R10	42	26	B	
Ｐ484	R11	25	37	B	
Ｐ485	R11	33	57	C	
Ｐ486	R10	31	62	B	
Ｐ487	R10	37	52	B	
Ｐ488	R11	45	35	ＬⅢ	
Ｐ490	R11	52	18	腐植土	
Ｐ492	R11	44	72	B	

表２－３　小穴群

ＧＰ名	グリッド	長軸(cm)	深さ(cm)	覆土	備考(重複や出土遺物など)
Ｐ493	Ｒ10	35	35	Ｂ	
Ｐ495	Ｒ10	27	46	Ｂ	
Ｐ497	Ｒ11	39	73	Ｂ	
Ｐ498	Ｒ11	41	47	Ｂ	
Ｐ499	Ｕ11	28	50	Ｂ	
Ｐ500	Ｕ12	40	80	－	
Ｐ501	Ｕ11	24	20	Ｄ	
Ｐ503	Ｕ11	34	60	Ｄ	
Ｐ504	Ｕ12	46	40	Ｄ	
Ｐ505	Ｕ12	40	34	－	
Ｐ506	Ｖ11	22	20	－	
Ｐ507	Ｖ11	25	20	－	
Ｐ508	Ｖ11	31	40	－	
Ｐ509	Ｗ11	43	60	Ｄ	
Ｐ510	Ｘ11	34	60	－	
Ｐ511	Ｗ10	25	30	－	
Ｐ512	Ｘ10	35	31	－	
Ｐ514	Ｙ10	32	50	－	
Ｐ515	Ｙ10	42	3	－	
Ｐ516	Ｚ10	30	70	Ｄ	
Ｐ517	Ｚ10	24	58	Ｄ	
Ｐ518	Ｖ12	57	70	－	
Ｐ520	Ｑ11	42	40	礫	
Ｐ522	Ｑ11	27	35	Ｂ	
Ｐ523	Ｕ10	23	－	Ｂ	
Ｐ524	Ｒ10	28	31	砂礫	
Ｐ527	Ｕ10	32	20	－	土塁の下
Ｐ529	Ｑ11	26	31	砂礫	
Ｐ530	Ｑ11	32	40	砂礫	
Ｐ531	Ｑ11	30	29	Ｂ	
Ｐ532	Ｒ10	33	52	Ｄ	
Ｐ533	Ｒ８	27	36	Ｄ	
Ｐ534	Ｒ８	26	44	Ｄ	
Ｐ535	Ｒ８	30	53	Ｄ	
Ｐ536	Ｒ８	40	62	Ｄ	
Ｐ537	Ｒ８	33	58	Ｄ	
Ｐ538	Ｒ８	49	60	Ｄ	
Ｐ539	Ｒ８	29	39	Ｃ	
Ｐ540	Ｒ８	32	70	Ｄ	
Ｐ541	Ｒ11	27	34	Ｂ	
Ｐ542	Ｒ11	35	48	Ｃ	
Ｐ544	Ｒ８	36	21	Ｄ	
Ｐ545	Ｒ８	32	66	Ｄ	
Ｐ546	Ｒ８	30	43	Ｄ	
Ｐ547	Ｒ８	32	39	Ｄ	
Ｐ548	Ｑ８	39	40	Ｄ	
Ｐ549	Ｑ８	33	42	Ｄ	
Ｐ550	Ｑ８	35	40	Ｄ	炭含む
Ｐ551	Ｓ12	26	66	Ｂ	
Ｐ552	Ｒ11	24	39	Ｃ	
Ｐ553	Ｑ11	25	35	－	
Ｐ554	Ｒ11	23	39	Ｃ	
Ｐ555	Ｒ11	31	30	Ｂ	
Ｐ556	Ｒ11	55	38	Ｄ	
Ｐ557	Ｒ11	22	39	Ｃ	
Ｐ558	Ｒ12	25	45	Ｂ	
Ｐ559	Ｓ12	26	72	Ｄ	
Ｐ560	Ｒ11	48	58	Ｃ	
Ｐ561	Ｒ12	38	46	Ｃ	
Ｐ562	Ｑ11	36	22	砂礫	
Ｐ563	Ｓ12	18	36	Ｄ	
Ｐ564	Ｒ11	28	63	Ｃ	
Ｐ565	Ｒ11	40	54	Ｃ	ＧＰ566より新しい
Ｐ566	Ｒ11	39	42	Ｂ	ＧＰ565より古い
Ｐ567	Ｑ12	38	31	Ｂ	砂
Ｐ568	Ｒ10	40	54	砂礫	
Ｐ569	Ｒ12	21	34	Ｄ	
Ｐ570	Ｗ10	51	46	Ｂ	
Ｐ571	Ｒ12	31	31	Ｃ	
Ｐ572	Ｓ12	42	30	Ｃ	石器１点
Ｐ575	Ｒ12	52	28	Ｃ	
Ｐ576	Ｓ12	31	42	Ｄ	
Ｐ578	Ｒ12	26	30	Ｂ	
Ｐ579	Ｒ12	31	45	Ｂ	
Ｐ580	Ｓ12	33	61	Ｂ	
Ｐ581	Ｓ12	50	61	Ｃ	
Ｐ582	Ｓ12	23	35	Ｄ	
Ｐ583	Ｓ12	27	36	Ｃ	
Ｐ584	Ｓ12	25	32	Ｄ	
Ｐ585	Ｒ11	33	30	Ｃ	ＧＰ645との新旧不明
Ｐ588	Ｒ11	39	54	Ｃ	
Ｐ589	Ｓ12	25	29	Ｂ	
Ｐ591	Ｗ10	29	62	Ｃ	籾殻含む　土師器１点
Ｐ595	Ｖ11	32	42	Ｂ	
Ｐ597	Ｗ10	33	62	Ｂ	
Ｐ599	Ｖ11	32	45	Ｂ	
Ｐ600	Ｓ９	39	74	Ｂ	
Ｐ601	Ｓ12	28	24	Ｃ	
Ｐ602	Ｒ11	41	55	Ｃ	
Ｐ603	Ｓ12	31	48	Ｂ	
Ｐ604	Ｓ12	57	50	Ｄ	
Ｐ605	Ｒ12	39	18	Ｄ	
Ｐ607	Ｒ11	30	61	砂礫	
Ｐ608	Ｓ11	23	41	Ｃ	
Ｐ609	Ｒ11	41	24	Ｃ	
Ｐ610	Ｒ11	22	34	Ｂ	
Ｐ612	Ｒ10	34	44	Ｃ	
Ｐ613	Ｒ11	35	30	Ｄ	
Ｐ614	Ｒ12	39	41	Ｃ	
Ｐ615	Ｒ12	25	14	Ｃ	
Ｐ617	Ｒ12	28	55	Ｃ	
Ｐ620	Ｑ11	22	32	砂礫	
Ｐ621	Ｒ12	21	25	Ｄ	
Ｐ622	Ｒ11	18	31	砂礫	
Ｐ623	Ｑ11	40	23	Ｄ	
Ｐ626	Ｓ11	31	44	Ｃ	
Ｐ627	Ｒ10	27	40	Ｃ	
Ｐ628	Ｒ10	51	52	砂礫	ＧＰ633より古い
Ｐ629	Ｒ11	31	46	Ｃ	
Ｐ630	Ｑ10	29	67	Ｄ	
Ｐ632	Ｒ10	23	37	砂礫	
Ｐ633	Ｒ10	26	28	砂礫	ＧＰ628より新しい
Ｐ634	Ｑ11	42	27	Ｄ	
Ｐ635	Ｒ11	37	8	砂礫	
Ｐ636	Ｒ11	25	20	砂礫	
Ｐ637	Ｒ11	19	10	砂礫	
Ｐ638	Ｒ12	22	36	Ｃ	
Ｐ639	Ｑ８	36	41	Ｄ	
Ｐ640	Ｑ８	33	45	Ｄ	
Ｐ641	Ｙ10	35	45	Ｄ	
Ｐ642	Ｔ12	27	53	Ｂ	
Ｐ643	Ｔ12	29	36	Ｂ	
Ｐ644	Ｔ12	35	55	Ｄ	
Ｐ645	Ｒ11	23	30	Ｄ	ＳＢ04Ｐ７より古い、ＧＰ585との新旧不明
Ｐ646	Ｔ12	51	70	Ｄ	
Ｐ647	Ｔ12	35	52	Ｂ	
Ｐ648	Ｔ12	27	37	Ｄ	
Ｐ649	Ｒ11	37	30	Ｄ	
Ｐ650	Ｔ11	31	32	Ｄ	
Ｐ651	Ｔ11	33	30	Ｄ	
Ｐ652	Ｔ12	28	44	Ｄ	
Ｐ653	Ｔ11	25	43	Ｃ	
Ｐ654	Ｔ11	27	30	Ｃ	
Ｐ655	Ｒ11	32	21	Ｂ	
Ｐ656	Ｔ12	39	60	Ｄ	
Ｐ657	Ｔ12	27	49	Ｄ	
Ｐ659	Ｔ11	32	30	Ｃ	
Ｐ660	Ｗ10	32	50	Ｄ	土師器１点
Ｐ661	Ｕ11	25	56	Ｃ	土師器１点
Ｐ664	Ｓ９	63	65	Ｂ	
Ｐ665	Ｔ11	25	55	Ｄ	
Ｐ666	Ｚ９	27	38	Ｃ	
Ｐ667	Ｓ13	28	35	Ｃ	３号土塁の下
Ｐ668	Ｖ11	23	65	Ｂ	
Ｐ669	Ｖ11	46	75	Ｂ	土師器１点
Ｐ670	Ｔ11	46	26	Ｃ	
Ｐ671	Ｔ12	44	32	Ｄ	
Ｐ672	Ｖ11	26	40	Ｂ	
Ｐ673	Ｗ10	22	27	Ｃ	
Ｐ674	Ｗ12	22	50	Ｂ	
Ｐ675	Ｚ９	21	27	Ｂ	
Ｐ676	Ｙ10	34	54	－	
Ｐ677	Ｙ11	23	41	－	
Ｐ678	Ｖ11	27	21	－	
Ｐ679	Ｒ11	40	60	－	
Ｐ680	Ｓ10	30	29	－	
Ｐ681	Ｘ11	39	54	－	
Ｐ682	Ｘ11	43	60	－	ＧＰ147との新旧不明
Ｐ684	Ｘ11	37	47	－	炭化物分析
Ｐ685	Ｘ11	80	65	－	ＧＰ294より新しい
Ｐ686	Ｗ11	96	62	－	
Ｐ687	Ｗ11	24	39	－	
Ｐ688	Ｗ11	37	58	－	
Ｐ689	Ｖ11	37	66	－	
Ｐ690	Ｖ11	38	50	－	
Ｐ691	Ｗ11	50	20	－	
Ｐ692	Ｗ11	63	59	－	
Ｐ694	Ｗ11	60	38	－	
Ｐ695	Ｗ11	50	47	－	
Ｐ696	Ｙ11	35	46	－	
Ｐ697	Ｙ11	40	67	－	
Ｐ698	Ｙ10	32	54	－	
Ｐ699	Ｙ11	40	47	－	

※Ａパターン：腐食土+黒褐色土、Ｂパターン：ＬⅡ+炭化物、
Ｃパターン：ＬⅡ+ＬⅢｂ、Ｄパターン：ＬⅡ+ＬⅢａ

第３章　その他の遺構と遺物

第１節　遺 構 の 分 布

本章では、中世城館に関連しない遺構について報告していく。遺構の年代は概ね、弥生時代、古代、鎌倉時代、戦国時代、江戸時代である。

住居跡は12軒を確認した。すべてが弥生時代中期の桜井・天神原式期に相当する。平面形は不整形や楕円形のものが多い。分布傾向には粗密が認められ、Ｍ・Ｎ14・15グリッド、丘陵頂上部の平坦面の縁辺から沢３へ向かう緩斜面に６軒が密集している。とくに２・３・６・９・10号住居跡は重複し、斜面の下位から上位に向かって、住居跡を埋め立てながら床面としている。重複した住居跡群の中で最も新しい３号住居跡では、土器・石器ともに最も多く出土している。また、10号住居跡では土偶の肩部が出土している。

溝跡は10条を確認した。多くは丘陵頂上部の平坦面に位置し、14号溝跡は３号平場の沢３へ向かう緩斜面に位置する。年代は、４号溝跡が弥生時代中期後半以前、１・２・７号溝跡が弥生時代中期後半、５号溝跡が13世紀前半、８号溝跡が中世となる。

土坑は47基を確認した。丘陵頂部の平坦面に多く分布している。土坑の年代は特定できる出土遺物がなく不明なものが多いが、弥生時代が３・７～11・26・27号土坑、古代が６号土坑、近世が15号土坑である。６号土坑は調査区西側の斜面に立地し、周壁が焼土化していることから木炭焼成土坑と考えている。

焼土遺構は７基を確認した。丘陵上部の平坦面に立地し、遺構の分布に粗密は認められない。ＬⅢ上面が熱を受け焼土化したものが多く、５号焼土遺構はＬⅡ上面が熱を受けている。年代は不明のものが多い。平面形は楕円形が多く、６号焼土遺構は掘形を持ち、７号焼土遺構は浅い掘り込みの周壁から底部にかけて赤化している。

性格不明遺構は16基を確認した。丘陵頂上部の平坦面に多く、22～24号性格不明遺構は平坦面の縁辺に並んで位置する。３号性格不明遺構は弥生時代中期後半、22～24号性格不明遺構は４号平場整地より古い。

中でも底面に火通し溝を有し、その周りが被熱している火葬遺構と推測されるものが６基（ＳＸ04・10・11～13・15）認められる。年代を特定できるような出土遺物はないが、４基から出土した炭化物を放射性炭素年代測定したところ、15世紀後半から16世紀初頭の数値を得ていることから、中世城館廃絶後、戦国期の所産と判断した。４・５号平場の平坦面や緩斜面に５基（ＳＸ10・11～13・15）が集中して分布する。平面形は概ね不整な楕円形や長方形で、底面の中央に溝状の掘り込みを持ち、その周辺が焼土化したものが多い。

第2節　竪 穴 住 居 跡

1号住居跡　ＳＩ01

遺　　構（図67、写真47）

１号住居跡は丘陵頂部平坦面のＱ14、Ｒ13・14グリッドに位置する。検出面はＬⅣで、炭化物・ＬⅢ塊を含む褐灰色土の範囲として確認した。本遺構の南東側は調査区外へと延びている。北

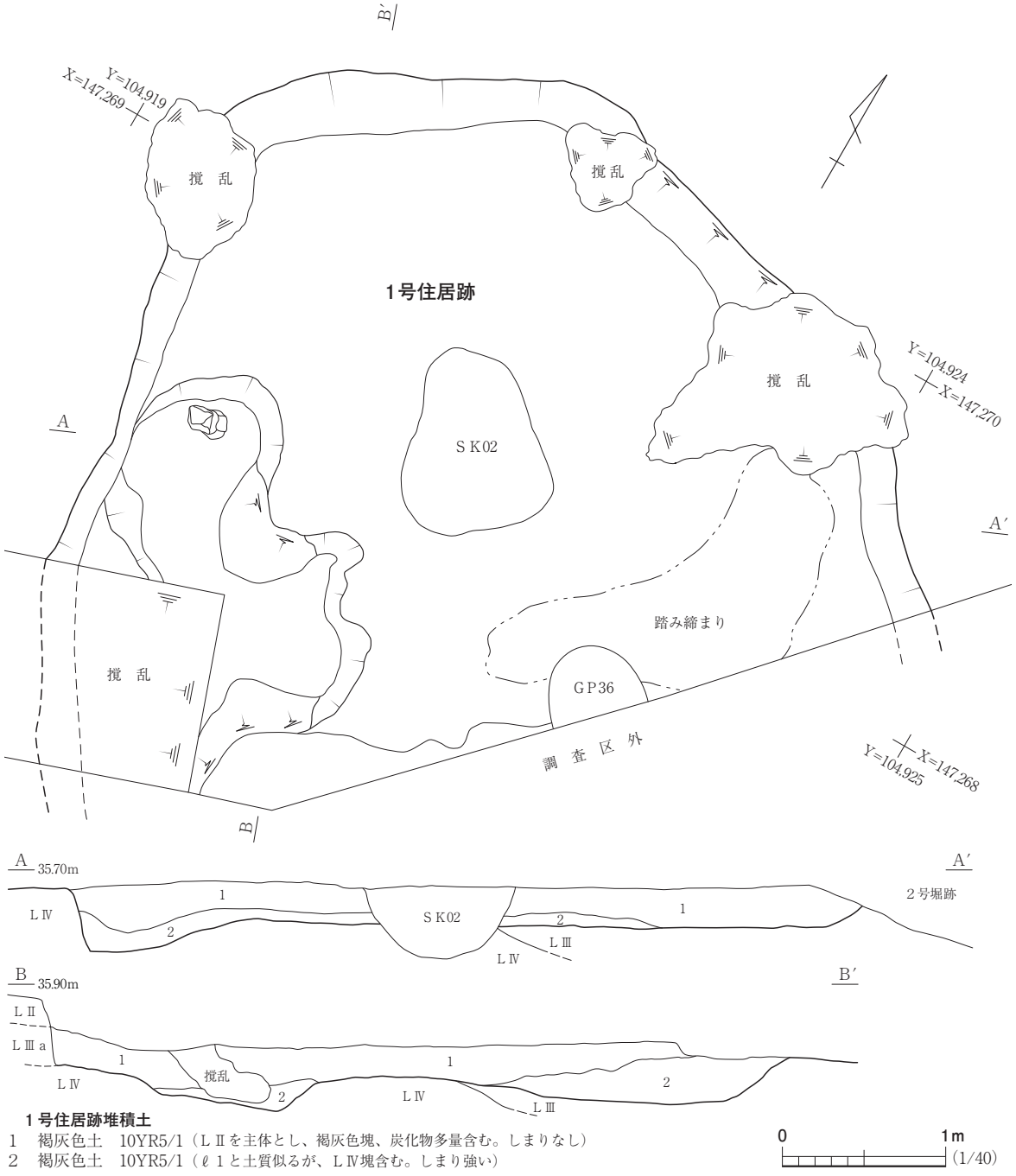


図67　１号住居跡

壁の一部や南西側は撹乱により破壊されている。２号堀跡、２号土坑、ＧＰ36と重複し、本遺構が古い。

平面形は、北西・南東方向に細長い楕円形を基調とし、規模は北東・南西方向で5.4ｍ、北西・南東方向は遺存値で4.2mを測る。検出面からの深さは最大40cmで、床面はＬⅣを掘り込んだ面をそのまま使用している。南西隅部の床面は９～15cm程くぼんでおり、東側の床面には踏み締まりが認められる。周壁の立ち上がりは緩やかだが、西壁は急に立ち上がっている。住居内の堆積土は２層に区分し、ℓ１・２はＬⅡを由来とする褐灰色土を基調としており、Ⅳ塊、炭化物を含む。土層観察から、本遺構内にＬⅡが流れ込んだものと推測している。住居内に柱や炉などの施設は確認できなかった。

遺　　物（図68、写真64）

本遺構からは弥生土器の破片34点、石器２点が出土しており、５点を図示した。図68－１～４は弥生土器である。１・２は壺の胴部上半の破片で、１は３本１組の平行沈線により重層の山形文を施している。沈線内には赤い顔料が残っている。外面には炭化物が付着している。２は平行沈線により区画され、下は地文が、上は斜位の平行沈線が施される。３・４は壺もしくは甕の胴部下半であり、縄文の原体は付加条文である。図68－５は安山岩製の扁平片刃石斧の刃部である。刃部の平面形は撥状を呈し、刃先には使用によるつぶれや刃こぼれが見られる。剥離後に研磨による調整を行っているため、両側縁に認められる剥離痕の稜線は磨滅している。

遺構内から出土した炭化物１点に対して、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行い、樹種はクリ、２σ暦年範囲は紀元前４世紀中葉から紀元前３世紀初頭の結果を得た（第４章第１節参照）。

ま と め

本遺構は、明確な掘り込みを持つこと、床面が比較的平坦で踏み締まりを持つこと、石器や土器が集中して出土することから、住居跡と考えられる。時期は出土した遺物の特徴から弥生時代中期後半の所産と考えられる。

（佐　藤）

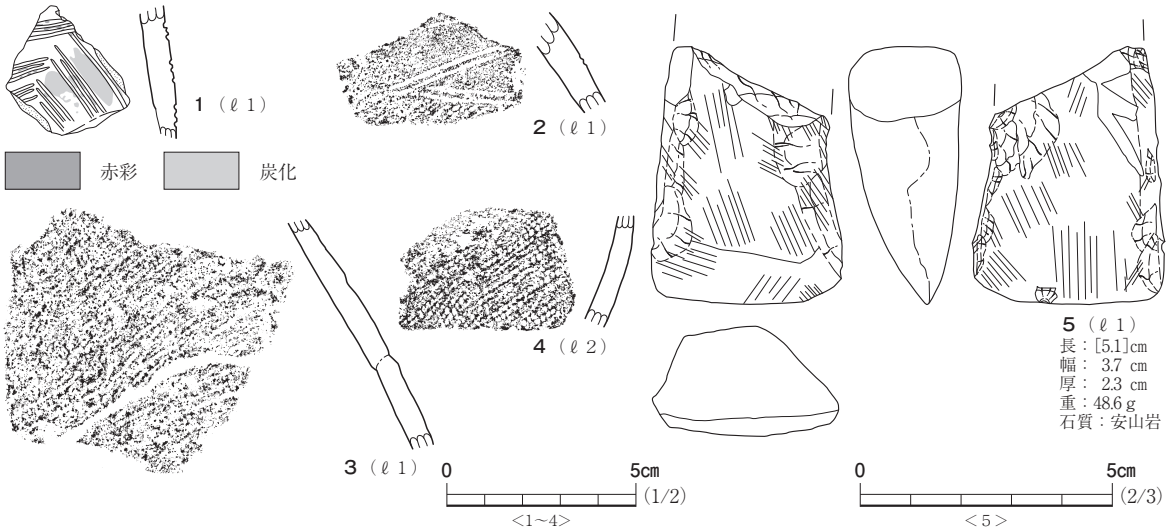


図68　１号住居跡出土遺物

２号住居跡　ＳＩ02

遺　　構（図69、写真48）

２号住居跡は住居跡が密集する丘陵頂部の緩斜面、Ｍ・Ｎ15グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、炭化物を含む褐灰色土の範囲として確認した。本遺構の遺存状態は悪く、中央より南東側の床面や北西側の壁面の一部は、後世の撹乱により壊されている。本遺構は複数の遺構と重複し、３号住居跡、ＧＰ65より古く、６・９・10号住居跡、３号性格不明遺構より新しい。３号住居跡とは北西壁面を接し、６号住居跡とは北東部が覆うように重なり、９号住居跡とは北東壁面が接する。

平面形は北西・南東方向が長い不整長方形で、規模は北西・南東方向で6.81m、北東・南西方向で3.4mを測る。検出面からの深さは最大10㎝で、周壁の立ち上がりは緩やかである。床面はＬⅢａ、６・９号住居跡の覆土を掘り込んだ面をそのまま使用している。全体的に弱い踏み締まりが認められるが、６号住居跡覆土と重複する部分では踏み締まりが認められなかった。住居内の堆積土は、ＬⅡを由来とする褐灰色土の単層で、住居のくぼみを埋めるように堆積していることから、斜面上位からの流れ込みによる自然堆積と判断した。住居内に柱や炉などの施設は確認できなかった。

遺　　物（図70、写真64）

本遺構からは弥生土器の破片20点、石器22点が出土し、６点を図示した。図70－１は弥生土器の壺もしくは甕の胴部下半の破片で、縄文の原体は付加条文である。図70－２は赤玉石製の小型石錐である。押圧剥離により調整され、下端部は尖り、その横断面は三角形となる。図70－３は赤玉石製の不定形石器で、横断面が三角形の縦に長い剥片を素材に用いている。左面の上端部は、調整により打点の高まりが取り除かれている。右・左面の右側縁には細かな剥離が認められる。図70－４～６は流紋岩の剥片で、６は断面の厚さが６㎜程と均一な剥片である。

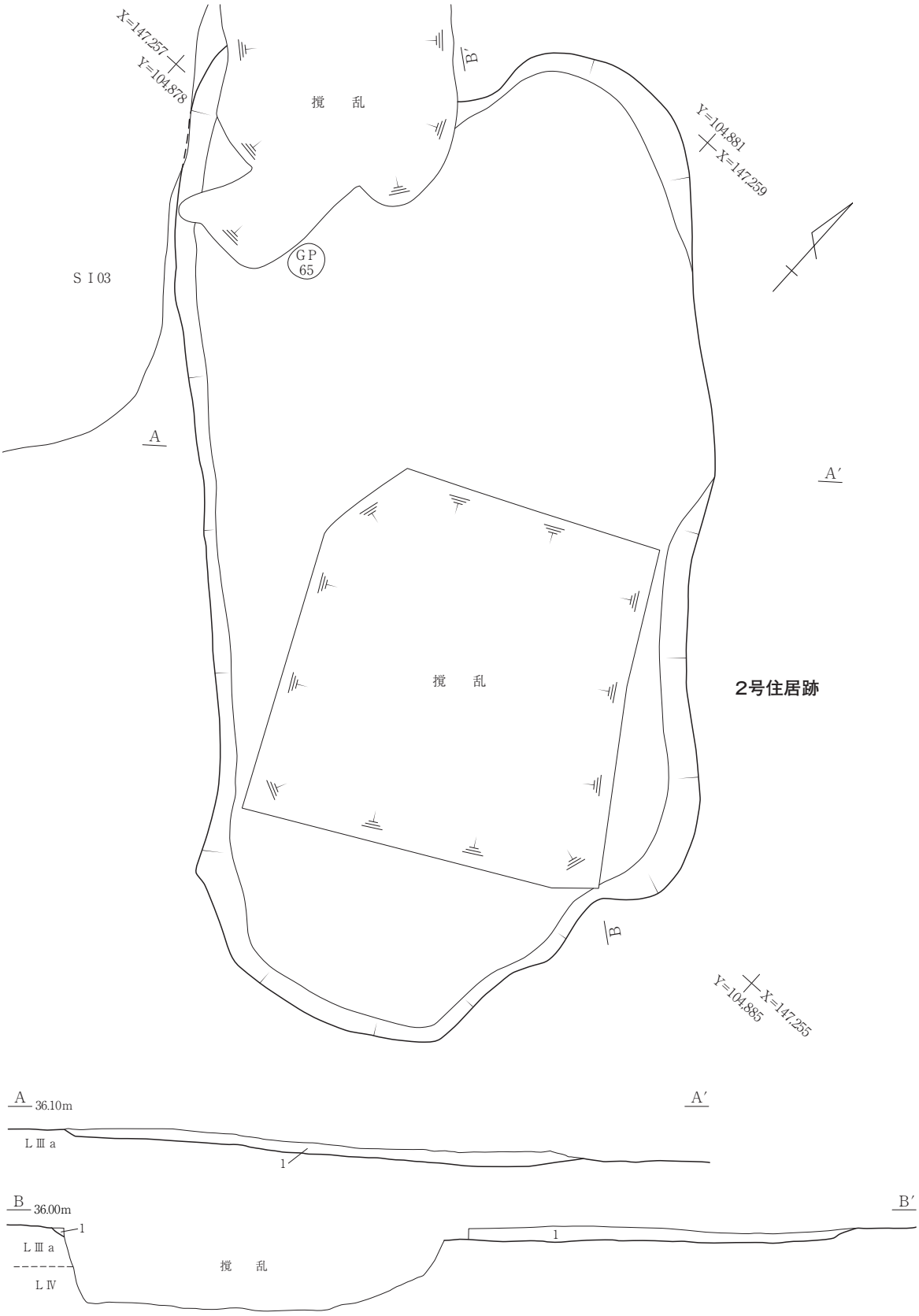
ま と め

本遺構は、住居内施設がないものの、床面が比較的平坦であること、石器、土器が集中して出土することや類例から住居跡と判断した。時期は出土した遺物の特徴や遺構の重複関係から、弥生時代中期後半の所産と考えられる。（佐　藤）

３号住居跡　ＳＩ03

遺　　構（図71、写真49）

３号住居跡は丘陵頂部の平坦面縁辺付近、Ｍ15グリッドに位置する。北東側は２号堀跡へ向けて緩やかに傾斜している。検出面はＬⅢａで、土器の小片、炭化物、焼土を含むにぶい黄褐色土の範囲として確認した。本遺構は複数の遺構と重複しており、３号掘立柱建物跡Ｐ３・４、ＧＰ16・31より古く、２号住居跡、３号性格不明遺構より新しい。本遺構の北西側から北東側にかけて、２・５・６・９・10号住居跡が密集して造られている。



２号住居跡堆積土
1　褐灰色土　10YR5/1（ＬⅡを基調とし、灰黄褐色土塊・焼土・炭化物含む）

0　1m
(1/40)

図69　２号住居跡

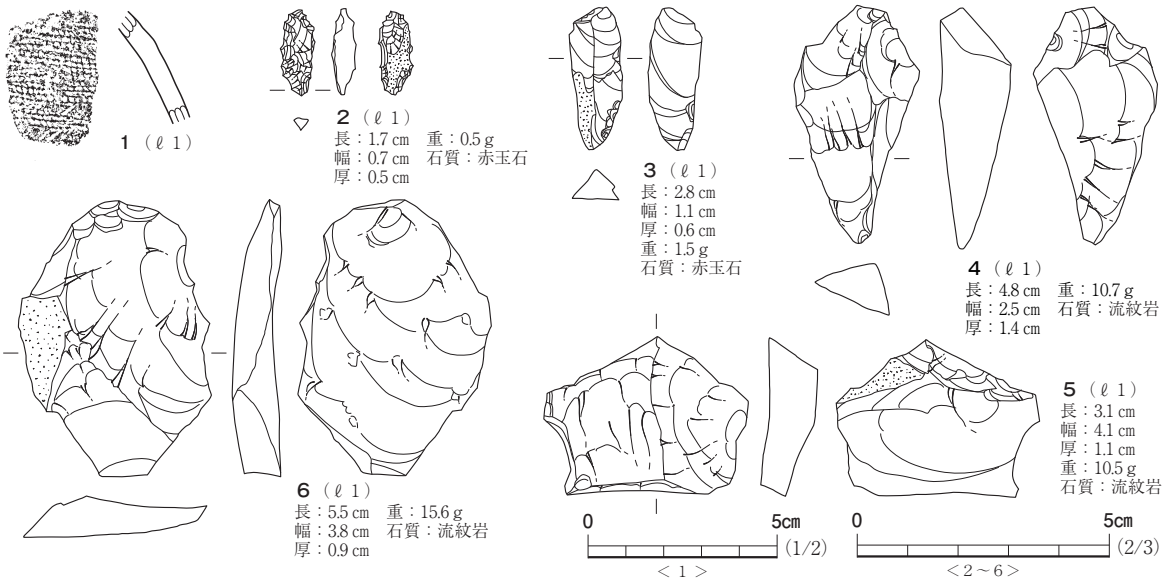


図70　２号住居跡出土遺物

平面形は、北西側に対して南東側は幅が短くなる台形を基調としている。規模は北東壁3.92m、北西壁2.6m、南東壁1.35mを測る。検出面からの深さは、北西側が26cmなのに対し、南東側は10cmと浅い。周壁は北西・南西壁の立ち上がりが急なのに対し、北東・南東壁は緩やかである。床面はＬⅢａを掘り込んだ面をそのまま使用している。踏み締まりは認められない。住居内の堆積土は３層に区分した。ℓ１はにぶい黄褐色土、ℓ２はにぶい黄橙色土で、いずれもＬⅡを由来とする。ℓ３は明黄褐色土で、ＬⅣ塊を含む。ℓ１・３はレンズ状の堆積、ℓ２は三角堆積を示していることから、いずれも自然の流れ込みと判断した。住居内施設として床面から４基の小穴を確認した。配置に規則性は認められない。Ｐ１は住居中央からやや南西壁側に位置する。平面形は楕円形で、規模は径34cm、床面からの深さは19cmである。Ｐ２は北東壁側に位置する。平面形は楕円形で、規模は径30cm、床面からの深さは22cmである。Ｐ３は住居中央からやや北西壁側に位置する。平面形は円形で、規模は径29cm、床面からの深さは８cmである。Ｐ４は住居中央からやや北東壁側に位置する。平面形は楕円形で、規模は径34cm、床面からの深さは12cmである。Ｐ１～４の覆土は、ＬⅡを由来とする褐灰色土を基調とする。自然堆積と判断した。Ｐ１・２は、掘り込みが明確で断面形が箱形を呈していることや、覆土から腐植物が認められることから住居跡に伴う柱穴と考えられる。

遺　　物（図72、写真64）

本遺構からは弥生土器の破片117点、石器51点が出土しており、遺存が良好なもの20点を図示した。図72－１～12は弥生土器である。１は高杯である。束線具により横位に施文し、それより新しく縦位に施文している。束線具は２本１組で、幅は３mm程である。脚部には円形の外窓が認められる。２～４は壺である。２は口縁部の小片で、３本引きの平行沈線が縦位に施される。単節斜縄文を地文とする。３は頸部で、２本引きの平行沈線で重層の山形文を施す。沈線間の幅は１mm程度、断面形はＶ字状となる。４は胴部上半で、４本１組の束線具により重層の山形文を施す。５は

図71　３号住居跡

甕の口縁部である。口縁端部には刻みが施される。縄文の原体は単節斜縄文である。６～９は、壺もしくは甕の胴部下半である。６は束線具により横位に施され、縄文の原体は単節斜縄文である。７・８の縄文の原体は付加条文である。９の内面には種実の圧痕が観察できる。10～12は壺もしくは甕の底部である。10・11の底部には木葉痕が、12の底部には布目痕が認められる。

図72－13～20は石器である。13は粘板岩製の扁平片刃石斧である。刃部は基部幅よりわずかに幅広で、使用によるつぶれや刃こぼれの痕跡が認められる。基部から刃部にかけて研磨による線状痕が認められる。剥離後に研磨による調整を行っているため、両側縁に認められる剥離痕の稜線は

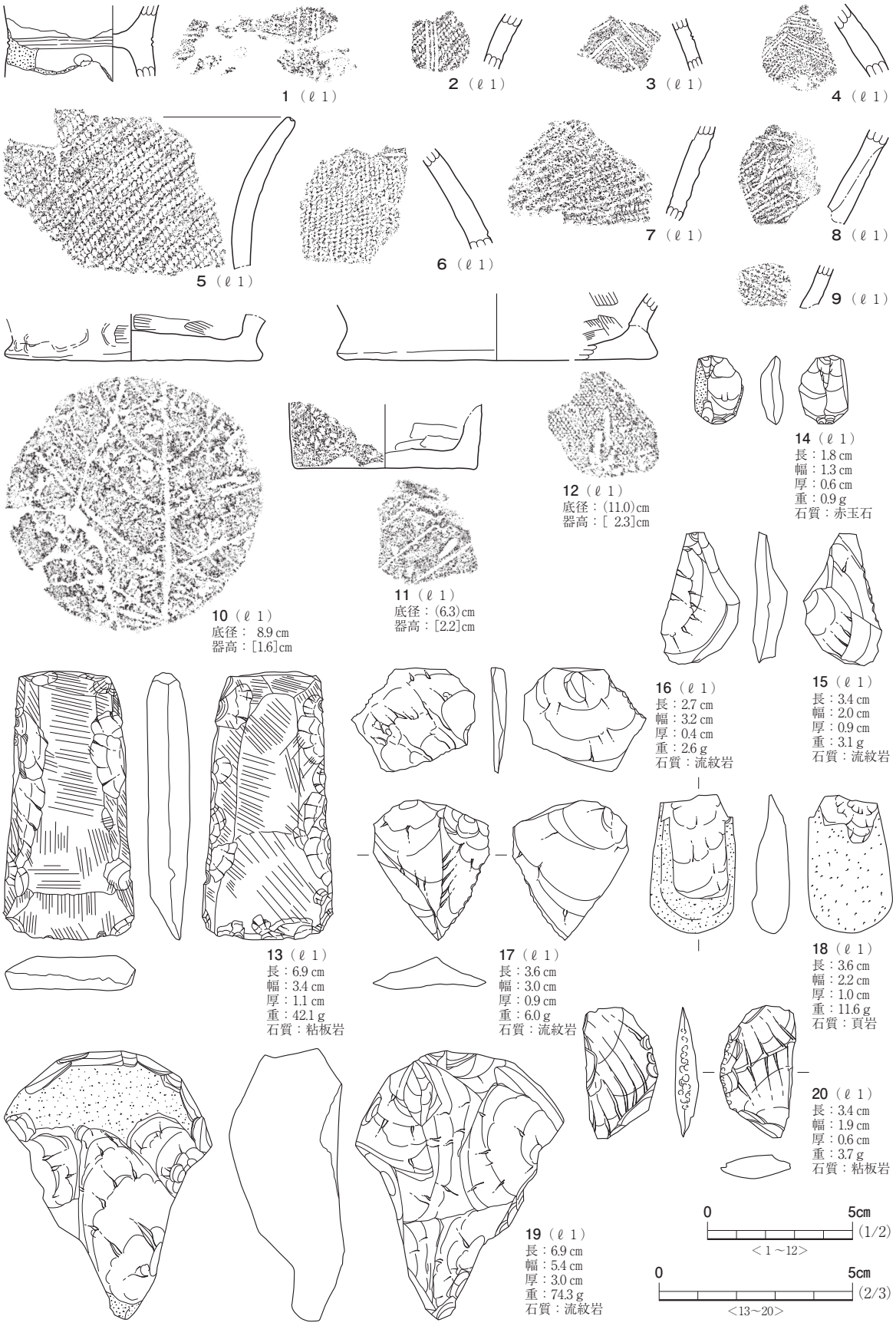


図72　3号住居跡出土遺物

磨滅している。14は赤玉石製の楔形石器である。両極打法により、上下の両縁辺に剥離痕が認められる。15～17は石材が流紋岩の不定形石器である。15・16の右面の右側縁部、17の左面右側縁部に微細な調整剥離が認められる。18は頁岩製の礫石器である。上縁辺部を表裏面から打撃し鋭く整形している。19は流紋岩製の多面体の石核である。剥離面に打面を転移しながら剥離している。20は粘板岩製の剥片で、右側縁には敲打が認められる。遺構内から出土した炭化物１点に対して、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行った。樹種はサクラ属と推定され、２σ暦年範囲は13世紀末葉から14世紀末葉の結果を得た（第４章第１節参照）。

ま と め

本遺構は、明確な掘り込みを持つことや、床面に柱穴が認められることや、石器や土器が集中して出土することから住居跡と判断した。確認した住居跡の中で最も出土遺物が多く、住居跡の重複は最も新しい。年代は出土した遺物の特徴から、弥生時代中期後半の所産と考えられる。（佐　藤）

４号住居跡　ＳＩ04

遺　　構（図73）

４号住居跡は丘陵頂部の平坦面縁辺付近、Ｏ・Ｐ14・15グリッドに位置している。検出面はＬⅢ上面で、炭化物を含む褐灰色土の範囲として確認した。本遺構の遺存状態は悪く、東側の大部分、北西側の一部は、後世の撹乱により壊されている。本遺構は４号溝跡より新しく、５号溝跡、ＧＰ46より古い。

本遺構の平面形は、確認された住居周壁から、長方形を基調としていたと推測される。現状で確認できた規模は、北東・南西方向が5.5ｍ、北西・南東方向が3.25ｍである。検出面からの深さは13㎝と浅く、周壁はいずれも緩やかに立ち上がっている。床面は掘り込んだＬⅢをそのまま使用し、踏み締まりが認められる。床面の広い範囲に、焼土塊・ＬⅡ塊が斑状に分布していた。堆積土はＬⅡに由来する褐灰色土で、焼土を多量に含んでいる。堆積土は住居のくぼみを埋めるように堆積していることから、流れ込みと判断した。住居内施設は小穴３基を確認した。小穴はいずれも住居南東壁、中央の壁際に位置している。小穴の平面形は円形で、規模はＰ１・３が径15～20㎝程、深さが10㎝程である。Ｐ２は径27㎝、深さは34㎝となり、ＬⅣ上面まで掘り込んでいる。小穴の堆積土はいずれも、ＬⅢ塊・炭化物・焼土を含むことから人為による埋め立てと判断した。

遺　　物（図73、写真64）

本遺構からは弥生土器片６点、石器13点が出土し、石器３点を図示した。図73－１は不定形石器で、側縁には細かい調整剥離が認められる。図73－２は板状の剥片で、左面右側縁に礫面を残す。図73－３はアプライト製の円礫である。右側縁に調整剥離が認められる。

ま と め

本遺構は、撹乱により大部分が破壊されているが、床面に柱穴と考えられるＰ１～３があることや、石器や土器が集中して出土したことから住居跡と判断した。時期は出土した遺物の特徴から、

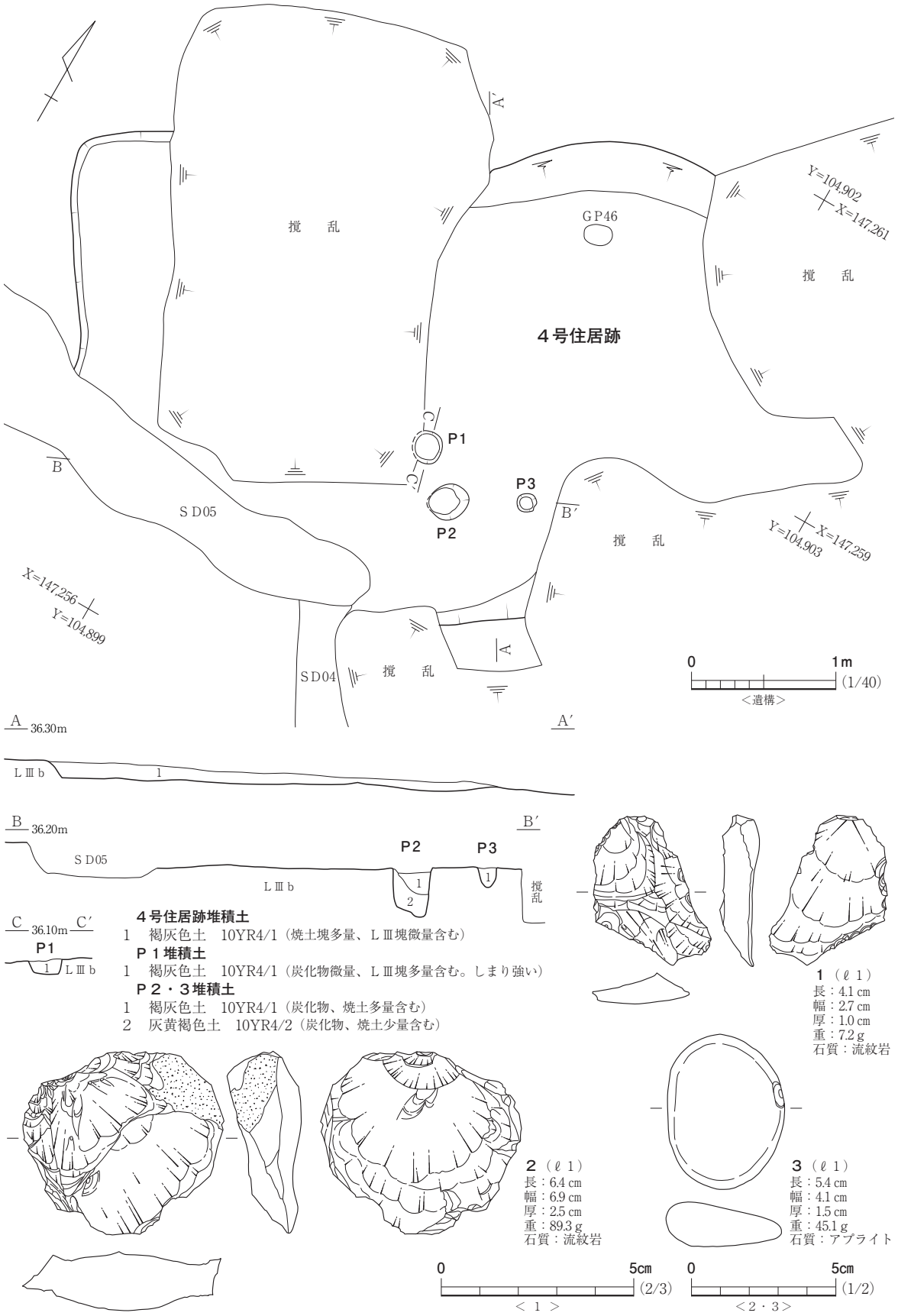


図73　4号住居跡、出土遺物

弥生時代中期後半の所産と考えられる。（佐　藤）

５号住居跡　ＳＩ05

遺　　構（図74、写真50）

５号住居跡は住居跡が密集する丘陵頂部の平坦面、M14・15グリッドに位置している。検出面はＬⅢａ上面で、炭化物や焼土を含む褐灰色土の範囲として確認した。北東壁と床面の一部は、後世の撹乱により壊されている。８号溝跡、ＧＰ66と重複し、本遺構が古い。本遺構の南東側には住居群が密集して分布している。

本遺構の平面形は不整楕円形で、北側が張り出す。規模は北西・南東方向で4.35ｍ、北東・南西方向で3.02ｍを測る。検出面からの深さは30㎝で、周壁の立ち上がりは極めて緩やかとなり、北側では15～19°、それ以外では40～48°である。断面形は逆台形となる。床面は掘り込んだＬⅢａをそのまま利用しており、ほぼ平坦だが踏み締まりは認められない。住居内の堆積土は２層に区分した。ℓ１はＬⅡとＬⅢの混土を基調とした褐灰色土で、炭化物・焼土を含む。ℓ２はＬⅢを由来とする灰黄褐色土で、炭化物を含む。三角堆積を呈することから自然の流れ込みと判断した。

住居内施設は小穴４基を確認した。Ｐ１～４は住居中央に位置する小穴で、平面形はいずれも円形で、住居跡の周壁と平行するように配置されている。規模は径18～30㎝、床面からの深さは23～30㎝である。小穴の堆積土はいずれも褐灰色土を基調とし、住居覆土ℓ１と同質である。小穴については、配置や深さから住居跡に伴う柱穴と考えている。

遺　　物（図74、写真64）

本遺構からは弥生土器１点、石器２点が出土し、２点を図示した。図74－１は弥生土器の甕の頸部で、縄文の原体は単節縄文である。内面には炭化物の付着が認められる。図74－２は凝灰岩製の長方形を呈する小型の砥石である。下端部は欠損している。砥面は左面のみで、中央は緩やかにくぼんでいる。極めて小さな砥石で、その大きさから指先で使用するものと考えている。

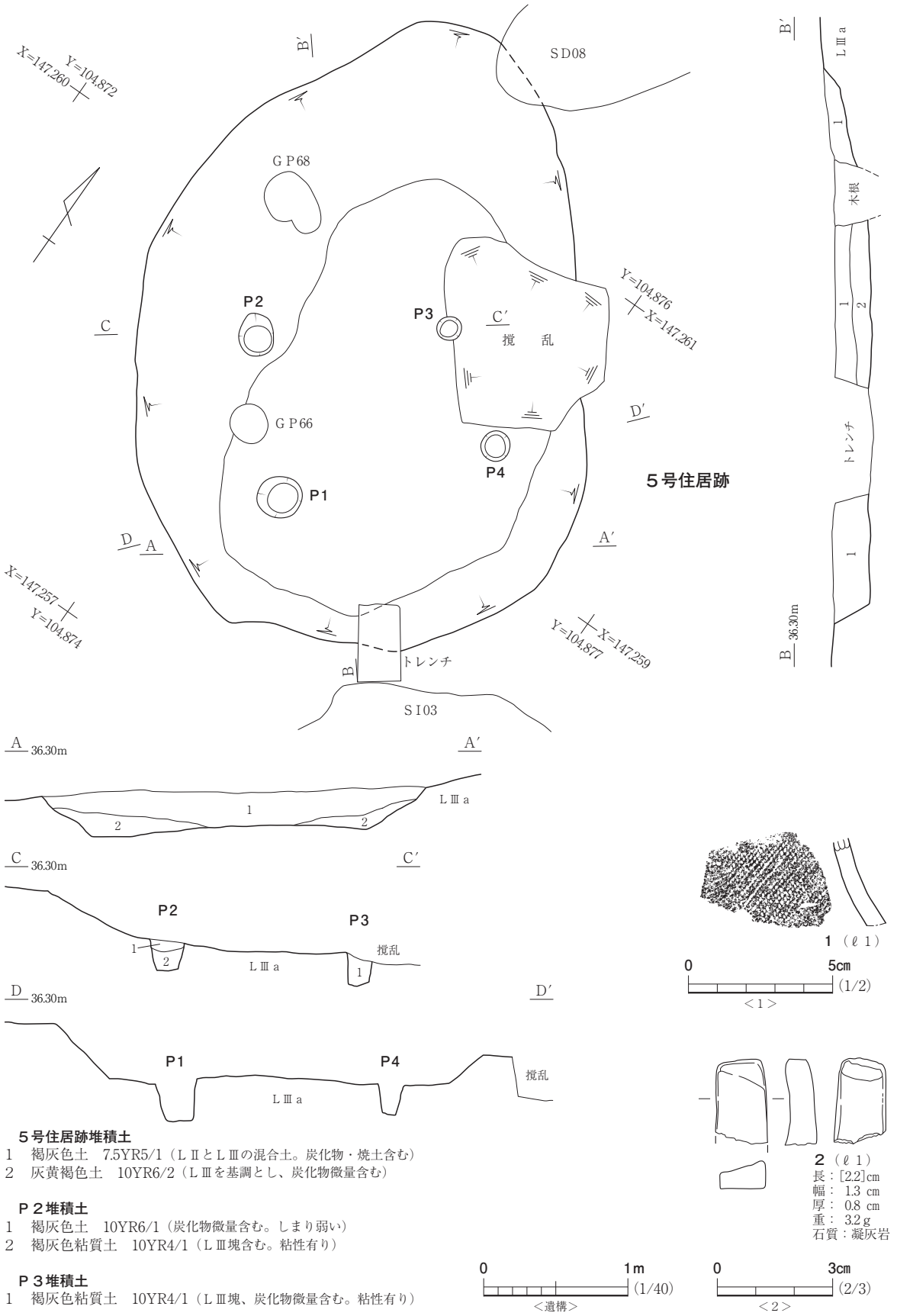
ま と め

本遺構は掘り込みが深いことや、床面中央部に柱穴が四角形に配置されることから住居跡と考えられる。年代は出土遺物から弥生時代中期後半の所産と考えられる。（佐　藤）

６号住居跡　ＳＩ06

遺　　構（図75、写真51）

６号住居跡は住居跡が密集する丘陵頂部の緩斜面、M14、M・N15グリッドに位置する。本遺構は幅が2.3mと狭く、住居とするには問題があるが、平面形や規模が９号住居跡と同様で、明確な周壁の立ち上がりや床面が平坦であることから、住居跡として報告する。検出面はＬⅢａ・ｂ上面で、２号住居跡の床面を精査した際、炭化物や焼土を含むにぶい黄橙色土の範囲として確認した。南西側の一部は、後世の撹乱により壊されている。本遺構は２・９・10号住居跡、３号性格



5号住居跡堆積土
1　褐灰色土　7.5YR5/1（LⅡとLⅢの混合土。炭化物・焼土含む）
2　灰黄褐色土　10YR6/2（LⅢを基調とし、炭化物微量含む）

P2堆積土
1　褐灰色土　10YR6/1（炭化物微量含む。しまり弱い）
2　褐灰色粘質土　10YR4/1（LⅢ塊含む。粘性有り）

P3堆積土
1　褐灰色粘質土　10YR4/1（LⅢ塊、炭化物微量含む。粘性有り）

図74　5号住居跡、出土遺物

不明遺構と重複し、２号住居跡より古く、９・10号住居跡、３号性格不明遺構より新しい。

平面形は北西・南東方向が長い、隅丸長方形で、規模は北西・南東方向が4.86ｍ、北東・南西方向が2.3ｍである。検出面からの深さは最大13㎝、周壁は緩やかに立ち上がる。床面はＬⅢ・Ⅳや、重複する遺構の覆土を掘り込んだ面をそのまま使用している。床面はほぼ平坦だが、踏み締まりは認められない。住居内の堆積土は２層に区分した。ℓ１は、炭化物をごく微量含むにぶい黄橙色土である。ℓ２は焼土や炭化物を含むにぶい橙色土である。いずれの堆積土もＬⅢに近似することや、レンズ状の堆積状況を示していることから、斜面上位からの流れ込みと判断した。住居の柱や炉などの施設は確認できなかった。

遺　　物（図76、写真64）

本遺構からは弥生土器片５点、石器４点が出土し、２点の石器を図示した。図76－１は多面体の石核である。打面を頻繁に転移しながら剥離作業を行っている。図76－２は剥片である。右面

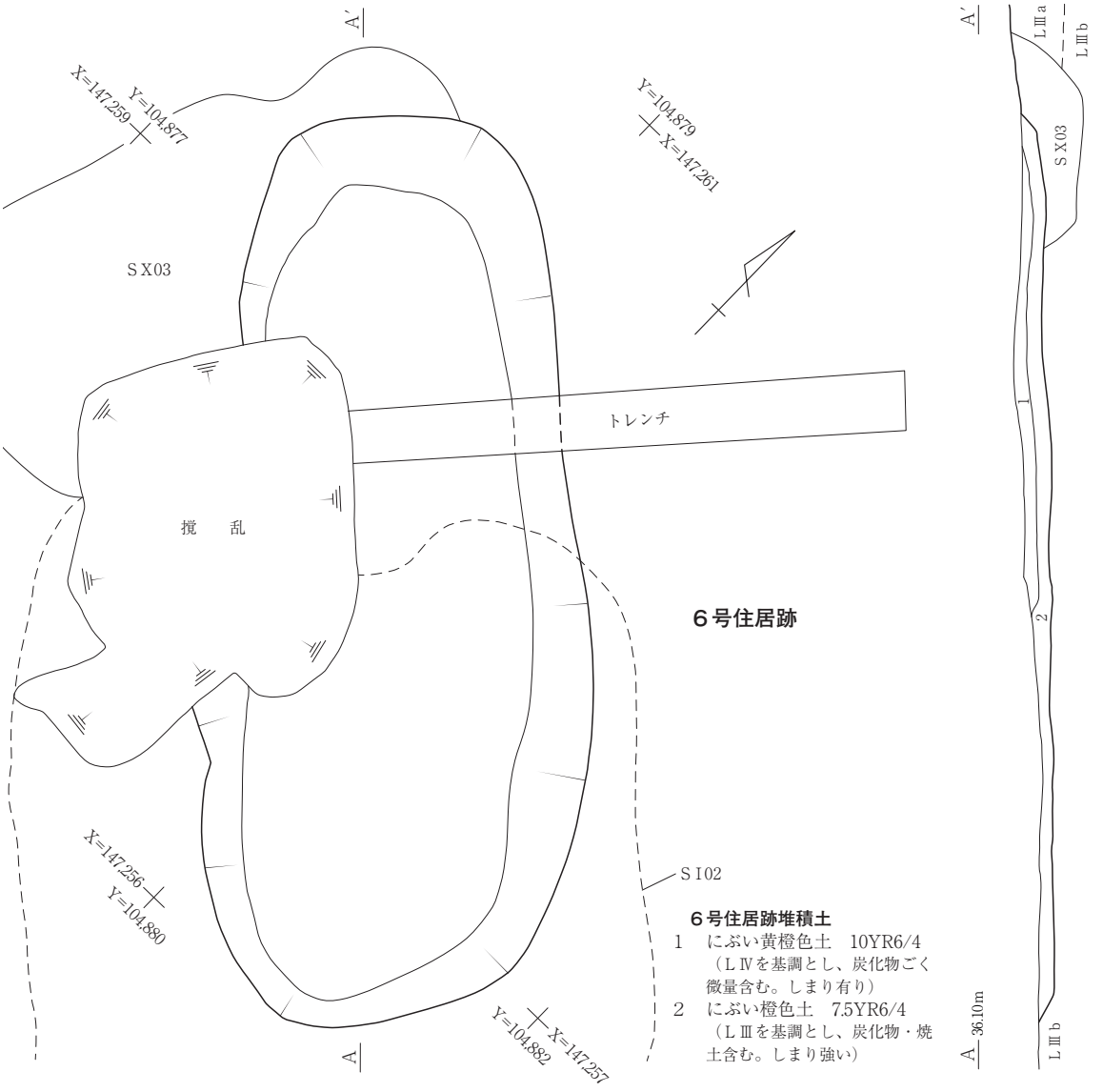


図75　６号住居跡

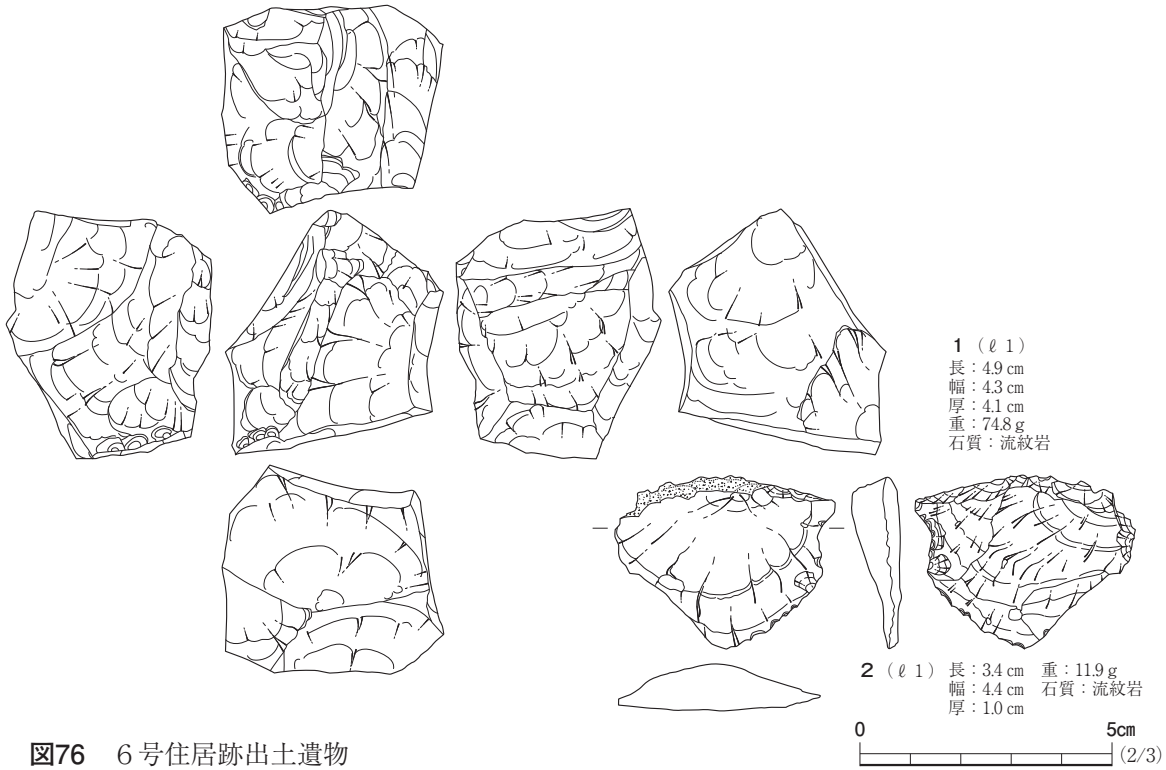


図76　6号住居跡出土遺物

右側縁と、表裏面には微細な剥離が認められる。いずれも、流紋岩製である。

ま と め

本遺構は、床面が比較的平坦であることや、他遺跡や9号住居跡の類例から住居跡と判断した。時期は出土した遺物や遺構の重複関係から、弥生時代中期後半の所産と考えられる。　（佐　藤）

7号住居跡　ＳＩ07

遺　　構（図77、写真51）

7号住居跡は、丘陵頂部平坦面のＬ・M16グリッドに位置する。検出面はＬⅢａ上面で、1号土塁の積土とＬⅡの除去後に、炭化物を含む褐色土の範囲として確認した。本遺構の北西部の大半や南西部の一部は、後世の撹乱や掘りすぎにより遺存していない。1号土塁・1号掘跡と重複し、本遺構が古い。本遺構の北西側には、8号住居跡がほぼ接して造られている。

平面形は楕円形を基調とするが、北西に比べ南東が若干狭い。規模は北西・南東方向で3.37ｍ、北東・南西方向で2.22ｍを測る。検出面からの深さは最大12cmで、床面はＬⅢａを掘り込んだ面をそのまま使用しており、踏み締まりは認められない。周壁の立ち上がりは緩やかだが、南西壁の立ち上がりは急である。住居内の堆積土は2層に区分した。ℓ1・2はともにＬⅡを由来とする、褐色粘質土を基調とする土で、炭化物を含んでいる。レンズ状の堆積が認められることから、自然堆積と判断した。住居内に柱や炉などの施設は確認できなかった。本遺構からは遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、床面が比較的平坦であることや、他遺跡の類例から住居跡と考えられる。年代は遺構

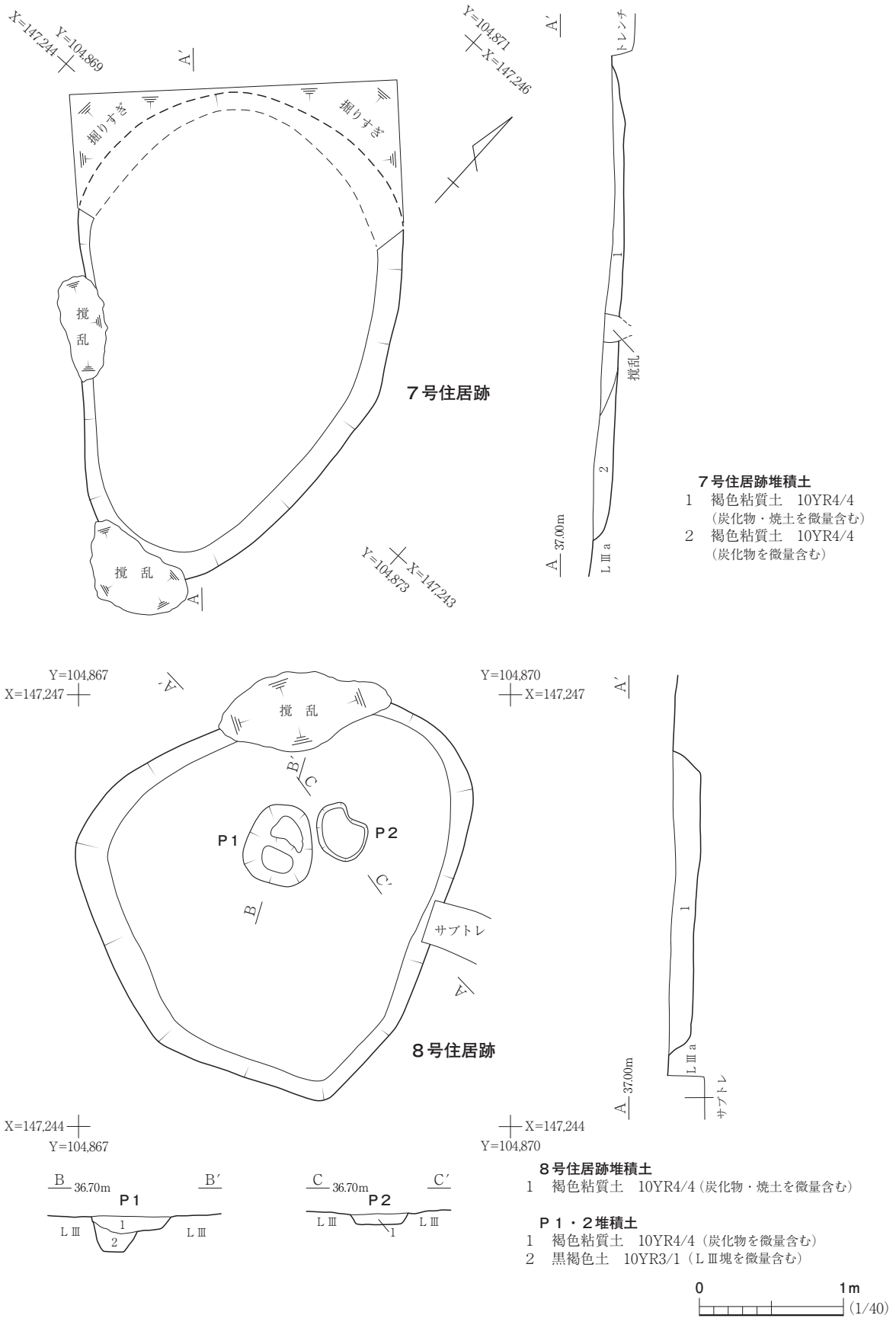

X=147,244
Y=104,869
A
掘りすぎ
掘りすぎ
Y=104,871
X=147,246
A′
トレンチ
撹乱
撹乱
７号住居跡
撹乱
Y=104,873
X=147,243
A
A′
1
2
撹乱
A 37.00m
ⅢLa
７号住居跡堆積土
1　褐色粘質土　10YR4/4
（炭化物・焼土を微量含む）
2　褐色粘質土　10YR4/4
（炭化物を微量含む）
Y=104,867
X=147,247
A
撹　乱
B′
C
P1
P2
C′
B
サブトレ
A
８号住居跡
Y=104,870
X=147,247
A′
1
ⅢLa
A 37.00m
サブトレ
X=147,244
Y=104,867
X=147,244
Y=104,870
B 36.70m
B′
P1
1
2
ⅢL
ⅢL
C 36.70m
C′
P2
ⅢL
1
ⅢL
８号住居跡堆積土
1　褐色粘質土　10YR4/4（炭化物・焼土を微量含む）
Ｐ１・２堆積土
1　褐色粘質土　10YR4/4（炭化物を微量含む）
2　黒褐色土　10YR3/1（ⅢL塊を微量含む）
0
1m
(1/40)

図77　７・８号住居跡

に伴う遺物がなく判然としないが、遺構がＬⅡに覆われたＬⅢａ上面から掘り込んでいることから、概ね弥生時代中期後半の所産と推測できる。（佐　藤）

８号住居跡　ＳＩ08

遺　　構（図77、写真52）

８号住居跡は、丘陵頂部平坦面のＬ16グリッドに位置する。検出面はＬⅢａ上面で、１号土塁の積み土とＬⅡの除去後に、炭化物・焼土を含む、褐色土の範囲として確認した。本遺構の北壁の一部は、木根により壊されている。１号土塁・１号掘跡と重複し、本遺構が古い。本遺構の南東側には、７号住居跡がほぼ接して造られている。

本遺構の平面形は不整な隅丸三角形で、規模は北東・南西方向で2.89ｍを測る。検出面からの深さは最大20㎝で、周壁はいずれも急に立ち上がる。床面は掘り込んだＬⅢａの面をそのまま使用しており、中央より南側は部分的に弱い踏み締まりが認められる。住居内の堆積土は単層で、ＬⅡを由来とする褐色粘質土で、炭化物・焼土をわずかに含む。堆積土は住居のくぼみを埋めるような状況から、流れ込みと判断した。住居内施設は小穴２基を確認した。Ｐ１は住居跡中央部に位置する小穴である。平面形は隅丸長方形で、規模は直径56㎝、深さは25㎝である。堆積土は２層に区分した。ℓ１は住居内堆積土と同質の褐色粘質土、ℓ２はＬⅢ塊を含む黒褐色土である。その規模や深さから柱穴と考えられる。Ｐ２はＰ１の東側に隣接して位置する小穴である。平面形は不整形で、規模は直径40㎝、深さは８㎝と浅い。小穴内には住居内堆積土と同質の褐色粘質土が堆積していた。本遺構からは弥生土器２点が出土しているが、いずれも小片のため図示していない。

ま と め

本遺構は、住居内施設として柱穴が認められることや、床面が比較的平坦で踏み締まりを持つことから、住居跡と考えられる。時期は出土した遺物の特徴から、弥生時代中期後半の所産と考えられる。（佐　藤）

９号住居跡　ＳＩ09

遺　　構（図78、写真53）

９号住居跡は竪穴住居跡が密集する丘陵頂上部緩斜面のＭ・Ｎ14・15グリッドに位置する。検出面はＬⅢａ・Ⅳで、一部は２・６号住居跡の床面で、ＬⅣの小礫を含むにぶい橙色を基調とする楕円形の範囲として確認した。当初は６号住居跡に伴う掘形や貼床の土と考えていたが、周壁の立ち上がりが明瞭に認められることや、床面から住居内施設と考えられる小穴や溝が確認できたことから、住居跡と判断した。本遺構は、２・６・10号住居跡、11号土坑と重複し、10号住居跡、11号土坑より新しく、ほかの遺構より古い。

本遺構の平面形は不整長方形で、長軸は北西・南東方向となる。規模は北東壁で６ｍ、北西壁で2.3ｍ、検出面からの深さは最大で32㎝である。床は掘り込んだＬⅢａ・Ⅳをそのまま利用し、ほ

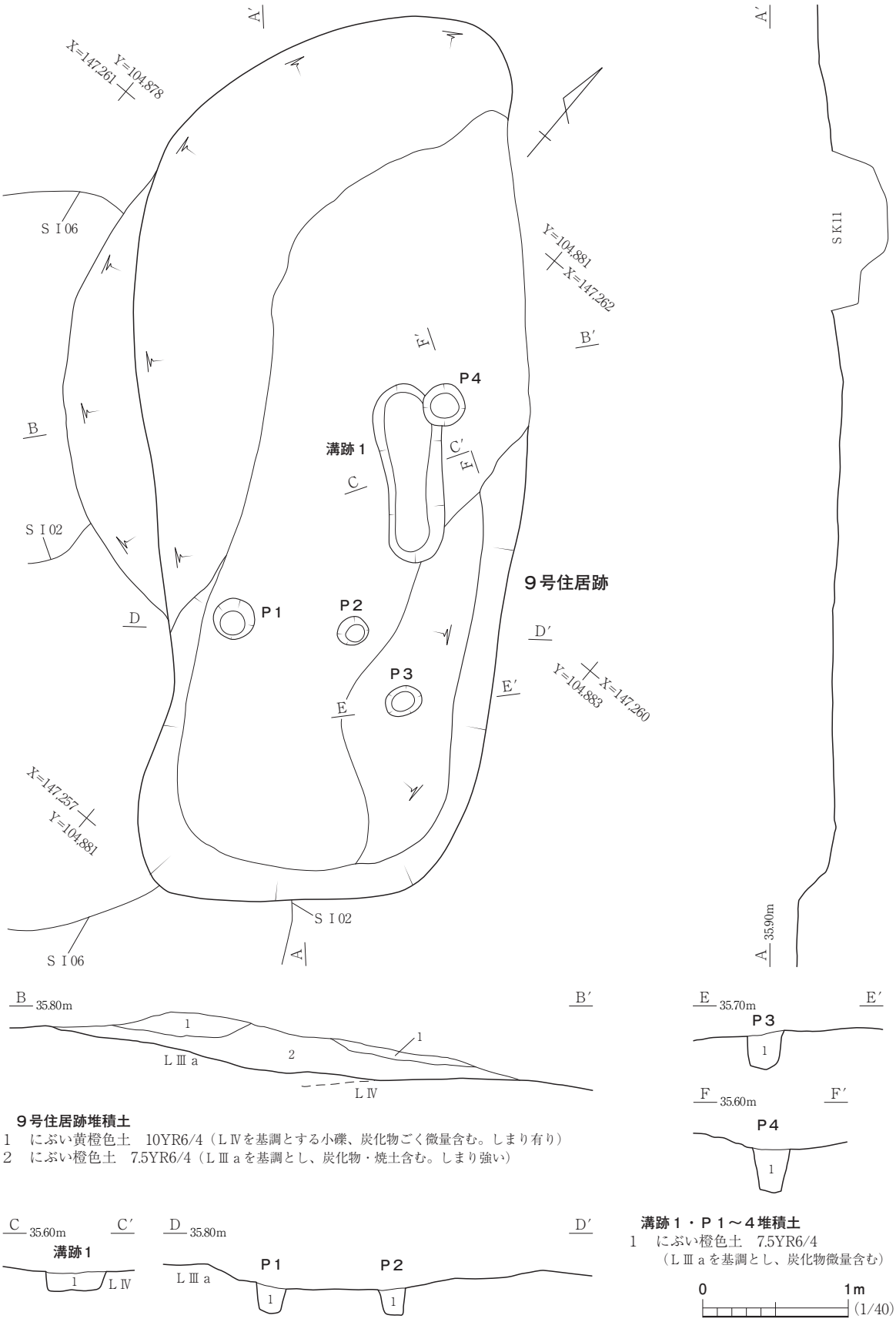

A′
X=147.261
Y=104.878
S I 06
Y=104.881
X=147.262
B′
F′
P4
B
溝跡１
C′
F
C
S I 02
９号住居跡
P1
P2
D
D′
P3
Y=104.883
X=147.260
E′
E
X=147.257
Y=104.881
S I 02
S I 06
A
S K 11
A 35.90m
B 35.80m
B′
1
1
2
L Ⅲ a
L Ⅳ
E 35.70m
E′
P３
1
F 35.60m
F′
P４
1
９号住居跡堆積土
1　にぶい黄橙色土　10YR6/4（L Ⅳを基調とする小礫、炭化物ごく微量含む。しまり有り）
2　にぶい橙色土　7.5YR6/4（L Ⅲ a を基調とし、炭化物・焼土含む。しまり強い）
C 35.60m
C′
溝跡１
1
L Ⅳ
D 35.80m
D′
L Ⅲ a
P１
P２
1
1
溝跡１・Ｐ１～４堆積土
1　にぶい橙色土　7.5YR6/4
（L Ⅲ a を基調とし、炭化物微量含む）
0
1m
(1/40)

図78　９号住居跡

ぼ平坦であるが、床面の踏み締まりは認められない。周壁の立ち上がりは斜面上位側の南西・南東壁は明瞭だが、斜面下位側ではごくわずかに確認できただけである。住居内の堆積土は２層に分けられた。ℓ１はＬⅣを由来とするにぶい黄橙色土で、ℓ２はＬⅢａを由来とするにぶい橙色土で、焼土や炭化物を含む。堆積土は基本層序と逆転することや、炭化物や焼土が含まれることから、人為による堆積と考えられる。

住居内施設は溝跡１条、小穴４基を確認した。Ｐ１は住居床面の南西壁付近、Ｐ２～４は北東壁付近に位置する小穴である。Ｐ４は溝跡１と重複し、Ｐ４が新しい。小穴の平面形はいずれも円形で、その規模は径20～30cm程、深さは18～30cm程である。溝跡１は住居床面の中央から北東壁寄りに位置している長軸は住居跡と同様で、その規模は、長軸1.2m、幅46cm、深さ13cmである。小穴や溝跡１の堆積土はにぶい橙色土の単層で、住居覆土ℓ２と同質のものである。

遺　　物（図79、写真64）

本遺構からは弥生土器38点、土製品１点、石器12点が出土し、７点を図示した。図79－１・２は甕形土器で、頸部に幅の狭い無文帯が認められる。図79－３～５は壺形土器もしくは甕形土器である。５の底部には布の痕跡が認められる。縄文の原体は３・５が付加条文、１・４が単節斜縄文である。図79－６は匙形の土製品で、ユビオサエにより成形し、内外面ともに緩やかな弧状を呈する。図79－７は流紋岩製の楔形石器で、両極打法により上下の両縁辺には微細な剥離痕や潰れが認められる。

ま と め

本遺構は住居内施設を有し、土器・石器が出土していること、明確な掘り込みを持つことから、住居跡と判断した。平面形が不整長方形で浅い掘り込みが特徴といえる。床面には住居内施設とし

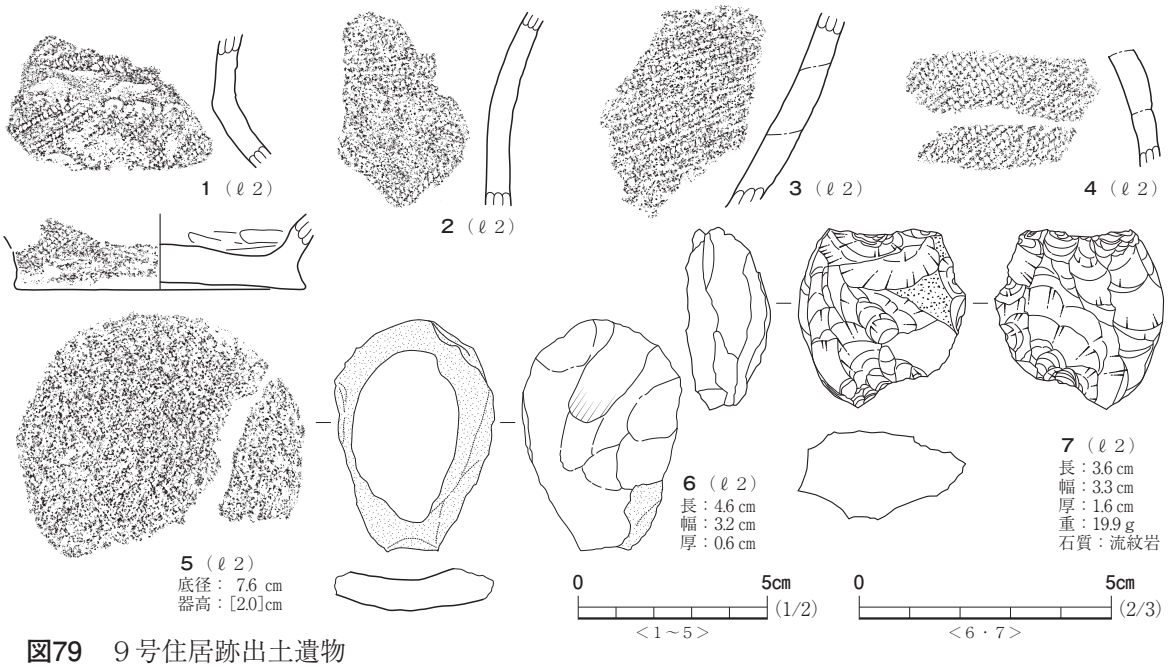


図79　９号住居跡出土遺物

て溝跡１条、小穴４基があるものの、配置に規則性はない。年代は、出土遺物の特徴や遺構の重複関係などから弥生時代中期後半の所産と考えられる。（佐　藤）

10号住居跡　ＳＩ10

遺　　構（図80、写真54）

10号住居跡は、住居跡が密集する丘陵頂部の緩斜面、Ｍ・Ｎ14・15グリッドに位置する。検出面は９号住居跡床面で、斜面下位側の一部がＬⅣ上面となり、炭化物粒を含んだ灰褐色土の範囲として確認した。２・９号住居跡と重複し、本遺構が古い。

本遺構の平面形は、南東側に対して北西側が狭くなる不整な楕円形を呈する。規模は北西・南東壁で3.98m、北東・南西壁で2.94mとなる。検出面からの深さは最大39cmで、周壁は急に立ち上がるが、南西コーナー付近は緩やかとなる。床は掘り込んだＬＶの面をそのまま使用し、床面は平坦となるが、東側には周壁に沿って長さ3.18ｍ、幅1.48ｍ、深さ12cm程度の浅いくぼみが認められる。住居内の堆積土は３層に分けられ、ℓ１は灰褐色土で、ＬＶを由来とする砂礫や炭化物・焼土を含む。ℓ２はにぶい褐色土でＬＶを基調とし、グライ化した灰色粘土塊を含む。ℓ３はℓ２と同質で、炭化物、黒褐色粘質土塊を含む。堆積土の観察から、人為による堆積と考えられる。住居に伴う施設は小穴１基を確認した。Ｐ１は住居跡北西部に位置する小穴である。平面形は楕円形で、規模は直径42cm、深さは15cmである。堆積土は褐灰色土の単層である。

遺　　物（図80、写真65）

本遺構からは土偶１点、弥生土器57点、石器１点が出土し、その中から土偶１点、弥生土器２点を図示した。図80－１は壺形土器の頸部付近の破片で、２本一組の平行沈線で横位と縦位に施文している。図80－２は底部で、外面には布の圧痕が認められる。図80－３は肩が丸く表現される土偶（刺突文土偶）の肩部から頸部付近と考えられる。肩部には沈線で区画された瘤状の盛り上がりが認められ、刺突を密に施す。刺突は土偶に対し右側から施文している。類例として三春町西方前遺跡出土の土偶が挙げられる。年代は類例から縄文時代晩期頃の所産と判断した。

遺構内から出土した炭化物１点に対して、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行い、樹種はヒノキ属、２σ暦年範囲は３世紀前葉から４世紀中葉の結果を得た（第４章第１節参照）。

ま と め

本遺構は、明確な掘り込みを持つことや住居内施設として小穴が認められること、土器や石器が出土することから住居跡と判断した。平面形が不整楕円形で浅い掘り込みが特徴といえる。時期は出土した遺物の特徴や遺構の重複関係から、弥生時代中期後半の所産と考えられる。（佐　藤）

12号住居跡　ＳＩ12

遺　　構（図81、写真54）

12号住居跡は、丘陵頂部平坦面のＶ11・12グリッドに位置する。検出面はＬⅢａ上面で、炭化

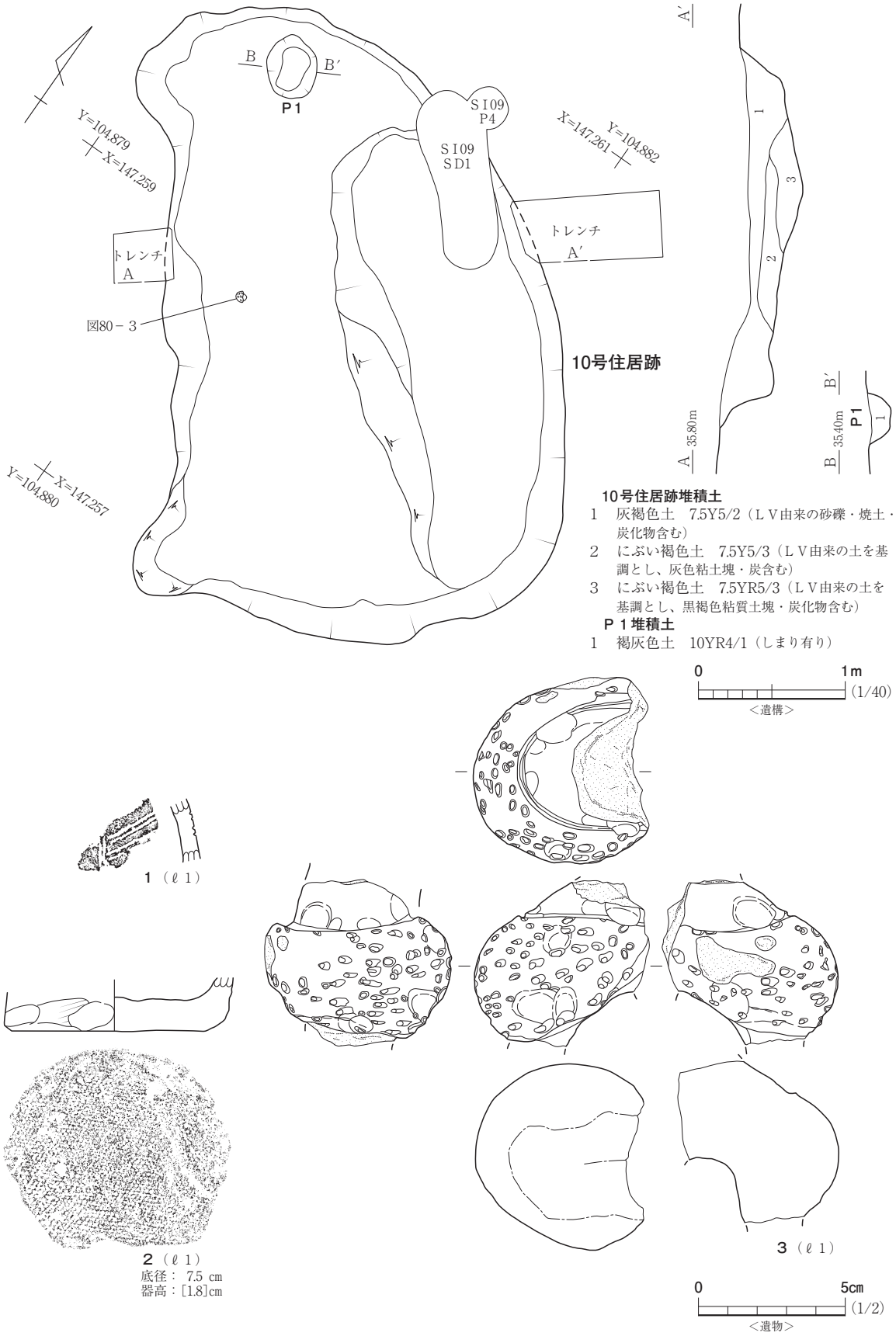


図80　10号住居跡、出土遺物

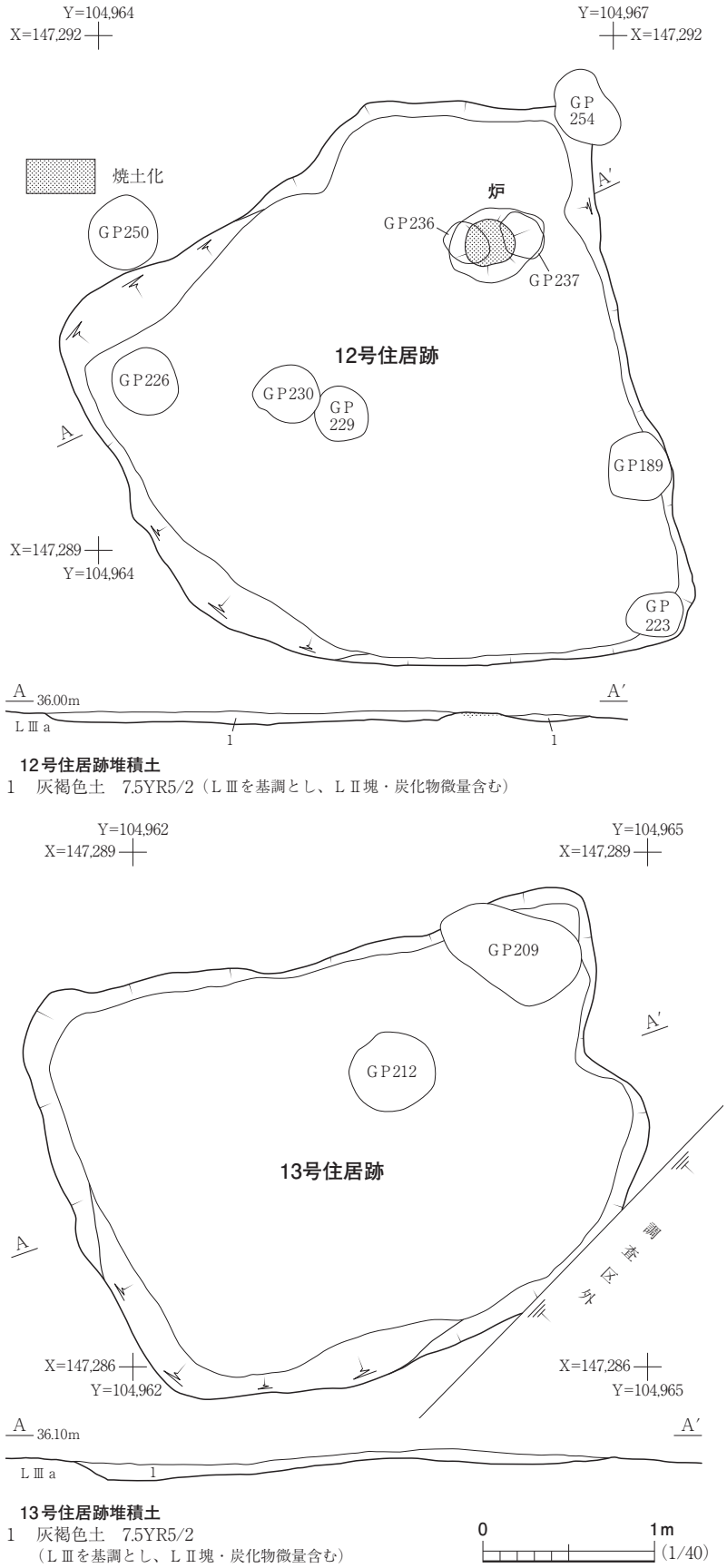


図81　12・13号住居跡

物を含む、灰褐色土の範囲として確認した。ＧＰ189・223・226・229・230・236・237・254と重複し、本遺構が古い。本遺構の南西側には13号住居跡がほぼ接して造られているが、重複関係は不明である。

平面形は不整方形で、北壁は真北からやや北西側が直線的に伸び、北西側は大きく突出する。規模は北西・南東壁で3.14m、弧状となる南壁では最大3.56mとなる。検出面からの深さは最大８cmで、周壁はいずれも緩やかに立ち上がる。床は掘り込んだＬⅢａの面をそのまま使用し、床面に踏み締まりが認められる。住居内の堆積土は単層で、ＬⅢを由来とする灰褐色土で、ＬⅡ塊、炭化物を微量含む。堆積土中にはＬⅡ塊や炭化物を含むことから、人為によるものと判断した。炉は床面中央からや北東寄りに位置する。平面形は円形で、規模は直径が29cmである。炉の上部は、円形に弱く被熱している。炉の付近はＬⅢａを掘り残し、高さは６cmである。本遺構からは弥生土器３点、石器１点が出土しているが、いずれも小片のため図示してい

ない。

ま と め

本遺構は、炉が認められることや、床面が比較的平坦なことから住居跡と考えられる。炉の付近はＬⅢａを掘り下げていることから、ℓ１が貼床で、上面が床となる可能性がある。時期は出土した遺物の特徴から、弥生時代中期後半の所産と考えられる。（佐　藤）

13号住居跡　ＳＩ13

遺　　構（図81）

13号住居跡は、丘陵頂部平坦面のＶ12グリッドに位置する。検出面はＬⅢａ上面で、炭化物を含む、灰褐色土の範囲として確認した。ＧＰ209・212と重複し、本遺構が古い。本遺構の北東側には12号住居跡がほぼ接して造られているが、重複関係は不明である。南東側の一部周壁は調査区外となる。

平面形は不整長方形で、規模は西壁で2.62ｍ、北壁で3.41ｍである。検出面からの深さは最大10㎝で、周壁は緩やかに立ち上がる。床は掘り込んだＬⅢａの面をそのまま使用し、上面には踏み締まりが認められる。住居内の堆積土は単層で、ＬⅢを由来とする灰褐色土で、炭化物を微量含む。堆積は土中に炭化物を含むことや隣接する12号住居跡の土質と近似することから、人為によるものと判断した。本遺構からは遺物は出土していない。

ま と め

本遺構は、住居内施設などは確認できなかったが、形態的な特徴から住居跡と推測した。時期は出土遺物がなく判然としないが、12号住居跡と近似することから、概ね弥生時代の所産と推測した。（佐　藤）

第３節　　溝　　跡

１号溝跡　ＳＤ01（図82、写真55）

本遺構は、調査区中央よりやや西側のＰ14・15グリッドに位置する。２号堀跡に近い平坦部に立地しており、周囲の標高は35.7ｍである。西側には４・５号土坑、２号溝跡が近接して分布し、北東方向約４ｍには７号溝跡が位置している。検出面はＬⅢで、舌状に延びた褐色土の範囲として確認した。本遺構の南側は調査区外に延伸している。

本遺構は北西・南東方向に延伸している。調査区内で確認できた長さは1.2ｍで、幅は最大で50㎝を測る。検出面からの深さは14㎝で、底面はほぼ水平である。遺構内堆積土は褐色粘質土の単層である。遺物は出土していない。本遺構の具体的な性格は不明だが、ＬⅡに覆われたＬⅢから掘り込まれていることから概ね弥生時代頃の所産と考えられる。（吉　野）

２号溝跡　ＳＤ02（図82、写真55）

本遺構は、調査区中央よりやや西側のＰ15グリッドに位置する。丘陵の頂上部の平坦面に立地しており、周囲の標高は35.9ｍとなる。北東方向には４・５号土坑が近接しており、西側には４号住居跡、４・５号溝跡が分布している。検出面はＬⅢで、細長い褐色土の範囲として確認した。本遺構の南東側は調査区外に延伸している。

本遺構はやや蛇行しながらも概ね北西・南東方向に延伸している。調査区内で確認できた長さは0.98ｍで、幅は最大で38㎝を測る。検出面からの深さは12㎝で、底面はほぼ水平である。遺構内堆積土は褐色粘質土の単層である。遺物は出土していない。本遺構の具体的な性格は不明だが、ＬⅡに覆われたＬⅢから掘り込まれていることから概ね弥生時代頃の所産と考えられる。　（吉　野）

３号溝跡　ＳＤ03（図82・84、写真55・65）

本遺構は、調査区西側のＮ16グリッドに位置する。丘陵頂上部の平坦面に立地しており、周囲の標高は36.5ｍとなる。本遺構の周辺は、後世の撹乱により遺構の分布は希薄で、西側に８ｍ程離れて１号土塁・１号堀跡、７・８号住居跡が分布し、北側に５ｍ程離れて１号掘立柱建物跡が分布する。検出面はＬⅢで、炭化物をわずかに含む暗褐色土の範囲として確認した。遺構の北西側は後世の撹乱によって失われている。南東側はさらに調査区外へ延伸している。

本遺構は北西・南東方向に延伸している。調査区内で確認できた遺構の長さは2.1ｍである。幅は最大で1.8ｍを測る。検出面からの深さは31㎝で、底面は北西側に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は暗褐色粘質土の単層である。

本遺構からは弥生土器３点、石器１点が出土しており、石器１点を図示した。図84－10は流紋岩製の剥片である。礫面はススが付着し、左面上端は細かい潰れが認められる。

本遺構の具体的な性格や年代は不明である。　（吉　野）

４号溝跡　ＳＤ04（図82、写真55）

本遺構は、調査区中央よりやや西側のＰ15グリッドに位置する。丘陵頂上部の平坦面に立地しており、周囲の標高は36.2ｍである。検出はＬⅢで、溝状に広がる灰黄褐色土の範囲として確認した。本遺構は４号住居跡、５号溝跡、ＧＰ47・49と重複しており、いずれの遺構よりも古い。

西側約２ｍには１号土坑がある。遺構の北端部は５号溝跡と重複しており、５号溝跡が４号溝跡を切っていることから４号溝跡が古い。また、遺構の東部分は後世の撹乱により破壊されている。

本遺構は北西南東方向に延伸しており、遺存する規模は、長さ2.36ｍ、幅60㎝を測る。検出面からの深さは10㎝となり、底面は北側に向かってわずかに傾斜している。遺構内堆積土は灰黄褐色土の単層である。遺物は出土していない。本遺構の具体的な性格は不明だが、４号住居跡より古いことから弥生時代中期後半以前の所産と考えられる。　（吉　野）

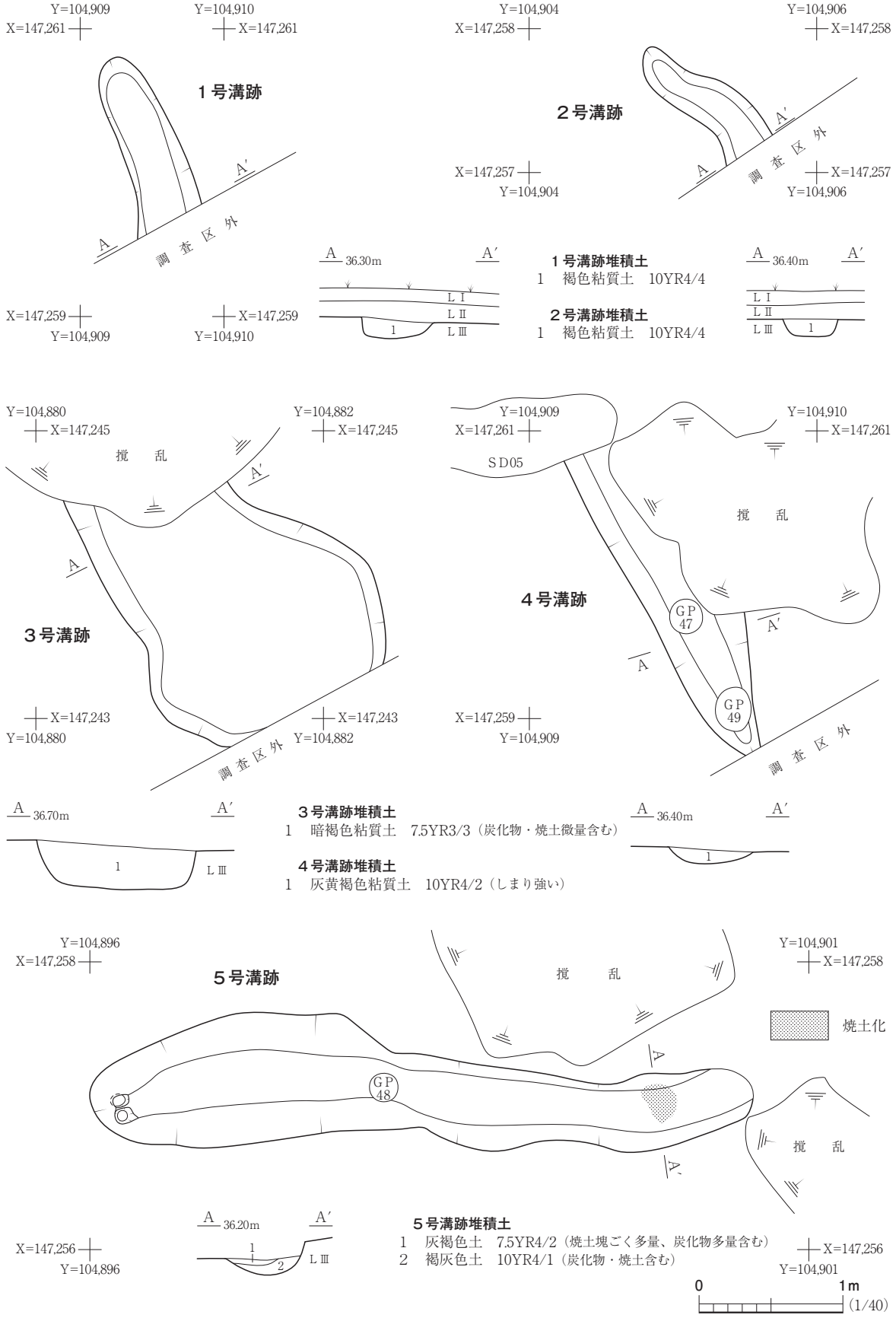

Y=104,909
X=147,261
Y=104,910
X=147,261
１号溝跡
A
A′
調査区外
X=147,259
Y=104,909
X=147,259
Y=104,910
A 36.30m A′
L Ⅰ
L Ⅱ
L Ⅲ
1
Y=104,904
X=147,258
Y=104,906
X=147,258
２号溝跡
A
A′
調査区外
X=147,257
Y=104,904
X=147,257
Y=104,906
１号溝跡堆積土
1　褐色粘質土　10YR4/4
２号溝跡堆積土
1　褐色粘質土　10YR4/4
A 36.40m A′
L Ⅰ
L Ⅱ
L Ⅲ
1
Y=104,880
X=147,245
Y=104,882
X=147,245
撹　乱
A
A′
３号溝跡
X=147,243
Y=104,880
X=147,243
Y=104,882
調査区外
A 36.70m A′
1
L Ⅲ
３号溝跡堆積土
1　暗褐色粘質土　7.5YR3/3（炭化物・焼土微量含む）
４号溝跡堆積土
1　灰黄褐色粘質土　10YR4/2（しまり強い）
Y=104,909
X=147,261
Y=104,910
X=147,261
SD05
撹　乱
４号溝跡
GP 47
GP 49
A
A′
X=147,259
Y=104,909
調査区外
A 36.40m A′
1
Y=104,896
X=147,258
５号溝跡
撹　乱
Y=104,901
X=147,258
焼土化
GP 48
A
A′
撹　乱
A 36.20m A′
1
2
L Ⅲ
X=147,256
Y=104,896
５号溝跡堆積土
1　灰褐色土　7.5YR4/2（焼土塊ごく多量、炭化物多量含む）
2　褐灰色土　10YR4/1（炭化物・焼土含む）
X=147,256
Y=104,901
0
1m
(1/40)

図82　１～５号溝跡

５号溝跡　ＳＤ05（図82・84、写真55・65）

本遺構は、調査区中央よりやや西側のＯ15・Ｐ15グリッドに位置する。丘陵頂上部の平坦面に立地しており、周囲の標高は36ｍである。他遺構との重複関係は、４号住居跡、４号溝跡より新しく、ＧＰ48よりも古い。検出はＬⅢで、焼土や炭化物を多く含む灰褐色土の範囲として確認した。

本遺構は東西方向に延伸しており、遺存する規模は、長さ4.6m、幅は最大で0.9mを測る。検出面からの深さは24㎝で、底面は凹凸が少なく、西側に向かってわずかに傾斜している。遺構の東側の底面付近には、赤色の焼土塊が集中して認められる。遺構内堆積土は２層に分層される。ℓ１は、灰褐色土に焼土塊や炭化物を多量に含む層である。堆積状況から人為堆積と判断した。ℓ２は、炭化物や焼土を含む褐灰色土で、堆積状況から人為堆積と判断した。５号溝跡の西隅部の底面からは小穴を２基確認した。いずれも平面形は円形で、径は10～15㎝程、底面からの深さは６～８㎝程である。

本遺構からは、中世陶器１点、弥生土器７点、石器４点、鉄滓４点(21.8g)、炉壁１点が出土しており、中世陶器１点、石器２点を図示した。図84－１は常滑焼の甕の口縁部である。口縁端部は一部折り返され、上部へわずかに摘み出される。年代は口縁部の形態から13世紀前半の所産と考えられる。図84－８は流紋岩製の不定形石器である。左面右側縁部に微細な剥離が認められる。図84－９は流紋岩製の剥片である。左面両側側縁部に潰れが認められる。遺構内から出土した炭化物１点に対して、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行い、樹種はヒノキ属、２σ暦年範囲は１世紀後半から３世紀前葉との結果を得た(第４章第１節参照)。

本遺構の性格は不明だが、覆土中から炉壁や焼土塊、鉄滓が出土することから、周辺に鍛冶関連の遺構の存在が想定される。年代は、出土した常滑焼から13世紀前半頃の所産と考えられる。

（吉　野）

６号溝跡　ＳＤ06（図83・84、写真55・65）

本遺構は、調査区西側のＫ・Ｌ17グリッドに位置する。丘陵頂上部の平坦面に立地しており、周囲の標高は36.8ｍである。検出はＬⅢで、不整形に広がる黄褐色土の範囲として確認した。本遺構は１号道跡の東側肩部に近接しており、２号柱列跡Ｐ１－Ｐ４間の軸線下にある。ＧＰ57と重複し、本遺構が新しい。

本遺構は北東・南西方向に延伸しており、本遺構の長さは1.72m、幅は最大で33㎝を測る。検出面からの深さは10㎝であり、底面は平坦である。遺構内堆積土は、焼土や炭化物を含むにぶい黄褐色土の単層である。堆積土の特徴は５号溝跡に近似する。

本遺構から出土した遺物は焼けた粘土塊が６点出土で、遺存が良好な１点を図示した。図84－７は粘土塊である。被熱しており、表面は赤化している。表面には、粘土紐の積み上げ痕が明瞭に観察できる。スサ等の混和材は認められない。本遺構の具体的な性格や年代は不明である。（吉　野）

７号溝跡　ＳＤ07（図83・84、写真55）

本遺構は、調査区中央よりやや西側のＱ14グリッドに位置する。北側の２号堀跡へ向かって落ち込む緩斜面上位に立地しており、周囲の標高は35.5ｍである。検出面はＬⅣで、炭化物や焼土を含む灰褐色土の範囲として確認した。北東側には８・９号土坑が分布している。

本遺構は南北方向に延伸しており、規模は長さ2.76ｍ、幅は73㎝を測る。検出面からの深さは29㎝で、底面はＬⅣの角礫が多く露出し、凹凸が顕著である。また、底面は北側へ向かって傾斜している。遺構内堆積土は２層に分層される。ℓ１は炭化物や焼土を多量に含む層であり、ℓ２はＬⅣに含まれる礫を多量に含む堆積土である。いずれもＬⅢを由来としており、堆積の状況から自然流入土と判断した。

本遺構からは弥生土器25点、石器６点が出土しており、弥生土器４点を図示した。図84－３～６は弥生土器である。３は壺の口縁部と頸部の境付近と考えられる。口縁部と頸部の境には、断面三角形の突帯がめぐる。内外面には３本引きの平行沈線による施文が認められ、頸部に山形文、口縁部と内面に縦線文が施される。沈線の断面形はＵ字状である。４は壺の上胴部である。２本１組の束線具により、横線文を施す。縄文の原体は付加条文である。５は壺もしくは甕の下胴部で、縄文の原体は付加条文である。６は壺もしくは甕の底部である。底部には布目の痕跡が確認できる。

本遺構は南北方向に延伸する溝跡である。具体的な性格は不明だが、年代は出土遺物の特徴から弥生時代中期後半頃の所産と考えられる。（吉　野）

８号溝跡　ＳＤ08（図83・84）

本遺構は、調査区西側のM14グリッドに位置する。西側の２号堀跡へ向かって落ち込む緩斜面上位に立地しており、周囲の標高は35.9ｍである。検出面はＬⅢで、褐灰色土と黒褐色土の混ざった範囲として確認した。遺構の北東半分は後世の撹乱によって消失しており、北東端部がわずかに残る。本遺構の南西端部は５号住居跡と重複しており、本遺構の方が新しい。本遺構の南東方向には、住居跡が複数分布しており、南側の平坦部には小穴群が多く分布している。

本遺構は北東・南西方向に延伸しており、その規模は長さ3.54ｍ、幅84㎝を測る。検出面からの深さは41㎝で、遺存している底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は３層に分層される。ℓ１はＬⅢａを由来とする土質である。ℓ２はＬⅡを由来とする褐灰色土と黒褐色土塊の混土で、１号土塁の構築土と近似した様相を示す。ℓ３はＬⅢを由来とする橙色土である。土層の観察からℓ１・２は人為堆積、ℓ３は自然堆積と判断した。

本遺構からは、中世陶器１点、弥生土器３点が出土しており、中世陶器１点を図示した。図84－２は常滑焼甕の胴部下半と考えられ、内面にはススが付着している。本遺構の性格は不明なものの、年代は出土した常滑焼から概ね中世期の所産と考えられる。（吉　野）

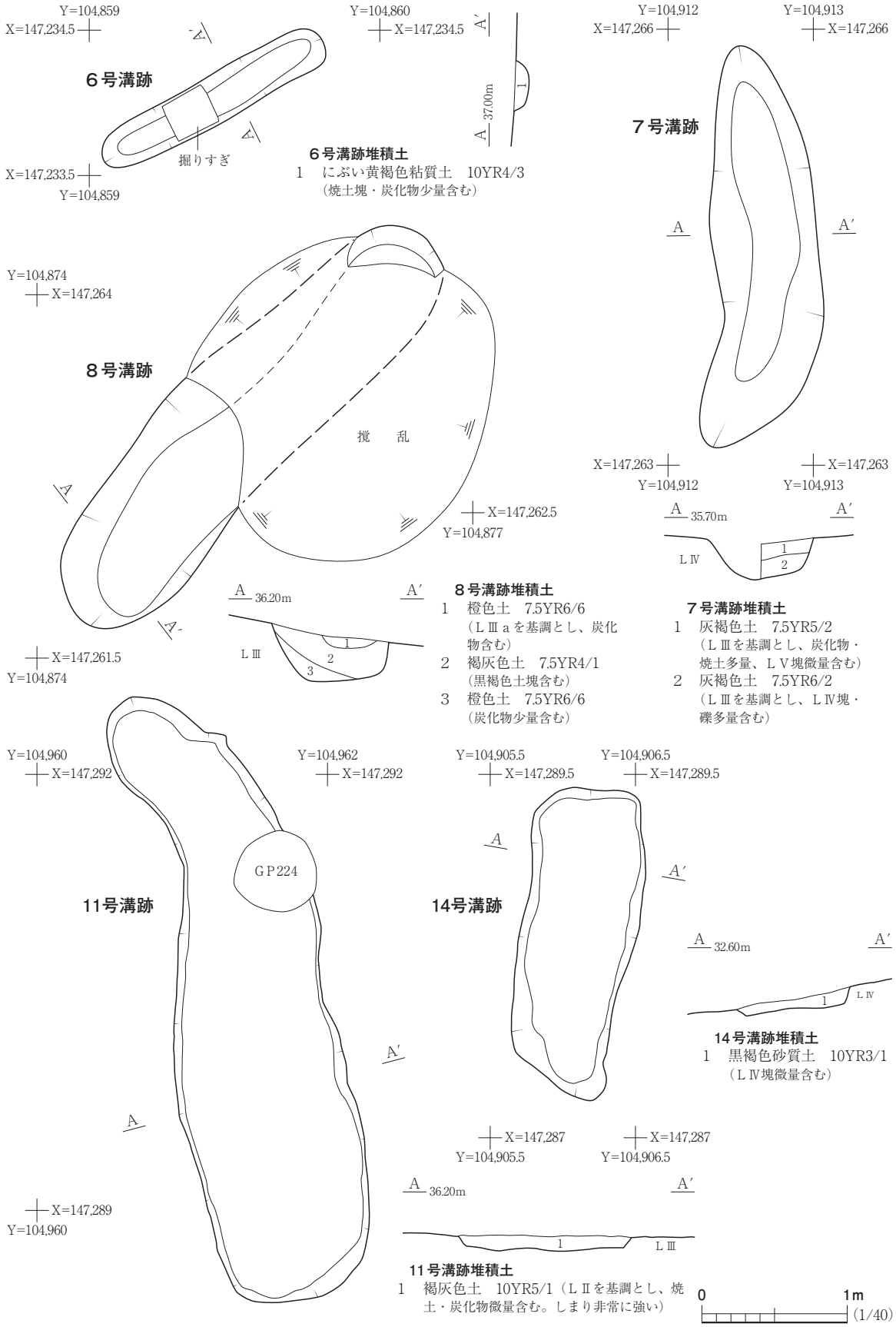


図83　６～８・11・14号溝跡

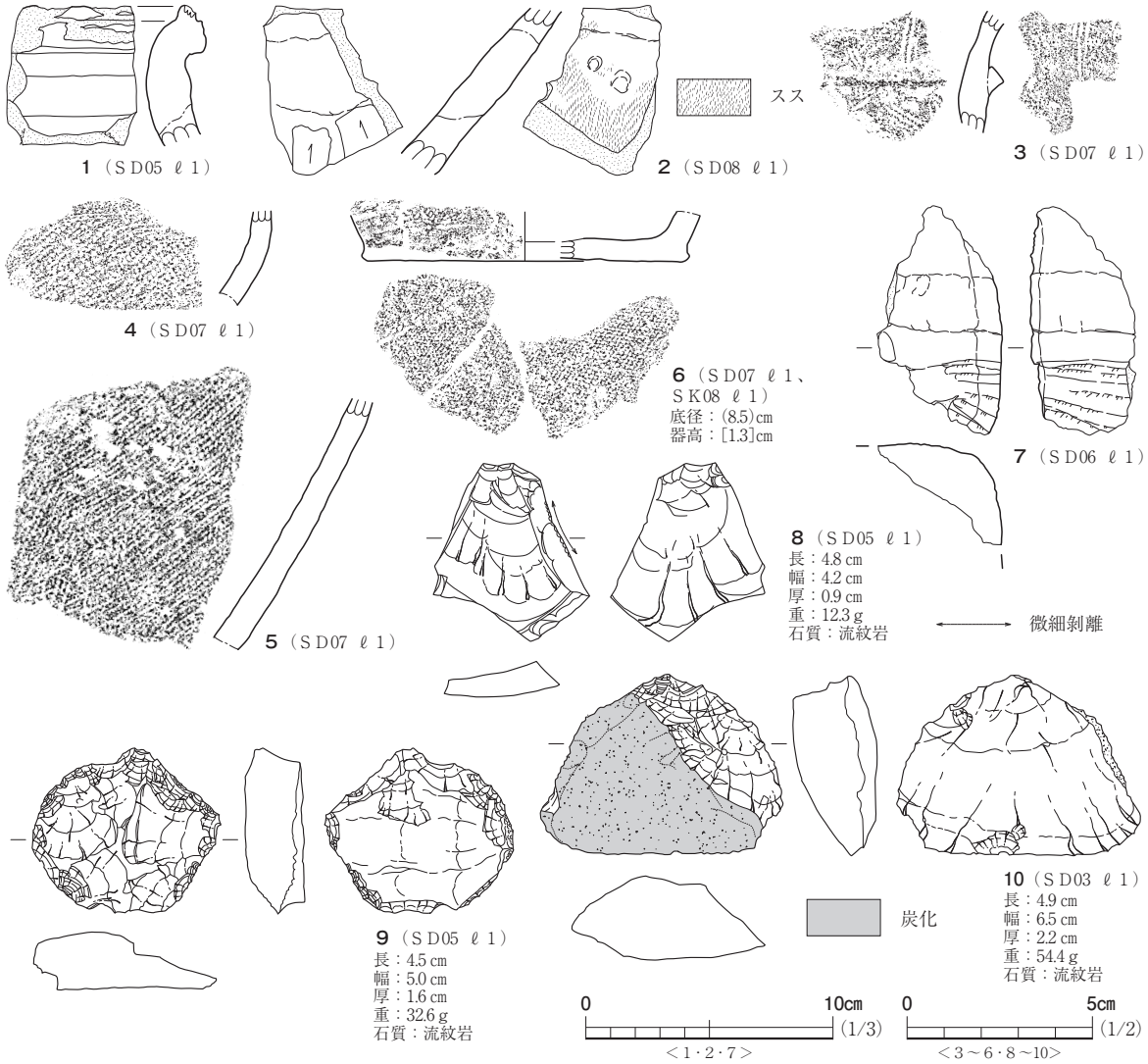


図84　３・５～８号溝跡出土遺物

11号溝跡　ＳＤ11（図83）

本遺構は、丘陵北東側頂部の平坦面、Ｖ11・12グリッドに位置する。検出面はＬⅢで、溝状の褐灰色土の範囲として確認した。本遺構はＧＰ224と重複し、本遺構が古い。本遺構の南側に隣接して13号住居跡が、東側には12号住居跡が位置している。

本遺構は南北方向に延伸する溝跡である。規模は長さ4.27m、幅は南側で1.2m、北側では60cmとなり、北側に向けて幅を減じる。検出面からの深さは最大で10cmである。周壁はいずれも急傾斜となる。底面は平坦に整えられている。遺構内堆積土はＬⅡを由来とする褐灰色土の単層で、焼土や炭化物を含み、しまりは非常に強い。堆積土の状況から人為に埋め立てたものと判断した。本遺構から、弥生土器の小片が４点出土しているが、いずれも小片のため図化していない。

本遺構は南北方向に延伸する浅い溝跡である。その性格は不明だが、年代は出土遺物から概ね弥生時代の所産と考えられる。（佐　藤）

14号溝跡　ＳＤ14（図83）

本遺構は、沢３の緩斜面、Ｐ12グリッドに位置する。検出面はＬⅣで、溝状の黒褐色砂質土の範囲として確認した。２号土塁と重複し本遺構が古い。南東側４ｍには45号土坑が、北東側3.2mには11号性格不明遺構が位置する。

本遺構は南北方向に延伸する溝跡である。規模は長さ2.12m、幅は80cmである。検出面からの深さは最大で10cmである。周壁は急傾斜だが、斜面下位にあたる南西側のみ緩やかとなる。底面は平坦に整えられている。遺構内堆積土はＬⅣ塊を微量含んだ黒褐色砂質土である。斜面上位からの流れ込みと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は南北方向に延伸する浅い溝跡である。その性格は不明だが、年代は２号土塁より古いことから、概ね中世以前の所産と考えられる。（佐　藤）

第４節　土　坑

１号土坑　ＳＫ01（図85・92、写真56）

本遺構は、丘陵頂上部の平坦面、O15グリッドに位置する。検出面はＬⅢ上面で、にぶい黄褐色粘質土の範囲として確認した。北方向約１ｍには４号住居跡や５号溝跡が分布している。ＧＰ１と重複しており、本遺構が古い。

遺構の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸1.37ｍ、短軸1.14ｍで、深さは検出面から最大48cmを測る。周壁の断面は逆台形を呈し、中央部の底面はほぼ平坦である。遺構内堆積土は、４層に分層した。ℓ１はＬⅡを由来とする自然堆積と判断した。ℓ２はＬⅡとＬⅢを由来とする土の混土で人為堆積である。ℓ３・４はＬⅢを由来とする自然堆積土と判断した。

本遺構からは弥生土器１点、石器４点、粘土塊１点が出土しており、弥生土器１点を図示した。図92－２は壺の頸部である。２本引きの平行沈線により波状文を施している。遺構内から出土した炭化物１点に対して、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行い、樹種はクリ、２σ暦年範囲は14世紀後葉から15世紀前葉との結果を得た（第４章第１節参照）。本遺構の詳細な性格や年代は不明である。（吉　野）

２号土坑　ＳＫ02（図85）

本遺構は、丘陵頂上部の平坦面から２号堀跡の落ち際、R14グリッドに位置する。本遺構は１号住居跡の掘り下げ中に、炭化物をわずかに含む灰褐色土の範囲として確認した。１号住居跡と重複しており、本遺構の方が新しい。

平面形は不整な楕円形を呈する。規模は長軸1.12m、短軸94cmを測る。検出面からの深さは43cmで、周壁は擂鉢状に立ち上がる。遺構内堆積土は、２層に分層した。いずれもレンズ状の堆積

を示すことから、壁崩落土を含む自然堆積である。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構の詳細な性格は不明で、年代は１号住居跡より新しいことから、概ね弥生時代中期後半以降の所産と考えられる。（吉　野）

３号土坑　ＳＫ03（図85・92、写真56・65）

本遺構は丘陵頂上部、N15グリッドに位置する。検出面はＬⅢ上面で、灰黄褐色粘質土の楕円形の範囲として確認した。北西方向約1.2ｍには２号住居跡が位置している。本遺構の東端部は後世の撹乱を受けている。

遺構の平面形は、不整な楕円形を呈する。規模は長軸1.42㎝、短軸96㎝を測る。検出面からの深さは34㎝で、周壁は底面から開口部に向けて丸みをもって立ち上がり、特に南西側は緩やかである。遺構内堆積土は、４層に分層した。ℓ１・４は均質な土質で、レンズ状の堆積を示す流入土や、壁面崩落土を主体とした自然堆積である。ℓ２・３は遺構周辺のＬⅢ由来の土塊を含む人為堆積土である。

本遺構からは弥生土器１点、石器４点が出土しており、石器４点を図示した。ℓ３内からは、10～30㎝大の礫が11個出土している。その多くは、花崗岩や斑れい岩である。図92－11は流紋岩の石核である。亜円礫を用い、側縁から剥離を行っている。図92－12は石英斑岩製の磨石である。両面の中心に磨面が形成される。図92－13は赤玉石の石核である。両極打法による剥離が認められる。図92－14は花崗閃緑岩製の円礫で、左面左側縁部にススが付着する。

本遺構の性格は不明だが、年代は土器や石器の特徴から弥生時代後半と考えられる。（吉　野）

４号土坑　ＳＫ04（図85）

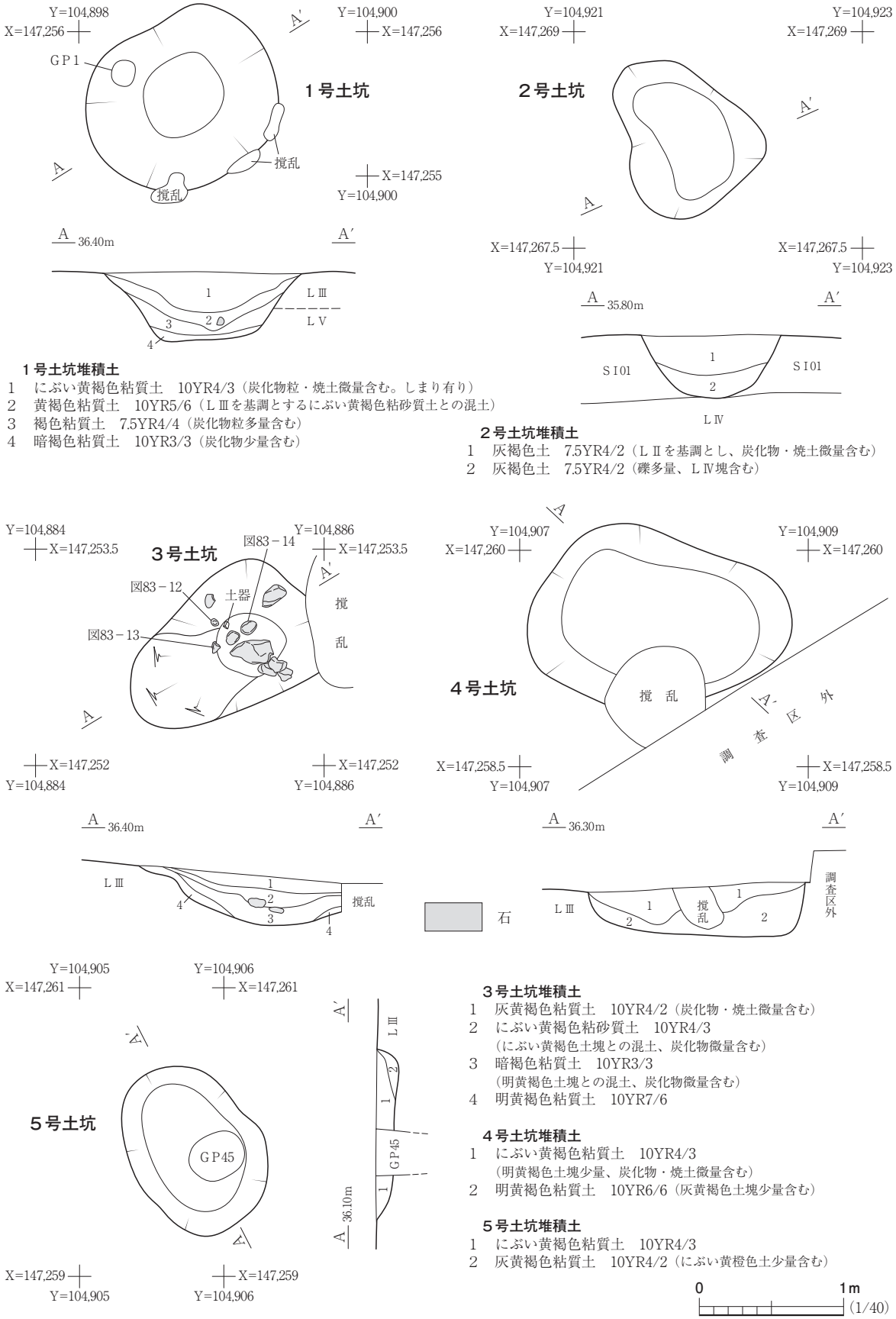
本遺構は丘陵頂上部の平坦部、Ｐ14・15グリッドに位置する。検出面はＬⅢ上面で、にぶい黄褐色粘質土の範囲として確認した。西方向約１ｍには５号土坑、東方向約１ｍには１号溝跡がある。南壁の一部は後世の撹乱により遺存していない。

遺構の平面形は、不整な隅丸長方形を呈する。規模は長軸1.65ｍ、短軸1.24ｍで、検出面からの深さは38㎝である。周壁は急に立ち上がる。底面は凹凸が多い。遺構内堆積土は、２層に分層した。ℓ１・２はＬⅢを由来とする堆積土を基調とする。土層の堆積がレンズ状を示すことから、周壁崩落土を含む自然堆積と判断した。遺物は出土していない。

本遺構の具体的な性格や年代は不明である。（吉　野）

５号土坑　ＳＫ05（図85）

本遺構は丘陵頂上部の平坦面、Ｐ14･15グリッドに位置する。検出面はＬⅢである。検出時は、ＬⅢと同質だがよりしまり・粘性のあるにぶい黄褐色粘質土の範囲として確認した。ＧＰ45と重複し、本遺構が古い。東方向約１ｍに４号土坑、西方向約2.2ｍに４号住居跡が隣接して分布する。



１号土坑堆積土

1　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3（炭化物粒・焼土微量含む。しまり有り）
2　黄褐色粘質土　10YR5/6（ⅠⅢを基調とするにぶい黄褐色粘砂質土との混土）
3　褐色粘質土　7.5YR4/4（炭化物粒多量含む）
4　暗褐色粘質土　10YR3/3（炭化物少量含む）

２号土坑堆積土

1　灰褐色土　7.5YR4/2（ⅠⅡを基調とし、炭化物・焼土微量含む）
2　灰褐色土　7.5YR4/2（礫多量、ⅠⅣ塊含む）

３号土坑堆積土

1　灰黄褐色粘質土　10YR4/2（炭化物・焼土微量含む）
2　にぶい黄褐色粘砂質土　10YR4/3
（にぶい黄褐色土塊との混土、炭化物微量含む）
3　暗褐色粘質土　10YR3/3
（明黄褐色土塊との混土、炭化物微量含む）
4　明黄褐色粘質土　10YR7/6

４号土坑堆積土

1　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3
（明黄褐色土塊少量、炭化物・焼土微量含む）
2　明黄褐色粘質土　10YR6/6（灰黄褐色土塊少量含む）

５号土坑堆積土

1　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3
2　灰黄褐色粘質土　10YR4/2（にぶい黄橙色土少量含む）

図85　１～５号土坑

遺構の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸1.21ｍ、短軸89㎝で、検出面からの深さは最大15㎝である。底面は凹凸があり、周壁は急に立ち上がる。遺構内堆積土は２層に分層した。土層の堆積はレンズ状を示すことから周壁崩落土を含む自然堆積と判断した。遺物は出土していない。本遺構の具体的な性格や年代は不明である。（吉　野）

６号土坑　ＳＫ06（図86）

本遺構は沢２の斜面中位、Ｉ・Ｊ17グリッドに位置する。検出面はＬＶで、１号道跡の底面を精査中に赤色の焼土塊と炭化物を多く含んだ黒褐色粘質土の範囲として確認した。１号道跡の平場状の部分と重複しており、本遺構が古い。本遺構の上面や北西壁の一部は、後世の撹乱により失われている。

本遺構の平面形は不整な楕円形を呈する。規模は遺存部のみで長軸82㎝、短軸45㎝で、検出面からの深さは15㎝である。周壁は緩やかに立ち上がる。底面は中央部がわずかにくぼむ。遺構の周壁の一部は、被熱により焼土化している。焼土の厚さは最大で３㎝を測る。

遺構内の堆積土は、炭化物や焼土塊を多量に含む黒褐色粘質土の単層で、人為による埋め立てと判断した。遺物は出土していない。

本遺構の性格は形態的な特徴や、覆土に焼土塊・炭化物を含むことから、木炭焼成土坑と考えられる。年代は出土遺物がなく不明だが、他遺跡の類例から概ね古代と推測される。（吉　野）

７号土坑　ＳＫ07（図86、写真56）

本遺構は、北側の谷へ下る緩斜面、Ｐ14グリッドに位置する。検出面はＬⅢで、炭化物と焼土をわずかに含むにぶい黄褐色粘質土の範囲として確認した。本遺構の南方向約1.4ｍには４号住居跡が位置している。

遺構の平面形は方形を呈し、規模は長軸59㎝、短軸46㎝で、検出面からの深さは19㎝である。底面は凹凸があり、ＬⅣの小礫が露頭している。周壁は垂直に立ち上がる。遺構内堆積土は、ＬⅢｂを由来とするにぶい黄褐色砂質土の単層で、炭化物や焼土を含むことから、人為による埋め立てと判断した。本遺構からは弥生土器片５点が出土しているが、いずれも小片のため図示していない。本遺構の詳細な性格は不明だが、年代は出土遺物の特徴から弥生時代中期後半の所産と考えられる。（吉　野）

８号土坑　ＳＫ08（図86・92、写真56・65）

本遺構は、沢３の斜面上位、Ｑ14グリッドに位置する。検出面はＬⅣである。検出時はＬⅣに炭化物・焼土を含む範囲として確認した。南方向約１ｍに７号溝跡、北東約60㎝に９号土坑が隣接して分布している。

遺構の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸1.62ｍ、短軸１ｍで、検出面からの深さは最大32㎝

である。周壁は急に立ち上がり、底面はＬⅣを掘り込んでおり、数cm程の礫が露頭し、凹凸が認められる。遺構内堆積土は、２層に分層した。いずれも灰褐色土で、焼土や炭化物、ＬⅢ・Ⅳ塊を含むことから人為による埋め立てと判断した。

本遺構からは弥生土器38点、石器23点が出土しており、弥生土器２点を図示した。図92－３は壺形土器の上胴部である。２本引きの平行沈線により重山形文を施している。沈線の断面形はＵ字状となる。図92－８は壺形土器もしくは甕形土器の下胴部である。縄文の原体は単節斜縄文である。遺構内から出土した炭化物１点に対して、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行い、樹種はクリ、２σ暦年範囲は12世紀中葉から13世紀前葉との結果を得た（第４章第１節参照）。

本遺構の具体的な性格は不明だが、年代は出土遺物の特徴から弥生時代中期後半の所産と考えられる。（吉　野）

９号土坑　ＳＫ09（図86・92、写真65）

本遺構は沢３の斜面上位、Q14グリッドに位置する。検出面はＬⅣで、炭化物や焼土を含んだ楕円形の灰褐色土の範囲として確認した。南西方向約60cmには８号土坑、東方向約４ｍには１号住居跡が分布している。

遺構の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸1.35ｍ、短軸83cmで、検出面からの深さは最大33cmを測る。周壁は急に立ち上がり、底面はＬⅣに含まれる礫が多く露頭し、凹凸が著しい。遺構内堆積土は、２層に分層した。いずれも灰褐色土で、焼土や炭化物、ＬⅢ～Ｖを由来とする土塊を含むことから人為による埋め立てと判断した。

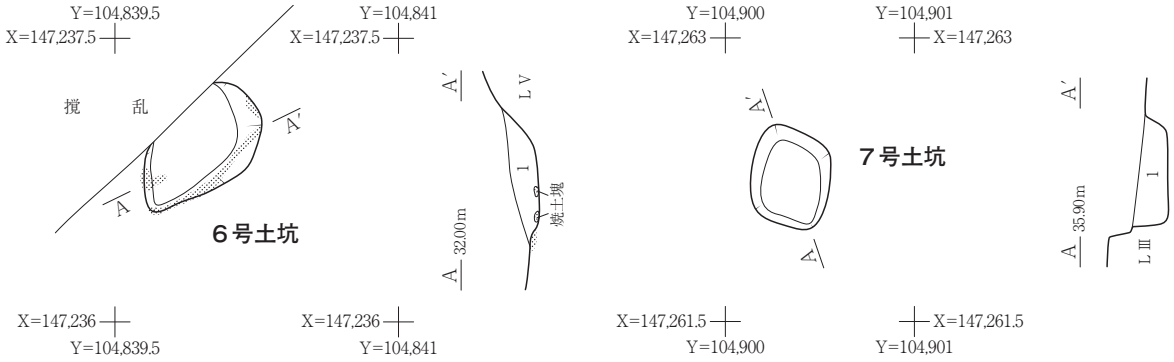
本遺構からは弥生土器14点が出土しており、弥生土器２点を図示した。図92－４は壺の上胴部である。３本１組の束線具により縦線文、横線文を施している。縄文の原体は条間が幅広の単節斜縄文である。図92－７は壺もしくは甕の下胴部である。縄文の原体は付加条文である。

本遺構の具体的な性格は不明だが、年代は出土遺物の様相から弥生土器中期後半の所産と考えられる。（吉　野）

10号土坑　ＳＫ10（図86）

本遺構は丘陵頂上部の平坦面、Ｌ15グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、１号土塁の積土とＬⅡを除去した後の精査で確認した。１号土塁と重複しており、本遺構の方が古い。南東方向約６ｍには８号住居跡が位置している。遺構の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸1.56ｍ、短軸1.13ｍで、検出面からの深さは最大34cmである。周壁は、西側は急に立ち上がり、それ以外は緩やかである。底面は平坦である。遺構内堆積土は、ＬⅢａを由来とする灰黄褐色粘質土で自然堆積と判断した。本遺構から遺物は出土していない。

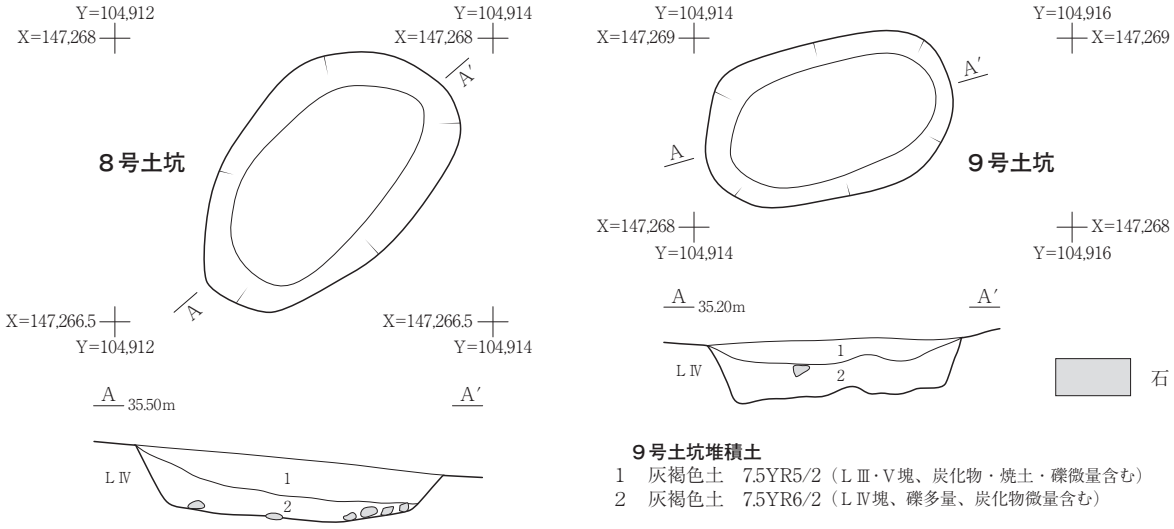
本遺構の具体的な性格は不明だが、年代はＬⅡに覆われたＬⅢから掘り込まれることから、概ね弥生時代の所産と考えられる。（吉　野）



６号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR3/1
（炭化物・焼土塊多量含む）

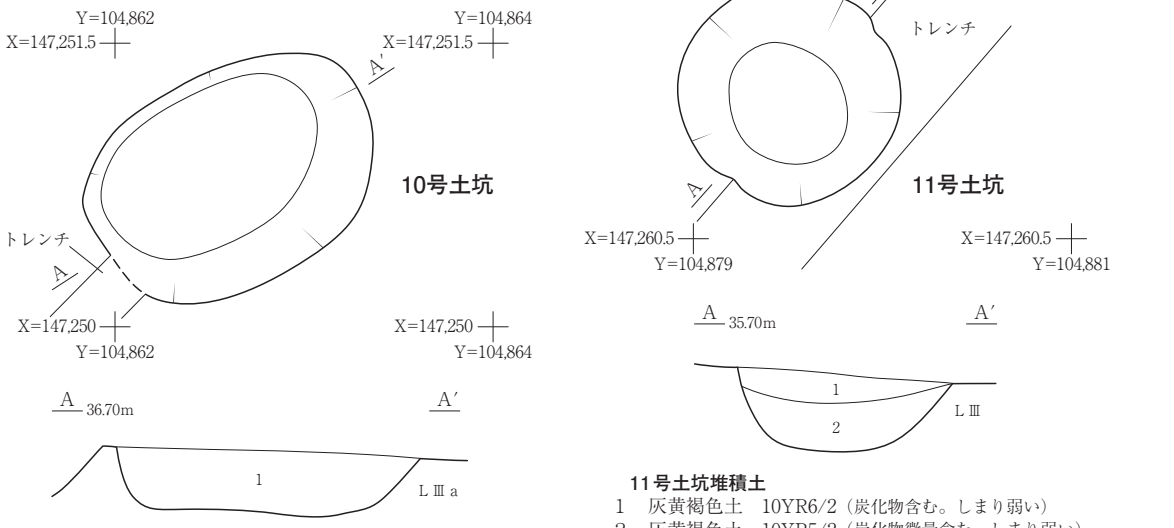
焼土化

７号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3
（炭化物・焼土少量含む）



８号土坑堆積土
1　灰褐色土　7.5YR5/2（Ｌ Ⅲ･Ⅳ塊、炭化物・焼土・礫微量含む）
2　灰褐色土　7.5YR6/2（Ｌ Ⅳ塊、礫多量、炭化物微量含む）

９号土坑堆積土
1　灰褐色土　7.5YR5/2（Ｌ Ⅲ･Ⅴ塊、炭化物・焼土・礫微量含む）
2　灰褐色土　7.5YR6/2（Ｌ Ⅳ塊、礫多量、炭化物微量含む）



１０号土坑堆積土
1　灰黄褐色粘質土　10YR4/2（炭化物微量含む）

１１号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10YR6/2（炭化物含む。しまり弱い）
2　灰黄褐色土　10YR5/2（炭化物微量含む。しまり弱い）

0　1m
(1/40)

図86　６～11号土坑

11号土坑　ＳＫ11（図86・92、写真65）

本遺構は、丘陵頂上部付近の斜面上位、Ｍ・Ｎ 14グリッドに位置する。検出面はＬⅢで、９号住居跡床面の精査中に、灰黄褐色土の範囲として確認した。９号住居跡と重複しており、本遺構が古い。遺構の南側には２・３・５・６・10号住居跡が密集して分布している。

遺構の平面形は円形を呈する。規模は直径1.15m、検出面からの深さは最大42cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦となる。遺構内堆積土は２層に分層した。いずれもＬⅢを由来とする灰黄褐色土で、斜面上位からの自然堆積と判断した。

本遺構からは弥生土器６点が出土しており、２点を図示した。図92－５は壺の上胴部である。２本引きの平行沈線により三角形文を施している。図92－９は壺もしくは甕の下胴部である。縄文の原体は単節斜縄文である。

本遺構の具体的な性格は不明だが、年代は９号住居跡より古いことや出土遺物から弥生時代中期後半の所産と考えられる。（吉　野）

12号土坑　ＳＫ12（図87）

本遺構は、丘陵頂部の平坦面、Ｙ・Ｚ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢで、不整形な褐灰色土の範囲として確認した。ＧＰ516・517と重複しており、本遺構が新しい。本遺構の北東方向へ2.4mには15号土坑が、西側には５号平場の小穴群が分布している。

遺構の平面形は隅丸方形であり、規模は長軸1.62m、短軸1.34m、検出面からの深さは最大52cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦となる。遺構内堆積土は２層に分層した。いずれもＬⅡを由来とする褐灰色土で、炭化物・焼土、ＬⅢａ塊を含むことから、短期間に埋め立てられたものと判断した。本遺構からは弥生土器１点、石器１点が出土しているが、いずれも小片のため図示していない。

本遺構は平面形が隅丸方形の土坑である。具体的な性格は不明だが、中世の小穴より新しいことから概ね中世以降の所産と考えられる。（佐　藤）

13号土坑　ＳＫ13（図87）

本遺構は、丘陵東隅の平坦面、Ｚ10グリッドに位置する。検出面は５号平場整地上面で、長方形の黒褐色土の範囲として確認した。他の遺構との重複は認められないが、５号平場の整地より新しい。本遺構の西側には隣接して14号土坑が位置している。

本遺構の平面形は長方形であり、規模は長軸73cm、短軸54cm、検出面からの深さは最大25cmである。周壁はいずれも垂直に立ち上がり、底面は平坦となる。遺構内堆積土は黒褐色土の単層で、グライ化した褐色粘土塊を含む。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は平面形が整った長方形で、比較的小型の土坑である。詳細な性格は不明だが、年代は５

号平場の整地より新しいことから、概ね中世以降の所産と考えられる。（佐　藤）

14号土坑　ＳＫ14（図87）

本遺構は、丘陵東隅の平坦面、Ｚ10グリッドに位置する。検出面は５号平場整地上面で、不整方形のにぶい褐色土の範囲として確認した。他の遺構との重複は認められないが、５号平場の整地より新しい。本遺構の東側には隣接して13号土坑が位置している。

本遺構の平面形は不整な方形であり、規模は長軸1.14m、短軸98㎝、検出面からの深さは最大22㎝である。周壁はいずれも急に立ち上がり、底面は平坦となる。遺構内堆積土は２層に分けられた。ℓ１はＬⅢａを由来とするにぶい褐色土で、褐灰色土塊を含む。ℓ２は黒褐色土で焼土・炭化物・ＬⅢａ塊を含む。いずれも堆積土の特徴から人為によるものと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は平面形が不整な方形の掘り込みの浅い土坑である。詳細な性格は不明だが、年代は５号平場の整地より新しいことから、概ね中世以降の所産と考えられる。（佐　藤）

15号土坑　ＳＫ15（図87）

本遺構は、丘陵東隅の平坦面、Ｚ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢで、長方形の黒褐色土の範囲として確認した。他の遺構との重複は認められない。本遺構の東側３ｍには14号土坑が、南西側2.4mには12号土坑が位置する。

本遺構の平面形は長方形であり、規模は長軸1.49m、短軸91㎝、検出面からの深さは最大63㎝である。周壁は急に立ち上がり、西壁はほぼ垂直となる。底面は、東壁に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は２層に分けられた。いずれもＬⅢａ塊を含んだ黒褐色土であることから、短期間のうちに埋め立てられたものと判断した。遺物は近世陶器２点、貝殻片が４点出土している。近世陶器は大堀相馬焼の灰釉丸碗とみられるが、いずれも小片のため図示していない。

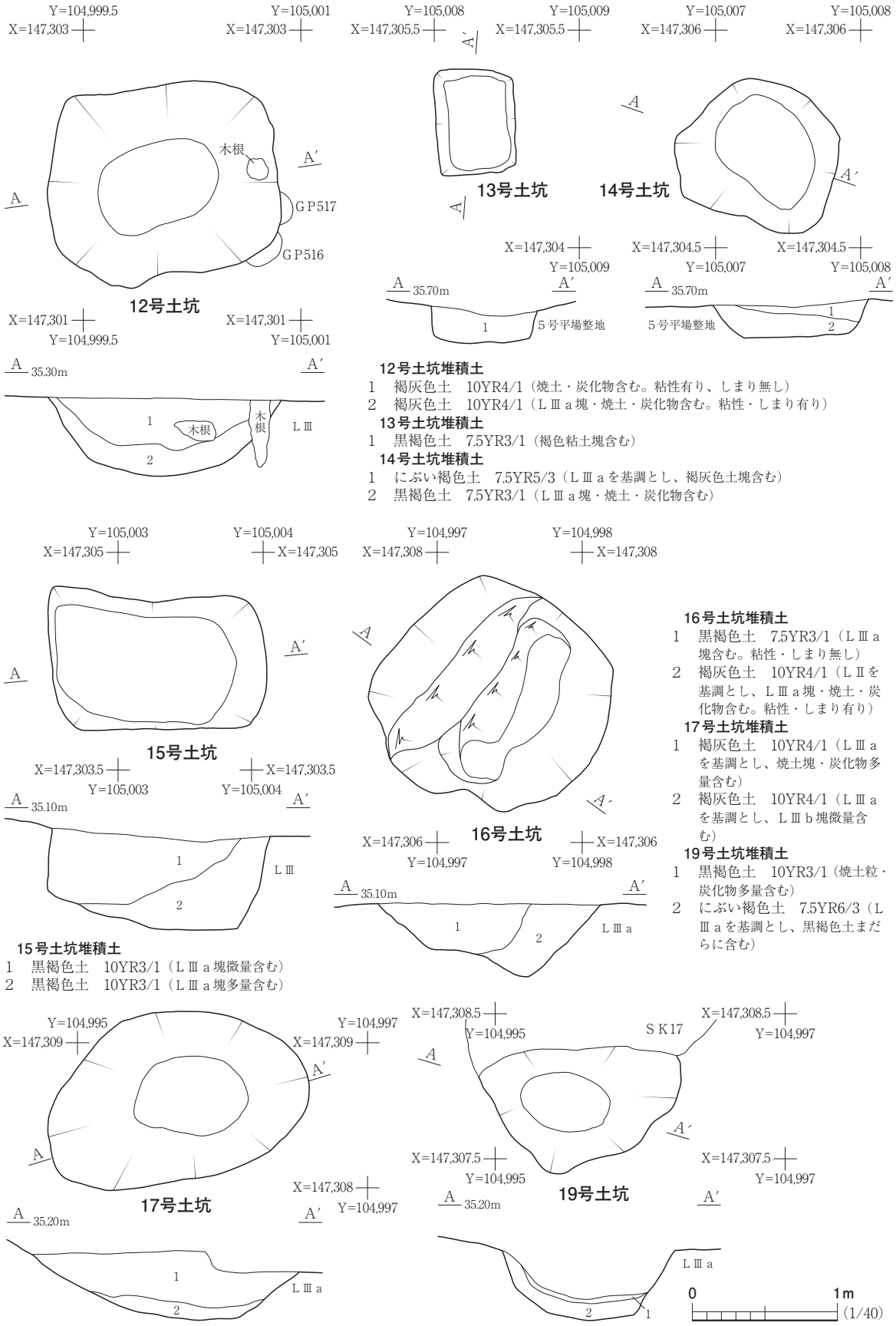
本遺構は平面形が長方形の掘り込みが深い土坑である。その詳細な性格は不明だが、少量の陶器片や貝殻が出土していることから廃棄坑の可能性がある。年代は大堀相馬焼の灰釉丸碗が出土していることから、18世紀末から19世紀初頭頃の所産と考えられる。（佐　藤）

16号土坑　ＳＫ16（図87）

本遺構は、丘陵東隅の平坦面、Ｙ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、方形の黒褐色土の範囲として確認した。他の遺構との重複は認められない。本遺構の北西側には17～20号土坑が近接して位置している。

本遺構の平面形は不整な方形であり、規模は一辺1.55m、検出面からの深さは最大50㎝である。周壁はいずれも緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形となる。底面は、北東南西方向に細長くなる。

遺構内堆積土は２層に分けられた。ℓ１は黒褐色土でＬⅢａ塊を含む。15号土坑の遺構堆積土



12号土坑堆積土
1　褐灰色土　10YR4/1（焼土・炭化物含む。粘性有り、しまり無し）
2　褐灰色土　10YR4/1（Ｌ Ⅲ ａ塊・焼土・炭化物含む。粘性・しまり有り）

13号土坑堆積土
1　黒褐色土　7.5YR3/1（褐色粘土塊含む）

14号土坑堆積土
1　にぶい褐色土　7.5YR5/3（Ｌ Ⅲ ａを基調とし、褐灰色土塊含む）
2　黒褐色土　7.5YR3/1（Ｌ Ⅲ ａ塊・焼土・炭化物含む）

15号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（Ｌ Ⅲ ａ塊微量含む）
2　黒褐色土　10YR3/1（Ｌ Ⅲ ａ塊多量含む）

16号土坑堆積土
1　黒褐色土　7.5YR3/1（Ｌ Ⅲ ａ塊含む。粘性・しまり無し）
2　褐灰色土　10YR4/1（Ｌ Ⅱを基調とし、Ｌ Ⅲ ａ塊・焼土・炭化物含む。粘性・しまり有り）

17号土坑堆積土
1　褐灰色土　10YR4/1（Ｌ Ⅲ ａを基調とし、焼土塊・炭化物多量含む）
2　褐灰色土　10YR4/1（Ｌ Ⅲ ａを基調とし、Ｌ Ⅲ ｂ塊微量含む）

19号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（焼土粒・炭化物多量含む）
2　にぶい褐色土　7.5YR6/3（Ｌ Ⅲ ａを基調とし、黒褐色土まだらに含む）

図87　12～17・19号土坑

と近似する。ℓ２は褐灰色土でＬⅡを由来とし、ＬⅢａ塊・炭化物・焼土を含む。土質の特徴から、いずれも人為堆積と判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は平面形が方形の土坑である。その詳細な性格は不明だが、年代は15号土坑と堆積土の土質が近似することから近世以降の可能性がある。（佐　藤）

17号土坑　ＳＫ17（図87）

本遺構は、丘陵東隅の平坦面、Ｙ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、遺構検出時は楕円形の褐灰色土の範囲として確認した。18～20号土坑と重複し、本遺構が新しい。本遺構の周辺には16・18～20号土坑が隣接して位置している。

本遺構の平面形は楕円形を呈する。規模は長軸1.83m、短軸1.15m、検出面からの深さは最大47cmである。周壁はいずれも緩やかに立ち上がり、断面形はⅢ状となる。底面は平坦となる。遺構内堆積土は２層に分けられた。いずれもＬⅢａを由来とする褐灰色土で、ＬⅢｂ塊・炭化物・焼土塊を含むことから人為による埋め立てと判断した。本遺構から石器が１点出土しているが、小片のため図示していない。

本遺構は平面形が楕円形の土坑である。その詳細な性格や年代は不明である。（佐　藤）

19号土坑　ＳＫ19（図87）

本遺構は、丘陵東隅の平坦面、Ｙ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、当初は17号土坑として掘削していたが、底面が浅いことや、堆積土が異なることから、別の土坑が重複していると判断した。17号土坑との重複関係は、本遺構が古い。本遺構の周辺には16～18・20号土坑が隣接して位置している。

本遺構の平面形は不整な楕円形を呈する。規模は長軸1.4m、短軸の遺存値85cm、検出面からの深さは最大49cmである。周壁はいずれも急に立ち上がり、断面形は逆台形となる。底面は中央に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は２層に分けられた。ℓ１は炭化物・焼土粒を含む黒褐色土となる。ℓ２はＬⅢａを由来とするにぶい褐色土で、17号土坑の遺構内堆積土に近似する。遺構内堆積土の特徴から、17号とほぼ同時期に埋め立てられたものと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は平面形が不整な楕円形の土坑である。その詳細な性格や年代は不明である。（佐　藤）

20号土坑　ＳＫ20（図88）

本遺構は、丘陵東隅の平坦面、Ｙ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、黒褐色土の方形の範囲として確認した。17号土坑と重複し、本遺構が古い。本遺構の周辺には16～19号土坑が隣接して位置している。

本遺構の平面形は方形を呈する。規模は一辺1.15m、検出面からの深さは最大23cmである。周壁は

いずれも緩やかに立ち上がる。底面は中央に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土はＬⅢａと黒褐色土の混合土の単層で、人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は平面形が方形の浅い掘り込みの土坑で、その詳細な性格や年代は不明である。（佐　藤）

21号土坑　ＳＫ21（図88）

本遺構は、丘陵頂部の平坦面、Ｗ・Ｘ11グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、黒褐色土の楕円形の範囲として確認した。９号溝跡、ＧＰ127・312と重複し、いずれの遺構より新しい。本遺構の南東側には、22号土坑が隣接して位置している。

本遺構の平面形は不整な三角形を呈する。規模は一辺78㎝、検出面からの深さは最大18㎝である。周壁は北壁が急に立ち上がり、それ以外は緩やかとなる。断面形は逆台形となる。底面は中央に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土はＬⅢａ塊を含む黒褐色土の単層で、人為による埋め立てと判断した。本遺構からは弥生土器が１点出土しているが、小片のため図示していない。

本遺構は、小型で平面形が不整な三角形の土坑である。その詳細な性格は不明だが、年代は中世の小穴群や９号溝跡より新しいことから、概ね中世以降の所産と考えられる。（佐　藤）

22号土坑　ＳＫ22（図88・92、写真56）

本遺構は、丘陵頂部の平坦面、Ｘ11グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、にぶい黄褐色土の楕円形の範囲として確認した。本遺構は他遺構との重複が認められ、ＧＰ159・300より新しく、９号溝跡より古い。本遺構の北西側には、21号土坑が隣接して位置している。

本遺構の平面形は円形を基調としていたと推測される。規模は直径94㎝、検出面からの深さは最大28㎝である。周壁はいずれも急に立ち上がり、底面は平坦となる。遺構内堆積土はＬⅢａを由来とするにぶい黄褐色土で、ＬⅡ塊や炭化物を含むことから、人為による埋め立てと判断した。

本遺構からは弥生土器が13点、石器１点が出土しており、弥生土器１点を図示した。図92－１は弥生土器の壺形土器の頸部片である。無地文に３本１組の束線具を用いて、格子文と波状文を施している。

本遺構は、小型で平面形が円形の土坑である。その詳細な性格は不明だが年代は、中世の小穴群より新しいことから、概ね中世以降の所産と考えられる。（佐　藤）

24号土坑　ＳＫ24（図88）

本遺構は、丘陵頂部の平坦面、Ｖ11グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、褐灰色土の円形の範囲として確認した。他遺構との重複は認められない。本遺構の北側は木根による撹乱により遺存していない。本遺構の北西側１ｍには、59号土坑が近接して位置している。

本遺構の平面形は円形を基調としていたと推測される。規模は直径1.57ｍ、検出面からの深さは最大44㎝である。周壁は急に立ち上がり、底面は平坦となる。遺構内堆積土は３層に分けられた。

ℓ１・３はＬⅡを由来とした褐灰色土で、焼土塊・炭化物・黒褐色土塊・ＬⅢ塊を含む。ℓ２はＬⅢａを由来とした灰褐色土で黒褐色土塊を多量含んでいる。土質の特徴から、人為的に埋め立てたものと判断した。本遺構からは弥生土器が３点、石器１点が出土しているが、小片のため図示していない。本遺構は、平面形が円形の土坑である。その詳細な性格や年代は不明である。　（佐　藤）

25号土坑　ＳＫ25（図88、写真56）

本遺構は、丘陵頂部の平坦面Ｕ12グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、褐灰色土の方形の範囲として確認した。他遺構との重複は認められない。本遺構の北西側には、８号性格不明遺構が、北東側には27号土坑が隣接して位置している。

本遺構の平面形は方形を呈する。規模は長軸1.45m、短軸1.37m、検出面からの深さは最大57cmである。周壁はいずれも緩やかに立ち上がる。底面は中央に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は４層に分けられた。ℓ１はＬⅡを由来とし、ＬⅣ塊・炭化物を含む。ℓ２はＬⅡとＬⅢの混合土で、黒褐色土塊を含む。ℓ３は黒褐色土、ℓ４は黒色土で、いずれも炭化物を含む。いずれの堆積土も土質の特徴から、人為的に埋め立てたものと判断した。本遺構からは弥生土器が２点出土しているが、小片のため図示していない。

本遺構は、平面形が方形の土坑である。その詳細な性格や年代は不明である。　（佐　藤）

26号土坑　ＳＫ26（図88・92、写真57・65）

本遺構は、丘陵頂部の平坦面、Ｕ11・12グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、９号性格不明遺構の底面を精査中に、黒褐色土の方形の範囲として確認した。本遺構は他遺構との重複関係が認められ、９号性格不明遺構、ＧＰ503・504より古く、27・28号土坑より新しい。本遺構の南西側には25号土坑、８号性格不明遺構が、南東側には６号焼土遺構が近接して位置している。

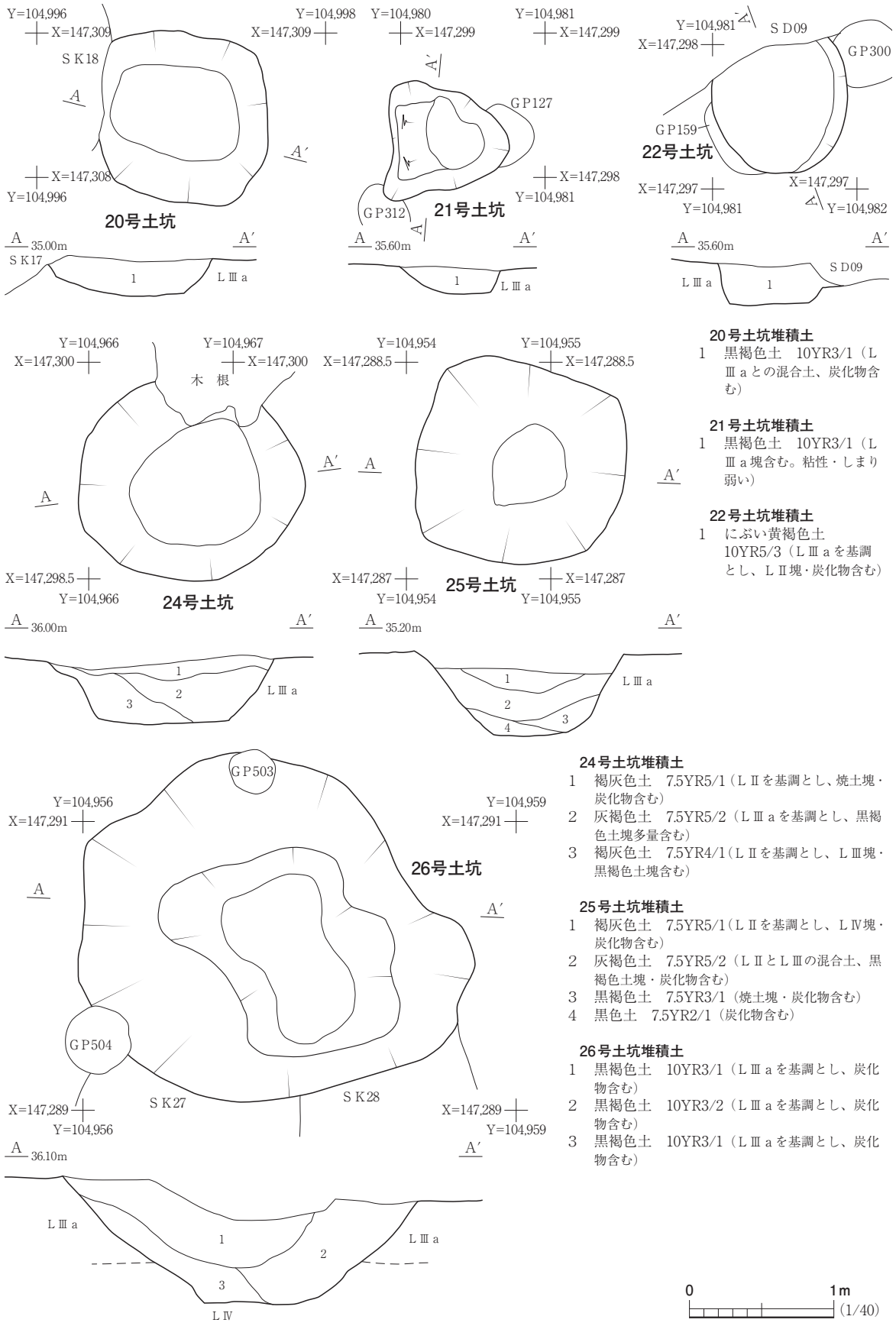
本遺構の平面形は不整な楕円形を呈する。規模は直軸2.84m、短軸2.35m、検出面からの深さは最大85cmである。周壁はいずれも緩やかに立ち上がる。底面は中央に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は３層に分けられた。いずれもＬⅢａを由来とする黒褐色土を基調としている。いずれの堆積土にも土塊など入らないことから、自然に流入したものと考えられる。

本遺構からは弥生土器が58点出土しており、２点を図示した。図92－６は甕の口縁部である。口縁端部は水平となり、２本１組の平行沈線が施される。図92－10は壺もしくは甕の底部である。

本遺構は、平面形が不整楕円形の土坑である。その詳細な性格は不明だが、年代は出土した遺物の特徴から弥生時代中期後半と考えられる。　（佐　藤）

27号土坑　ＳＫ27（図89、写真57）

本遺構は、丘陵頂部の平坦面、Ｕ12グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、26号土坑の精査中に周壁の一部に褐灰色土の範囲を確認したことから、周辺の遺構検出を再度行い、楕円形の範囲



20号土坑堆積土

1　黒褐色土　10YR3/1（LⅢaとの混合土、炭化物含む）

21号土坑堆積土

1　黒褐色土　10YR3/1（LⅢa塊含む。粘性・しまり弱い）

22号土坑堆積土

1　にぶい黄褐色土　10YR5/3（LⅢaを基調とし、LⅡ塊・炭化物含む）

24号土坑堆積土

1　褐灰色土　7.5YR5/1（LⅡを基調とし、焼土塊・炭化物含む）
2　灰褐色土　7.5YR5/2（LⅢaを基調とし、黒褐色土塊多量含む）
3　褐灰色土　7.5YR4/1（LⅡを基調とし、LⅢ塊・黒褐色土塊含む）

25号土坑堆積土

1　褐灰色土　7.5YR5/1（LⅡを基調とし、LⅣ塊・炭化物含む）
2　灰褐色土　7.5YR5/2（LⅡとLⅢの混合土、黒褐色土塊・炭化物含む）
3　黒褐色土　7.5YR3/1（焼土塊・炭化物含む）
4　黒色土　7.5YR2/1（炭化物含む）

26号土坑堆積土

1　黒褐色土　10YR3/1（LⅢaを基調とし、炭化物含む）
2　黒褐色土　10YR3/2（LⅢaを基調とし、炭化物含む）
3　黒褐色土　10YR3/1（LⅢaを基調とし、炭化物含む）

図88　20～22・24～26号土坑

として確認した。本遺構は他遺構との重複関係が認められ、26号土坑、９号性格不明遺構、ＧＰ504より古く、28号土坑より新しい。本遺構の南西側には25号土坑、８号性格不明遺構が、南東側には６号焼土遺構が近接して位置している。

本遺構の平面形は不整な楕円形を呈する。規模は直軸1.88m、短軸1.47m、検出面からの深さは最大38cmである。周壁はいずれも緩やかに立ち上がる。底面は中央に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は２層に分けられた。いずれもＬⅡを由来とする褐灰色土で、ＬⅢａ塊や焼土を含んでいることから、人為による埋め立てと判断した。

本遺構は、平面形が不整な楕円形の土坑である。その詳細な性格は不明だが、年代は26号土坑より古いことから、概ね弥生時代中期後半以前の所産と考えられる。（佐　藤）

28号土坑　ＳＫ28（図89）

本遺構は、丘陵頂部の平坦面、U12グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、26・27号土坑の精査中に周壁の一部に灰褐色土の範囲を確認したことから、周辺の遺構検出を再度行い、不整楕円形の範囲として確認した。本遺構は他遺構との重複関係が認められ、26・27号土坑、９号性格不明遺構、ＧＰ396・500より古い。本遺構の南西側には25号土坑、８号性格不明遺構が、南東側には６号焼土遺構が近接して位置している。

本遺構の平面形は不整な楕円形を呈すると推測される。規模は長軸の遺存値1.6m、短軸1.58m、検出面からの深さは最大63cmである。周壁はいずれも緩やかに立ち上がる。底面の中央付近は段状になっている。遺構内堆積土は３層に分けられた。ℓ１・２はＬⅢａを由来とする褐灰色土で、黒褐色土塊やＬⅣ塊を含む。ℓ３はにぶい橙色粘質土でＬⅢａとＬⅣの混合土である。いずれも遺構内堆積土の特徴から、人為による埋め立てと判断した。本遺構からは弥生土器５点、石器１点が出土しているが、いずれも小片のため、図示していない。

本遺構は、平面形が不整な楕円形の土坑である。その詳細な性格は不明だが、年代は26・27号土坑より古いことから、概ね弥生時代中期後半以前の所産と考えられる。（佐　藤）

29号土坑　ＳＫ29（図89）

本遺構は、丘陵頂部の平坦面、T13グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、褐灰色土の楕円形の範囲として確認した。他遺構との重複は認められない。本遺構の北東側１mには６号柱列跡が近接して位置している。

本遺構の平面形は不整な楕円形を呈する。規模は長軸80cm、短軸60cm、検出面からの深さは最大８cmである。周壁はいずれも緩やかに立ち上がり、底面は平坦となる。遺構内堆積土はＬⅡを由来とする褐灰色土である。堆積状況から自然堆積と判断した。

本遺構は、平面形が不整楕円形で掘り込みの浅い土坑である。その詳細な性格や年代は不明である。（佐　藤）

30号土坑　ＳＫ30（図89、写真57）

本遺構は、丘陵頂部の平坦面、Ｘ11グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、褐灰色土の楕円形の範囲として確認した。他遺構との重複は認められない。本遺構の北西側３ｍには22号土坑が近接して位置している。

本遺構の平面形は不整な楕円形を呈する。規模は長軸1.44m、短軸1.25m、検出面からの深さは最大47㎝である。周壁はいずれも急に立ち上がり、底面は中央に向かって緩やかに傾斜する。遺構内堆積土は３層に分けられた。ℓ１はＬⅢａを由来とする褐灰色土で、上位からの流入土と考えられる。ℓ２はＬⅡを由来とした褐灰色土でＬⅣ塊を含み、ℓ３は黒褐色土でＬⅡ・Ⅳ塊を含むことから、いずれも人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、平面形が不整楕円形の土坑である。その詳細な性格や年代は不明である。　（佐　藤）

31号土坑　ＳＫ31（図89）

本遺構は、丘陵頂部の平坦面、Ｒ12グリッドに位置する。検出面はＬⅢｂで、黒褐色土の楕円形の範囲として確認した。ＧＰ578と重複し、本遺構は新しい。本遺構の西半部分は後世の撹乱により破壊されている。本遺構の東側４ｍには36号土坑が近接して位置している。

本遺構の平面形は楕円形と推測される。規模は長軸73㎝、短軸の遺存値37㎝、検出面からの深さは最大10㎝である。周壁はいずれも緩やかに立ち上がり、底面は平坦となる。遺構内堆積土は炭化物や焼土を含む黒褐色土の単層で、人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。本遺構は、平面形が楕円形で、浅い掘り込みの土坑である。その詳細な性格は不明だが、年代は中世の小穴より新しいことから、概ね中世以降の所産と考えられる。　（佐　藤）

33号土坑　ＳＫ33（図89）

本遺構は、丘陵頂部の平坦面、Ｓ11グリッドに位置する。検出面はＬⅢｂで、灰褐色土の円形の範囲として確認した。他遺構との重複は確認できない。本遺構の南側には34号土坑が隣接して位置している。

本遺構の平面形は円形を呈し、規模は直径1.12m、検出面からの深さは最大20㎝である。周壁はいずれも緩やかに立ち上がる。底面にはＬⅣ上面の砂礫が認められ、凹凸が顕著となる。遺構内堆積土は橙色砂質土塊を含む灰褐色土で、人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は平面形が円形で浅い掘り込みの土坑である。詳細な性格や年代は不明である。（佐　藤）

34号土坑　ＳＫ34（図89）

本遺構は、丘陵頂部の平坦面、Ｓ11グリッドに位置する。検出面はＬⅢｂで、にぶい黄橙色土

の楕円形の範囲として確認した。他遺構との重複は確認できないが、北西壁周辺は後世の撹乱により遺存していない。本遺構の北側には33号土坑が隣接して位置している。

本遺構の平面形は楕円形と推測でき、規模は長軸1.72m、短軸は遺存値で1.02m、検出面からの深さは最大32cmである。周壁はいずれも緩やかに立ち上がる。底面や周壁にはＬⅣ上面の砂礫が認められ、凹凸が顕著となる。遺構内堆積土は２層に分けられた。ℓ１はＬⅢａを由来とするにぶい黄橙色土で、ＬⅡ塊や炭化物を含む。ℓ２はＬⅡを由来とする褐灰色土で炭化物を含む。堆積土中に土塊や炭化物を含むことから人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は平面形が楕円形で、浅い掘り込みの土坑である。詳細な性格や年代は不明である。

（佐　藤）

35号土坑　ＳＫ35（図89）

本遺構は、丘陵頂部の平坦面、R11グリッドに位置する。検出面はＬⅢｂで、方形の褐灰色土の範囲として確認した。他遺構との重複は確認できない。本遺構の南側1.7mには14号性格不明遺構が、西側２mには７号柱列跡が隣接して位置している。

本遺構の平面形は方形を呈し、規模は一辺77cm、検出面からの深さは最大17cmである。周壁はいずれも緩やかに立ち上がる。底面にはＬⅣ上面の砂礫が認められ、凹凸がある。遺構内堆積土はＬⅢａ塊や炭化物粒・焼土塊を含む褐灰色の単層で、人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、平面形が方形となる浅い掘り込みの土坑である。詳細な性格や年代は不明である。

（佐　藤）

36号土坑　ＳＫ36（図90）

本遺構は、丘陵頂部の平坦面、S12グリッドに位置する。検出面はＬⅢｂで、楕円形の範囲として確認した。他遺構との重複は確認できない。本遺構の東側には３号堀跡が隣接して位置している。

本遺構の平面形は楕円形を呈し、規模は長軸80cm、短軸70cm、検出面からの深さは最大13cmである。周壁はいずれも緩やかに立ち上がる。底面は平坦となる。遺構内堆積土は、黒褐色土塊を含む褐灰色の単層で、人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、平面形が楕円形となる土坑である。詳細な性格や年代は不明である。　（佐　藤）

37号土坑　ＳＫ37（図90）

本遺構は、丘陵斜面に近い平坦面、T10グリッドに位置する。検出面はＬⅣで、楕円形の範囲として確認した。他遺構との重複は確認できない。本遺構の北西側には38号土坑が位置する。

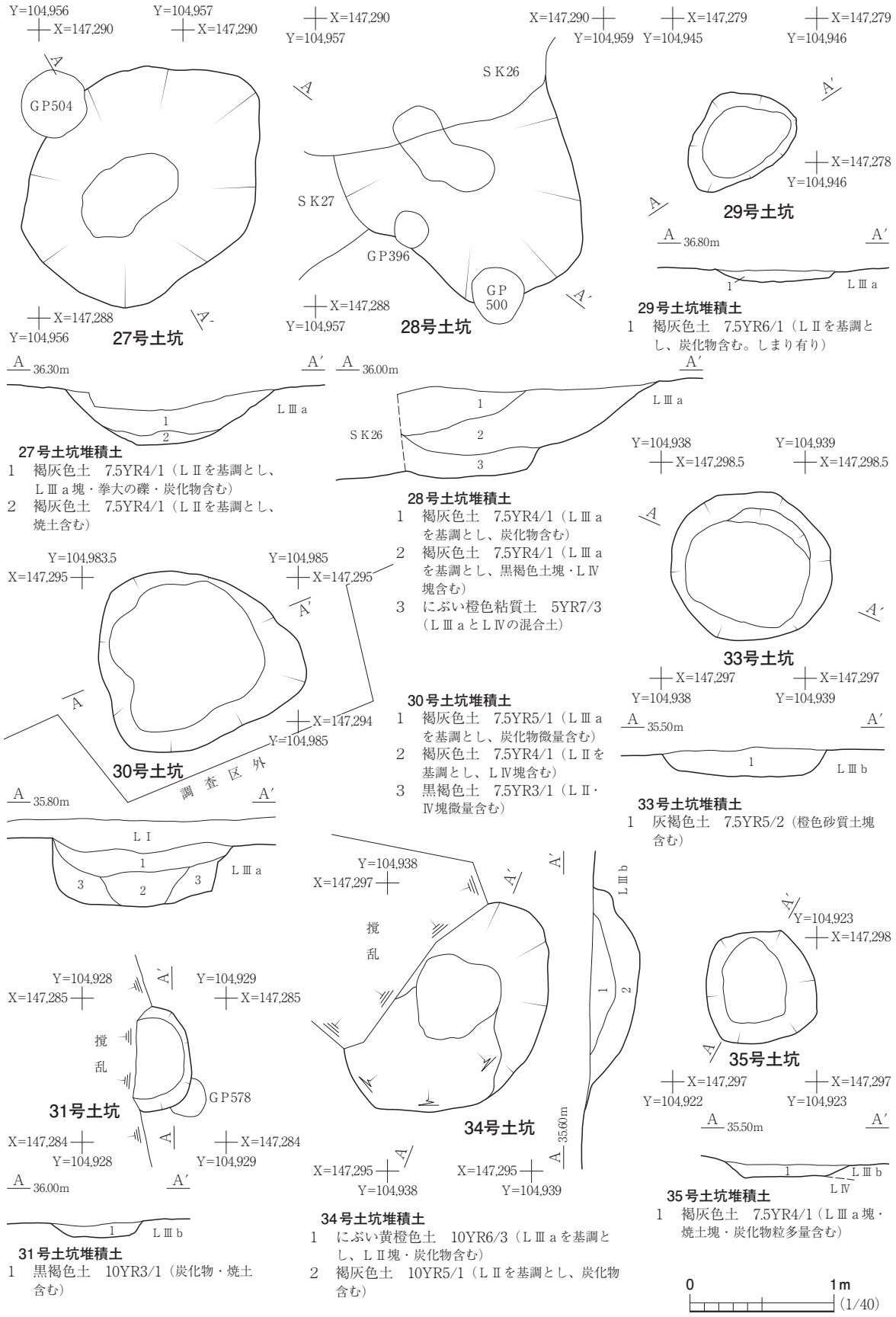


図89　27～31・33～35号土坑

本遺構の平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.6m、短軸1.43m、検出面からの深さは最大50cmである。周壁は南西・南東壁は急に、それ以外の壁は緩やかに立ち上がる。ＬⅣを深く掘り込んでいることから、周壁や底面はＬⅣに含まれる小礫が露出し、著しい凹凸が認められる。遺構内堆積土は３層に分けられた。ℓ１はＬⅢａを由来とする灰褐色土で上位からの流入土と考えられる。ℓ２は灰褐色土塊・炭化物を含んだ褐灰色土、ℓ３はＬⅢｂ塊を含んだ褐灰色砂質土でいずれも人為により埋め立てたものと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、平面形が楕円形となる土坑である。隣接する38号土坑とは、規模や土質、ＬⅣから深く掘り込むなど共通性が認められる。詳細な性格や年代は不明である。（佐　藤）

38号土坑　ＳＫ38（図90、写真57）

本遺構は、丘陵斜面に近い平坦面Ｔ10グリッドに位置する。検出面はＬⅣで、円形の範囲として確認した。他遺構との重複は確認できない。本遺構の南東側には37号土坑が認められる。

本遺構の平面形は円形を呈し、規模は直径1.44m、検出面からの深さは最大60cmである。周壁はいずれも急に立ち上がり、断面形は逆台形となる。ＬⅣを深く掘り込んでいることから、周壁や底面はＬⅣに含まれる小礫が露出し、著しい凹凸が認められる。遺構内堆積土は３層に分けられた。ℓ１はＬⅡを由来とする褐灰色土で上位からの流入土と考えられる。ℓ２・３は黒褐色土で、ＬⅢａ塊を含んでいることから、人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、平面形が円形となる土坑である。隣接する37号土坑とは、規模や土質、ＬⅣから深く掘り込むなど共通性が認められる。詳細な性格や年代は不明である。（佐　藤）

39号土坑　ＳＫ39（図90）

本遺構は、北側の丘陵緩斜面、Q10グリッドに位置する。検出面はＬⅣで、４号平場に伴う整地を除去した後、不整楕円形の範囲として確認した。18号性格不明遺構と重複し、本遺構が新しい。本遺構の南側には15号性格不明遺構が隣接している。

本遺構の平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸1.48m、短軸1.27m、検出面からの深さは最大36cmである。周壁はいずれも急に立ち上がり、断面形は逆台形となる。ＬⅣや18号性格不明遺構の堆積土を掘り込んでおり、底面や周壁には凹凸が認められる。遺構内堆積土は３層に分けられた。いずれの堆積土にもＬⅢａ塊を含んでいることから人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、平面形が不整楕円形となる土坑である。詳細な性格は不明だが、４号平場の整地より古いことから概ね中世以前の所産と考えられる。（佐　藤）

40号土坑　ＳＫ40（図90）

本遺構は、丘陵頂部の平坦面、V11グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、不整な方形の範

囲として確認した。10号溝跡・ＧＰ508と重複し、本遺構が古い。本遺構の北側２ｍに24号土坑が隣接している。

本遺構の平面形は不整な方形を呈し、規模は長軸86㎝、短軸74㎝、検出面からの深さは最大13㎝である。周壁はいずれも急に立ち上がり、断面形は逆台形となる。底面は西側に向かって緩やかに傾斜している。堆積土はＬⅡを由来とする褐色土で、黄橙色粘土塊を含むことから人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、平面形が不整方形となる掘り込みの浅い土坑である。詳細な性格は不明だが、10号溝跡や中世の小穴より古いことから、概ね中世以前の所産と考えられる。（佐　藤）

43号土坑　ＳＫ43（図90）

本遺構は、北西側の丘陵緩斜面、Ｑ12グリッドに位置する。検出面はＬⅣで、４号平場の整地土を除去した際、不整な楕円形の範囲として確認した。他遺構との重複は認められないが、４号平場の整地より古い。本遺構の北側１ｍには44号土坑が近接して位置している。

本遺構の平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸70㎝、短軸45㎝、検出面からの深さは最大６㎝と浅い。周壁はいずれも緩やかに立ち上がる。底面は地山であるＬⅣに含まれる小礫が露出しており、凹凸が著しい。遺構内堆積土は黒褐色土の単層で、焼土や炭化物を含むことから人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

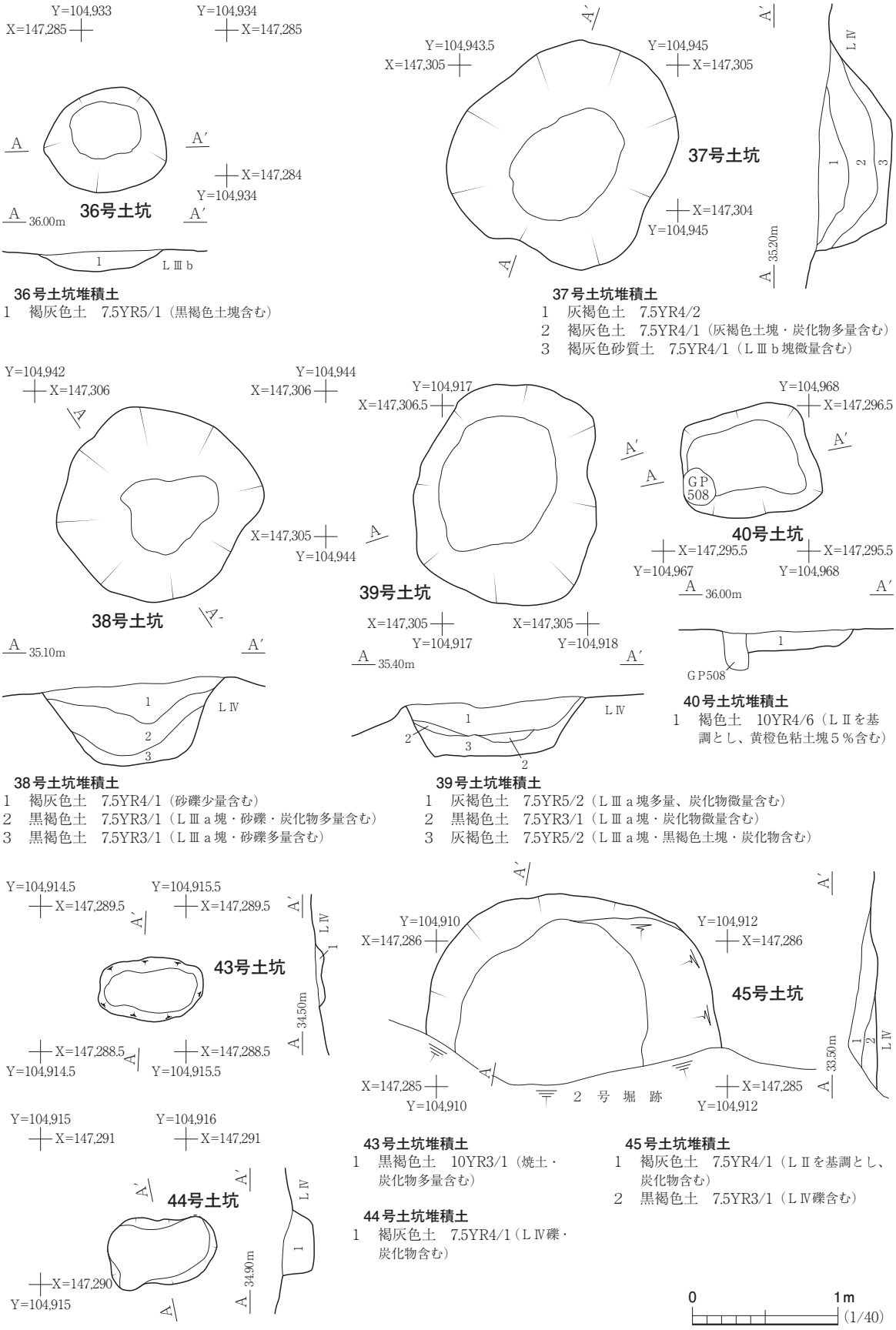
本遺構は、小型で平面形が不整楕円形となる、掘り込みの浅い土坑である。近接して位置する44号土坑と平面形や規模が近似している。詳細な性格は不明だが、４号平場の整地より古いことから、概ね中世以前の所産と考えられる。（佐　藤）

44号土坑　ＳＫ44（図90）

本遺構は、北西側の丘陵緩斜面、Ｑ11グリッドに位置する。検出面はＬⅣで、４号平場の整地土を除去した際、不整な楕円形の範囲として確認した。他遺構との重複は認められないが、４号平場の整地より古い。本遺構の南側１ｍには43号土坑が近接して位置している。

本遺構の平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長軸74㎝、短軸45㎝、検出面からの深さは最大22㎝である。周壁は北東・南西部分は垂直となり、それ以外は急に立ち上がる。底面や周壁には地山であるＬⅣに含まれる小礫が露出しており、凹凸が著しい。遺構内堆積土は褐灰色土の単層で、炭化物やＬⅣの礫を含むことから人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、小型で平面形が不整楕円形となる、掘り込みの浅い土坑である。近接して位置する43号土坑と平面形や規模が近似している。詳細な性格は不明だが、４号平場の整地より古いことから、概ね中世以前の所産と考えられる。（佐　藤）



36号土坑堆積土
1　褐灰色土　7.5YR5/1（黒褐色土塊含む）

37号土坑堆積土
1　灰褐色土　7.5YR4/2
2　褐灰色土　7.5YR4/1（灰褐色土塊・炭化物多量含む）
3　褐灰色砂質土　7.5YR4/1（Ｌ Ⅲ ｂ塊微量含む）

38号土坑堆積土
1　褐灰色土　7.5YR4/1（砂礫少量含む）
2　黒褐色土　7.5YR3/1（Ｌ Ⅲ ａ塊・砂礫・炭化物多量含む）
3　黒褐色土　7.5YR3/1（Ｌ Ⅲ ａ塊・砂礫多量含む）

39号土坑堆積土
1　灰褐色土　7.5YR5/2（Ｌ Ⅲ ａ塊多量、炭化物微量含む）
2　黒褐色土　7.5YR3/1（Ｌ Ⅲ ａ塊・炭化物微量含む）
3　灰褐色土　7.5YR5/2（Ｌ Ⅲ ａ塊・黒褐色土塊・炭化物含む）

40号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/6（Ｌ Ⅱを基調とし、黄橙色粘土塊５％含む）

43号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（焼土・炭化物多量含む）

44号土坑堆積土
1　褐灰色土　7.5YR4/1（Ｌ Ⅳ礫・炭化物含む）

45号土坑堆積土
1　褐灰色土　7.5YR4/1（Ｌ Ⅱを基調とし、炭化物含む）
2　黒褐色土　7.5YR3/1（Ｌ Ⅳ礫含む）

図90　36～40・43・45号土坑

45号土坑　ＳＫ45（図90）

本遺構は、沢３の緩斜面、Ｐ・Ｑ12グリッドに位置する。検出面はＬⅣで、２号土塁の構築土を除去した際、楕円形の範囲として確認した。本遺構の南半部は、２号堀跡の掘り込みにより破壊され、遺存していない。２号土塁・２号堀跡と重複しており、本遺構が古い。本遺構の西側４ｍには14号溝跡が位置している。

本遺構の平面形は楕円形を呈していたと推測され、規模は長軸1.98ｍ、短軸は遺存値で1.3ｍ、検出面からの深さは最大20㎝である。周壁は、いずれも緩やかに立ち上がる。底面は地山であるＬⅣに含まれる小礫が露出しており、凹凸が認められる。遺構内堆積土は２層に分けれられた。いずれも斜面上位からの流入土と判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、平面形が楕円形と推測される土坑である。詳細な性格は不明だが、２号土塁・堀跡より古いことから、概ね中世以前の所産と考えられる。（佐　藤）

46号土坑　ＳＫ46（図91）

本遺構は、丘陵北東側の斜面に近い平坦面、Ｔ・Ｕ10グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、３号土塁の積土を除去した際、楕円形の範囲として確認した。３号土塁と重複しており、本遺構が古い。本遺構の北側2.5ｍには57・58号土坑が位置している。

本遺構の平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.14ｍ、短軸は70㎝、検出面からの深さは最大19㎝である。周壁は、急に立ち上がる。底面は中央に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は２層に分けれられた。ℓ１はＬⅢａを由来とする褐灰色土で炭化物を含み、ℓ２は黒褐色土でＬⅢｂ塊を含むことから、どちらの土も人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、平面形が楕円形の土坑である。詳細な性格は不明だが、３号土塁より古いことから、概ね中世以前の所産と考えられる。（佐　藤）

48号土坑　ＳＫ48（図91、写真57）

本遺構は、丘陵北側の緩斜面、Ｒ・Ｓ８グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、方形の範囲として確認した。本遺構の西側には小穴群が位置している。

本遺構の平面形は方形を呈し、規模は一辺1.08ｍ、検出面からの深さは最大22㎝である。周壁は、緩やかに立ち上がる。底面は中央に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は褐灰色土の単層でＬⅢａ塊を含んでいることから、人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、平面形が方形の土坑である。詳細な性格や年代は不明である。（佐　藤）

49号土坑　ＳＫ49（図91）

本遺構は、丘陵北側の緩斜面、Ｑ８グリッドに位置する。検出面はＬⅣで、楕円形の範囲として確認した。本遺構の東側には小穴群が位置している。

本遺構の平面形は方形を呈し、規模は長軸1.43m、短軸1.23m、検出面からの深さは最大25cmである。周壁は、緩やかに立ち上がる。特に南・西壁は傾斜が緩やかとなる。底面は中央に向かって傾斜している。遺構内堆積土はＬⅡを由来とする褐灰色土の単層で、斜面上位からの流入土と考えられる。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、平面形が楕円形の土坑である。詳細な性格や年代は不明である。（佐　藤）

63号土坑　ＳＫ63（図91、写真57）

本遺構は、丘陵頂部の平坦面、Ｔ11グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、３号土塁の除去後に円形の範囲として確認した。３号土塁と重複しており、本遺構が古い。本遺構の南側２ｍには64号土坑が位置している。

本遺構の平面形は円形を呈し、規模は直径65cm、検出面からの深さは最大31cmである。周壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦となる。遺構内堆積土は２層に分けられた。ℓ１はＬⅡを由来とする褐灰色土で、斜面上位からの流入土と考えられる。ℓ２はＬⅢａを由来とする灰褐色土でＬⅡ塊、炭化物塊を含むことから、人為による埋め立てと判断した。遺構から遺物は出土していない。本遺構は、小型で平面形が円形の土坑である。詳細な性格は不明だが、年代は３号土塁より古いことから、概ね中世以前の所産と考えられる。（佐　藤）

64号土坑　ＳＫ64（図91）

本遺構は、丘陵頂部の平坦面、Ｔ・Ｕ11グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、３号土塁の除去後に楕円形の範囲として確認した。３号土塁と重複しており、本遺構が古い。本遺構の北側２ｍには63号土坑が位置している。

本遺構の平面形は楕円形を呈し、規模は長軸97cm、短軸81cm、検出面からの深さは最大48cmである。周壁は、いずれも急に立ち上がる。底面は平坦となる。遺構内堆積土は２層に分けられた。いずれもＬⅢａを由来とする褐灰色土で、ＬⅢｂ塊や黒褐色土塊を含むことから、人為による埋め立てと判断した。遺構から遺物は出土していない。

本遺構は、小型で平面形が楕円形の土坑である。詳細な性格は不明だが、年代は３号土塁より古いことから、概ね中世以前の所産と考えられる。（佐　藤）

65号土坑　ＳＫ65（図91）

本遺構は、丘陵北側の緩斜面、Ｓ９グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、３号土塁の除去後

に楕円形の範囲として確認した。他の遺構との重複は認められない。本遺構の南東側4.4mには、67号土坑、24号性格不明遺構が位置している。

本遺構の平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.06m、短軸70㎝、検出面からの深さは最大30㎝である。周壁は、いずれも急に立ち上がる。底面は中央に向かって緩やかに傾斜している。底面の東側には楕円形の小穴が付帯しており、その大きさは直径44㎝、深さ27㎝である。遺構内堆積土は２層に分けられた。ℓ１はＬⅢａを由来とする褐灰色土でＬⅡ塊、ＬⅣ由来の礫を含み、ℓ２は灰褐色土でＬⅣ塊を含む。いずれも人為による埋め立てと判断した。遺構から遺物は出土していない。

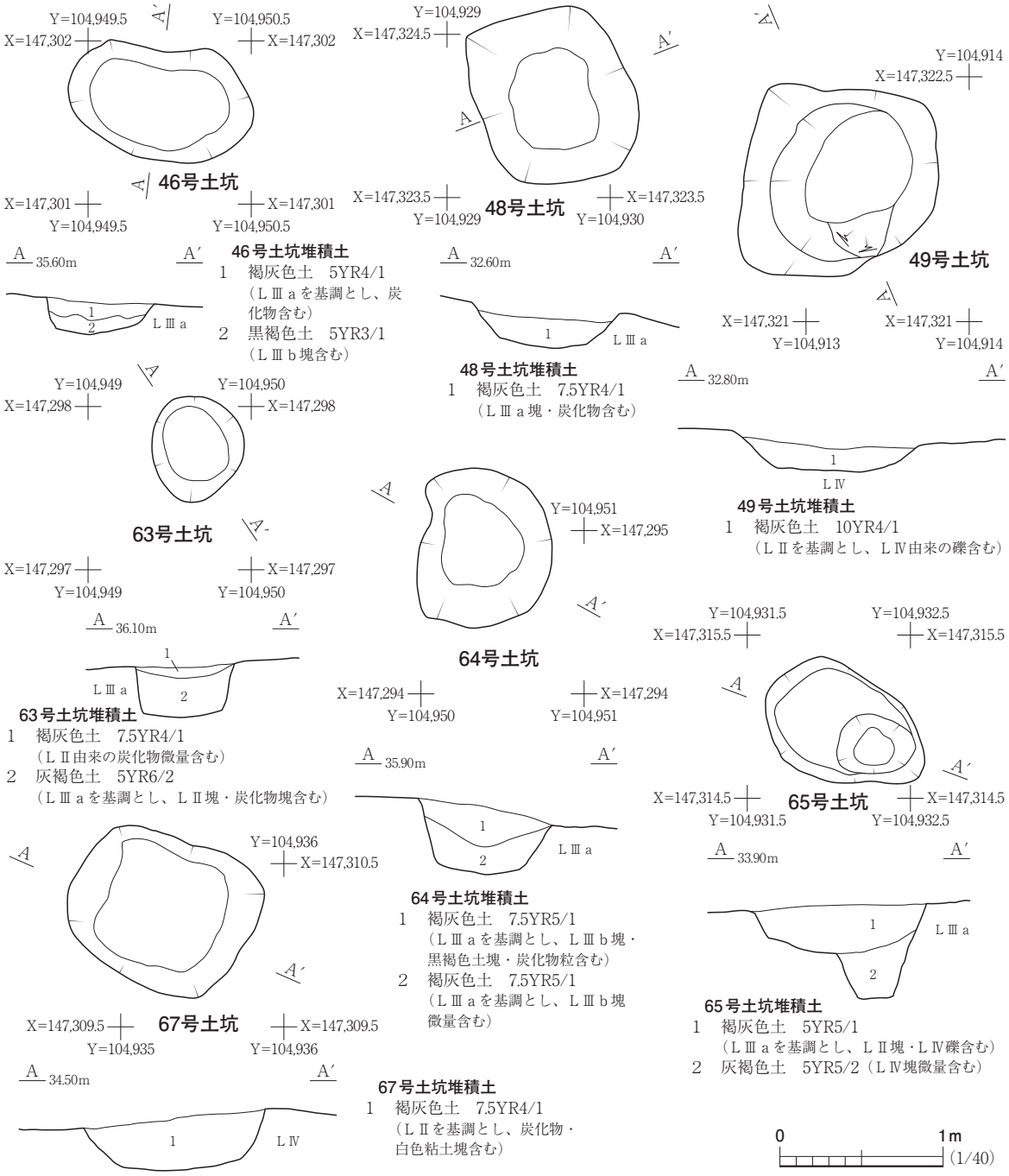


図91　46・48・49・63～65・67号土坑

本遺構は、平面形が楕円形で底面に小穴を有する土坑である。詳細な性格や年代は不明である。

（佐　藤）

67号土坑　ＳＫ67（図91）

本遺構は、丘陵北側の緩斜面、Ｓ９・10グリッドに位置する。検出面はＬⅣで、長方形の範囲として確認した。他の遺構との重複は認められない。本遺構の東側には24号性格不明遺構が隣接して位置している。

本遺構の平面形は長方形を呈し、規模は長軸1.1m、短軸95cm、検出面からの深さは最大33cmである。周壁は、いずれも緩やかに立ち上がる。底面はＬⅣに含まれる小礫が露出し、著しい凹凸が認められる。遺構内堆積土は、ＬⅡを由来とする褐灰色土の単層で、炭化物や白色粘土塊を含む。斜面上位からの流入土と判断した。

本遺構は、平面形が長方形の土坑である。詳細な性格や年代は不明である。　（佐　藤）

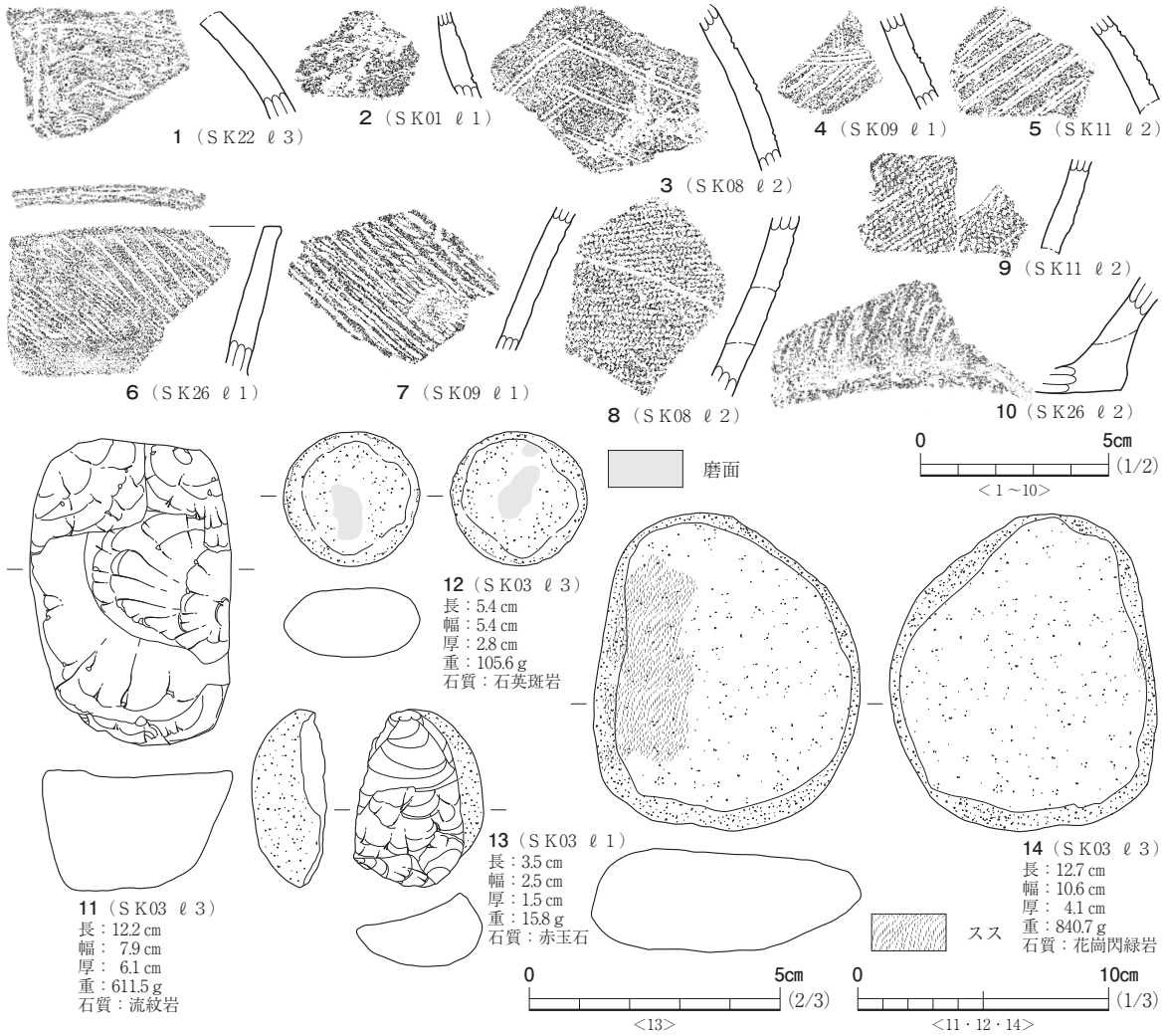


図92　１・３・８・９・11・22・26号土坑出土遺物

第５節　焼 土 遺 構

１号焼土遺構　ＳＧ01（図93、写真58）

本遺構は、丘陵頂上の平坦部、O15グリッドに位置する。検出面はＬⅢ上面で、焼土化した不整形の範囲として確認した。重複する遺構はないが、北方約１ｍに２号性格不明遺構が存在する。

平面形は中央部がくびれた楕円形で、長軸60㎝、短軸34㎝を測る。焼土化は検出面から４～５㎝の深さにまで及んでおり、平面形のくびれ部分では２㎝と浅くなる。長軸方向に隣接した２か所で被熱があったと推測される。

本遺構の性格は不明であるが、ＬⅢが焼土化していることから弥生時代以降に形成されたものと考えられる。（吉　野）

２号焼土遺構　ＳＧ02（図93、写真58）

本遺構は、丘陵頂上の平坦部、M15・16グリッドに位置する。検出面はＬⅢ上面で、焼土化した不整方形の範囲として確認した。重複する遺構はないが、南西方向には１号土塁、東方向約２ｍには１号掘立柱跡が近接して位置している。

焼土面の平面形は不整な方形で、規模は長軸38㎝を測る。焼土化は検出面から９㎝の深さにまで及んでおり、断面形は椀形となる。また、２号焼土遺構から西側では炭化物粒が集中して認められ、その範囲は長さ1.59ｍ、幅0.82ｍとなる。

本遺構の性格は不明であるが、ＬⅢが焼土化していることから弥生時代以降に形成されたものと考えられる。（吉　野）

３号焼土遺構　ＳＧ03（図93、写真58）

本遺構は丘陵頂上の平坦部、M15グリッドに位置する。検出はＬⅢで、焼土化した不整方形の範囲として確認した。重複する遺構はないが、北東側には６軒の住居跡や中世の小穴群が密集して分布している。

焼土面の平面形は楕円形であり、規模は長軸33㎝、短軸20㎝を測る。焼土化は検出面から４㎝の深さにまで及んでおり、断面形は椀形となる。

本遺構の性格は不明であるが、ＬⅢが焼土化していることから弥生時代以降に形成されたものと考えられる。（吉　野）

４号焼土遺構　ＳＧ04（図93、写真58）

本遺構は、丘陵頂上の平坦部、N15グリッドに位置する。検出はＬⅢで、焼土化した不整方形の範囲として確認した。本遺構の南西端部は一部撹乱によって破壊を受けている。北西側には６軒

の竪穴住居跡や中世の小穴群が密集して分布している。

焼土面の平面形は楕円形であり、長軸51cm、短軸33cmを測る。焼土化は検出面から10cmの深さにまで及んでおり、断面形は椀形となる。

性格は不明であるが、ＬⅢが焼土化していることから弥生時代以降に形成されたものと考えられる。（吉　野）

５号焼土遺構　ＳＧ05（図93、写真58）

本遺構は丘陵頂上の平坦部、Ｘ10グリッドに位置する。検出面はＬⅡで、焼土化した円形の範囲として確認した。５号掘立柱建物跡と重複し、本遺構が新しい。

焼土面の平面形は円形を呈し、直径25cmの範囲が橙色に焼土化している。焼土化は検出面から５cmの深さにまで及び、断面形は弧状となる。本遺構の性格は不明であるが、ＬⅡが焼土化していることや、中世の遺構と推測される５号掘立柱建物より新しいことから、概ね中世以降に形成されたものと考えられる。（佐　藤）

６号焼土遺構　ＳＧ06（図93）

本遺構は丘陵頂上の平坦部、Ｕ12グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、検出時は斑状の焼土化した範囲として確認した。ほかの遺構との重複はみられない。

焼土面の平面形は斑状であり、約60cmの範囲に集中して分布している。焼土化は検出面から２～５cmの深さにまで及ぶ。本遺構には掘形が認められ、平面形は中央部がくびれた楕円形を呈する。規模は長軸が1.02m、短軸が83cm、深さは検出面から最大で13cmを測る。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は弧状となる。堆積土はＬⅡを由来とする褐灰色土の単層で、炭化物、焼土粒を微量含む。堆積は、土質の特徴から人為によるものと判断した。本遺構から遺物は出土していない。本遺構の性格は不明である。年代は、掘形がＬⅢａから確認でき、埋土にＬⅡを用いていることから、弥生時代以降の所産と推測している。（佐　藤）

７号焼土遺構　ＳＧ07（図93、写真58）

本遺構は丘陵頂上の平坦部、Ｒ11グリッドに位置する。検出面はＬⅢｂで、検出時は焼土塊や炭化物を多量に含む楕円形の範囲として確認した。ほかの遺構との重複はみられない。

平面形は隅丸長方形で、規模は長軸58cm、短軸50cmを測る。深さは検出面から最大で５cmとなり、周壁の立ち上がりは極めて緩やかである。遺構内の西側には焼土化した範囲が確認できた。焼土面の平面形は三日月形であり、長軸45cm、短軸19cmの範囲が暗褐色に焼土化している。焼土化は遺構の掘り込みから２～４cmの深さにまで及んでいた。堆積土は黒褐色土の単層で、焼土塊、炭化物を多量に含んでいた。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は浅いくぼみで、一部が焼土化した遺構である。その年代や性格は不明である。（佐　藤）

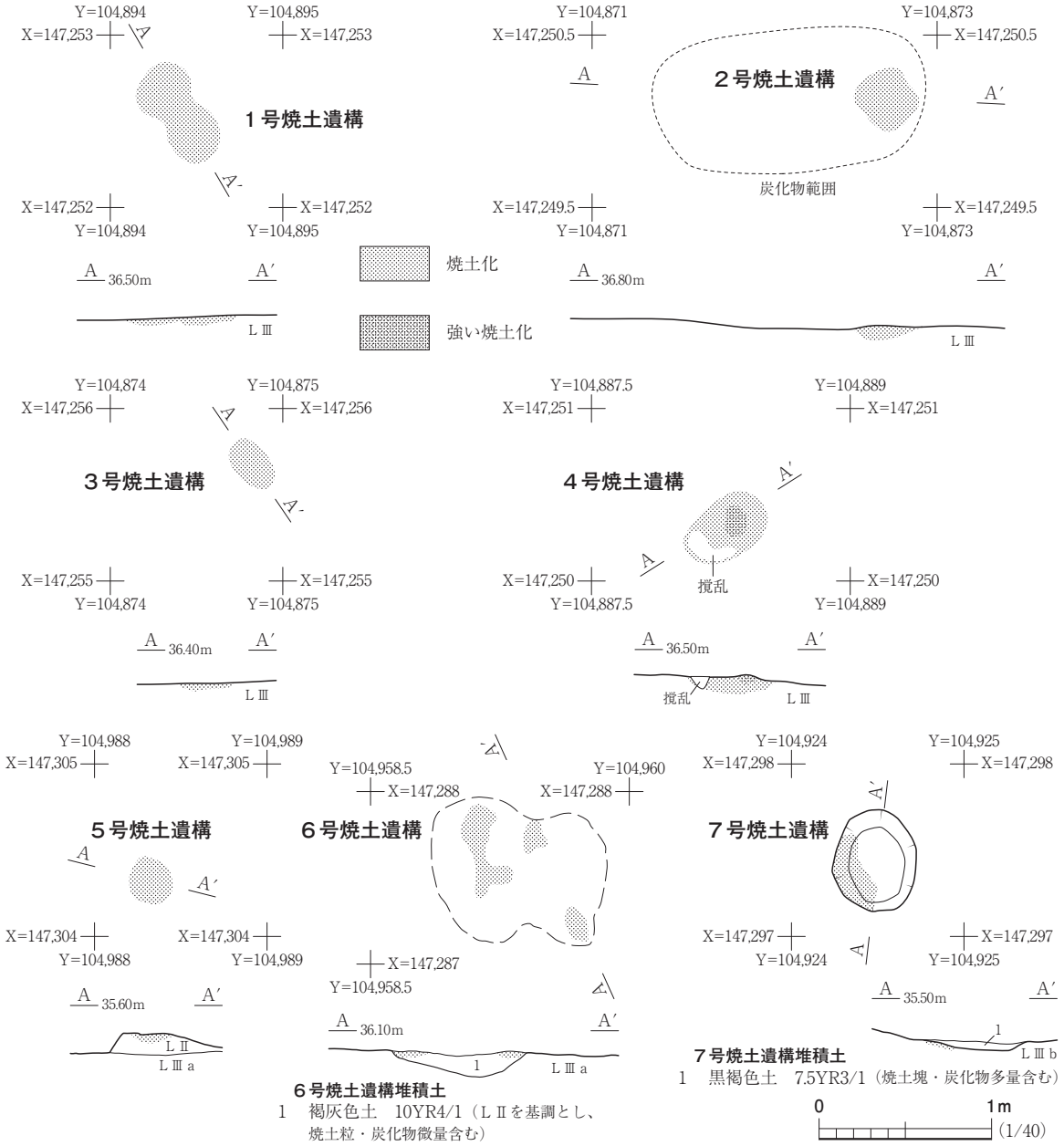


図93　１～７号焼土遺構

第６節　性格不明遺構

１号性格不明遺構　ＳＸ01（図94）

本遺構は丘陵頂上部の平坦面、Ｌ17グリッドに位置する。検出面はＬⅢで、炭化物や焼土を含む灰褐色土の不整形な範囲として確認した。本遺構は２号柱列跡Ｐ４と重複しており、本遺構の方が古い。本遺構の西側１ｍには、６号溝跡が近接して位置している。遺構の北側は後世の撹乱によって破壊されており、正確な遺構の範囲は不明である。

遺構の平面形は不整形で、南西端部が細長く突出している。遺存部における規模は、南北方向で

2.72ｍ、東西方向2.04ｍ、検出面からの深さは最大18㎝を測る。周壁は急に立ち上がる。底面は凹凸があり、南西方向へ緩やかに傾斜する。遺構内堆積土２層に分層される。いずれもＬⅡに由来する自然堆積土と判断した。本遺構から遺物は出土していない。本遺構の詳細な性格は不明ながら、２号柱列跡より古いことから年代は概ね中世以前と考えられる。（吉　野）

２号性格不明遺構　ＳＸ02（図94）

本遺構は丘陵頂上部の平坦面、O15グリッドに位置する。検出面はＬⅡで、撹乱を除去した後に、方形の褐色粘質土の範囲として確認した。北東方向約５ｍには４号住居跡が位置している。遺構の周辺はほとんどが撹乱によって破壊されており、正確な遺構の範囲は把握できなかった。

遺構の平面形は、南側と東側の壁の遺存状況から隅丸方形と推定される。規模は、遺存値で長軸3.18ｍ、短軸2.18ｍを測る。検出面からの深さは最大42㎝である。底面はＬⅢをそのまま用い、平坦となる。周壁は急に立ち上がる。遺構内堆積土は２層に分層される。いずれもＬⅡを由来とする土質で、自然堆積と判断した。本遺構からは弥生土器５点、石器２点が出土しているが、いずれも小片のため図示していない。

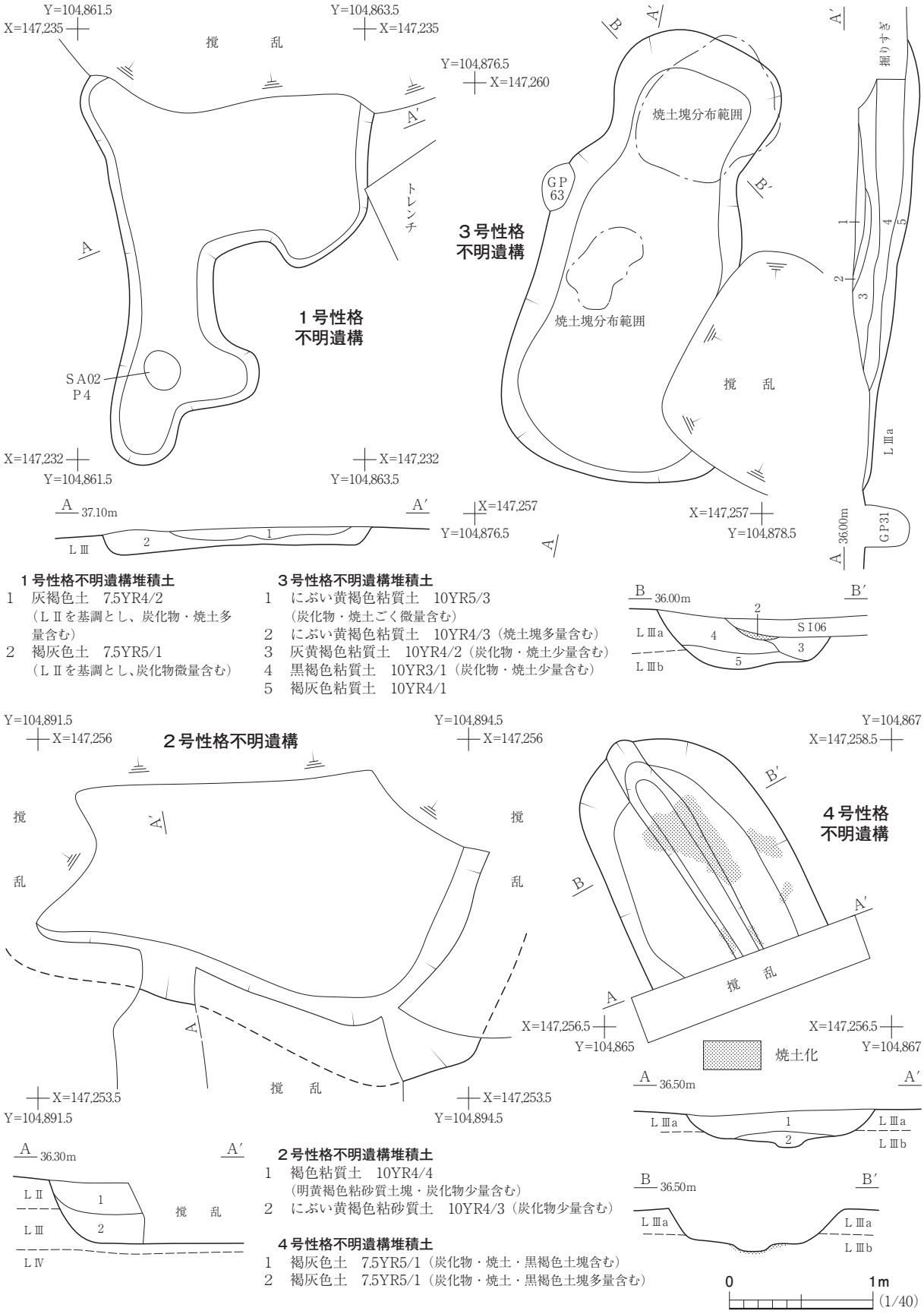
本遺構は後世の撹乱により殆どが失われているが、平面形は隅丸方形を呈すると推測される。検出面からの深さは42㎝と深いのが特徴的である。形態的な特徴は中世の方形竪穴状遺構に類似する。年代はＬⅡから掘り込まれることから、概ね中世以降の所産と推測される。（吉　野）

３号性格不明遺構　ＳＸ03（図94・99、写真59・65）

本遺構は、丘陵頂上部付近の緩斜面の落ち際付近、M14・15グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、３号住居跡床面の精査中に焼土や炭化物を含むにぶい黄褐色粘質土の範囲として確認した。本遺構は３・６号住居跡、ＧＰ63と重複しており、本遺構はいずれの遺構よりも古い。南東の床面から壁の一部は後世の撹乱により破壊されている。遺構の平面形は、北側にくびれを持つ隅丸長方形を呈する。規模は、長軸3.17ｍ、幅は中央の遺存部で1.38ｍ、深さは42㎝を測る。周壁は、いずれも緩やかに立ち上がる。遺構内堆積土は５層に分層した。ℓ１はＬⅢを由来とするにぶい黄褐色粘質土であり、自然堆積と判断した。ℓ２～４は焼土塊・炭化物を多量含む人為堆積である。ℓ５は褐灰色粘質土で混入物がないことから自然堆積と考えられる。

本遺構からは弥生土器14点、石器２点、粘土塊１点が出土しており、３点を図示した。図99－３は甕の頸部である。地文をユビナデで磨り消している。図99－４は粘土塊である、被熱により表面は赤色を呈し、上端部には丸棒を差し込んだ痕跡が認められる。表面の一部には、布目の押圧痕が認められる。図99－５は流紋岩の剥片である。上端部、左面右側縁部からの剥離が認められる。

本遺構の詳細な性格は不明だが、堆積土の観察から遺構のくぼみに焼土塊を廃棄している様子が



１号性格不明遺構堆積土

1　灰褐色土　7.5YR4/2
（ⅡLを基調とし、炭化物・焼土多量含む）

2　褐灰色土　7.5YR5/1
（ⅡLを基調とし、炭化物微量含む）

３号性格不明遺構堆積土

1　にぶい黄褐色粘質土　10YR5/3
（炭化物・焼土ごく微量含む）

2　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3（焼土塊多量含む）

3　灰黄褐色粘質土　10YR4/2（炭化物・焼土少量含む）

4　黒褐色粘質土　10YR3/1（炭化物・焼土少量含む）

5　褐灰色粘質土　10YR4/1

２号性格不明遺構堆積土

1　褐色粘質土　10YR4/4
（明黄褐色粘砂質土塊・炭化物少量含む）

2　にぶい黄褐色粘砂質土　10YR4/3（炭化物少量含む）

４号性格不明遺構堆積土

1　褐灰色土　7.5YR5/1（炭化物・焼土・黒褐色土塊含む）

2　褐灰色土　7.5YR5/1（炭化物・焼土・黒褐色土塊多量含む）

図94　１～４号性格不明遺構

認められた。年代は出土した弥生土器の様相や遺構の重複関係から弥生時代中期後半頃と考えられる。（佐　藤）

４号性格不明遺構　ＳＸ04（図94、写真59）

本遺構は丘陵頂上部の平坦面、Ｌ15グリッドに位置する。北西側へ１ｍ程向かうと急峻な斜面となる。検出面はＬⅢａで、炭化物や焼土を含む褐灰色土の範囲として確認した。遺構の南側は、後世の撹乱により遺存していない。南西方向約５ｍには１号土塁、東方向約10ｍには住居跡群が密集して分布している。本遺構の平面形は、遺存部から楕円形と推定される。遺存する部分の規模は、長軸方向で1.74ｍ、短軸1.31ｍ、底面までの深さは24㎝を測る。周壁は内湾しながら緩やかに立ち上がる。本遺構の中央部には溝が１条附帯している。溝は北壁の上端部から掘り込まれ、長軸方向に遺構の底面を縦断するように構築されている。規模は遺存値で長さ1.74ｍ、幅31㎝、深さ５㎝を測る。遺構の底面と周壁、溝の底面の一部には、暗赤色の焼土化した部分が認められる。中央付近の焼土化した面の厚さは、最大で３㎝を測る。遺構内堆積土は、２層に分層した。ℓ１は炭化物と焼土を含む褐灰色土で、ℓ２は多量の炭化物や焼土が含まれる褐灰色土である。いずれも人為による埋め立てと判断した。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は楕円形の平面形で中央部の底面に火通し溝がめぐり、底面から周壁の一部は焼土化している特徴から火葬遺構の可能性がある。年代は出土遺物がなく不明だが、遺跡内の同様遺構の放射性炭素年代測定の値から、概ね中世の所産と考えられる。（吉　野）

９号性格不明遺構　ＳＸ09（図95・99）

本遺構は丘陵頂上部の平坦面、Ｕ11・12グリッドに位置する。検出面はＬⅢａで、炭化物粒を含む褐灰色土の長方形の範囲として確認した。本遺構の重複関係は26～28号土坑より新しく、ＧＰ396・399・501・503より古い。

本遺構の平面形は不整な隅丸長方形で、規模は、長軸４ｍ、短軸2.12ｍ、検出面からの深さは最大18㎝を測る。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸が認められる。遺構内堆積土は、ＬⅢを由来とする褐灰色土の単層でＬⅢ塊や炭化物粒を含む。土塊を含むことから人為による堆積と判断した。本遺構からは弥生土器12点、石器10点が出土しており、石器１点を図示した。図99－６は赤玉石製の石核である。剥離には打点が認められないことから、被熱による可能性がある。

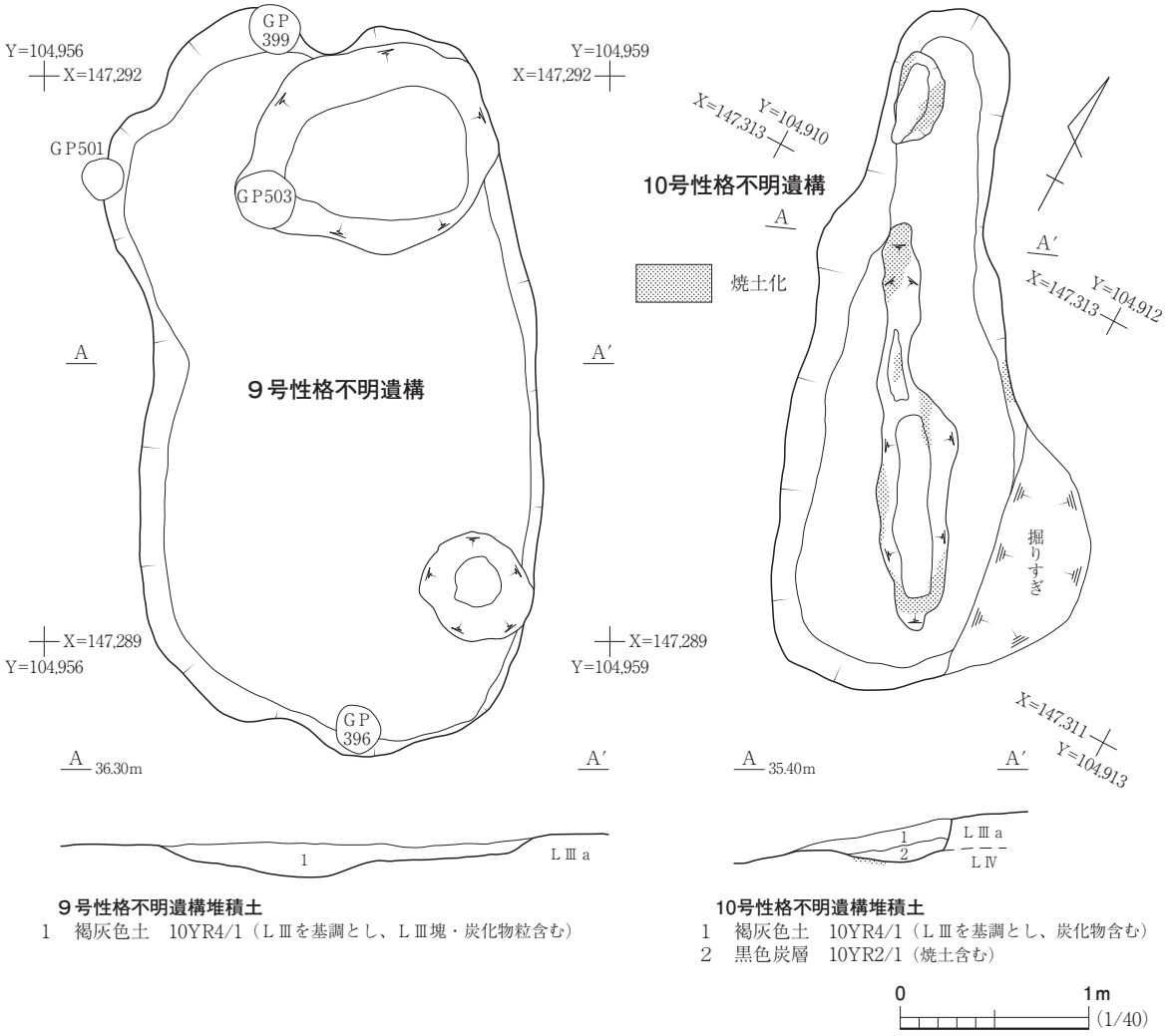
本遺構の詳細な性格は不明だが、年代は中世の小穴より古く、弥生時代の26～28号土坑より新しいことから、弥生時代以降、中世以前の所産と推測される。（佐　藤）

10号性格不明遺構　ＳＸ10（図95）

本遺構は３号平場の丘陵緩斜面、Ｑ９グリッドに位置する。検出面はＬⅢａ・Ⅳで、炭化物や焼土を含む褐灰色土の範囲として確認した。他の遺構との重複関係は認められない。

平面形は、不整長方形を呈し、北側に向かって幅を減じる。規模は、長軸3.63ｍ、短軸1.26ｍ、底面までの深さは19㎝を測る。主軸方向は北西・南東方向で、斜面に対し斜めの方向につくられている。周壁は斜面上位の東壁は急に、斜面下位の西壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦となる。遺構の底面を縦断するように溝が１条附帯している。溝の遺存状況は不良ながら、長さは推定値で3.08ｍ、幅36～40㎝、深さ２～６㎝となる。溝の周壁付近には橙色の焼土化した部分が認められる。中央付近の焼土化した面の厚さは、最大で２㎝を測る。堆積土は２層に分けられた。ℓ１はＬⅢを由来とする褐灰色土で、斜面上位からの流入土と考えられる。ℓ２は黒色炭層で焼土を含む。本遺構から遺物は出土していない。遺構内から出土した炭化物１点に対して、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行い、樹種はコナラ亜属コナラ節、２σ暦年範囲は15世紀中葉から16世紀前葉、もしくは16世紀中葉から17世紀前葉との結果を得た（第４章第１節参照）。

本遺構は底面に火通し溝がめぐり、その周壁が焼土化していることや、堆積土に炭層が認められることから火葬遺構の可能性がある。年代は、放射性炭素年代測定の結果を踏まえると、概ね中世の所産と考えられる。　（佐　藤）



９号性格不明遺構堆積土
1　褐灰色土　10YR4/1（ＬⅢを基調とし、ＬⅢ塊・炭化物粒含む）

10号性格不明遺構堆積土
1　褐灰色土　10YR4/1（ＬⅢを基調とし、炭化物含む）
2　黒色炭層　10YR2/1（焼土含む）

図95　９・10号性格不明遺構

11号性格不明遺構　ＳＸ11（図96、写真59）

本遺構は３号平場の丘陵斜面、Ｐ・Ｑ11グリッドに位置する。検出面はＬⅣで、４号平場の整地土を除去後、炭化物や焼土を含む褐灰色土の範囲として確認した。南方向約５ｍには２号堀跡が位置している。４号平場の整地、13号溝跡と重複し、本遺構が新しい。

本遺構は焼成部とその両脇の小穴状の掘り込み（Ｐ１・２）で構成される。焼成部の平面形は、長方形を呈し、規模は、長軸2.87ｍ、短軸1.05ｍ、底面までの深さは14㎝を測る。主軸方向はほぼ東西で、斜面の傾斜に対し並行するようにつくられている。周壁は緩やかに立ち上がる。底面は地形の傾斜に沿って西側へ向かって緩やかに傾斜している。焼成部の底面中央部には溝が１条附帯している。溝は焼成部の長軸方向に底面を縦断するように構築されている。規模は長さ2.76ｍ、幅25～30㎝、深さ４㎝を測る。焼成部の底面や溝の一部には、橙色の焼土化した部分が認められる。中央付近の焼土化した面の厚さは、最大で３㎝を測る。堆積土は２層に分けられた。ℓ１はＬⅡを由来とする褐灰色土で、斜面上位からの流入土と考えられる。ℓ２は黒色炭層で焼土を含んでいる。

小穴状の掘り込みは、焼成部の両脇に２基検出されている（Ｐ１・２）。Ｐ１が長軸1.13ｍ、短軸77㎝の楕円形、Ｐ２が長軸85㎝、短軸69㎝の方形となる。いずれも長軸は焼成部と同方向となり、斜面の傾斜に合わせて掘り込まれている。深さは検出面から９～15㎝と浅く、周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は焼成部のℓ１と同様の土質で、斜面上位からの流入土と判断した。出土遺物は認められない。遺構内から出土した炭化物１点に対して、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行い、樹種はコナラ亜属コナラ節、２σ暦年範囲は15世紀中葉から16世紀前葉との結果を得た（第４章第１節参照）。

本遺構は底面に火通し溝がめぐり、その付近が焼土化していることや、堆積土に炭層が認められることから火葬遺構の可能性がある。小穴状の掘り込みの用途は不明である。年代は放射性炭素年代測定の結果から、概ね15世紀中葉から16世紀前葉頃の所産と考えられる。（佐　藤）

12号性格不明遺構　ＳＸ12（図96、写真59）

本遺構は４号平場の丘陵頂部平坦面、Ｒ11・12グリッドに位置する。検出面はＬⅢｂで、炭化物や焼土を含む褐灰色土の範囲として確認した。南北の周壁は後世の掘削により破壊されている。５号掘立柱建物跡、ＧＰ558・638と重複しており、本遺構が新しい。南西方向約1.8ｍには、13号性格不明遺構が長軸方向を同様にして位置している。

平面形は隅丸長方形を基調とすると推測され、規模は、長軸2.68ｍ、短軸86㎝、底面までの深さは７㎝を測る。周壁は急に立ち上がり、底面はほぼ平坦となる。遺構の東側の底面中央には溝が１条附帯している。規模は長さ1.56ｍ、幅20㎝、深さ４㎝となる。遺構の底部中央付近や東壁付近には暗褐色の焼土化した部分が認められる。中央付近の焼土化した面の厚さは、最大で２㎝を測

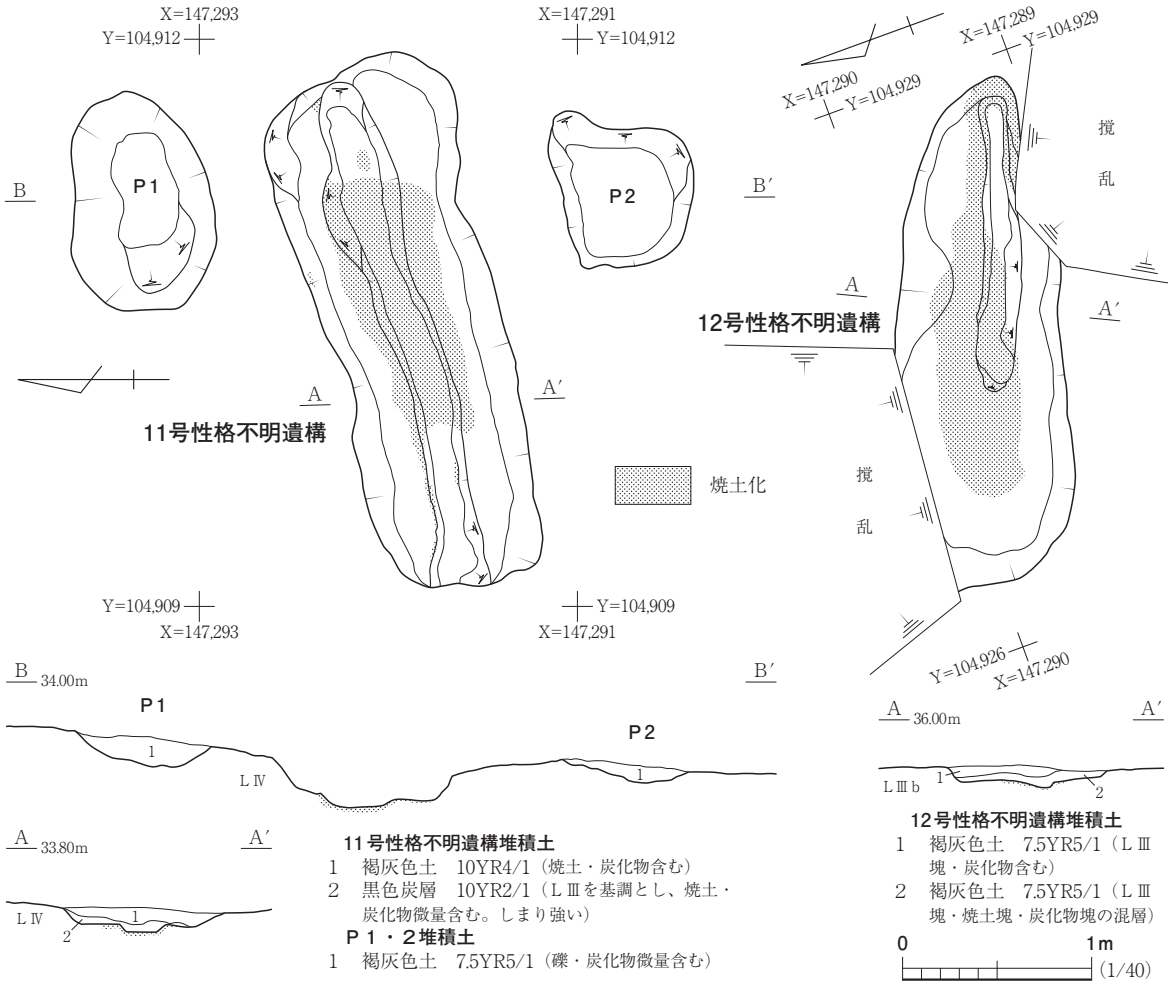


図96　11・12号性格不明遺構

る。堆積土は２層に分けられた。ℓ１・２ともにＬⅢ塊、炭化物などを含んでいることから、人為的に埋めた土と判断した。本遺構から遺物は出土していない。遺構内から出土した炭化物１点に対して、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行い、樹種はクリ、２σ暦年範囲は15世紀中葉から16世紀前葉、もしくは16世紀後葉から17世紀前葉との結果を得た(第４章第１節参照)。

本遺構は底面に火通し溝がめぐり、底部や周壁が焼土化していることから火葬遺構の可能性がある。年代は放射性炭素年代測定の結果から、概ね15世紀中葉から16世紀前葉頃の所産と考えられる。

（佐　藤）

13号性格不明遺構　ＳＸ13（図97、写真60）

本遺構は４号平場の丘陵頂部平坦面、Ｒ12グリッドに位置する。検出面はＬⅢで、ＬⅢ塊を含む褐灰色土の範囲として確認した。ＧＰ561と重複しており、本遺構が新しい。北東方向約1.8mには、12号性格不明遺構が長軸方向を同様にして位置している。

平面形は隅丸長方形を基調とすると推測され、規模は長軸2.77ｍ、短軸1.16m、底面までの深さは26cmを測る。周壁は急に立ち上がり、底面はほぼ平坦となる。遺構の底面中央には溝が１条附

帯している。規模は長さ２ｍ、幅25㎝、深さ４㎝となる。ℓ１は褐灰色土で、ＬⅢ塊を多量含むことから、操業後に埋めた土と判断した。ℓ２は黒色炭層で人為堆積である。本遺構からは土師器１点が出土しているが、小片のため図示していない。

本遺構は底面に火通し溝がめぐり、堆積土に炭層が認められることから火葬遺構の可能性がある。年代は出土遺物がなく不明だが、遺跡内の類例から概ね中世期の所産と考えられる。（佐　藤）

14号性格不明遺構　ＳＸ14（図97、写真60）

本遺構は４号平場の丘陵頂部平坦面、Ｑ・Ｒ11グリッドに位置する。検出面はＬⅢで、ＬⅢ・Ⅳ塊を含む褐灰色土の範囲として確認した。７号柱列跡、ＧＰ488・497・553・635～637と重複しており、本遺構が新しい。本遺構の南方向約0.6ｍには50号土坑が近接して位置している。

平面形は西側へ向けて幅が狭くなる不整長方形となり、規模は長軸5.34ｍ、短軸1.8ｍ、底面までの深さは24㎝を測る。主軸は東西方向となる。周壁は急に立ち上がるが、西側へ向かって緩やかになり、西隅では斜面に向けて開口する。底面はほぼ平坦となる。堆積土は２層に分けられ、いずれも褐灰色土で、ＬⅢ・Ⅳ塊を含むことから、人為的に埋めたものと判断した。本遺構からは遺物は出土していない。

本遺構は長さ５ｍを超える平面形が不整長方形の遺構である。その性格をうかがい知ることはできないが、遺構の重複関係から中世以降の所産と考えられる。（佐　藤）

15号性格不明遺構　ＳＸ15（図97）

本遺構は４号平場北西側の緩斜面、Q10グリッドに位置する。検出面はＬⅢで、４号平場の整地土を除去後、18号性格不明遺構を掘削した際、周壁に炭化物や焼土を含む褐灰色土を確認し、周辺を精査した結果、隅丸長方形の範囲として確認した。本遺構の北側は18号性格不明遺構と重複し、これより古い。本遺構の北東側には近接して39号土坑が位置する。

平面形は遺存状況から、隅丸の長方形になると推測される。規模は、遺存値で長軸2.1ｍ、短軸74㎝、底面までの深さは14㎝を測る。主軸方向は南北方向で、斜面の傾斜に対し垂直方向に掘られている。周壁は斜面上位の東壁は急に、斜面下位の西壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦となる。遺構の底面、西壁付近には縦断するように溝が１条附帯している。長さは遺存値で1.35ｍ、幅10～26㎝、深さ２～６㎝となる。溝の周壁の一部は橙色に焼土化した部分が認められる。焼土化した面の厚さは、最大で２㎝を測る。堆積土は２層に分けられた。ℓ１はＬⅡを由来とする褐灰色土で、斜面上位からの流入土と考えられる。ℓ２は黒色炭層で、主に溝を覆うように堆積していた。

本遺構は底面に火通し溝がめぐり、その周壁が焼土化し、堆積土に炭層が認められることから火葬遺構の可能性がある。遺構内から出土した炭化物１点に対して、樹種同定及び放射性炭素年代測定を行い、樹種はコナラ亜属コナラ節、２σ暦年範囲は15世紀中葉から16世紀前葉との結果を得

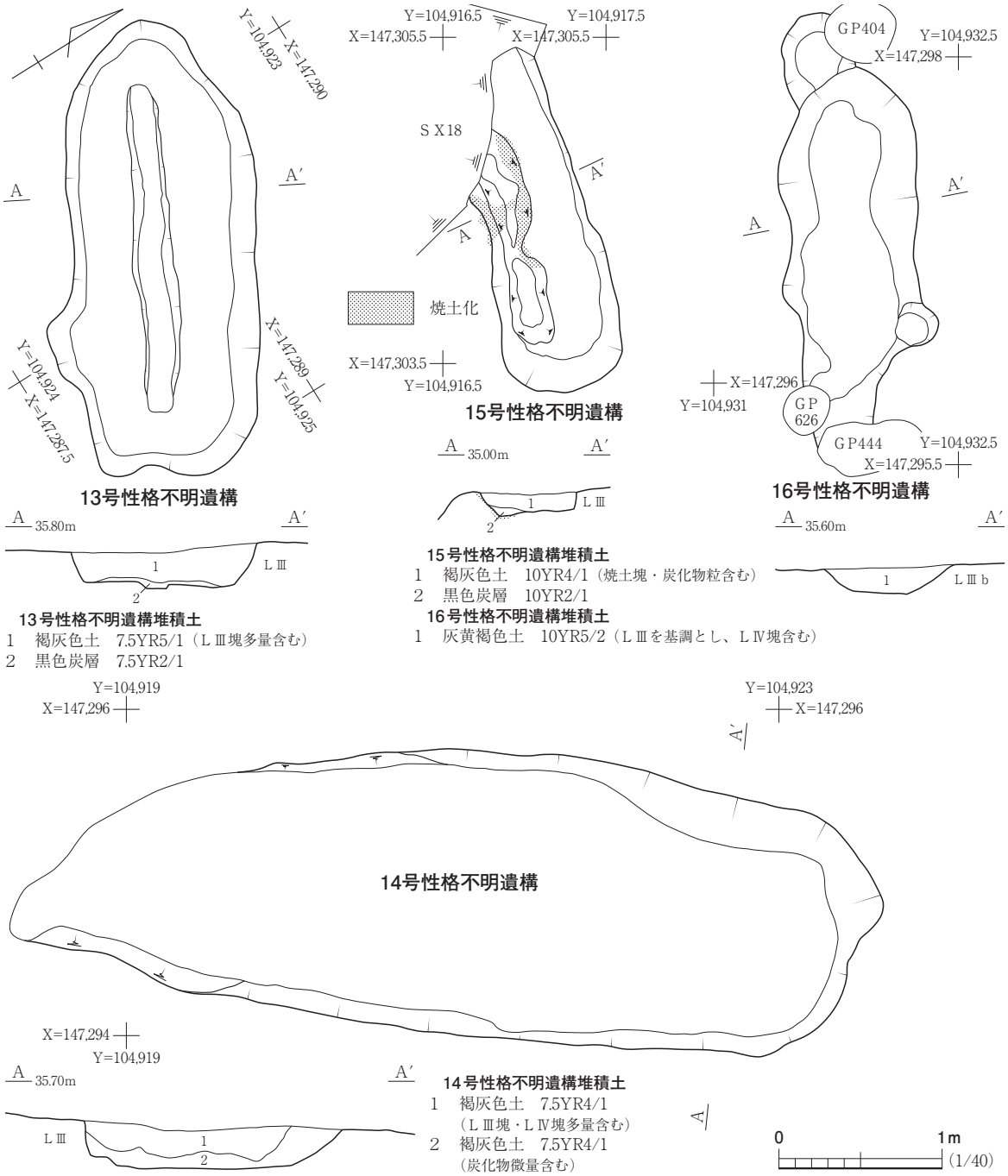


図97　13～16号性格不明遺構

た（第４章第１節参照）。年代は放射性炭素年代測定の結果から、概ね15世紀中葉から16世紀前葉頃の所産と考えられる。　（佐　藤）

16号性格不明遺構　ＳＸ16（図97）

本遺構は４号平場の丘陵頂部平坦面、Ｓ11グリッドに位置する。検出面はＬⅢｂで、ＬⅣ塊を含む灰黄褐色土の範囲として確認した。ＧＰ404・444・626と重複しており本遺構が古い。本遺構の南西側には４号掘立柱建物跡が近接して分布している。群集する小穴群のなかに位置し、南側は

ＧＰ444により遺存していない。

本遺構の平面形は不整な長方形で、北側と東側の周壁の一部が突出する。規模は遺存値で長軸2.52ｍ、短軸84㎝、底面までの深さは24㎝を測る。主軸はほぼ南北方向となる。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面は平坦を基調とするが、周壁の突出部のみ、一段高くなっている。堆積土はＬⅢを由来とする灰黄褐色土の単層で、ＬⅣ塊を含んでいる。土質の状況から人為的に埋めたものと判断した。

本遺構からは弥生土器13点、石器２点が出土しているが、いずれも小片のため図示していない。

本遺構は平面形が不整な長方形となる。その性格をうかがい知ることはできないが、中世の小穴群より古いことから中世以前の所産と考えられる。（佐　藤）

18号性格不明遺構　ＳＸ18（図98）

本遺構は４号平場、北西側の丘陵斜面、Q10グリッドに位置する。検出面はＬⅣで、４号平場の整地土除去後、砂礫を含む黒褐色土の範囲として確認した。本遺構の重複関係は、39号土坑より古く、15号性格不明遺構より新しい。

本遺構の平面形は不整な楕円形を基調としながら、北東側に張り出しを持つ。規模は長軸2.64ｍ、短軸1.8ｍ、底面までの深さは34㎝を測る。主軸は北西・南東方向を基調とする。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面にはＬⅣの小礫が露頭し、細かな凹凸が認められる。また、北東側の張り出し部分は底面より15㎝高い段状になっている。堆積土は２層に分けられ、いずれにも炭化物やＬⅣを由来とする砂礫を含むことから人為的に埋めたものと判断した。

本遺構からは石器が１点出土しているが、小片のため図示していない。

本遺構は平面形が不整楕円形で、北東側に張り出しを持つ遺構である。その性格をうかがい知ることはできないが、年代は４号平場の整地土より古いことから、中世以前の所産と考えられる。

（佐　藤）

22号性格不明遺構　ＳＸ22（図98・99、写真65）

本遺構は４号平場、北側の平場線付近の斜面、Ｔ９・10グリッドに位置する。検出面はＬⅣで、４号平場の整地土除去後、にぶい橙色土の範囲として確認した。本遺構は、ほかの遺構との重複は認められないが、西側に近接して23・24号性格不明遺構が位置する。

本遺構の平面形は不整形で、規模は長軸4.5ｍ、短軸2.1ｍ、底面までの深さは北側で84㎝、南側では43㎝を測る。周壁は急に立ち上がり、断面形は箱形を基調とする。底面は極めて凹凸が多い。特に北側と東側は土坑状に深い掘り込みが認められる。堆積土は３層に分けられ、ℓ１はＬⅢａを基調とするにぶい橙色土でＬⅣを由来とする小礫を含む。土塊などを含まないことから、斜面上位からの流入土と判断した。ℓ２は炭化物や焼土塊を含み、ℓ３はＬⅢｂとＬⅣの混合土でいず

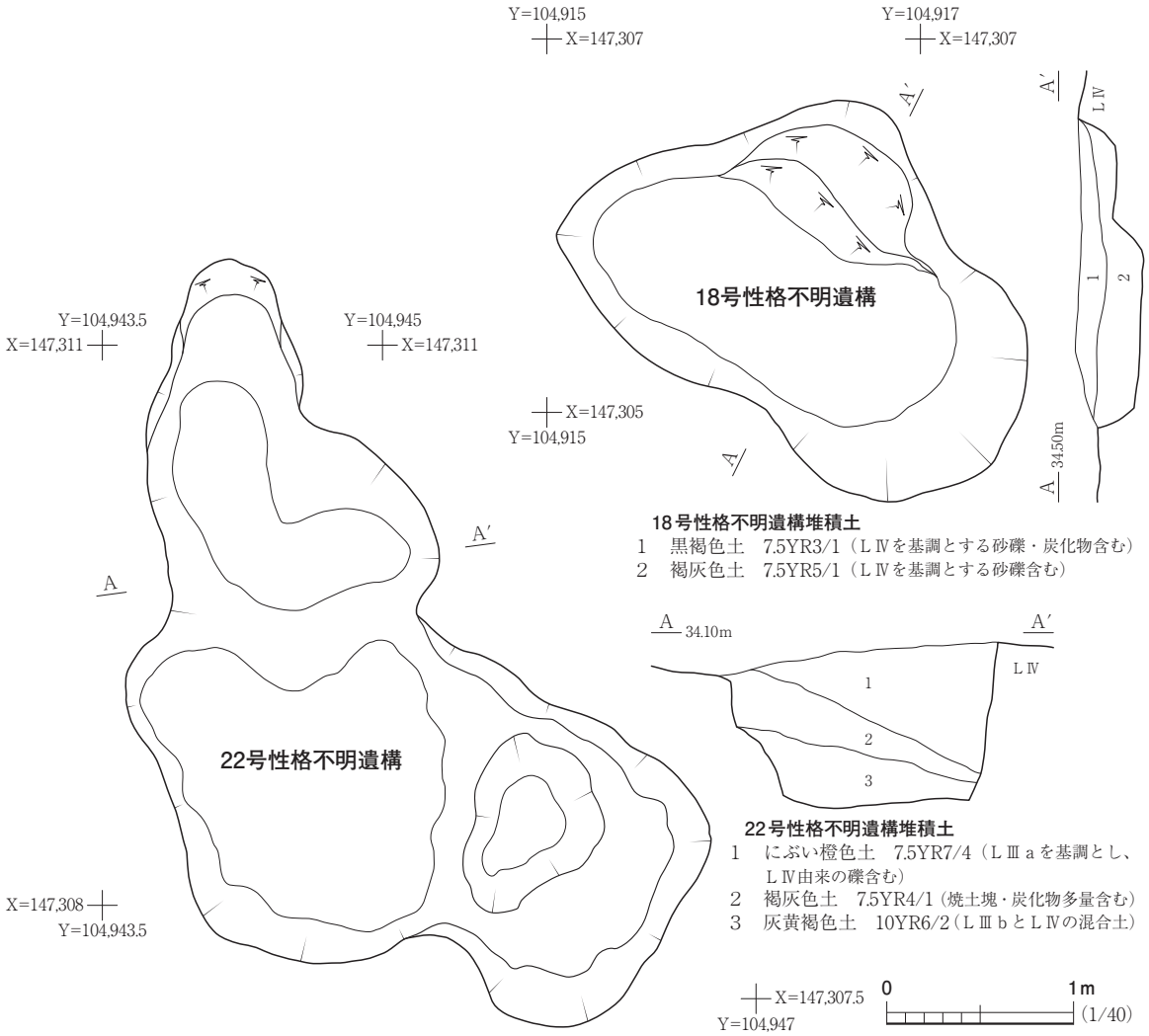


図98　18・22号性格不明遺構

れも人為による堆積と考えられる。

本遺構からは土師器20点、ミニチュア土器が出土しており、２点を図示した。図99－１は筒形土器である。体部は垂直に立ち上がり、口縁端部はわずかに内傾する。粘土紐の輪積み痕が明瞭に認められる。図99－２はミニチュア土器である。内外面にはユビオサエが認められる。底部には木葉痕が認められる。

本遺構は平面形が不整形の遺構である。その詳しい性格は不明だが、遺構の底部は細かい凹凸を持ち、不整形な土坑状の掘り込みを持つことから、土取り穴の可能性がある。年代は遺構内に自然流入土が堆積したのち、４号平場の整地が行われることや、出土した遺物の特徴から、概ね古代の所産と考えられる。　（佐　藤）

23号性格不明遺構　ＳＸ23（図99）

本遺構は４号平場、北側の平場線付近の斜面、Ｔ９・10グリッドに位置する。検出面はＬⅣで、４号平場の整地土除去後、褐灰色土の範囲として確認した。本遺構は、ほかの遺構との重複は

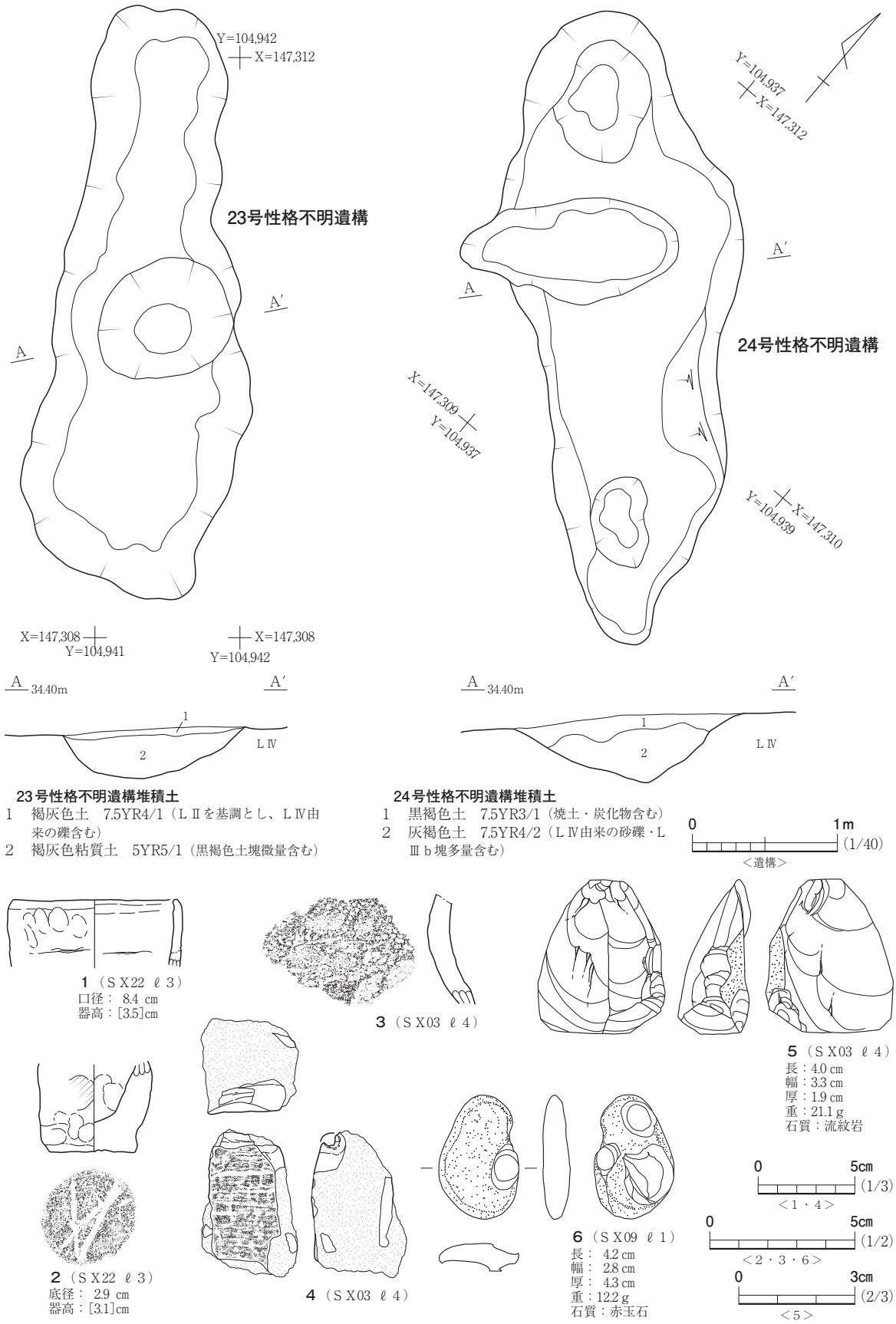


図99　23・24号性格不明遺構、3・9・22号性格不明遺構出土遺物

認められないが、隣接して22・24号性格不明遺構が位置する。

本遺構の平面形は不整長方形で、規模は長軸4.1ｍ、短軸1.4ｍ、底面までの深さは10～13㎝程となり、遺構中央部にある土坑状の掘り込み部分では34㎝を測る。主軸方向は南北となり、斜面の傾斜に直交する。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を基調とする。底面は極めて凹凸が多く、特に遺構中央には、土坑状に深い掘り込みが認められる。堆積土は２層に分けられ、ℓ１はＬⅡを由来とする褐灰色土でＬⅣの礫を含む。ℓ２は褐灰色粘質土で黒褐色土塊を含む。いずれも土質の特徴から人為堆積と考えられる。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は平面形が不整長方形の遺構である。その詳しい性格は不明だが、底部に細かい凹凸が認められることや、土坑状の掘り込みを持つことから、土取り穴の可能性がある。年代は４号平場の整地より古いことや、22号性格不明遺構と類似することから、概ね古代の所産と考えられる。

（佐　藤）

24号性格不明遺構　ＳＸ24（図99）

本遺構は４号平場、北側の平場線付近の斜面、Ｓ９・10グリッドに位置する。検出面はＬⅣで、４号平場の整地土除去後、黒褐色土の範囲として確認した。本遺構は、ほかの遺構との重複は認められないが、隣接して東側に22・23号性格不明遺構が位置する。

本遺構の平面形は不整長方形で、規模は長軸4.34ｍ、短軸1.64ｍ、底面までの深さは８～17㎝程となり、遺構中央部にある土坑状の掘り込み部分では46㎝を測る。主軸方向は北西・南東となり、斜面の傾斜に斜交する。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形を基調とする。底面は極めて凹凸が多く、特に遺構中央や、北西隅部や南東隅には、土坑状の深い掘り込みが認められる。堆積土は２層に分けられ、ℓ１は黒褐色土で焼土・炭化物を含む。ℓ２は灰褐色土でＬⅢｂ・Ⅳ砂礫を含む。いずれも土質の特徴から人為堆積と考えられる。本遺構から遺物は出土していない。

本遺構は平面形が不整長方形の遺構である。その詳しい性格は不明だが、底部に細かい凹凸が認められることや、土坑状の掘り込みを複数持つことから、土取り穴の可能性がある。年代は４号平場の整地より古いことや、22・23号性格不明遺構と類似することから、概ね古代の所産と考えられる。

（佐　藤）

第７節　遺構外出土遺物（図100～104、写真66・67）

遺構外からは、陶磁器９点、土師器１点、弥生土器194点、縄文土器１点、石器77点、銭貨１点、炉壁１点、鉄滓１点が出土しており、51点を図示した。

図100－１は古瀬戸の瓶子である。体部の小片で外面には沈線がめぐる。17号性格不明遺構（図22－２）、59号土坑（図49－１）の資料と同一個体の可能性がある。図100－２・３はロクロ成形のかわらけである。３は底部が比較的小さく、直線的に立ち上がる。図100－４～６は瓷器系陶器の

壺もしくは甕の肩部である。６は胎土の特徴から渥美焼の可能性がある。図100－７・８は肥前系陶器の皿である。内面には蛇の目の釉剥ぎが認められる。８の高台は意図的に打ち欠いている。図100－９・10は粘板岩製の砥石である。側面には線状の工具痕が認められる。図100－11は銅銭で、1863年初鋳の「文久永宝」である。

図100－12～25は桜井・天神原式期の弥生土器である。12は高坏で、外面には平行沈線がめぐり、内外面には指頭の圧痕が明瞭に認められる。13～15は甕形土器の口縁部である。縄文の原体はいずれも付加条文で、14の口縁端部にはキザミが認められる。16～20は壺形土器の体部から頸部にかけての破片である。16は２本引きの平行沈線により、斜状文を施す。17は２本1組の束線具により連続山形文を施している。18は２本引きの平行沈線により波状文を施している。19は地文に２本引きの平行沈線により渦文もしくは同心円文を施している。

22～25は壺形土器もしくは甕形土器の破片である。縄文の原体は22・24が単節斜縄文、23が付加条文である。25の底部には木葉痕が認められる。図100－26は縄文土器で、磨消縄文に３条の太い平行沈線が施される。

図101－１～４、図102－１・２は、磨製石斧である。図101－１～４は長石斑岩製、図102－１・２は安山岩製である。図101－１は基部が角張り、基部中央から刃部にかけてを研磨している。基部中央付近がやや撥状に開くことから有角石斧の可能性がある。欠損部の表裏面には２次加工の剥離が認められる。図101－２・３は太型蛤刃石斧である。細長い礫素材を敲打後、研磨して製品としている。２の中央部には、柄の装着痕跡とみられる比較的大きい敲打がめぐる。３の基部には敲打より古い剥離の痕跡が認められる。図101－４、図102－１は刃部が欠損している。１は礫素材の緩やかな稜を利用し、両側縁の一部には、明瞭な敲打や抉るような剥離が認められる。図102－２は扁平片刃石斧で、両端部には研磨より古い剥離が認められ。図102－３は、砂質頁岩製の磨製石斧を転用した楔形石器である。図102－４は珪質凝灰岩製のノミ形石器である。棒状の礫素材を研磨して刃部を作り出している。図102－５・６・８は不定形石器とした。５は珪質凝灰岩製で、扁平で細長い礫素材を台石打法により剥離している。縁辺には細かな剥離が認められる。６は流紋岩製で、扁平な楕円礫を石器素材とし、左面右端部には刃こぼれとみられる微細な剥離が認められる。７は粘板岩製の石庖丁である。転用するため、複数回の剥離を行っており原型は留めていないが、左面の下端部や右面の上端部には石庖丁成形時の研磨の痕跡が確認できる。８は流紋岩製で、右側面には細かな剥離が認められる。

図103－１～３は石核である。１は流紋岩製で楕円礫を素材とする。礫面を残し、任意に打点を変えながら剥離を行っている。２は粘板岩製で扁平な右面右側縁部が若干磨耗していることから、直縁刃石器の可能性もある。礫を石器素材とし、縁辺から剥離を行い、貝殻状の石器素材を採取していたと考えられる。３は流紋岩製でサイコロ状の石核で、上端は複数回の剥離によりつぶれている。

図103－４～９、図104－１は剥片である。図103－４は流紋岩製で円礫の端部を素材とし、左面

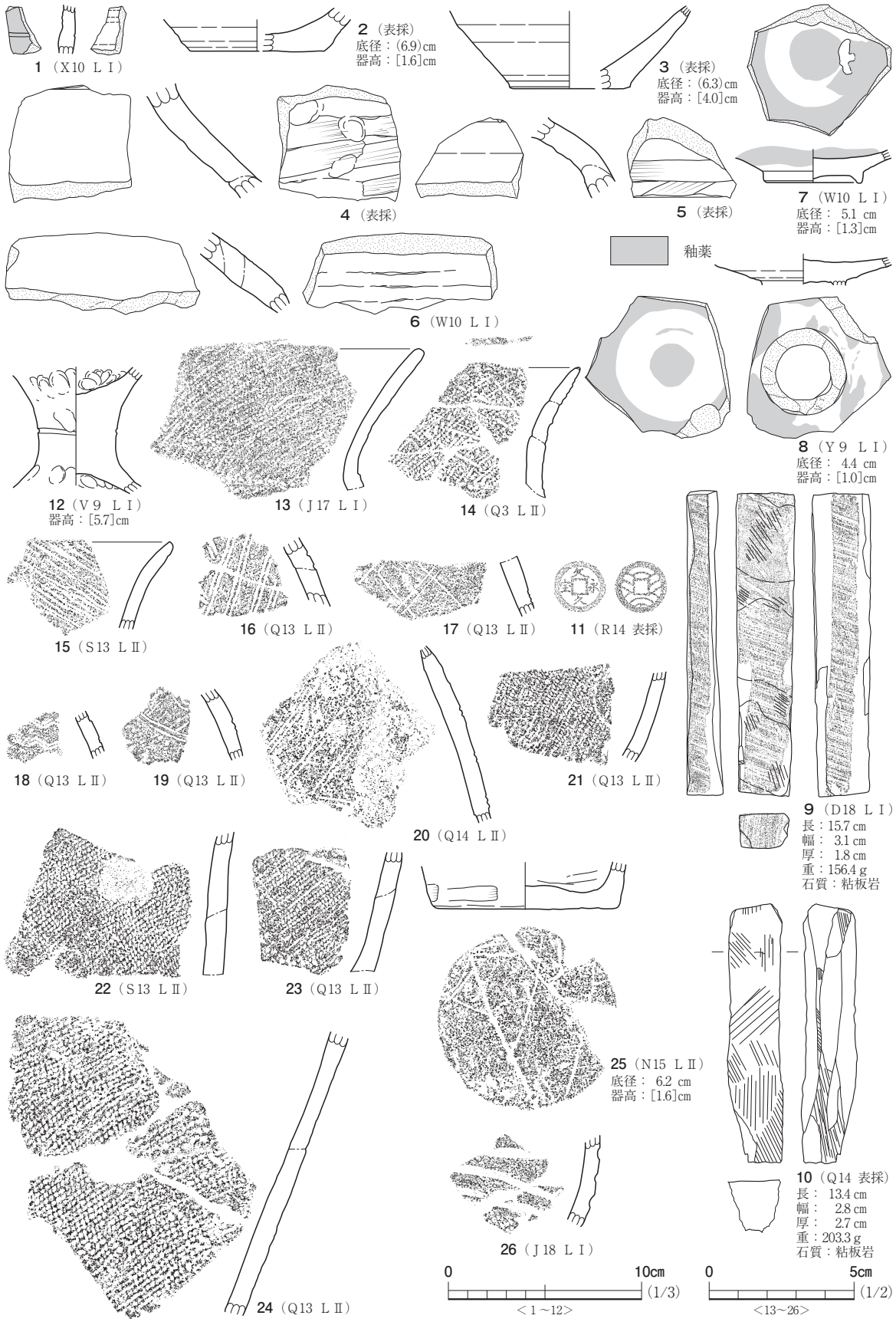


図100　遺構外出土遺物（１）

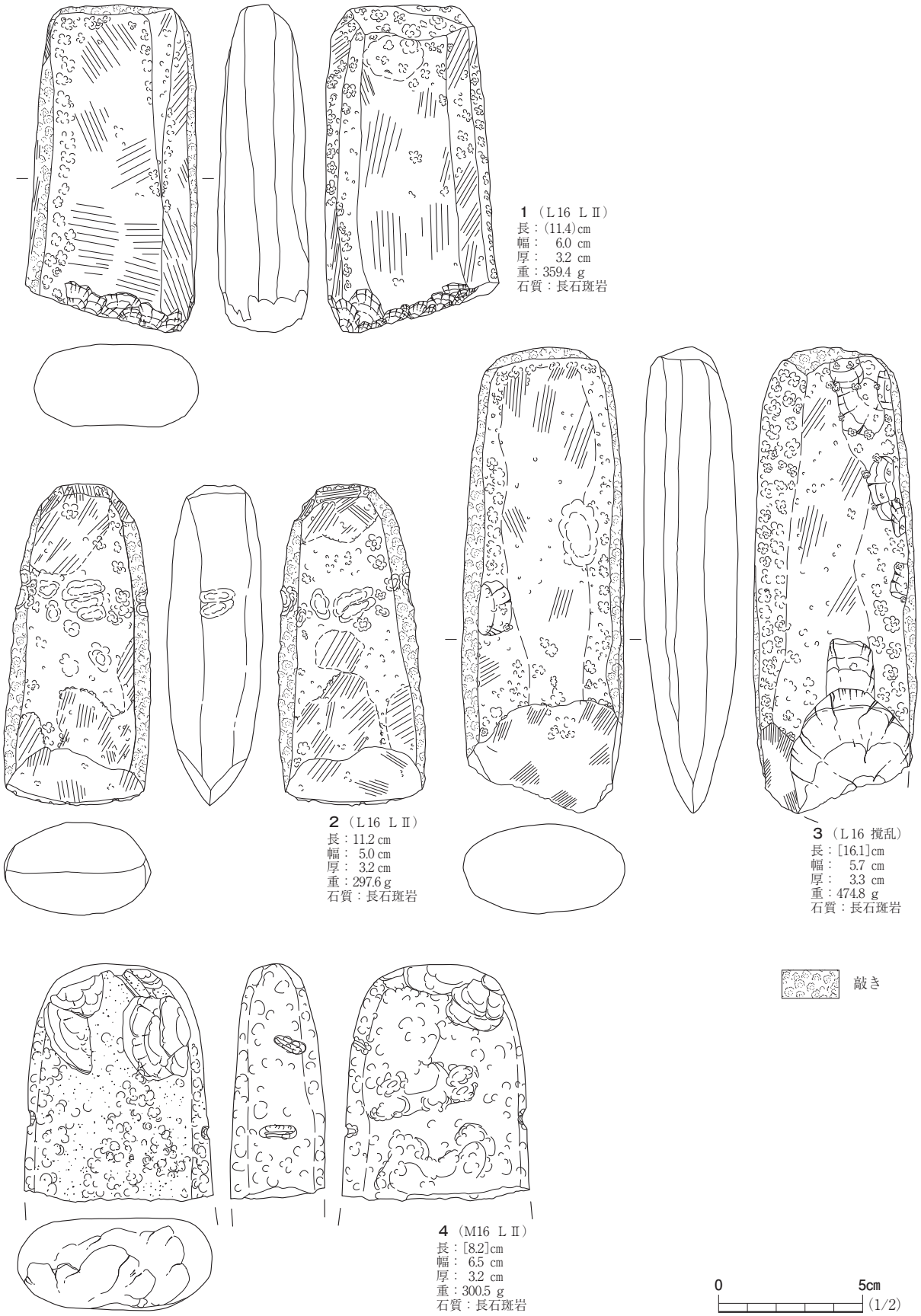


図101　遺構外出土遺物（２）

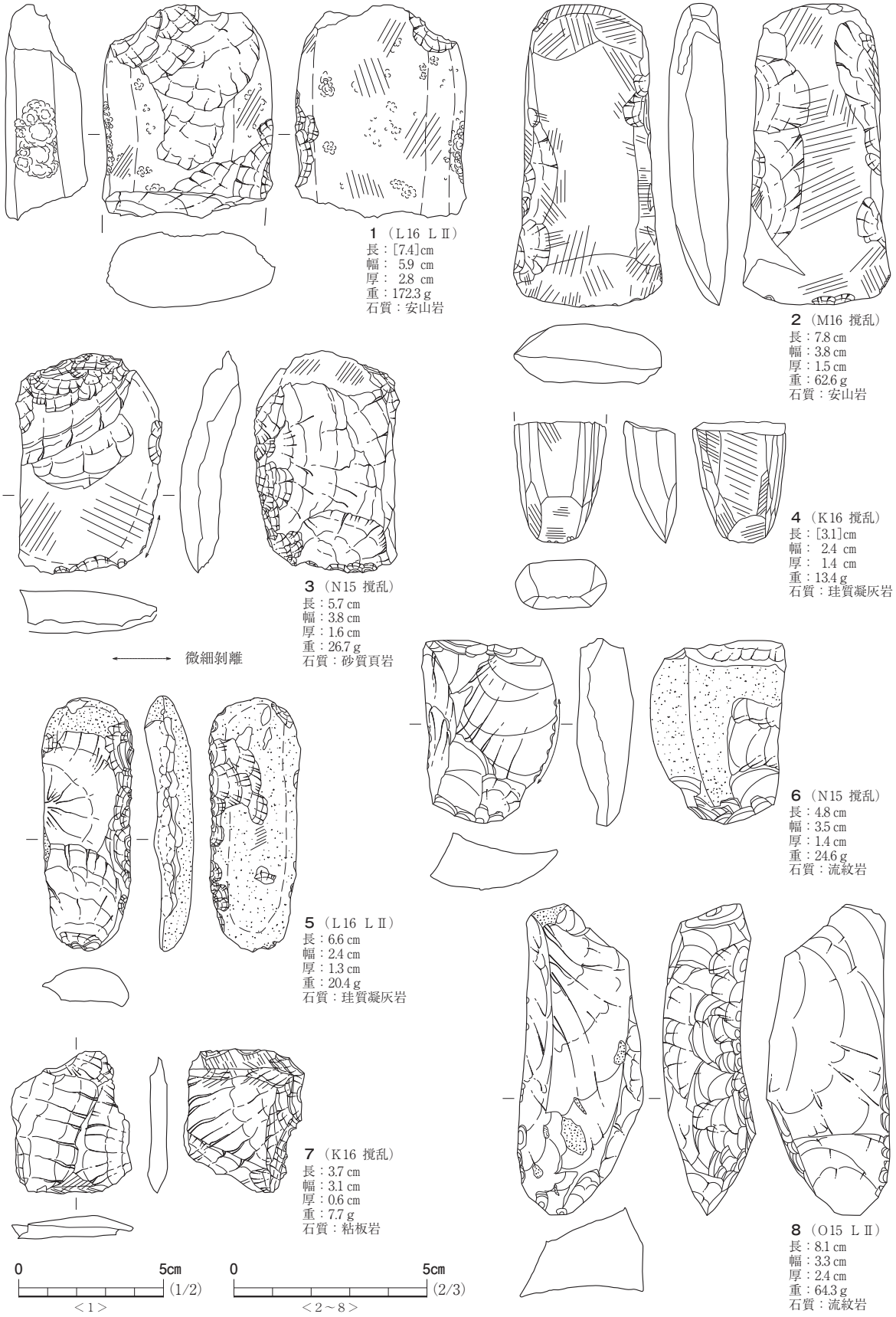


図102　遺構外出土遺物（３）

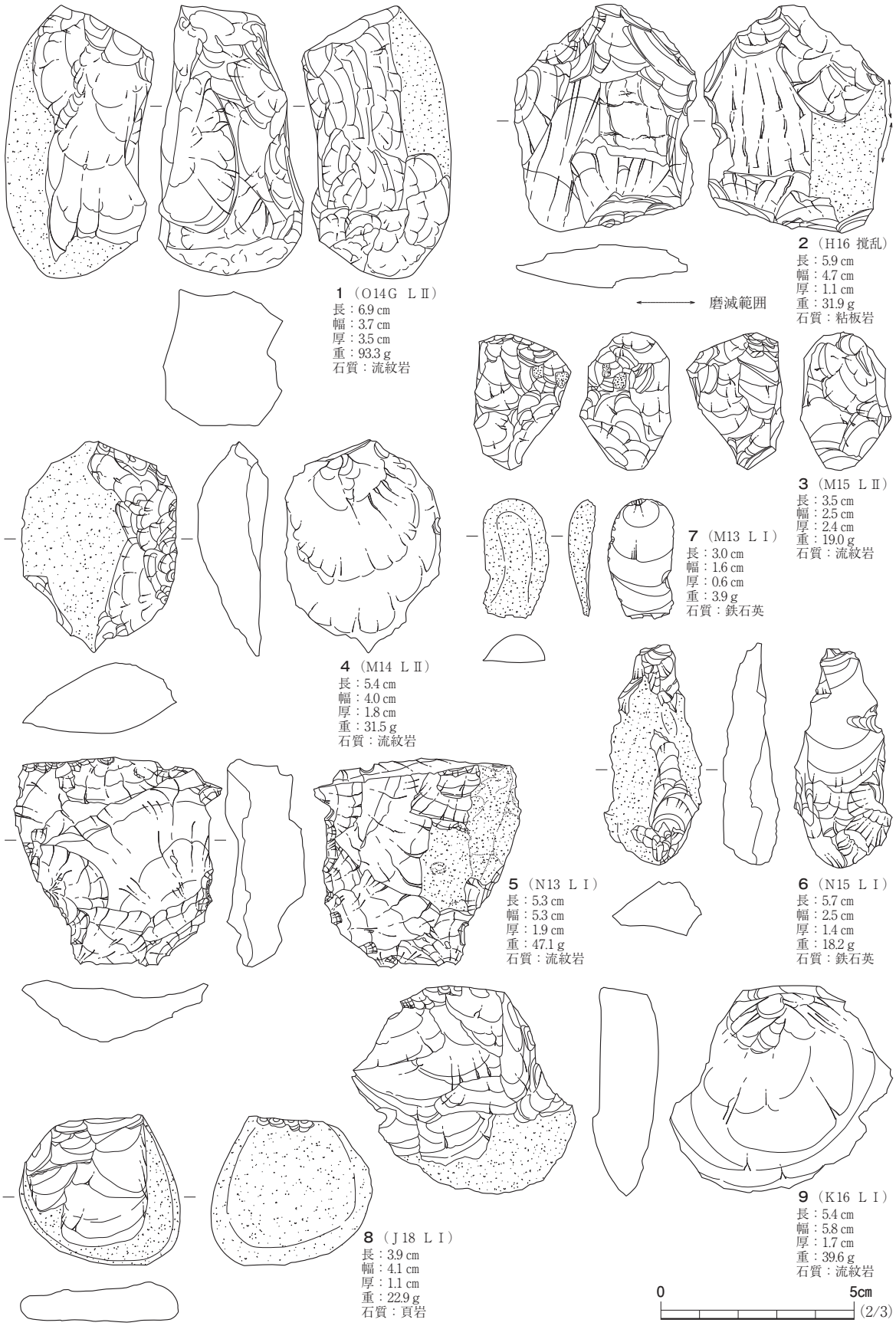


図103　遺構外出土遺物（４）

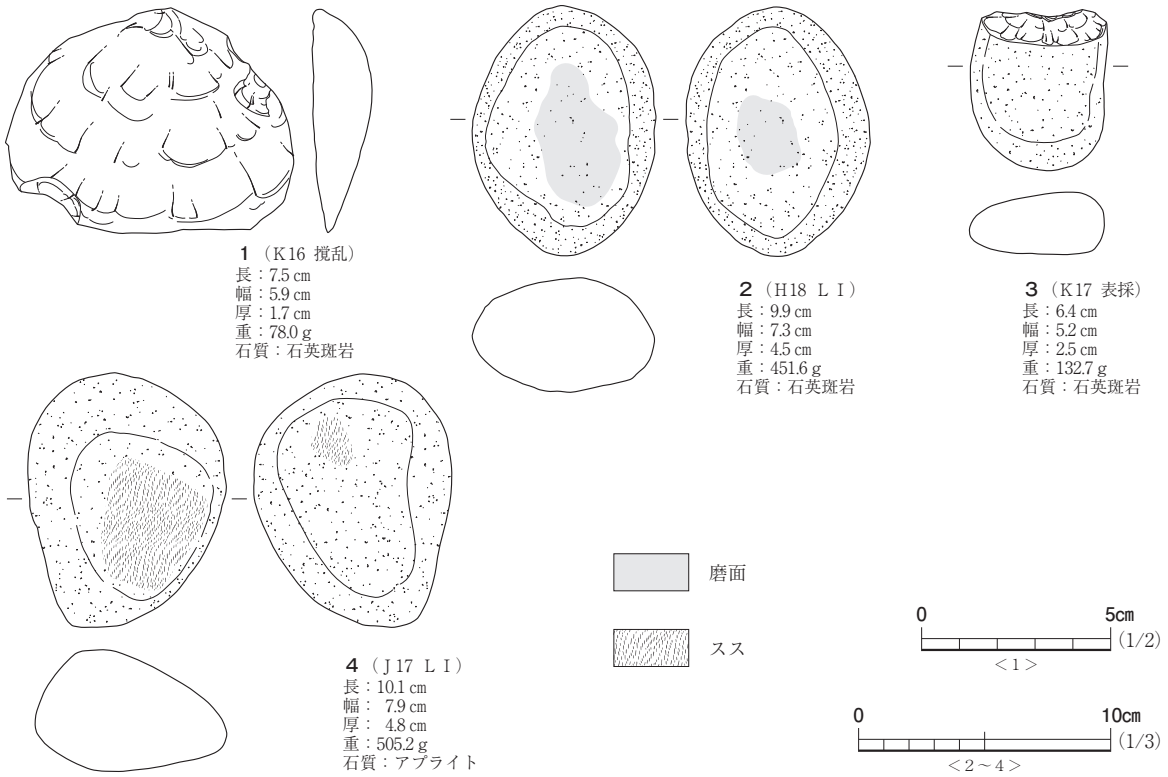


図104　遺構外出土遺物（５）

の側縁部に細かな剥離が認められる。図103－５は流紋岩製で左面上端部に細かな剥離が認められる。図103－６は鉄石英製で、台石に置いた剥離を行っている。図103－７は鉄石英製で、小型の円礫の端部を石器素材とし、右面の左端部には細かな剥離が認められる。図103－８は頁岩製で、扁平な礫を上端部からのみ剥離を行っている。図103－９は流紋岩製で円礫の端部を石器素材とし、左面の下部には礫面を残す。図104－１は石英斑岩製で、円礫端部の剥片を右上端部と左下端部の２回剥離を行っている。図104－２は石英斑岩製の磨石である。図104－３は石英斑岩製で、上端部に刃部を形成するような剥離を行っていることから、礫器の可能性がある。図104－４はアプライトの自然礫だが、両面にススが付着している。　（佐　藤）

第４章　自然科学分析

第１節　炭 化 物 分 析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

福島県双葉郡富岡町大字毛萱字前川原に所在する毛萱館跡は、中世の館跡であり、発掘調査では土塁・堀跡などの中世城館に関する遺構のほかに、弥生時代の集落跡も確認されている。本分析調査では、弥生時代中期・古代及び中世の可能性がある遺構から出土した炭化材について樹種同定を実施し、当時の木材利用に関わる資料を得るとともに、放射性炭素年代測定を行い、遺構の年代に関する情報を得る。

１．試　　料

樹種同定・年代測定を行う試料は、遺構から出土した炭化材15点である。小さなものは数ミリの破片多数、大きなものは１～数センチの炭化材が１～３個入っている。試料の詳細は表３に示す。

２．分析方法

（１）樹種同定

試料観察の結果、細片試料はいずれも同じ種類の可能性が高い。このため、最も大きな一片を抜き出して樹種同定を行い、そのほかの試料で年代測定を行う。大きめの炭化材が１～３個体入っている試料は、一番大きな試料を対象にする（これも観察の結果同一樹種であると考えられる）。同定には年代測定用にトリミングを行った残滓を用いる。剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の各割片を作成し、電子顕微鏡で観察する。

木材組織の種類や配列の特徴を、現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

（２）放射性炭素年代測定

細片試料は実体顕微鏡下で泥などの付着物を除去する。１個体の試料は、周囲を削り落として50㎎程度に調整する。削り落とした部分は樹種同定に用いる。試料は、塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA：Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に１mol/Lである。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径１㎜の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を用いて、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）を測

定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-Ⅱ)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-Ｃ６等)、バックグラウンド試料(IAEA-Ｃ１)の測定も行う。δ^{13}Cは試料炭素の^{13}C濃度(^{13}C/^{12}C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma；68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは、Oxcal4.3(Bronk, 2009)、較正曲線はIntcal13(Reimer et al., 2013)である。

３．結　　果

(１)樹種同定

結果を表３に示す。検出された種類は針葉樹３種類(モミ属？、マツ属複維管束亜属、ヒノキ属)、広葉樹４種類(コナラ亜属コナラ節、クリ、サクラ属？、ツツジ科)である。クリやコナラ亜属といった比較的重硬で、炭として残りやすい材が多い傾向にある。以下に検出された種類の形態的特徴を記す。

・モミ属？(*Abies*?)　マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で１分野に１～４個。放射組織は単列、１～20細胞高。全体的に劣化しているため、モミ属？とした。

・マツ属複維管束亜属(*Pinus* subgen. *Diploxylon*)　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや緩やかで、垂直樹脂道が晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平樹脂道と、樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、１～15細胞高。

・スギ(*Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don)　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。

表３　樹種同定結果一覧

試料番号	出土位置			樹　種	備　考
	遺構名	層　位	年　代		
TO-KGT-１	ＳＩ01	1	弥生時代中期	クリ	節の部分
TO-KGT-２	ＳＩ03	1	弥生時代中期	サクラ属？	芯持材　半分割　３年＋
TO-KGT-３	ＳＩ10	1	弥生時代中期	ヒノキ属	割材　８年＋
TO-KGT-４	ＳＢ02-Ｐ13	1	中世	ヒノキ属	芯持材　半分割　11年＋
TO-KGT-５	ＳＫ01	4	弥生時代中期	クリ	破片多数
TO-KGT-６	ＳＫ08	1	弥生時代中期	クリ	割材　３年＋
TO-KGT-７	ＳＤ05	1	中世	ヒノキ属	割材　３年＋
TO-KGT-８	ＧＰ684	埋土	中世	マツ属複維管束亜属	割材　10年＋
TO-KGT-９	ＳＸ10	2	古代か	コナラ亜属コナラ節	芯持材　半分割　７年＋
TO-KGT-10	ＳＸ11	2	古代か	コナラ亜属コナラ節	丸木　芯持　10年＋
TO-KGT-11	ＳＸ12	1	古代か	クリ	破片多数
TO-KGT-12	ＳＸ15	2	古代か	コナラ亜属コナラ節	みかん割材　６年＋
TO-KGT-13	ＳＸ17	3	中世	ツツジ科	みかん割材　17年＋
TO-KGT-14	ＧＰ278	埋土	中世	クリ	みかん割材　13年＋
TO-KGT-15	ＳＧ08	1	中世	モミ属？	割材　４年＋

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、１分野に２個が多い。放射組織は単列、１～10細胞高。

・ヒノキ属（*Chamaecyparis*?）　ヒノキ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型で、１分野に２個が多い。放射組織は単列、１～15細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Quercus* sect. Prinus）　ブナ科

環孔材で、孔圏部は１－３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１－20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は３－４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。

・サクラ属？（*Prunus*?）　バラ科

散孔材で、道管は単独または２～６個が放射方向あるいは斜方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１～４細胞幅、１～60細胞高。

・ツツジ科（Ericaceae）

散孔材で、小径の道管がほぼ単独で散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、１～４列、１～30細胞高。

（２）放射性炭素年代測定

結果を表４、図105に示す。TO-KGT-５とTO-KGT-11は試料が脆弱でアルカリの濃度を薄くしたが、他の試料は定法での処理を行っている。全ての試料で加速器質量分析装置を用いた年代測定に必要な炭素量が回収できている。測定の結　果、TO-KGT-１は2,215±25BP、TO-KGT-２は665±20BP、TO-KGT-３は1,750±25BP、TO-KGT-４は915±20BP、TO-KGT-５は535±20BP、TO-KGT-６は875±20BP、TO-KGT-７は1,885±25BP、TO-KGT-８は365±20BP、TO-KGT-９は355±20BP、TO-KGT-10は385±20BP、TO-KGT-11は380±20BP、TO-KGT-12は405±25BP、TO-KGT-13BPは500±20BP、TO-KGT-14は510±20BP、TO-KGT-15は770±20BPの値を示す。

暦年較正は、大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動、その後訂正された半減期（^{14}Cの半減期5,730±40年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データーセットは、Intcal13（Reimer et al., 2013）を用いる。２σの値は、TO-KGT-１がcalBC364～203、TO-KGT-２がcalAD1,280～1,389、TO-KGT-３がcalAD232～378、TO-KGT-４がcalAD1,035～1,165、TO-KGT-５がcalAD1,325～1,435、TO-KGT-６がcalAD1,049～1,219、TO-KGT-７がcalAD68～214、TO-KGT-８がcalAD1,452～1,631、TO-KGT-９がcalAD1,459～1,634、TO-KGT-10がcalAD1,445～1,620、TO-KGT-11がcalAD1,446～1,624、TO-KGT-12がcalAD1,437～1,617、TO-KGT-13がcalAD1,409～1,441、TO-KGT-14がcalAD1,405～1,441、TO-KGT-15がcalAD1,223～1,278である。

４．考　　察

検出された炭化材は、クリとコナラ節が多い。これらは比較的重硬で燃え残りやすく、炭化材として残りやすいという性状が関係している。クリは水湿に耐え、耐朽性が高いこと、縦方向に割れやすく容易に加工できることから、古くから建築材などとして用いられ、特に耐水性を求められる柱や板葺屋根などに用いられることが多い。コナラ亜属コナラ節は、クリとともに里山林の主要な樹木で、薪炭材として用いられることが多い。また、重硬な性質を利用して、家具や建具などに利用される。次に多いヒノキ属は、弾力性、靱性に富み、加工しやすく、耐湿、耐水性も高い良材である。高級建築材として使われるほか、家具、建具、曲物など幅広く利用される。検出された炭化材は小片のため用途は不明だが、加工に適した良材が検出される傾向にある。遺跡の立地と、各樹種の生態性から、これらの樹木は周辺で得やすい種類であったと思われる。その他検出されるマツ属複維管束亜属、モミ属、サクラ属、ツツジ科も人里近くの里山林や林縁に生育する種類であり、基本的に周辺で得やすい樹木を利用していたことがわかる。伊東・山田(2012)の木材利用データベースには、福島県内の分析例が13188点収録されている。このうちコナラ亜属(コナラ節、クヌギ節)は約40%を占め最も多い。次いでクリが約15%を占め、今回の検出傾向に似る。

年代測定の結果をみると、TO-KGT-１、TO-KGT-３、TO-KGT-７は弥生時代、その他は中世以降の年代値を示す。弥生時代中期と想定されている試料は５点(１・２・３・５・６)あり、そのうち１と３については年代測定結果は矛盾しないが、２・５では鎌倉～室町、６では平安～鎌倉の年代観を示す値が得られた。中世と想定される試料は６点(４・７・８・13・14・15)あり、４は平安時代、７は弥生時代の年代観を示す値が得られている。その他４点の測定結果は、中世の範囲におさまるが、８は江戸初期の可能性も残される。古代かとされる試料は４点(９・10・11・12)あり、いずれも室町～江戸初期の年代観を示す値が得られている。試料が採取された層位や出土遺物の年代観などの現地調査所見も併せて、総合的に検討していく必要がある。なお、樹種と時代性の関係ははっきりしないが、傾向としてモミ属やヒノキ属といった針葉樹が同じ時代観と思われる広葉樹に比べ古い場合がある(TO-KGT-７、TO-KGT-４、TO-KGT-15)。これは、針葉樹は長寿で大木になる木が多いことから、樹芯に近い部分が残り、年代測定試料になった可能性がある。このような場合、古木効果により、場合によっては数百年単位で古くなる可能性もある。

引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.

林　昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.

伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.

伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所. 66-176.

伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.

伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.

伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.

伊東隆夫・山田昌久(編), 2012, 木の考古学　出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.

Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Haflidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869-1887.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(編), 2006, 針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リス

表４　放射性炭素年代測定結果一覧

試　料	遺　構	方　法	補正年代（暦年較正用）BP	δ^{13}C（‰）	暦年較正年代			
						年代値		確率%
KGT１	ＳＩ01	AAA（１M）	2215±25（2213±23）	−26.3±0.2	σ	calBC　358－calBC　349	2307－2298 calBP	6.4
						calBC　314－calBC　277	2263－2226 calBP	26.4
						calBC　258－calBC　209	2207－2158 calBP	35.4
					2σ	calBC　364－calBC　203	2313－2152 calBP	95.4
KGT２	ＳＩ03	AAA（１M）	665±20（663±21）	−25.1±0.2	σ	calAD 1285－calAD 1303	665－647 calBP	35.7
						calAD 1366－calAD 1383	584－567 calBP	32.5
					2σ	calAD 1280－calAD 1315	671－635 calBP	49.5
						calAD 1356－calAD 1389	595－561 calBP	45.9
KGT３	ＳＩ10	AAA（１M）	1750±25（1751±23）	−27.8±0.2	σ	calAD　247－calAD　263	1703－1687 calBP	15.0
						calAD　275－calAD　330	1675－1621 calBP	53.2
					2σ	calAD　232－calAD　352	1718－1599 calBP	93.8
						calAD　368－calAD　378	1582－1572 calBP	1.6
KGT４	ＳＢ02 P13	AAA（１M）	915±20（916±21）	−25.8±0.2	σ	calAD 1046－calAD 1093	905－857 calBP	41.9
						calAD 1121－calAD 1141	830－810 calBP	16.7
						calAD 1147－calAD 1159	803－791 calBP	9.6
					2σ	calAD 1035－calAD 1165	916－785 calBP	95.4
KGT５	ＳＫ01	AaA（0.5M）	535±20（534±21）	−25.9±0.2	σ	calAD 1401－calAD 1427	549－524 calBP	68.2
					2σ	calAD 1325－calAD 1345	626－606 calBP	12.3
						calAD 1393－calAD 1435	558－516 calBP	83.1
KGT６	ＳＫ08	AAA（１M）	875±20（877±21）	−26.7±0.2	σ	calAD 1156－calAD 1211	795－740 calBP	68.2
					2σ	calAD 1049－calAD 1084	902－866 calBP	15.8
						calAD 1124－calAD 1137	826－814 calBP	2.8
						calAD 1150－calAD 1219	800－731 calBP	76.8
KGT７	ＳＤ05	AAA（１M）	1885±25（1883±23）	−26.2±0.2	σ	calAD　77－calAD　134	1874－1816 calBP	68.2
					2σ	calAD　68－calAD　214	1883－1737 calBP	95.4
KGT８	ＧＰ684	AAA（１M）	365±20（365±21）	−27.3±0.2	σ	calAD 1466－calAD 1517	484－434 calBP	46.1
						calAD 1595－calAD 1618	356－332 calBP	22.1
					2σ	calAD 1452－calAD 1524	498－426 calBP	56.6
						calAD 1559－calAD 1564	392－386 calBP	1.4
						calAD 1569－calAD 1631	381－319 calBP	37.4
KGT９	ＳＸ10	AAA（１M）	355±20（353±21）	−26.2±0.2	σ	calAD 1477－calAD 1522	473－429 calBP	33.7
						calAD 1575－calAD 1625	375－325 calBP	34.5
					2σ	calAD 1459－calAD 1528	492－422 calBP	45.2
						calAD 1553－calAD 1634	398－316 calBP	50.2
KGT10	ＳＸ11	AAA（１M）	385±20（385±21）	−26.4±0.2	σ	calAD 1451－calAD 1492	500－458 calBP	57.1
						calAD 1602－calAD 1613	348－338 calBP	11.1
					2σ	calAD 1445－calAD 1522	506－429 calBP	76.2
						calAD 1591－calAD 1620	359－330 calBP	19.2
KGT11	ＳＸ12	AaA（0.001M）	380±20（381±22）	−26.0±0.3	σ	calAD 1452－calAD 1495	498－456 calBP	53.4
						calAD 1602－calAD 1616	349－335 calBP	14.8
					2σ	calAD 1446－calAD 1522	505－428 calBP	70.6
						calAD 1575－calAD 1624	375－326 calBP	24.8
KGT12	ＳＸ15	AAA（１M）	405±25（407±24）	−24.5±0.2	σ	calAD 1444－calAD 1480	506－471 calBP	68.2
					2σ	calAD 1437－calAD 1513	514－437 calBP	87.2
						calAD 1601－calAD 1617	350－333 calBP	8.2
KGT13	ＳＸ17	AAA（１M）	500±20（501±21）	−24.8±0.2	σ	calAD 1415－calAD 1435	535－515 calBP	68.2
					2σ	calAD 1409－calAD 1441	541－509 calBP	95.4
KGT14	ＧＰ278	AAA（１M）	510±20（509±21）	−25.2±0.3	σ	calAD 1414－calAD 1431	537－519 calBP	68.2
					2σ	calAD 1405－calAD 1441	545－510 calBP	95.4
KGT15	ＳＧ08	AAA（１M）	770±20（769±21）	−25.6±0.2	σ	calAD 1246－calAD 1275	704－675 calBP	68.2
					2σ	calAD 1223－calAD 1278	728－673 calBP	95.4

１）年代値の算出には、Libby の半減期5568年を使用。
２）BP 年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
３）付記した誤差は、測定誤差σ（測定値の68.2% が入る範囲）を年代値に換算した値。
４）AAA は、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaA は試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
５）暦年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用
６）暦年の計算には１桁目まで示した年代値を使用。
７）較正データーセットは、Intcal13を使用。
８）較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、１桁目を丸めていない。
９）統計的に真の値が入る確率は、σが68.2%、２σが95.4% である

ト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

島地　謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.

Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ^{14}C Data. Radiocarbon, 19, 355-363.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編), 1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

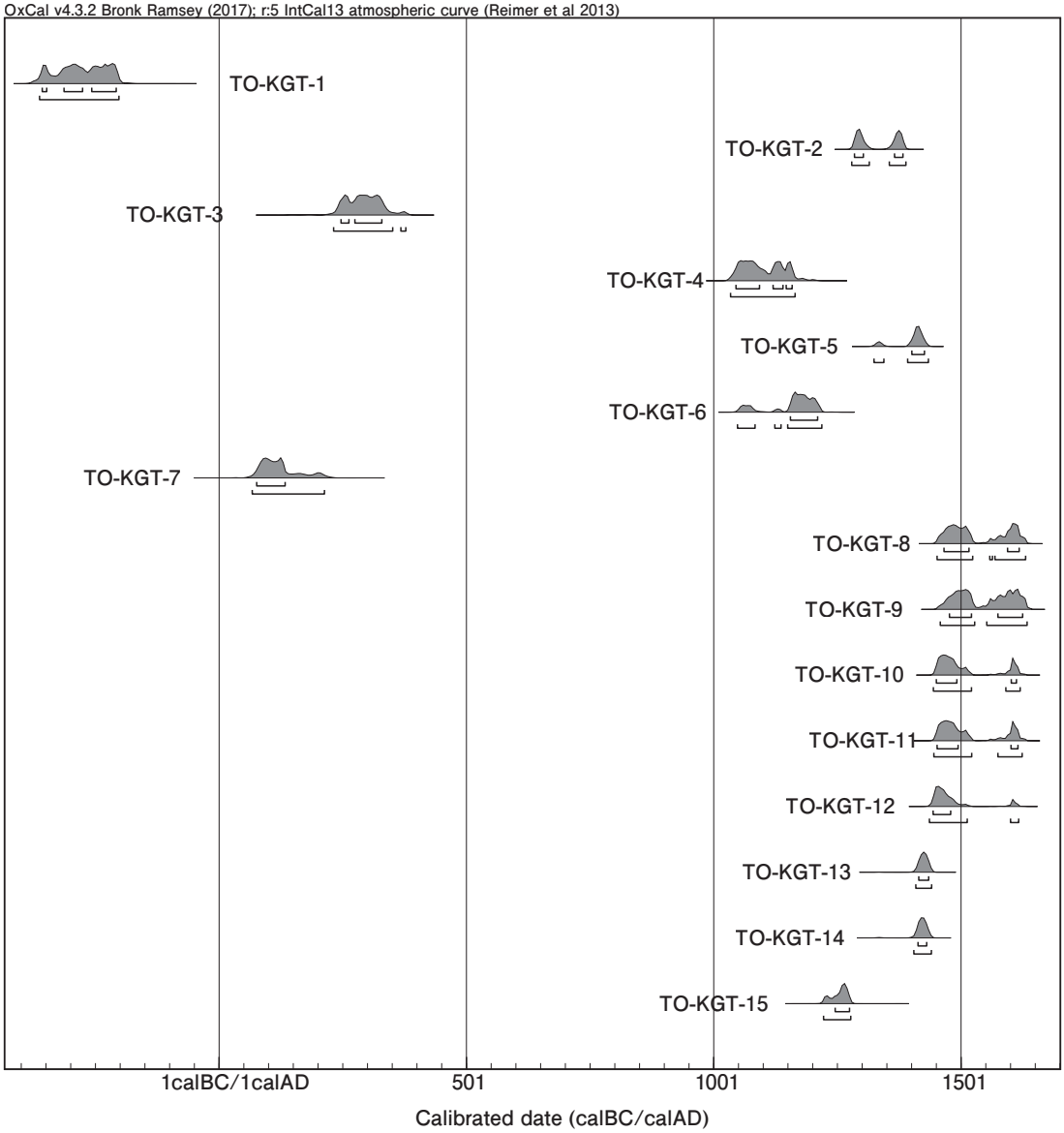
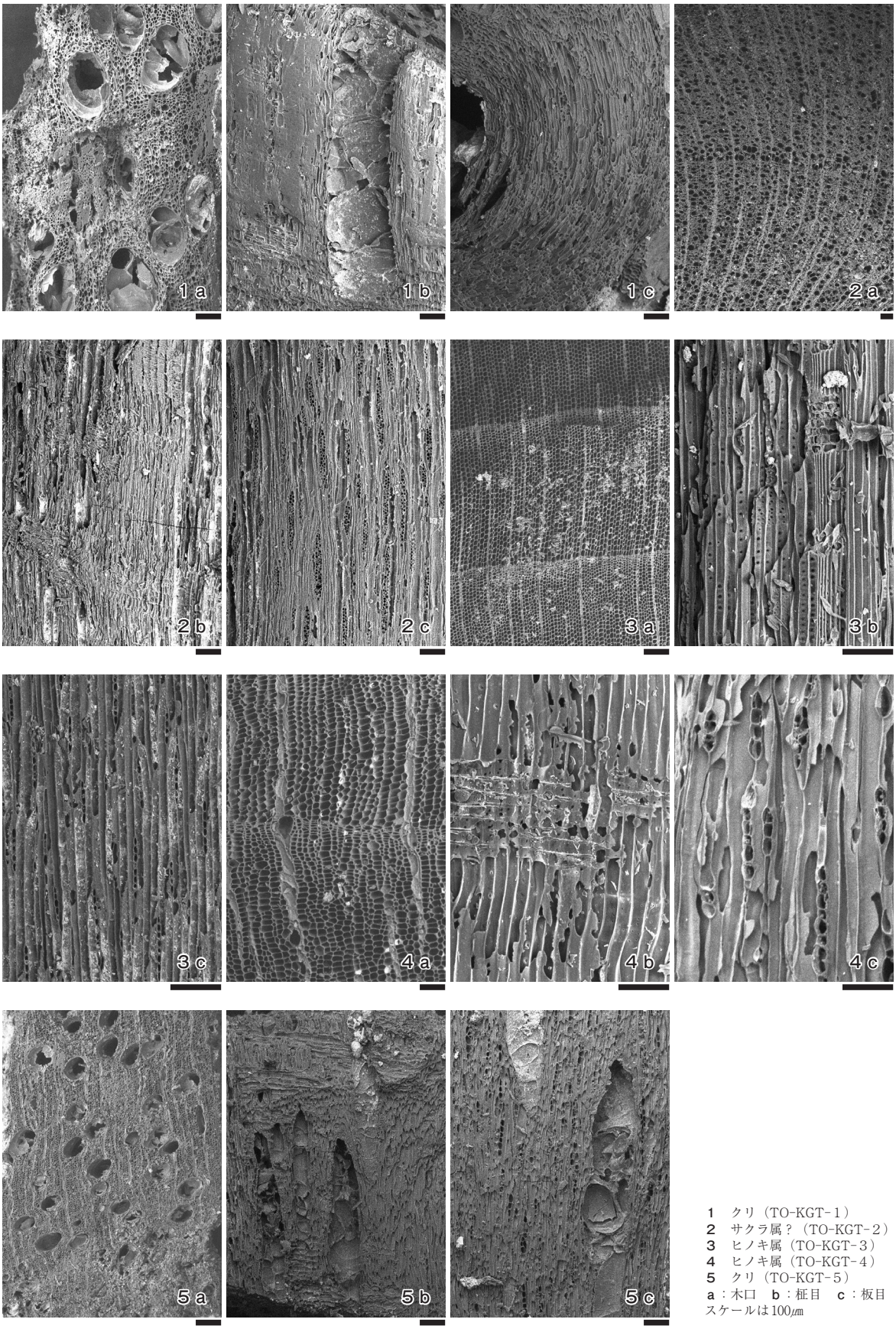
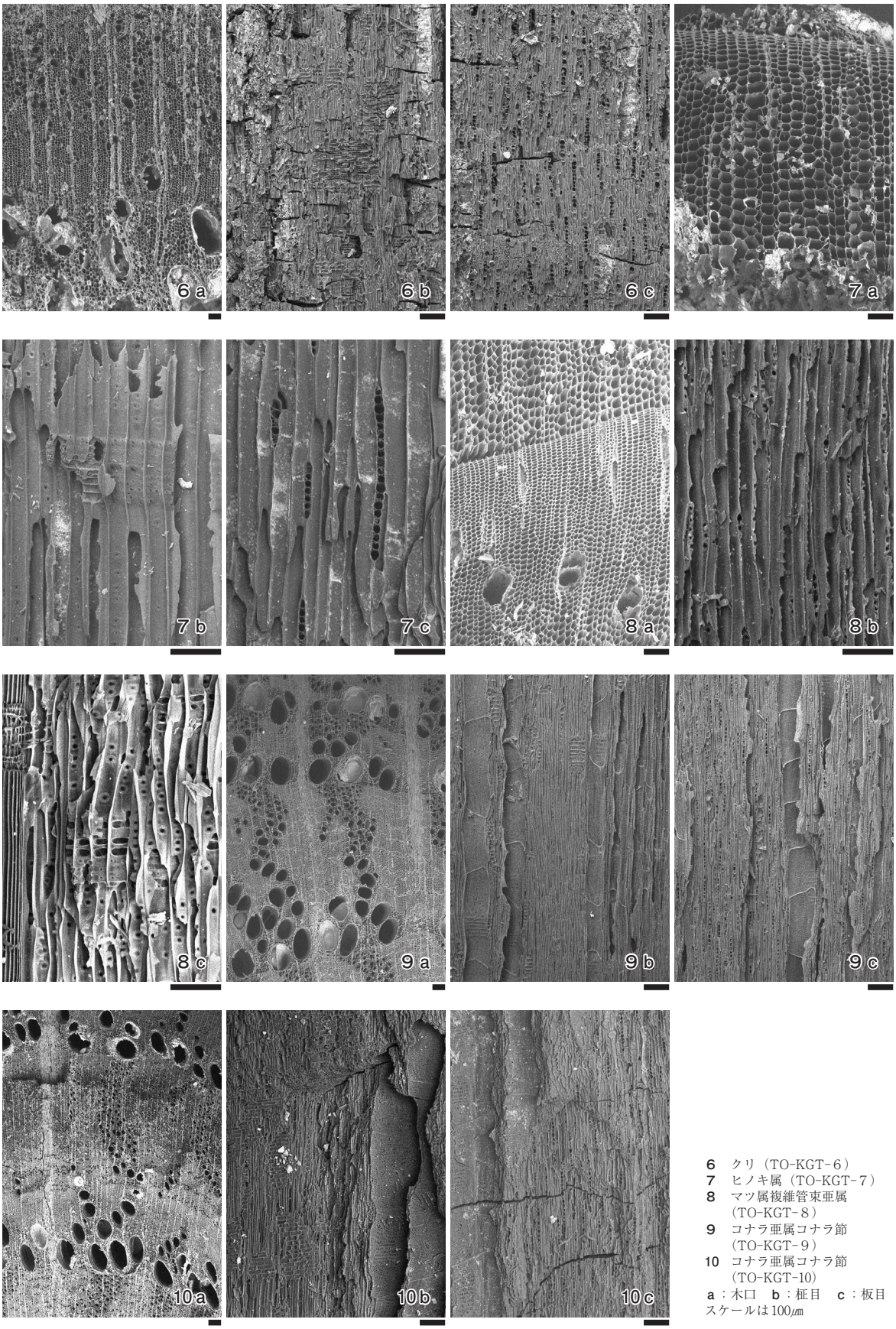


図105　暦年較正結果



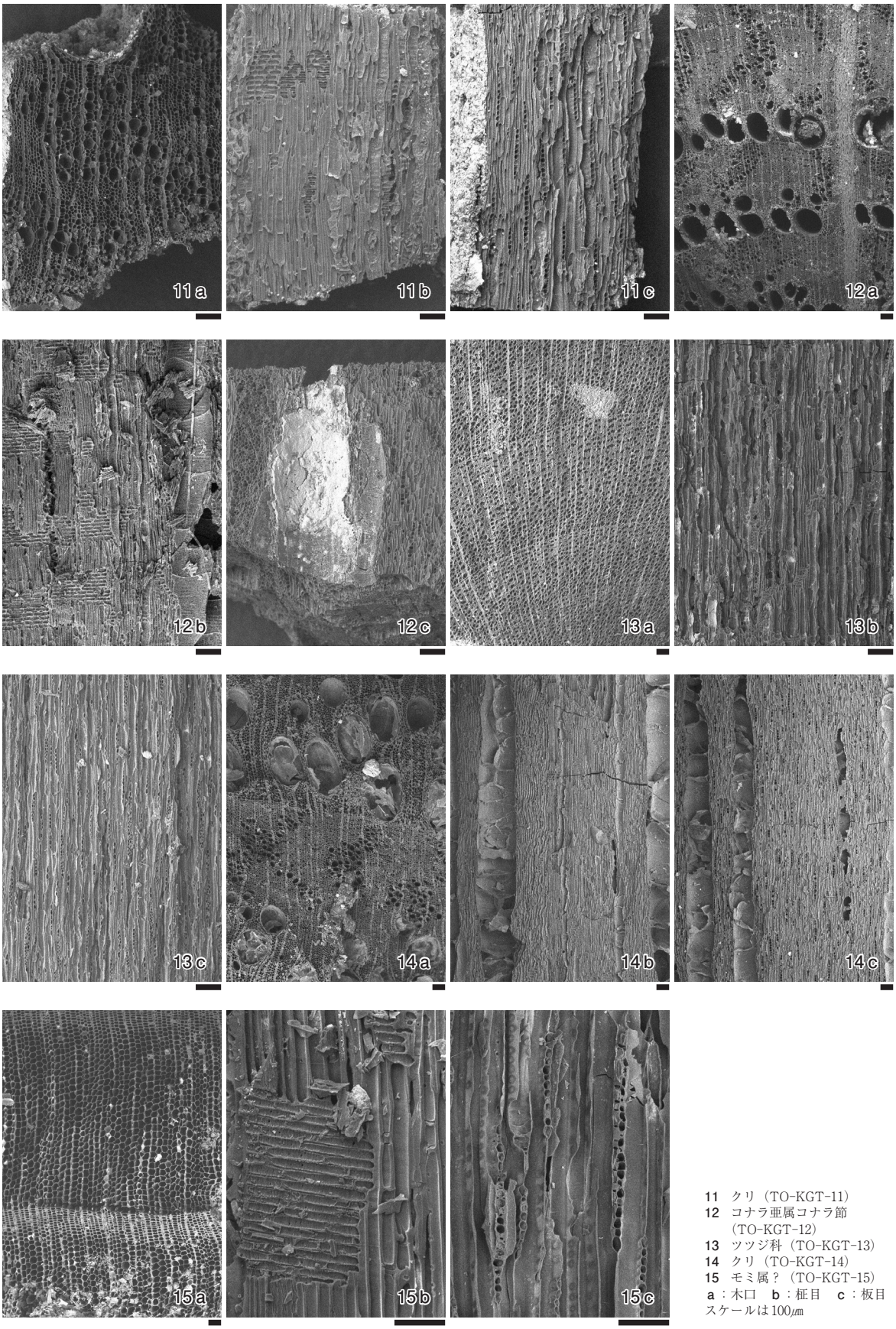
1　クリ（TO-KGT-1）
2　サクラ属？（TO-KGT-2）
3　ヒノキ属（TO-KGT-3）
4　ヒノキ属（TO-KGT-4）
5　クリ（TO-KGT-5）
a：木口　b：柾目　c：板目
スケールは100㎛

図106　炭化材（1）



6　クリ（TO-KGT-6）
7　ヒノキ属（TO-KGT-7）
8　マツ属複維管束亜属（TO-KGT-8）
9　コナラ亜属コナラ節（TO-KGT-9）
10　コナラ亜属コナラ節（TO-KGT-10）
a：木口　**b**：柾目　**c**：板目
スケールは100㎛

図107　炭化材（2）



11　クリ（TO-KGT-11）
12　コナラ亜属コナラ節（TO-KGT-12）
13　ツツジ科（TO-KGT-13）
14　クリ（TO-KGT-14）
15　モミ属？（TO-KGT-15）
a：木口　**b**：柾目　**c**：板目
スケールは100㎛

図108　炭化材（3）

第５章　総　括

第１節　弥生時代の竪穴住居跡について

今回の調査で、弥生時代中期後半とみられる竪穴住居跡が12軒検出されている。本節では、浜通りの弥生時代中期における竪穴住居跡の類例と比較しながら検討していく。

本遺跡の竪穴住居跡は、いずれも丘陵頂上部の平坦面や、縁辺の緩斜面に立地している。特に沢３の南側付近では、６軒の竪穴住居跡が密集し、斜面下位から上位に向かって住居を建てている様子が確認できた。他遺跡の類例と比較すると、毛萱遺跡は毛萱館跡と同一丘陵の頂上部の平坦面に立地し、楢葉町の美シ森Ｂ遺跡や南代遺跡、植松遺跡は、太平洋に近い台地や丘陵尾根の平坦部と縁辺の緩斜面に立地し、毛萱館跡の立地と共通する。また、本遺跡のように複数の住居が重複するような類例は無いが、いわき市の白岩堀ノ内遺跡では、丘陵下位の緩斜面に３軒の竪穴住居跡が密集して分布し、古い段階の住居跡が掘り込んだ平坦面を利用して新しい段階の住居跡が築かれている（井ほか1997）。

本遺跡における竪穴住居跡の平面形は、台形、隅丸長方形、不整な隅丸三角形・方形・長方形・楕円形など多様で企画性は認められない。規模は、長軸もしくは直径で2.9～6.8mとなり、数値に片寄り等の傾向は確認できない。稲村圭一氏によれば、福島県内の弥生時代中期の住居跡は平面形が多様で、規模に幅があるとし（稲村2013）、毛萱館跡の傾向と合致する。

住居内施設は床面に小穴を有するものが７軒、炉を有するものが１軒で確認できた。小穴は１～４個程度で、規則性を持った配列はほとんど確認できないが、５号住居跡では床面中央に４本主柱と考えられる配列がみられた。４本主柱の類例は浜通り地域にはみられず、須賀川市の関林Ｈ遺跡２号住居跡が挙げられる程度である。規則性を持たない床面の小穴配置は、浜通り地域の竪穴住居跡の特徴でもあり（稲村2013）、本遺跡と共通する。

炉は12号住居跡でのみ確認でき、地山を掘り残し、土手状にした部分を地床炉としている。

このように本遺跡の竪穴住居跡の特徴は、浜通り地域における弥生時代中期の類例と概ね合致するようである。ただし、本遺跡のように土器型式内の短い時期幅で、斜面下位から上位に向かって住居を建て替える事象は、浜通りにおいて類例が無く、特筆される。建て替えが少ない理由について、稲村氏は「住居が小規模で掘形も浅いため、その労働力は軽量で、廃絶・遺棄された住居の再利用が少なかった可能性がある」としている（稲村2013）。毛萱館跡の竪穴住居跡の様相から、集落としての継続性は低いと推測している。（佐　藤）

第２節　陶磁器の器種組成からみた城館の性格

本節では、城館の性格や、城主がある程度想定される城館跡から出土した陶磁器の器種組成を比較検討し、毛萱館跡の性格や居住者の階層について明らかにしていきたい。

毛萱館跡から出土した陶磁器の組成を概観すると、威信財・輸入陶磁器は認められず、古瀬戸の天目茶碗・平椀・葉茶壺（祖母懐茶壺・口広有耳壺）など国産陶器の喫茶具、ほかに古瀬戸の瓶子、かわらけなど酒宴に関連した遺物が出土している。いずれも出土数は少なく、個体数は古瀬戸製品で各種１・２個体、かわらけは４個体程度である。出土遺物の年代は、古瀬戸後期様式のⅢ・Ⅳ期（図51－１、図54－１）を主体とし、青花Ｂ１・Ｃ群や瀬戸大窯製品が認められないことから、15世紀前半から中葉頃に限定される。

表５に浜通り地方を中心として、発掘調査例があり、城館の性格や城主の階層が明らかとなっている城館から出土した陶磁器の器種組成を示した。器種は階層が明確に現れる威信財と喫茶具に限定して示した。威信財の定義は小野正敏氏の論考に従い、これに青磁香炉を加えた（小野2003）。

毛萱館跡と同様に国産陶器の喫茶具のみをもつ遺跡として、浪江町の沢東Ｂ遺跡が挙げられる。沢東Ｂ遺跡では、区画溝と付属する土橋状の出入口施設、区画の内側には掘立柱建物跡や井戸跡などがみつかり、喫茶具では古瀬戸の平椀と葉茶壺のみが出土している。報告書では遺跡の性格を「現在の大字程度か、それ以下の所領を有した土豪クラスの小領主」としている（稲村ほか2007）。

複数の村落を支配する領主の居館では、喫茶具に輸入陶磁器が加わり、威信財の一部が揃う。日吉下遺跡は、中世城館に関連した複数の平場や堀跡、掘立柱建物跡などが確認され、金成村や三澤村周辺を支配した岡本氏の居館「三澤館」に比定されている。出土遺物では古瀬戸の天目茶碗・平椀・葉茶壺、輸入陶磁器の天目茶碗や青磁椀が認められ、威信財では青磁の盤と香炉が出土している（松本ほか1983）。

郡単位を掌握する国人領主の居館では、国産陶器・輸入陶磁器・瓦器の喫茶具に加え、威信財の一部が揃う。特に瓦器の大型製品である風炉が認められる点は特徴と言える。水澤幸一氏によれば瓦器風炉は、国人領主の家臣や寺院、あるいは国人領主級以上の階層の遺跡からのみ認められるという（水澤1999）。また筆者は、福島県内で瓦器風炉が出土した遺跡について、水澤氏の論考と同様に村落遺跡からは見られず、国人領主の城館跡、寺院跡から多く認められるとした（佐藤2017）。特に伊達氏の居館である梁川城跡では、国産陶器・輸入陶磁器・瓦器の喫茶具に加え、酒海壺を含む威信財の殆どが揃っている（今野ほか2018）。以上の器種組成の特徴から勘案すると、毛萱館跡は毛萱村周辺を支配した村落領主クラスの居館と想定される。

次に、村落領主の居館から喫茶具が出土する意味合いについて考えていきたい。橋本素子氏は、『東寺百合文書』を引用し、代官や荘政所の家財リストの中に茶碗・茶臼・釜・葉茶壺などの喫茶具が含まれていることから、政治的な交流や交渉の場となる荘政所では、年貢収公の際や役人の饗

表５　浜通り地方を中心とした城館出土遺物の器種組成

遺跡名	所在地	城館の性格	威信財				喫茶具							備　考
			青白磁・白磁	青磁			輸入陶磁器			国産陶器			瓦器	
			梅瓶・四耳壺	盤	酒海壺	香炉	天目茶碗	青磁椀	葉茶壺	天目茶碗	平椀	葉茶壺	風炉	
沢東B遺跡	福島県双葉郡浪江町立野	土豪の小領主の居館									○	○		
毛萱館跡	福島県双葉郡富岡町毛萱	村落領主の居館								○	○	○		墨書かわらけ
新井田館跡	宮城県本吉郡南三陸町志津川	村落領主の居館（複数村）						○		○	○			
中山館跡	福島県いわき市中山	村落領主の居館（複数村）		○				○		○		○		中山氏の居館か
日吉下遺跡（三澤館跡）	福島県いわき市常磐三沢町	村落領主の居館（複数村）		○		○	○	○		○	○	○		岡本氏の居館か
小塙城跡	福島県双葉郡楢葉町下小塙	国人領主の居館（一郡）	○	○			○	○	○	○	○	○	○	楢葉氏関連
小高城跡	福島県南相馬市小高区	国人領主の居館（複数郡）	○				○						○	相馬氏の居館
白土城跡	福島県いわき市平南	国人領主の居館（複数郡）	○			○	○	○		○		○		白土系岩城氏の居館
稲村御所館跡	福島県須賀川市稲	鎌倉府の守護所		○			○	○		○	○	○	○	足利満貞の居館
梁川城跡	福島県伊達市梁川	国人領主の居館（複数郡）	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	伊達氏の居館

応の際に、茶のもてなしができるよう喫茶具の準備がされていたという（橋本2018）。

毛萱館跡のような村落領主の居館においても、政治的な交流や交渉の場として、喫茶によるもてなしを行うため、国産陶器で構成される最低限度の喫茶具（古瀬戸の天目茶碗・平椀・葉茶壺・在地産の茶臼など）を所持していたと想定される。そして、郡単位を掌握するような国人領主が所持する威信財、輸入陶磁器、瓦器風炉で構成された喫茶具や室礼具が欠落するのも、村落領主の居館の器種組成として大きな特徴と言える。（佐　藤）

第３節　戯画を墨書したかわらけについて

毛萱館跡の６号掘立柱建物跡の柱穴（Ｐ７）からは、内外面に戯画を墨書した15世紀のかわらけが１点出土している（図27－１）。外面には墨書で４個体以上の菊花を描き、内面には中央に洲浜を配し、その左上部には松葉と推測される意匠がみてとれる。また内外面の一部に朱の痕跡も確認できた。

かわらけに草花を描く例は、中世の文献資料にも認められ、山科教言の日記『教言卿記第二』の応永14（1407）年３月11日の記述に、宴会に用いるかわらけに薄い墨画で梅花の文様を描く表現がある（荒川2008）。

外面に草花の戯画を墨書したかわらけの出土は僅少なようで、管見では数例を挙げるのみである。三春城跡からは、内面に朱色で紅葉を描いたかわらけが出土している。年代は15世紀末から16世紀後葉で田村義顕が三春に入部以降の所産と考えられる（垣内ほか2011）。稲村御所館跡からは、内面に細長い葉を描き、その内側を白色顔料で塗ったかわらけが出土している。年代は15世紀中葉で、足利満貞によって稲村御所が機能していた時期の所産と考えられる（菅野ほか2016）。白鳥館遺跡からは、内外に樹幹と花の文様を描いたかわらけが出土している。黒色の顔料で樹幹を、花弁を朱で、花の中央を白色顔料で塗り分けている。年代は15世紀後半以前と考えられる（及川2008）。草戸千軒町遺跡からは内面の中央に花文が墨書されたかわらけが数点出土している。年

代は15世紀中頃～後半である（岩本ほか1994）。湯築城跡からは、底部の内外面に草花の文様が赤く焼きつけられたかわらけが数点出土している。火襷の要領で、草花を置いて焼成したものと推測される。年代は16世紀代と考えられる（中野2009）。荒玉社周辺遺跡からは、外面に墨書で草花を描いているかわらかけが出土している（柳川2006）。堅田Ｂ遺跡からは外面に墨書で草木を描いたかわらけが出土し、年代は13世紀後半と考えられる（金沢市教育委員会2004）。

元興寺旧境内からは、外面底部に墨書で中央に花と木が描かれ、その周辺には草が配され、上部には「聞」の字が書かれている。年代は13世紀代と考えられる（楠元1976）。

かわらけの内面に州浜と松葉を配す図案は、神仙思想により延命長寿の吉祥を願う「蓬莱山」をモチーフにした「蓬莱文」と考えられる。蓬莱文が墨書されたかわらけの出土例は管見に無いが、蓬莱山をモチーフとした図案は古代から現代にいたるまで多く見られ、日常的に使用する漆器椀や、文台や化粧箱などの調度品・あるいは和鏡の図案にうかがい知ることができる。しかし、かわらけに蓬莱文を墨書する例は認められないことから、中世の宴において日常的にかわらけに墨書していたものではないと考える。

宴と蓬莱の関連性は、中世の絵画資料を中心に明らかにされている。室町時代に描かれた「月次

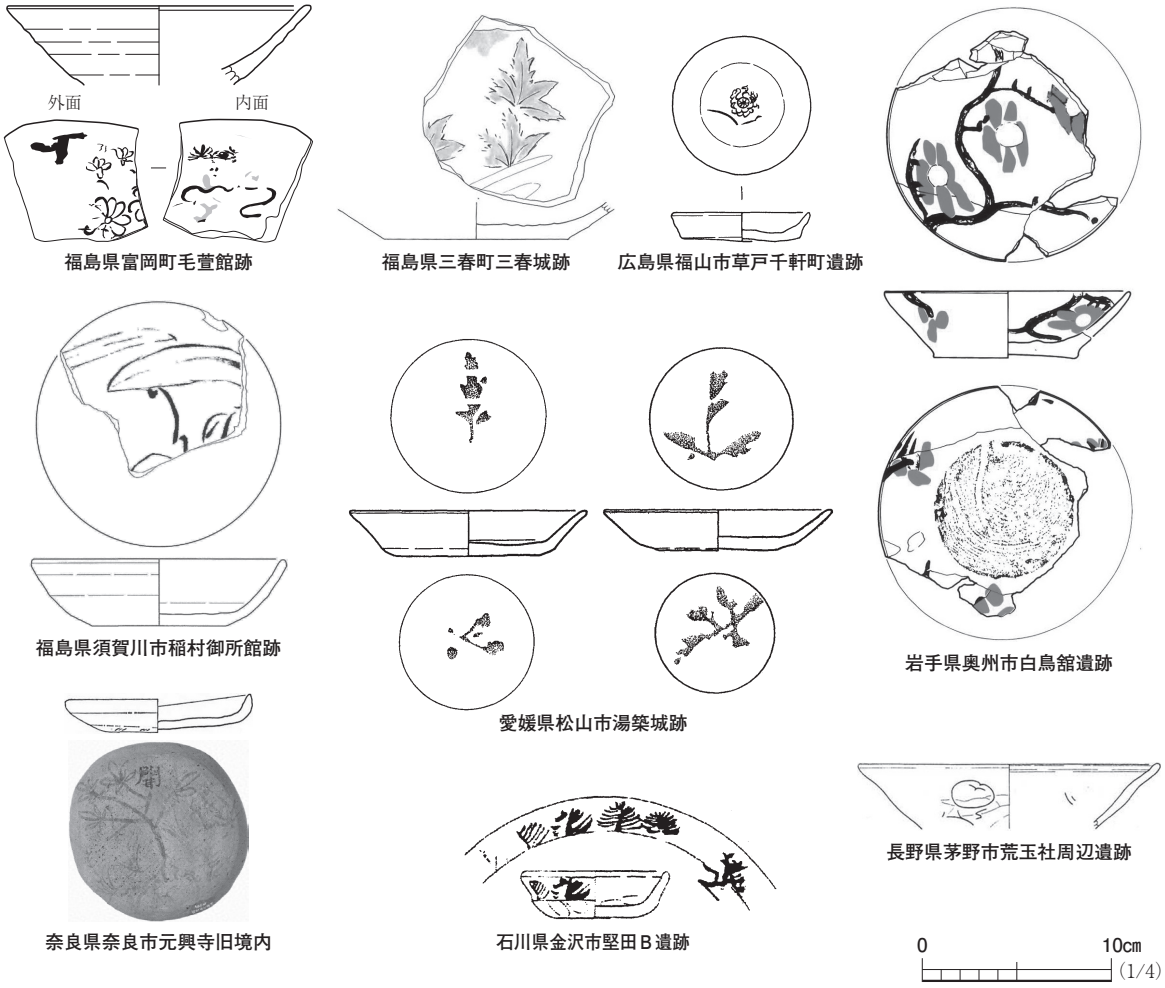


図109　草花の記されたかわらけ

風俗図屏風」や、江戸時代初頭に描かれた「東山遊楽図屏風」には、宴席の中央に洲浜台(州浜形の台の上に松・竹・梅・鶴・亀などを飾って、蓬莱山を模した祝祭の飾りもの)が確認でき(斉藤2008)、中世における神仙蓬莱思想と宴の関連性がうかがえる。また荒川正明氏は洲浜台が場を神聖化する仕掛けとして、祝宴の吉祥の飾り物に変容していくとしている(荒川2008)。

毛萱館跡出土の戯画が墨書されたかわらけについて、外面の菊花文は、中世の文献資料の類例から、宴に用いる際に描かれたと考えられる。「重陽の節句」では９月９日に健康長寿を願い、杯に菊花を浮かべて酒を飲んだことから、重陽の節句に関連した酒宴の際に用いたのかも知れない。類例を概観すると文様のモチーフは菊花に加え、紅葉や椿もしくは梅など、季節を象徴する花を配するようである。また、遺物の年代は13世紀後半から16世紀にかけて多く見られるようで、文献資料の年代とも合致する。出土遺跡の性格を見ると、居館や、鎌倉府の御所、寺院、町など様々な性格の遺跡から出土している。

内面の蓬莱文は、宴に際して吉祥の意図を持って描かれたと考えられる。絵画資料に、宴の中央に洲浜台を配置する例があることから、中世における宴と蓬莱に強い関連性がうかがえる。かわらけに墨書の戯画が墨書された類例はほとんど無いことから、毛萱館跡から出土したかわらけは、当時の宴会儀礼や文様を考える上で貴重な資料と言える。（佐　藤）

第４節　城 館 の 構 造

立地と平場の配置　毛萱館跡は、紅葉川南岸に隣接する丘陵の北辺部を城館として利用している。北西側は紅葉川に浸食された急崖となる。丘陵頂上部の平坦面は標高35～37ｍで、丘陵裾部との比高差は30ｍ前後ある。城館は丘陵頂部を３条の土塁・堀跡で区画し、７つの比較的大きな平場(１～５・８・９号平場)で構成される。丘陵斜面部中位には切岸により生じた６・７号平場など帯状の小規模な平場が連なる。各平場は、丘陵上の平坦面、丘陵を開析する大小の沢、尾根状の張出しといった地形を有効に利用しながら配置されている。１・２号平場は丘陵頂部の平坦面を造作なく使用しているのに対し、４・５号平場では丘陵頂部の掘削しやすい地山土(ＬⅡ、ＬⅢａ)を用いて縁辺に整地を行っている。特に４号平場は全体をＬⅢｂまで掘削していた。

土塁・堀跡・整地　２号堀跡は、沢３のくぼみを利用して丘陵上を横断するように掘削している。２号土塁・２号堀跡の断面規模は、実効堀幅11.9m、垂直塁壁高4.86m、実効法高6.46mと、ほかの土塁と比較して倍以上の規模であり、城館守備の根幹となるような施設と考えられる。２号土塁・２号堀跡の内側の４・５号平場と、外側の１・２号平場では、小穴や出土遺物の数量に明確な差異があることから、居住し日常的に生活する平場と、緊急性の高い時にのみ使用する平場を分けるような役割があったと考えられる。１号土塁・１号堀跡と３号土塁・３号堀跡の断面規模は類似し、実効堀堀幅が5.2～5.8m、垂直塁壁高が1.3～2.35m、実効法高が3.15～4.5mとなる。丘陵頂上部の平場を区画するための施設で、２号土塁・２号堀跡より防御性は劣る。

城館内の経路　城外から城館内を経て、５号平場(主郭)へ至る経路は３箇所を想定している(図110)。経路１は、７号平場と８号平場に挟まれた沢４を進み、８号平場北端部から南に向かう。８号平場から、４号平場の小穴が無い北東縁辺部付近を進み、３号土塁出入口を通って５号平場(主郭)へ至る。経路２は、経路１と同様に沢４を進み６・７号平場を経て、２号道跡を登り、１号門跡を通過して５号平場(主郭)に至る。６・７号平場の間には小規模な沢があるが、架橋により通路としていたと想定したい。経路３は、丘陵裾部、紅葉川の河岸段丘上に立地する小規模な平場から、丘陵中位の平場を通り、１号道跡を経て、１・２号平場を通り、２号土塁・２号堀跡の南東隅部を経て、５号平場(主郭)へ至る。旧毛萱村の集落の方向に開口し、通路の周りに小規模な平場を連ね、複雑な経路を示す経路１・２が「大手口」、経路３が「搦手口」に相当すると考えている。

(杉　沢)

各平場の性格と序列　５号平場は、確認された平場の中で最高所に位置する。北縁辺部には整地と切岸が、北東側には４・５号土塁、北西側には３号土塁・３号堀跡、南西側には２号土塁・２号堀跡が認められ、確認された平場の中でも最も防御性が高い。出入口は３箇所で認められ、①北東縁辺の６号平場につながり、１号門跡が付属する箇所、②北西隅部の３号土塁・３号堀跡を通じ、４号平場につながる箇所、③南西隅部の２号土塁・２号堀跡を通じ、２号平場につながる箇所である。建物は桁行４間以上、梁行２間以上のものが２棟確認できる。小穴は331基を確認し、規模は長軸で20～50㎝、深さは20～80㎝とほかの平場と比べ、小穴の規模が大きく、確認数も多い。５号平場の北東縁辺からは、旧毛萱村の集落や旧波倉村に至る街道、紅葉川、太平洋が一望できる。

５号平場は、①確認された平場の中で最高所に位置し、旧毛萱村の集落などが一望できること、②門・土塁・堀・整地・切岸などで防御性を高めていること、③複数の掘立柱建物跡、小穴群が認められ、居住性が高いこと、④経路のすべてが５号平場に至り、最も求心的であることから考えると、城館の主が日常的に生活した場、すなわち「主郭」と考えられる。北東縁辺に位置する１Ｂ号門跡は、櫓門と想定され、村落や街道、洋上の哨戒のために用いられたと考えられる。また、調査区外の南東側に主殿のような施設が位置すると想定される。

４号平場は、全体をＬⅢｂまで掘削することにより、整地や土塁に使用する土を補い、５号平場との高低差を意図して設けている。北東縁辺部には整地と切岸が、西縁辺部には整地が、南西側には２号土塁・２号堀跡が、北東側には３号土塁・３号堀跡が認められ、確認された平場の中で、５号平場に次いで防御性が高い。出入口は１箇所で認められ、北東隅部の３号土塁・３号堀跡を通じ、５号平場とつながっている。建物は桁行６間・梁行１間のものや、桁行５間・梁行１間のものが認められ、主屋に準じるような性格が考えられる。小穴は185基を確認した。規模は長軸で20～40㎝、深さは20～70㎝と小穴の規模や確認数は５号平場に準じる。小穴群は北東縁辺部で確認できないことから、通路が位置していると想定した。

４号平場は、土塁・堀・整地・切岸などで防御性を高めていること、複数の掘立柱建物跡、小穴群が認められ、居住性が高いことから、主郭である５号平場に準じるような場と考えられる。

３号平場は、沢３から続く緩やかな傾斜が認められ、13号溝跡が位置する。建物や小穴は認められないことや緩斜面であることから居住性は無く、13号溝跡により４号平場の防御性を高めるために設けられた平場と考えられる。

１・２号平場は、整地は認められず、丘陵頂部の平坦面をそのまま平場に利用している。建物は桁行２間・梁行１間の簡易なものや、倉庫や柵が想定される「狭梁掘立柱建物跡」が認められる。小穴は１号平場が６基、２号平場が51基、規模は長軸で20～30㎝、深さ20～60㎝と、４・５号平場と比べて規模は小さく、数量も極めて少ない。１・２号平場は居住性が低く、主郭に侵攻する敵の侵攻を遅延させたり、未然に防ぐ機能、いわゆる「外郭」に相当すると考えられる。また、簡易的な建物である１号掘立柱建物跡は、臨時的な兵士の駐屯施設の可能性が想定される。

６・７号平場は４・５号平場の切岸によりできた「帯曲輪」で、遺構が認められないことから、５号平場から斜面下位を経由するための通路と考えられる。

プレ城館　遺構の重複関係から、４・５号平場の整地、３・４・５号土塁、３号堀跡の構築以前には、５号平場の北東側の縁辺部に１Ｄ号門跡が位置し、北側縁辺部には等間隔に土坑群が並んでたと考えられる（付図）。また、５号平場整地土からは古瀬戸の天目茶碗（図34－1）や瓦器の擂鉢（図34－2）が、５号平場の縁辺に並んだ59号土坑からは古瀬戸の瓶子（図49－1）が出土し、本格的な城館の構築以前にも一定の生活感がうかがえる。このことから、本格的な城館を構築する以前に主郭である５号平場は、日常的な生活や築城の指揮をする場として機能していたと想定される。

城 破 り　城館の廃絶に際して、３号土塁の出入口と３号堀跡は埋め立てられていたが、それ以外に土塁を崩したり、堀跡を埋め立てるなどの行為は認められなかった。このことから、毛萱館跡では積極的な土塁・堀跡の破壊は行わず、最小限に留めていたと考えられる。　（佐　藤）

第５節　城 館 の 門 跡

毛萱館跡では、城館に関連して４度の建て替えを行っている１号門跡が確認できた。１号門跡は、５号平場の北東端部に位置し、この場所は毛萱館跡の占地する丘陵の北東縁辺部にあたり、東側は崖に、北側は小規模な尾根状の地形になり、２号道跡によって斜面下位の６号平場とつながっている。１号門跡の規模や構造、付随する遺構を新しい順に整理すると以下のようになる。

１Ａ号門跡　５号平場の整地上に、柱間１間の礎石建ちで構成される。本遺構には、４号土塁と２号道跡が伴う。２号道跡の側溝部分は５号平場の整地により埋め立てられ、小河原石群が、礎石の南側に細長い範囲で敷かれていた。２本柱による柱間１間の門跡は、上に屋根を架けた棟門や上土門、柱上に横木を渡した冠木門、２本柱のみの門などがある。ただし、礎石建物の場合は、柱だけでは不安定なので、４号土塁に取り付けられていたか、塀（柵）との併設が想定される。掘立柱による柱間１間の門の例では、岩手県猪川館跡の２号門跡が挙げられ、門に柵列が伴っている（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター2003）。１Ａ号門跡の礎石に伴う控柱について、検出時から

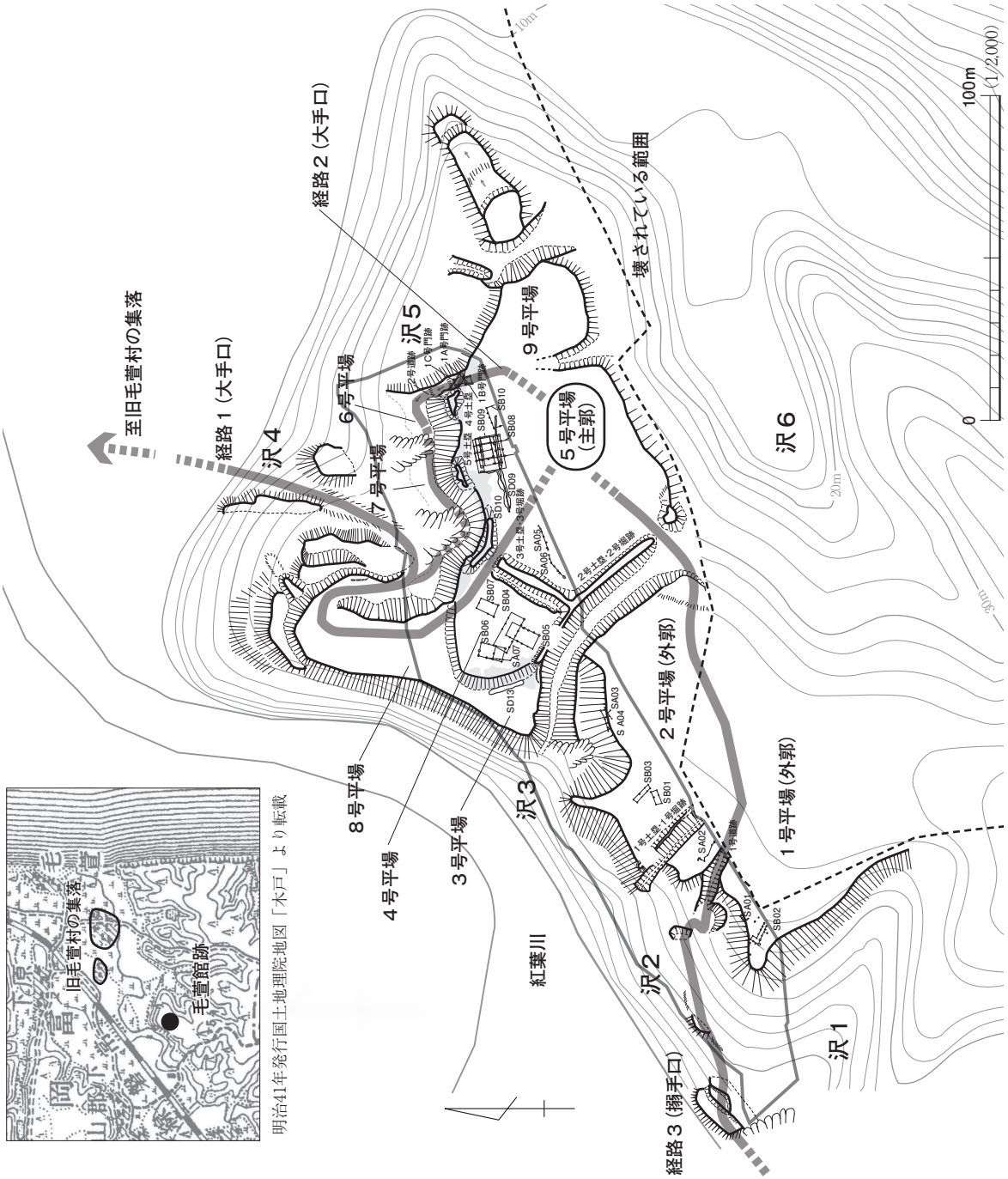


図110　毛萱館跡の構造

留意して調査したが、確認されなかった。

１Ｂ号門跡　５号平場の整地上に桁行き１間、梁行き２間、柱穴６基で構成される。本遺構に伴う遺構は４号土塁と２号道跡がある。１Ｂ号門跡は構成する６基の柱穴に大小の差が殆どなく、底面の標高も揃っていることから、櫓門であったと想定される。宮城県の新井田館跡の門跡（ＳＢ61）は、規模や柱穴の大きさなどが本遺構と類似している（南三陸町教育委員会2016）。また、岩手県の白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡の東門は、本遺構よりやや小規模だが、各柱穴に本柱・控柱の区別がなく、同様に櫓門の可能性がある（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター1997）。加えて、低位の平

場から丘陵上の平場へと、通路を登りきったところに門を構えている点も本遺構と共通する。

１Ｂ号門跡の機能していた時期の５号平場は、３・４・５号土塁、３号堀跡が築かれ、遺構・遺物も多く、城館の中心的な場で館主の居住空間でもあったと考えられる。１Ｃ号門跡から１Ｂ号門跡への建て替えは、５号平場の役割がより高まっていったことを示している。

１Ｃ号門跡　桁行き１間、梁行き１間の柱穴４基で構成される。本遺構に伴う遺構としては２号道跡がある。１Ｃ号門跡は２号道跡上に位置し、ＬⅢａ・ＬⅣを掘り込んで造られている。本遺構は１×１間の平面形が長方形を基調とする門跡で、類例は猪久保城跡の４号平場１号門(飯村ほか1994)、千葉県横芝光町の篠本城の門跡が規模も近い(道澤1995)。小屋館跡から検出された２基の門跡は、何れも本遺構よりも小さい。４本柱で想定される門には、薬医門や櫓門などが挙げられる。薬医門は二本の本柱の背後に控柱を立てた構造で、通常であれば柱穴規模は、控柱よりも本柱のほうが大きく、深くなる例が多いが、本遺構では４個の柱穴に大きさや、深さの違いは認められない。このことから、薬医門よりも櫓門のほうが可能性が高い。

１Ｃ号門跡は、２号道跡に伴うことから、城館として本格的に整備する過程で築かれる。この配置は、１Ａ・Ｂ号門跡にも踏襲される。

１Ｄ号門跡　柱穴２基で構成される柱間１間の門跡である。柱間の中央付近から、北東・南西方向に伸びている溝１が伴い、斜面下位に至る通路の痕跡と考えられる。柱間１間の門は、福島県及び宮城県、岩手県、青森県の事例を概観すると、青森県の根城跡や、岩手県の松本館跡にあるような柱間距離が３ｍを超える大きな門跡と、３ｍ未満の小さな門跡に大別される。後者のほうが、圧倒的に多く、報告では冠木門と想定されている例が多い。１Ｄ号門跡は柱間距離が2.12mと、小さな門跡の中でも平均的な柱間距離となっている。二本柱の門は柱上に横木を渡した冠木門、上に屋根を架けた棟門や上土門、二本柱を立てただけの門があるが、他の遺跡の類例から、簡素な冠木門か二本柱を立てただけの門であったと考えたい。１Ｄ号門跡は、４号土塁、５号平場の整地よりも古い段階の遺構で、城館最初期のものと考えられる。　（杉　沢）

第６節　ま　と　め

毛萱館跡は土塁や堀跡が遺存していることから、以前から中世の城館跡として周知されていたが、今回の県道広野小高線(毛萱工区)の建設に伴う発掘調査の結果、縄文時代、弥生時代、室町時代、近世の複合遺跡であることが判明した。

縄文時代晩期では、遺構は認められないが、刺突文土偶の肩部が１点出土している。当該地域における縄文時代晩期の遺跡が太平洋に近い丘陵にも分布が広がる可能性がある。

弥生時代中期後半(桜井・天神原式期)では、丘陵頂上部の平坦面や、縁辺を中心として住居跡12軒が確認された。本遺跡に隣接する毛萱遺跡は同時期で、毛萱地区周辺の丘陵頂上付近には弥生時代中期後半に集落が散発的に営まれるようである。竪穴住居跡はいずれも平面形に統一性が無

く、掘り込みが浅く、使用痕跡が貧弱なことから、集落の継続性は低いと推測される。

毛萱館跡から出土した弥生時代中期後半に比定される平行沈線文土器には天神原式と桜井式が認められ、天神原式がより主体的に出土しており、隣接する毛萱遺跡でも同様の傾向が認められる。また、図84－３は桜井式の壺形土器のみに認められる口縁部の突帯があり、天神原式にのみに認められる３本引きの平行沈線が施されることから、両型式のキメラ的な要素が確認できた。このことから、桜井式と天神原式の同時併存の可能性を予見させる好資料として特筆される。

室町時代、15世紀前半にはいると城館が築かれる。多数の掘立柱建物跡や小穴や出土した遺物などの特徴から、居館型山城と考えられる。毛萱館跡は丘陵を２号土塁と２号堀跡によって分断し、その東側を本格的な城域とするもので、双葉郡では富岡町日向館跡、楢葉町小塙城跡、浪江町権現堂城跡などに類例がうかがえる。このような双葉郡に通有する城館構造は、福島県浜通り太平洋沿岸地域に特徴的な低丘陵地の城館利用に沿ったものと考えられる。主郭と推測される５号平場の東端部からは、戦国時代まで遡る毛萱村の集落や街道が一望できることから、毛萱村周辺を支配した村落領主の居館と考えられる。遺物は少量ながら、国産陶器で構成される喫茶具が揃い、他の村落領主とされる居館の器種組成と比較しても整合する。また、６号掘立柱建物跡の柱穴からは、菊花や蓬莱文の戯画を墨書したかわらけが出土し、往時の宴会儀礼を知るうえで貴重な発見となった。

毛萱館跡は15世紀中頃には城館としての機能を停止するようで、文明六年(1474)の岩城氏方の猪狩氏による楢葉氏の滅亡とほぼ同時期である。このことから地域における支配体制の変容に伴い、毛萱館跡の城館としての機能が停止した可能性がある。

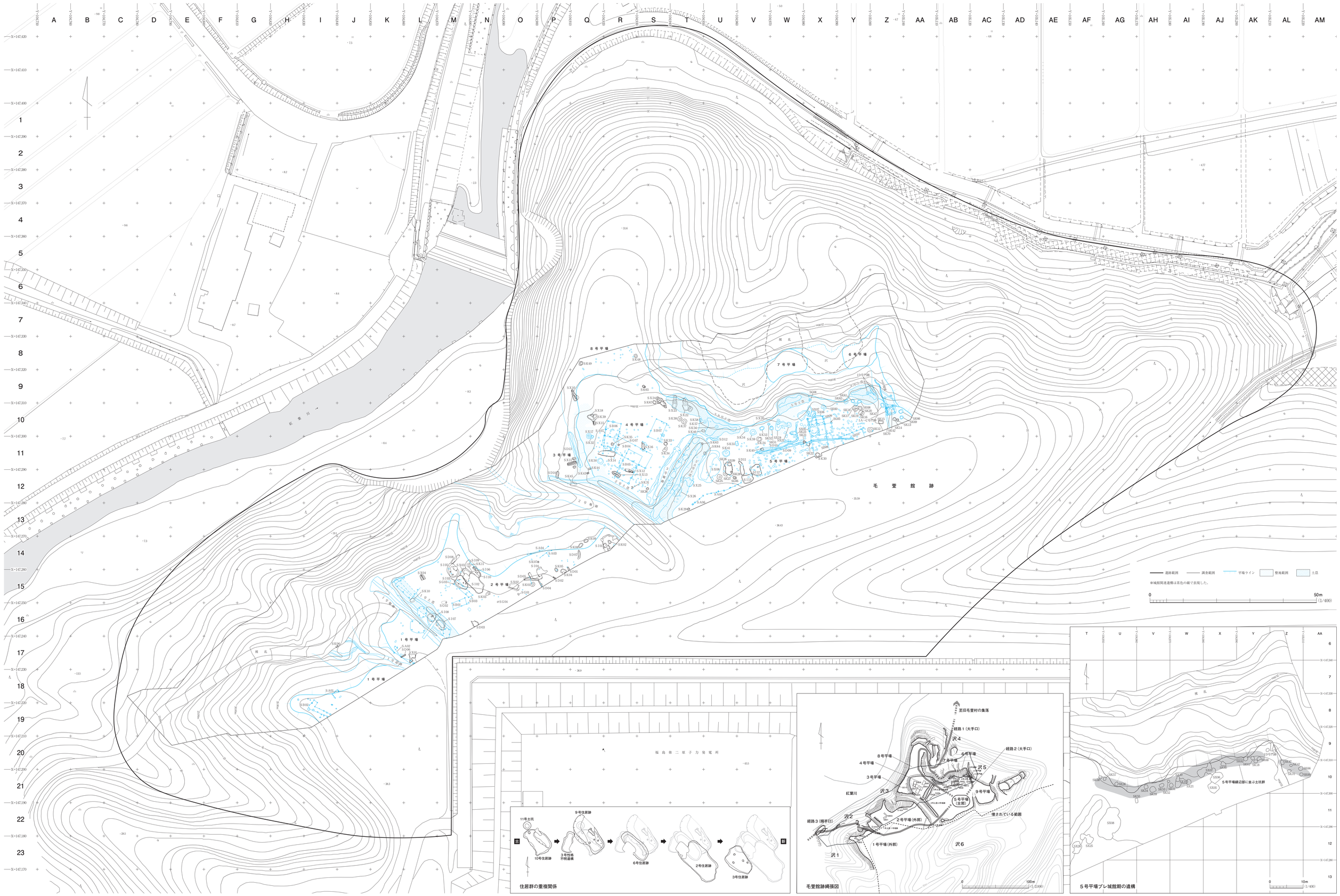
楢葉氏関連の城館とされる小塙城跡(小塙館跡)は、15世紀中葉の陶磁器が多く出土し、その多くが２次的に被熱していることや、16世紀以降の陶磁器の出土量が少なくなることから、猪狩氏の侵攻により落城したと推測されている(本間ほか2002)。今後、双葉郡の中世城館跡を発掘調査する際、楢葉氏滅亡を起因とする15世紀中葉から後葉に着目することで、どの支配勢力下による城かを判別する手がかりになると考えられる。毛萱館跡に近接する真壁城跡の年代は、青磁の香炉や稜花皿、青花の染付皿、瀬戸大窯産の鉢類が認められ、14世紀から16世紀代と考えられることから、毛萱地区や隣接する下郡山地区周辺における地域支配の場が、毛萱館跡から真壁城跡へ集約された可能性がある。

戦国時代、15世紀後半から16世紀前半にはいると、城館廃絶後に性格不明遺構が６基築かれる。形態的な特徴は千葉県成田市の駒井野荒追遺跡４号火葬施設と類似し(林田1992)、石垣分類(火葬遺構の分類)のＤＩｂ類に相当する(石垣2019)ことから、火葬遺構の可能性がある。

近世、18世紀後半から19世紀では遺構は確認できなかったが、大堀相馬焼の片口鉢や肥前系の磁器皿、銅銭が出土している。明治14年の地籍図をみると、遺跡周辺は「耕地」となっていることから、近代には畑作などが行われていたと考えられる。　（佐　藤）

引用・参考文献

荒淑人　2013 『小高城跡（第２次調査）－平成22年度試掘調査・発掘調査報告書－』南相馬市遺跡発掘調査報告７　南相馬市教育委員会
石垣義則　2019「張り出し部を有する火葬遺構の年代について」『日々是好日　北野博司先生還暦記念論集』北野博司先生還暦記念事業実行委員会
井憲治ほか　1997 『白岩堀ノ内遺跡』福島県教育委員会　財団法人福島県文化センター
稲村圭一ほか　2007『沢東Ｂ遺跡（２次調査）』福島県教育委員会　財団法人福島県文化振興事業団
稲村圭一　2013 「福島県内の弥生時代中期の住居跡について－まほろん収蔵資料からの検討－」『福島県文化財センター白河館研究紀要2013』 福島県文化財センター白河館
江川逸生ほか　2008 『白土城跡　岩城氏本城主郭周辺の調査』 いわき市教育委員会　財団法人いわき市教育文化事業団
江川逸生ほか　2013 『住吉館跡　中世岩崎氏関係城館跡の調査』 いわき市教育委員会　財団法人いわき市教育文化事業団
遠藤祝穂　1986 『富岡町の城館を探る』私家版
小野正敏　2003「威信財としての貿易陶磁と場－戦国期東国を例に－」『戦国時代の考古学』高志書院
管野和博ほか　2016 『稲村御所館跡・徳玄遺跡』須賀川市教育委員会
今野賀章ほか　2018 『梁川城跡　総合調査報告書』伊達市教育委員会
木幡成雄ほか　2006 『白土城跡　戦国大名岩城氏本城の調査』 いわき市教育委員会　財団法人いわき市教育文化事業団
小林清治ほか　1988 『福島県の中世城館跡』 福島県教育委員会
富岡町史編纂委員会　1987 『富岡町史』第三巻　考古民俗編　福島県富岡町
佐藤俊　2017 「福島県内における瓦質土器風炉の様相」『福島考古』第59号　福島県考古学会
田中則和ほか　2016 『新井田館跡』 南三陸町教育委員会
橋本素子　2018 『中世の喫茶文化　儀礼茶から「茶の湯」へ』 吉川弘文館
馬目順一ほか　1983 『真壁城遺蹟第四次調査報告』 福島県双葉郡富岡町教育委員会
水澤幸一　1999 「瓦器、その城館的なるもの－北東日本の事例から－」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第９集　帝京大学山梨文化財研究所
本間宏ほか　2002 『小塙城跡（３次調査）』福島県教育委員会　財団法人福島県文化事業団
松本友之ほか　1983 『日吉下遺跡』 いわき市教育委員会　財団法人いわき市教育文化事業団
和深俊夫　1997 『中山館跡Ⅱ区』 いわき市教育委員会　財団法人いわき市教育文化事業団
和深俊夫　1999 『中山館跡Ⅲ区』 いわき市教育委員会　財団法人いわき市教育文化事業団
荒川正明　2008 「宴のうつわ－造り物からやきものへ－」『宴の中世－場・かわらけ・権力』考古学と中世史研究５　高志書院
岩本正二ほか　1994 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅱ　北部地域南半部の調査』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編
及川真紀　2008 『国指定史跡　白鳥舘遺跡発掘調査報告書－第６次調査－』奥州市教育委員会
垣内和孝ほか　2011 『三春城跡Ⅵ　第８次調査報告書』 三春町教育委員会
金沢市教員委員会　2004『堅田Ｂ遺跡Ⅱ（本文・遺物編）』 金沢市埋蔵文化財センター
楠元哲夫ほか　1976「元興寺旧境内東隅発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1976年度』奈良県立橿原考古学研究所
斉藤研一　2008 「中世絵画に見る宴－野外での酒宴を中心に－」『宴の中世－場・かわらけ・権力』考古学と中世史研究５　高志書院
中野良一　2009 『湯築城跡　伊予道後の中世城館』 日本の遺跡39　同成社
林田利之　1992『千葉県成田市駒井野荒追遺跡』財団法人印旛郡市文化財センター
柳川英司　2006 『荒玉社周辺遺跡』茅野市教育委員会
道澤明　1995 「篠本城の発掘調査成果」『シンポジウム　よみがえる篠本城』 東総文化財センター
八戸市教育委員会　1993 『根城－本丸の調査－』八戸市埋蔵文化財調査報告第54集
飯村均ほか　1994 『猪久保城跡』福島県教育委員会　財団法人福島県文化センター
福島県文化センター　1999 「小屋館跡遺跡（含小屋館跡）」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅷ』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1997 『白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1997 『松本館跡発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　2003 『猪岡館跡第２次発掘調査報告書』



付図　毛萱館跡遺構配置図